ISSN 1880-3423

東北学院大学教養学部論集

# 東北学院大学
# 教養学部論集

第154号　2009年12月

第一五四号

〔論　　文〕

時代の音……鈴　木　秀　美……　1
ラゲール多項式の積の展開公式 II　……高　橋　光　一……　21
山形県尾花沢盆地におけるスイカ生産に関する気候学的
　バックグラウンド……菊　地　　立……　29
仙台藩（伊達藩）に於ける日置流印西派の伝播……黒　須　　憲……　51
セース・ノーテボームを読む１『フィリップと他者たち』……吉　用　宣　二……　65
英語における語頭の /j/ と語中の /j/ のふるまいの違い ……高　橋　直　彦……　91
Tilesius und Japan (Teil 1) : Tagebuchauszüge über Ankunft
　und Aufenthalt in Nagasaki 1804/5 ……Ernst F. SONDERMANN……　105
For a Walk : Experientially Learning
　a Lost Way of Life……Scott WATSON……　149

〔翻　　訳〕

ジョナサン・ターナーによる社会学理論の社会学の
　実践における利用の提案（編集）……久　慈　利　武……　157

〔論　　文〕

こころとは何か――二元論と心−身因果――　……伊　藤　春　樹……　242(27)
技術知としての教育学
　――W. ブレツィンカによる「教育の経験科学」の提唱――…氏　家　重　信……　268(1)

（二〇〇九・十二）

東北学院大学学術研究会

東北学院大学教養学部論集 第 154 号　2009 年 12 月

# 目　次

〔論　　文〕

●時代の音……鈴　木　秀　美……　1

●ラゲール多項式の積の展開公式 II　……高　橋　光　一……　21

●山形県尾花沢盆地におけるスイカ生産に関する気候学的
　バックグラウンド……菊　地　　立……　29

●仙台藩（伊達藩）に於ける日置流印西派の伝播……黒　須　　憲……　51

●セース・ノーテボームを読む 1『フィリップと他者たち』……吉　用　宣　二……　65

●英語における語頭の /j/ と語中の /j/ のふるまいの違い ……高　橋　直　彦……　91

● Tilesius und Japan (Teil 1) : Tagebuchauszüge über Ankunft
　und Aufenthalt in Nagasaki 1804/5 ……Ernst F. SONDERMANN……　105

● For a Walk : Experientially Learning
　a Lost Way of Life……Scott WATSON……　149

〔翻　　訳〕

●ジョナサン・ターナーによる社会学理論の社会学の
　実践における利用の提案（編集）……久　慈　利　武……　157

〔論　　文〕

●こころとは何か――二元論と心−身因果――　……伊　藤　春　樹……　242(27)

●技術知としての教育学
　――W. ブレツィンカによる「教育の経験科学」の提唱――……氏　家　重　信……　268(1)

●印は東北学院大学学術研究会の Web にて公開いたします

東北学院大学学術研究会

執筆者紹介（掲載順）

| | |
|---|---|
| 鈴　木　秀　美 | （チェロ奏者・指揮者・<br>東京藝術大学非常勤講師） |
| 高　橋　光　一 | （本学教養学部　教　授） |
| 菊　地　　立 | （本学教養学部　教　授） |
| 黒　須　　憲 | （本学教養学部　准教授） |
| 吉　田　宣　二 | （本学教養学部　教　授） |
| 高　橋　直　彦 | （本学教養学部　准教授） |
| ｴﾙﾝｽﾄ・F・ｿﾞﾝﾀﾞｰﾏﾝ | （本学教養学部　教　授） |
| スコット・ワトソン | （本学教養学部　教　授） |
| 氏　家　重　信 | （本学教養学部　教　授） |
| 伊　藤　春　樹 | （本学教養学部　教　授） |
| 久　慈　利　武 | （本学教養学部　教　授） |

# 時 代 の 音

鈴　木　秀　美

## は　じ　め　に

本論は2008年11月2日及び2009年6月20日に東北学院大学で行った筆者のレクチャー・コンサートの内容を加筆・推敲してまとめたものである。それはヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach（1685–1750）の無伴奏チェロ組曲 BWV1007–1012 にまつわる諸問題を解説し，また演奏するものであったが，その第2回目は同時に《時代の音》と題する3回のレクチャー・コンサート・シリーズの始まりでもあった。

日頃私達が享受している音楽—演奏がその形を取るまでには，どのような選択を経るのか。「古楽」という呼び名が知られ始め，オリジナル楽器や原典資料の研究などが盛んになってきた今日，その選択肢はよりいっそう増えていると思われるが，そこにはどのような問題が含まれるのか。日頃気軽に口にする「当時の音」とは何か。それに対するものとしてあると思われる「現代の音」はどういうものか。本稿は，音楽や演奏という漠然とした存在について今一度考え，21世紀にも弾き継がれ，次世代に伝えられるべきは何であるかを僅かなりとも探ろうとするものである。

昨今かなり一般的に使われるようになった「古楽」という言葉は，単に遠い昔の音楽を演奏することのみを意味するのではなく，「オリジナル楽器」もただ古い楽器を意味するのではない。作曲家の脳裡にある曲が浮かんだとき，或いは少なくともそれが楽譜に書かれたとき，そこには何らかの想定された楽器の音がある。オリジナル楽器の「オリジナル」には，その曲に想定された楽器という意味と，その楽器が元々作られたときの状態（楽器は時代と共に変化したので）という二つの意味を含んでいる。モンテヴェルディにもバッハにも，ベルリオーズにもバルトークにも，それぞれのオリジナル楽器が存在し得る。

## 疑問の始まり

古楽という言葉が一般的に使われるようになったのはそう遠い昔のことではない。東京近辺では40年ほど前，オリジナル楽器というものを使い，そのことを謳った演奏会が増え始

めてきた。筆者の在籍した桐朋学園大学に古楽器科が創設されたのは1978年のことである。

古楽とはそもそも，20世紀前半に，すっかり忘れ去られた遠い過去の音楽，中世やルネッサンス，或いはそれ以前の音楽を再紹介しようとする人々によって用いられた“Early Music”という言葉の日本語である。すっかり演奏の伝統が途絶え，どうやって演奏するのか誰も知らない楽器，どう読めばよいのか判らない楽譜，判らない音律などを再び演奏するための研究は時に考古学的とさえ言え，Earlyというよりは Ancient，古代の音楽であった。そのような研究者は音楽家というよりはむしろ学者に属し，下手をすれば好事家，懐古的趣味のアマチュアと思われ，奏法にせよレパートリーにせよ，プロフェッショナルな「楽壇」とはあまり接点のないものであった。

しかしその考えの基本姿勢，つまり文献や楽器などの資料研究からその曲当時の状況を知り，それを演奏に反映させることは重要かつ音楽の本質に迫るものであるという姿勢は，次第に後の時代の音楽においても有益であると考えられ，楽器の状態や演奏方法全般が，現代（20世紀以降）の演奏習慣とは一線を画して検証されるようになった。しかしレパートリーがバロック後期からクラシックなど，比較的近い時代の音楽に広がってきたとき，そこには大きな問題が生じ始めた。バッハとそれ以降の曲は20世紀初頭のレパートリーにも含まれていたので，同一曲ではあるものの，楽譜も楽器も弾き方も表現も，まるで違う方法が突如出現したのである。

音楽学校など教育の場において問題は顕著となった。研究に興味をそそられた学生達は，ある曲の演奏について，自分の教師のいうことと当時の教則本などの文献が教えるところの食い違いに悩み，教師は，今まで通り自分のいうことを守らず，奇妙な弾き方を始める学生に面食らうところとなって，「古楽」はひと頃，「伝統を壊し秩序を乱す不逞の輩の所業」と目されるところとなった。

しかしながら，過去に作曲された楽曲を演奏する限り，その原典資料や当時の演奏習慣，成立事情などの要点は，本来どんな楽器，どんな方法を用いようとも演奏に際して一度は把握されているべき事柄のはずである。個人的な嗜好，恣意的な判断に依らず，歴史全体を広く捉えて曲のあるべき姿に近づこうとする古楽のアプローチは徐々に理解され，昨今では現代の楽器の演奏に於いてさえその影響を無視できないところに至っている。

## 演奏行為全般について

### 「演奏」はメッセージ

ところでそもそも，音楽の演奏とは何だろうか。行為そのものを言うなら，人が，或いは

自分自身が書いた音符を楽器や歌で音にすること，或いは楽譜にならずとも心の裡に思い浮かぶままに弾き，歌うこと，と定義できるだろうが，「音楽」と「演奏」とを切り離して言うことは難しい。なぜならある楽曲の楽譜や使用する楽器のみを以て「音楽」ということはできず，また実際に音になっていない「心の裡に思い浮かんだもの」や，音を用いて表現したい想いや欲求そのものを「音楽」ということもできないからである。したがって，「音楽」というとき，そこには必ず音を発する「演奏」という能動的な行為が含まれる。つまり音楽は外への発信，何らかのメッセージなのであり，そうであれば受け取る側がいなくてはならない。極言するなら，演奏によって送られたメッセージが聴くものの胸中に何らかの変化をもたらして初めて，「音楽」は成就するのであり，部屋に響いているある種の「整えられた周波数」そのものは必ずしも音楽ではない。それをもって何かを伝えたいという奏者の意志と，またそこから何かを聴き取ろうという聴衆の意志，その疎通があってようやく音楽となるのである。

したがって，演奏するときには目の前にいる人に解るように，人の心に届くにはどうすればよいかと考えることが重要となるが，それは必ずしも客に阿ることでもなければ客の心理を弄ぶわけでもない。第一番目の聴衆は演奏者本人だからであり，また「聴衆の心理」という概念的対象にどう語りかけるかと考えることもできるからである。相手の数や有り様によって伝える方法が若干変わったとしても不思議ではないが，何をどの程度変えるのか，また変えてよいのかということは熟慮されなければならない。

## 演奏の客観性について

演奏家の中には，音楽は美術館のようなもの，コンサートの各曲はその各部屋のようなものであり，したがって伝える方法に変化は必要なく，我々はただ壁に掛かった絵のように客観的な演奏をし，聴衆が受け止めるに任せるのが良い，それが各作品の美を理解する最善の策であると主張する人もいる。しかし実際に音楽でそういうことは可能なのであろうか。美術館にさえ，絵画を並べる順番や，配置を考えたり壁の色や採光を工夫したりというお膳立てはあり，それは主観的なものである。

いわゆる古楽奏者は，20 世紀の一般的演奏習慣をあえて見直そうとする者であるから，多少なりともそのように客観的な姿勢を標榜するものである。むろん，ある音楽を理解する一番身近な鍵は楽譜にあるのであり，それを先入観なく読むことは第一に重要なことではある。しかし，同様の文献を読み，同じ自筆譜・初版譜など第一次資料を閲覧して研究をするにも拘わらず，その結果出てくる個々の演奏は千差万別であり，時には同じ楽譜から弾いて

いるということさえ信じ難いほど異なった結果をもたらすことは，多くの演奏や録音を聴いても明らかである。

「人は自分が観たい歴史を観る」とよく言われるとおり，資料から何を取捨選択するか，それのどこに焦点を当て，どの程度取り混ぜるかは主観的な選択なのである。少なくとも音楽における客観とは，音楽を恣意的に色づけしたくないという主観であり，客観主義とはそう努力しようとする姿勢にしか過ぎない。

## 楽譜が持つ「前提」

楽譜は，当時の音を知る第一歩である。作曲家が私達に残してくれた手紙のようなものであり，そこには多くの情報が詰まっている。それが手紙であるならば，添削されず，他人の加筆訂正など行われていないままで読みたいと思うのは当然である。原典資料，或いはそれに忠実な楽譜を求めようとすることは，音楽家が第一に持つべき基本姿勢である。

楽譜は大抵の場合，こう書けばこのように読まれるはずという前提を持って書かれている。なぜなら，相当近代になるまで，音楽は演奏される機会があって書かれるものであり，多くの場合演奏者さえも想定されていたからである。近代に至るまで音楽とは常に「現代音楽」だったのであり，少なくとも18世紀までの作曲者達は，世紀を経て言語も文化も全く違う者がその楽譜を読むことを想定しては書かなかった。したがって，読まれ方にある程度の予測がついたのであり，世紀を経てそれを再び眺める私達は，その時代の演奏習慣，記譜や読譜の習慣をある程度知っていなければ，間違って読んでしまう可能性が大いにある。

楽譜はどのみち全て記号であるが，音符以外の記号に関するごく身近な例として，現在スタッカートと呼ばれている，音符の上に付ける点が挙げられる。現在では，この点が付けられた時，音を前後の音から区切って短めに弾くこととされているが，18世紀初期，フランスのバロック音楽では，しばしばこの点が短くすることは意味せず，それが付いていなければ習慣的に若干の長短をもって演奏するところの音符を，正しく平均に弾くという意味になる。この長短はイネガル（inégale＝unequal（英）＝不均等）と呼ばれ，フランスに限らずヨーロッパ音楽で広く用いられていた演奏習慣の一つである。

またモーツァルトは，スタッカートのように丸い小さな点と，縦に細長いストロークを区別して用いていたが，19～20世紀前半の出版譜では印刷の活字としてその区別のないものが多かったので，おしなべて丸い点になってしまっていることが多く，モーツァルトの意図が正しく伝達されないままに時代が過ぎることとなった。現代に至ってもなお，その意味は必ずしも正しく理解されていない。

## 「前提」の衰退

フランス革命以降, 音楽は特権階級の愉しみから一般市民のものとなり, 出自も能力も様々な人が演奏するようになった。当然の結果として，作曲家は奏者が前提をもって読むことを以前ほど期待できなくなり，楽譜により多くの記号を書き込まなければならなくなった。演奏会場が大衆向けに広がったこともあって，オーケストラなど大規模アンサンブルのサイズはいっそう大きくなり，楽譜は一見複雑化してゆくが，これを果たして進歩と呼ぶべきであろうか。記号が多いということは，それだけ書かなければ読み手が理解しないということでもある。

18 世紀以前，音量というものを音楽表現の手段としてそのまま用いることがあまり考えられなかったせいでもあるが，バッハはその作品中殆ど音量の指示をしていない（バッハのカンタータに頻出する f と p は，多くの場合 Tutti（全奏）や独唱者の登場を意味した)。 それに対する極端な例として，チャイコフスキーはピアノ（p）を 6 つも書いている[1]。それはもちろん，その部分へのチャイコフスキーの想いの表現ではあるが，それだけ奏者の読解・表現能力を信用できていないということとも読み取れる。また強弱記号が多いからといってチャイコフスキーの音楽がバッハのそれより複雑であるとは言えない。

現代音楽の世界では，記号の付いていない音符は殆ど存在しないといってもよいほど多くの記号が使用される。たまに何も記号のない音があると奏者はどう弾いて良いのか解らず，作曲家に尋ねた後，結局その音に鉛筆で「普通に」等と書き込むことさえある。あたかも，時代が下るにつれて音符そのものの意味を持つ機能が衰えていったかのようである。19 世紀中頃までの音楽家達は全て「現代曲演奏家」であったのだが，演奏家に読解の前提を期待できない現在の音楽家とは大きな違いがある。

## 楽譜が表すもの

ニコラウス・アルノンクール氏は，楽譜とは，いつ音が始まるかを示しているに過ぎないという意味のことを述べている[2]。音符はどの程度の時間「有効か」が表されているものであり,「弾き終わり方」は絶対的なものではあり得ず，演奏の状況から奏者が判断し，読み取るものなのである。極端なことを言えば，音の始まりは楽譜に書かれているが，いつ終わるかを決めるのは演奏家と，聴衆の耳ないしは心である。ある一つの音，例えば四分音符の

[1] 交響曲第 6 番《悲愴》第 1 楽章，b. 160
[2] アルノンクール著「古楽とは何か」（音楽之友社）第 1 章「記譜法の諸問題」

実際に鳴る長さは，状況によって劇的に変化する。

作曲家が望んだところの「メッセージ」と，演奏家の持つそれが同一であるとは限らない。演奏家は本来，曲の持つ意図を聴衆に伝える良質のアンプやスピーカのようなもので，透明であることが理想的と言えるかもしれないが，どの機械にも独自の音質や性能があるのと同様，各々の声や想いを完全に排して演奏することは不可能である。前述のように，己の恣意に走るのではなく客観的に演奏したいという考えや姿勢はあり得ても，実際には実現不可能であり，そのことは何ら「より良い演奏」を約束しない。

しかしながら，演奏者の脳裡に形成される目標には多くの要素が複雑に絡まっている。その分析はただ音楽や音楽学のみに留まらず，心理学をはじめ多くの領域に跨るものと考えられ，一音楽家の手には到底負えない。演奏する者としては，それが完全に解明されることはあり得ず，また解明されてしまうべきでもなかろうと考える。

## 楽譜が表せない「音の終わり」と「色彩」

楽譜が作曲家からの大切な手紙であっても，そこに表されているのは音楽のごく一部である。今述べたように音の「終わり」については甚だ不明瞭である。前述のアルノンクール氏は，『音は〈消えるように〉終わるのであり，正確な終わりを聴き取ることはできない。幻像，つまり聴き手のファンタジーが音を延ばしており，現実の聴体験と分けることができないからである』とも述べている。つまり，一つの音の終わりは多くの場合次の音の始まりによって明らかとなるが，聴くものの想像の中にはまだ鳴り続けているかもしれず，楽譜はそれを記すことができないのである。

また，基本的に楽譜は色彩を表現することはできない。音楽に色彩が存在するかどうか，それはまた別の大きな議論の対象であるが，ここでは楽器や声の「音色」という意味に留めておく。そこで特に器楽の場合，ある曲が作られたときに想定され，用いられた楽器を知ることは，その楽曲に予想された色彩を知る上で重要である。

## 楽器の変遷

時代によって異なる審美眼をもって作られる楽器は，それぞれが何らかの意味でその時代の音，音色の好みを表している。僅か 2-3 世紀の間，時にはほんの 5-60 年の間でも，同じ名前で呼ばれる楽器は驚くほど変わり得るのである。ルネッサンス・リコーダーの大きく真っ直ぐで明るい音とバロック・リコーダーのくぐもった音，ドルツィアンというファゴットの

前身とフランスから始まったバッソン（バスーン）の鼻にかかってまろやかな音色，木管に穴を開けたものから総金属で各指穴にカバーがつくようになったフルートなど，楽器の変化は，単なる好みの変化にとどまらず，演奏された場所の違い，また演奏家の地理的移動さえも影響している。さらにまた，チェンバロに代わって台頭してきたフォルテピアノと，同じ頃流行し始めたクラリネットの音色のように，異なる楽器から音色や機能に何らかの共通点を持ち，その時代の好みを反映していると考えられることもある。

楽器は審美眼のみによって改造されていったのではない。演奏者はいつの時代にも，より大きな音と均一性・安定性，つまりより容易く演奏できることを求めていた。音が豊かで容易く演奏できることは何も悪いことではないが，問題は，何らかの改造をすると，それ以前にできていた表現の全てを出来るわけではないことである。

およそ全ての木管楽器は，指遣いによってよく鳴る音とくぐもった音を持っており，奏者も製作者も，出にくい音がよく出るように苦心した。指穴を増やし，それを塞ぐ金属の器具(キーと呼ぶ)を付けると音色はより均一になり，トリルと呼ばれる素早い反復も容易になる。管楽器の変化は特にフルートの場合顕著だが，キーは徐々に増え，指穴は大きくなって全てにカバーが付くようになり，円錐だった楽器が円筒になり，材質も金属になって，全ての音は日向に出て大きく明るく鳴るようになった。しかしそれと同時に，それまでにあった陰影はなくなり，奏者は苦労して陰になる音を作り出さねばならなくなった。道具としての不便や不均質は，必ずしも音楽にとっての不具合とは限らず，特別な音色や陰影となって音楽に深みをもたらすこともある。

ピアノについてごく簡略に言えば，モーツァルトの時代，小さな革のハンマーで真鍮弦を叩く5オクターヴのピアノは単純な交響曲損のため木のボディがよく響き，軽く明るい音色であったが，音域の拡張と音量の増大を求めて弦を増やした結果，ボディの強度を増すために箱は分厚くなり，次いで金属の支柱が入るようになり，さらには現在のピアノのように鋳物のフレームが全体を覆うようになり，モーツァルト時代の何倍もの大きさを持ちフェルトを巻かれたハンマーが鋼鉄の弦を叩く。鍵盤の重さはシュタイン（モーツァルトが好んだピアノの一つ）の約8倍とも言われる。現代のピアノでモーツァルトを弾くときに奏者が苦労するのは，如何にして楽器の持てる能力全てを使わずに音楽を表現するかということである。ヴァイオリンの顎あてやチェロのエンドピン（床に突き刺す棒）は奏者の腕や足を楽にするものではあるが，それによって楽器は固定される。固定は必ずしもよいことだけではなく，身体と楽器が一体となって動く自由が奪われるとも言え，チェロの場合には音が床の材質に大きく左右されることになるのである。現代の弦楽四重奏などを聴くとチェロだけ響き方が

異なり，ステージの材質などによっては上三声部と同じ明瞭さを保つことが甚だ困難となる。

それぞれの変化の段階に固有の美しさを持つ楽器が「進歩」したのかどうかは人の価値判断によるところも大きいが，変化によって何も失わなかったことはない。それは常に諸刃の剣であった。

オリジナル楽器（ある曲が作曲された当時使われていた仕様の楽器）とその変容は私達に多くのことを教えてくれる。演奏者によって楽器の音は大きく変わるものの，その曲の基本となる音量や雰囲気を知る手かがりとなるばかりでなく，人間がいかにいつも楽をしたがるものであるか，どれほど質より量を安易に求めることが多いかを教えてくれる。歴史上，音量の小さな楽器は衰退し，大きなものは生き残る。しかしまた，音量だけに頼らず，質を見極めることこそ芸術に肝要であるという考えが昔からあったことも窺い知ることが出来るのである。

## モダン楽器と呼ばれるものについて

バッハに関する楽器について述べる前に，古楽という言葉ができてから便宜的に使われるようになった「モダン」という言葉について述べておこう。

モダン楽器とは，簡単に言えば20世紀後半以降，「古楽」や「オリジナル楽器」が増えてきた時，周りにあった「一般的」楽器である。その仕様は，ヴァイオリンやヴィオラであれば前述のように顎で楽器を押さえて支える「顎当て」が付き，弦はスチール弦と巻き線のガット（ガットの上に銀などの金属を巻いて質量を高めたもの）の混合，チェロにはエンドピンと呼ばれる床に突き刺す脚が付き，殆どの場合4本ともスチール弦，というのがおおよそ20世紀後半の標準的仕様である。このような楽器は楽器店やテレビで今も普通に見られる。

しかし「古楽」が単に古い音楽や楽器を指すに留まらないのと同じく，「モダン」という言い方もまた，楽器の仕様や形状だけを指すのではなく，音楽する姿勢や考えをも表すようになった。つまり，どのような時代の音楽であっても（歴史的研究はするとしても）使用する楽器は替えず，同じ楽器の上で様々な時代的変化を表そうとするものである。それはそれで一つの考えであり，また一種の挑戦でもあるが，そこには，楽器製作者の意図への考慮が欠落していると言わざるを得ない。

どのような道具にも長所短所があり，得手不得手がある。それが音色であれ音量であれ，発音その他の機能性であれ，楽器製作者に何らかの目指す方向がある限り，その逆のものには向かない。製作者は当然，音量が豊かで音色も多様，弾きやすく安定しつつ発音も良い，

どの方面から見ても喜ばしい楽器を作ろうと努力するかもしれないが，全てを得ることはできない。音量は大きな胴体や強い張力によって得られるが，強い張力は発音を鈍くする。また音色が多彩であるということは当然それだけコントロールを必要とするものであるから，単純に弾きやすいとは言えない。また彼ら製作者の脳裡にも，「良い音」という理想像があるはずである。そしてその理想は，ちょうど服飾の趣味が移ろうように，時代と共に変化するものなのである。ある時代に美しいとされた事が，別の時代では美しくないこととも，退屈なこととともなり得るのである。

現代の「どこへいっても同じ」を目指すスタインウェイその他のピアノは，言わば徒に客観を目指す演奏と似て，個性があることを避けているかのようである。むろんピアニストに言わせれば一台ずつ大いに違うのだが，19 世紀に作られた一台ずつ別の楽器と言えるほど異なるピアノの数々に比べれば，その差はまことに微々たるものである。「オールマイティ」はそもそも存在し得ないが，それに近いものがあったとしてもそれは平均律という調律法と同じく，どの調も同様に美しく，最終的にはどこも美しくないのである。

## 弦楽器の歴史的変化について

17-8 世紀に作られたヴァイオリン属の楽器は，殆ど全てが 19 世紀になってより大きな音がするように改造されている。それは，音楽が貴族の占有から市民の手へと移り，演奏会場がより広く聴衆の数も増えたことと関係すると考えられる。ストラディヴァリ（Antonio Stradivari, 1644-1737）をはじめとする有名なクレモナの名器の数々も，彼らが作ったままに残っているものはゼロに近い。

弦楽器は，楽器本体・弦・そしてそれを擦る弓の 3 つが大きな要素である。19 世紀の製作者達はもちろん新しく楽器も製作したが，既にその頃高値で取引されていたそれ以前の楽器を改造したのであった。

改造とはすなわち，ネック（棹）の角度を少し後ろに反らせて僅かに長くし，高音域まで容易に弾けるように指板（しばん：指で弦を押さえる黒い板の部分）も長くし，それまでは張り合わせた軽い木材で作られていたのを無垢の黒檀にして音に重量感を与えた。楽器内部，表板の裏側に張られているバスバー（力木）と，弦の振動を裏板に伝える魂柱（こんちゅう）と呼ばれる柱の形状や太さ，長さも変化した。音に大きな影響を与える，弦を下から支えているコマの形状も変化した。

弦楽器は，こういった細かい差異の集積が結果的に大きな影響を与えるのであり，その有り様は様々であった。現代より太くて長いバスバーもあれば，魂柱がいつも細いと限ったわ

けでもない。バロック時代のコマは往々にして，現代のものよりどっしりと質感のあるものである。「バロックの楽器は華奢で，モダンはがっしりしている」とか，それぞれの時代がこうであるとかいう具合に，単純に図式化しようとすることは，理解よりも誤解を多く生む。

## 弦について

17-19 世紀の弦楽器は，ガット（羊の腸を縒り合わせたもの） もしくはその上に金属を巻いて質量を増やした弦が使われていたが，それは第二次世界大戦以降に至るまでごく普通に用いられたものであった。このことについては，筆者自身がヨーロッパ在住の間に数々の年輩音楽家から直接証言を得ているし，数々の写真や SP 録音の音が証明している。

同様に，付属品は一般に考えられるよりずっと後になってから使われ始めたものである。ヴァイオリンの顎当ては 1820～30 年頃使われ始めたと考えられ，チェロのエンドピンは 19 世紀も最後の 20 年ほどになってようやく広まってきたものである。

## 弓について

弓は言わば奏者の腕の延長であり，話をするときの唇や舌，歯である。同様に右手の動かし方（ボウイング）は，歌手の呼吸法，息遣いと同じような役割を果たしている。弓の形状は，それが何に優れた道具であるかを端的に示している。

（A）

（B）

A はバロック時代のもので，見事な流線型をもっており，音の静かな減衰を示しているかのようである。

B はクラシック時代，18 世紀末から 19 世紀初頭のスタイルで，弓は先が四角くなり始めているが，まだそれほどの重りを持ってはおらず，音のアーティキュレーションがし易い。

C はロマン派時代，1830-40 年頃の弓で，つまりはそれ以後現代に至るまでほぼ同じスタイルである。先が四角く充分な重さを持つようになり，弓の先まで音を保つことが容易に

（C）

なっている。

楽器にせよ弓にせよ，このような変化はある日突然起きたのではなく，徐々に，重なり合いながら起きていったのであり，これもまた図式的理解は危険である。

18 世紀の絵画は，どの時代，どの地方でどういう弓を用いていたかを知る重要な手がかりになる。

## 演奏法について

管・弦楽器の演奏法の詳細をここで論じることは出来ないが，そのごく一面とはいえ表現の本質にまで関わる可能性もある技術の一つに「ヴィブラート」がある。もともとは自然に揺れる人の声を真似るものであり，バロック時代から存在するものであった。詳述は避けるが，ヴィブラート，トレモロ，シェイクその他様々な名前で呼ばれ，その用法についての記述が幾つも見つけられることから，17-8 世紀にも用いられていたことは明らかである。ただどちらかといえば特別な表現として，また装飾法の一つとして限られた箇所に用いられることが多かったのである。

音が揺れることを好むかどうか，またその使用頻度については 18 世紀でも個人差が大きかったようだが，モーツァルトの父レーオポルト・モーツァルトは，ヴォルフガング・アマデウスが生まれた 1756 年出版の「ヴァイオリン教則本」の中で，全ての音にヴィブラートをかけるのは間違いであり，熱病にかかったようにかける人がいる，と諌めている[3]。また 19 世紀も後半に入った 1863 年，ライプツィヒで演奏した D. ポッパー[4] は，そのヴィブラートの多さについて新聞で批判されている[5]。ヴィブラートは，バロック・クラシック音楽に使われなかったということは全くなく，しかし 19 世紀後半に至っても，必ずしも現代人が想像するほどに用いられていたとは限らないのである。

[3] A treatise on the fundamental principles of Violin playing, 1756, Oxford Univ. press ISBN 0-19-318513-x
[4] David Popper（1843-1913），ハンガリー人，19 世紀後半最も著名なチェリストの一人
[5] Neue Zeitschrift für Musik, Oct. 30, 1863

## 演奏の形態の変化

オリジナル楽器を準備してその奏法を学び，正しい楽譜を用いても，その演奏形態が違えば音楽の意味するところは必ずしも正しく伝わらない。

今も好んでよく演奏される J.S. バッハの《2 つのヴァイオリンの協奏曲》は，もともと 6 声のコンチェルト（concerto a sei）と書かれていたもので，全パートが一人ずつで演奏されるものであった。同様に《ブランデンブルク協奏曲》も，基本的にソロ・パートとそれ以外のパートは同人数である。それを何十人ものオーケストラで演奏すれば，単にバランスが異なるだけではなく，全く別な音楽となってしまうのは当然である。

ハイドンの交響曲も，特にその初期･中期における作品は同様の問題をもつ例である。《パリ交響曲》と呼ばれる 6 曲，晩年の《ロンドン交響曲》12 曲など後期の作品は，それぞれパリとロンドンにあった大編成オーケストラによって演奏されたが，それまでの 30 年に及ぶ時代の作品は，雇い主エスターハーズィ家のために書かれたのであり，最初期，1760 年代のオーケストラは僅か 13 人である。オーケストラというよりはむしろ室内楽に近いこの時期の作品を，20 世紀の古今のオーケストラは「未完成な作品」と軽んじて無視するか，或いは 5〜6 倍の人数で演奏してきた。演奏家一人々々がいかに優れていたとしても，それでは到底，そこにあるべき軽妙さも機敏な会話も，ほどよいバランスも得ることは出来ない。60 年代の交響曲と最晩年の傑作『天地創造』初演時では，実に 15 倍もオーケストラのサイズが異なるのである。

## 演奏会場のサイズと音響

楽譜の読み取りと演奏の実践には，演奏会場のサイズや音響も大きく関係する。奏者の前提をもった理解を期待するのと同様，多くの場合音楽はある広さや音響を想像して書かれているからである。

例えば，Venezia のサンマルコ大聖堂で演奏するために書かれた Giovanni Gabrielli や Monteverdi の作品を日本のコンサート・ホールで演奏するとき，いったいどのように響けばその演奏は「成功」ということになるのだろうか。前者は響きが豊かであり，対面して 2 つのオーケストラまたは合唱が配置できるのに対し，後者は形状が異なり，殆どの場合響きは乏しい。

それにも拘わらず，演奏には成功と失敗があり，日本のホールであっても，響きが著しく異なっても，上記のような音楽が人に大きな感動を与えることは十分あり得るので，そこには演奏の形態や形状が異なってもなお壊れず，伝えられるべき内容，届けられるべきメッセー

ジというものがあるのだと考えられる。それは，その作曲家が意図したことのエッセンスのようなものかもしれないが，それだけで事が足りるのではないかもしれない。しかし，その「元」が何かを考えずに，演奏や練習の目標を定めることは難しい。

コンサートを企画する実際においては，経費や日程など現実的な理由によって，音楽家は数多くの非芸術的妥協を迫られる。少しでも多くの人に音楽を聴いてもらいたいのは当然だが，前述の通り，大きなホールでソロや室内楽を聴けばそれは異質なものとなるし，当然弾く方も同じ方法ではいられない。「大ホールで通用する弾き方」がより優れたものであるというのは正しくなく，それは異なった難しさなのである。

使用する楽器の性格が正しく伝わらない場所で演奏を重ねれば，その曲がつまらない，或いはその楽器がよいものではない，さらにはその奏者が優れていない等々の誤解を植え付け，コンサートを聴こうとする者は減り，結局音楽は徐々に廃れていく。しばしば雑誌や新聞などは「古楽器と呼ばれる，柔らかく脆い音の楽器」等と書き，また一般にバロック音楽やその楽器はそのようであると思われているが，そこには，従来の後期ロマン派的味付けとモダンの音量に慣れた耳にはそれしか聴き取れなかったという意味と，そのようにしか聞こえない場所で演奏してしまったからという二つの要素が含まれており，演奏が必ずしもそうだったとは限らないのである。

### バッハが組曲に意図した楽器は？

バッハの無伴奏組曲は，実はどのような楽器のために書かれたのか，完全に明らかではない。Violoncello がどのような楽器を意味するのかが明らかでないからである。組曲の第 6 番には「5 弦で」という指定が冒頭に書かれているが，ピッコロとは書かれていない。昨今研究が盛んになってきた，便宜的にスパッラ（イタリア語＝肩）と呼んでいる，肩から釣りひもで掛けて胸に押し当てて演奏する小型のチェロでバッハ自身が楽しんだ可能性はあり，当時の「ヴィオロンチェロ」は私たちの考えるところと違うかもしれない。

しかし，それ 1 種類しかなかったと考えるのが歴史的に正しいのかどうかは疑問の残るところであり，そのような楽器の演奏は未だ「音による説得力」を持っているとは言い難い。また同じ楽器であっても，演奏者がヴァイオリニストならその向きに弾くのが自然だが，ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者であれば縦向きに構える方が自然である。作曲者ただ一人がその曲を弾くという時代は 19 世紀より前に既に終わっているし，バッハの時代にも，彼以外の人が弾こうとした可能性は大いにある。同じ楽器を，向きを変えて弾いたこともなかったとは言い切れない。

さて，現代に伝えられている音楽作品の中で，J.S. バッハの「無伴奏チェロ組曲」は，多くのチェリストにとって最も重要な作品の一つであるが，独奏の器楽作品としては珍しいほどに多くの問題を包含している。

## 組曲の基本資料

まず，バッハの自筆譜は消失しており，厳密に何年に書かれたということは分かっていない。現代には 4 種類の筆写譜及び 1824 年以降に出版された楽譜によって伝承されているが，それらの楽譜は全て様々な問題を持っている。

第一に，最重要で最終的にこれを拠り所とするしかないのがバッハの 2 番目の妻，アンナ・マグダレーナ・バッハ（以下 AMB）によるもので，1727 年から 1732 年の間にライプツィヒで書かれたと推定されている[6]。第 2 はバッハの弟子であり自身オルガニスト・作曲家でもあったヨハン・ペーター・ケルナーのもので，1726 年に書かれているが完全ではなく，おそらく彼が作曲の勉強のために筆写した数百ページに及ぶ作品のうちの一部となっているものである[7]。第 5 番のサラバンドが抜け落ち，ジーグは最初の 9 小節のみで終わっている他，和音が足されていたり特徴的なリズムの変更があったりすることから，彼がバッハの自筆から筆写したかどうかさえ疑わしいとする意見もある。

第 3 は 18 世紀後半になって不詳の二人の書き手によって書かれたもので，特徴的な装飾音が数多く加えられている[8]。第 1 から第 3 までの 3 つはそれぞれベルリンの図書館に，第 4 は恐らく 18 世紀の末頃に書かれたもので，ウィーンの国立図書館に保管されている[9]。それぞれの筆写譜には相当数の相違点があり，キルステン・バイスヴェンガーほか音楽学者の研究によればお互いに関係を持たない。3 と 4 は時代的にも遅いことから，演奏家の視点にとっては，単に参照する以上にあまり意味を持たない。

第 1 の AMB は，シュヴァンベルク（Georg Heinrich Ludwig Schwanberg）への贈り物として書かれた。チェロ組曲の姉妹作品ともいえる無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ各 3 曲はバッハ自身の自筆浄書が残されており，1720 年と記されている。AMB はこのヴァイオリン作品も同時に筆写しており，そちらには Pars 1，チェロ作品には Pars 2 とされていたことから，チェロ作品もほぼ同時期に作曲されたのではないか，また AMB は両方ともバッハの自筆譜から写譜したであろうということが類推される。

---

[6] Staatsbibliothek zu Berlin–Preußischer Kulturbesitz（SBB），Mus. ms. Bach P 269
[7] 同前，P 804
[8] 同前，P 289
[9] Österreichische Nationalbibliothek Wien, Mus. Hs. 5007

初版譜は，この推測される作曲年から約 100 年後，1824 年にパリの Janet et Cotel 社から，次いで翌年ライプツィヒの Probst 社から出版されたが，それらは既に「6 曲のソナタもしくは練習曲」というタイトルが付けられ，AMB と比較してスラーや拍子記号，音の違いなど，細部に数多くの問題点を残している。

AMB の筆写譜にも間違いはかなりあり，さらに書き記されたスラーが非常に不明確で，どのように弾けばよいのか判らないということも恐らく手伝って，初版以来実に数多くの楽譜が出版されてきた。筆者はこの組曲に関する考察をまとめ，楽譜を付した本を 2009 年に出版したが[10]，その中で組曲の出版を 24 と書いた。それは A. ヴェンツィンガーが 1950 年に書き記したものを基本的に踏襲したのであったが，最近，私の師匠であった故井上頼豊氏の蔵書を整理していたところ, 東ヨーロッパの出版を含めまだ多くの楽譜があることが判り，その数はおよそ 40 種類ほどに上ると思われる。

しかしその殆どは古今東西のチェリストの監修によるものであり，個人個人がどのように弾くか，どう考えるかを何らかの形で楽譜に書き込んだものである。

2000 年に，ベーレンライター社は上述全ての資料，つまり 4 種類の筆写譜と初版譜，さらに一切のスラーを排し，各筆写譜の違いが一目瞭然に判るようにした現代譜を含んだセットを出版した[11]。また同年ブライトコップフ社は，初めて音楽学者（キルステン・バイスヴェンガー）の監修による楽譜を出版し，そこには，その楽譜に至る選択と研究の過程などが記されているので，この 2 種類の楽譜を見れば，基本的に全ての資料とそれに関する専門家の見解とを知ることができるようになった[12]。

## 楽譜に見られる音楽の語り口

バッハの時代に，スラーは音楽の語り口を僅かに滑らかにするものであり，基本的に音楽にスラーはまだそれほど多くはなかった。デタシェと呼ばれる一音一弓の方法で，音の付き離れを操作することによって言葉を形作るのが一般的であった。したがってスラーは多くの場合拍の最初から始まり, 1 拍の中に収まっている。当然, 拍を越えて付けられた長いスラーは格別な意味を持つ。

AMB やケルナーのスラーは細かく，アーティキュレーションも演奏が難しいが，それは，その演奏に用いられた弓とも関係している。どの時代の弓で弾いてもバッハが簡単というこ

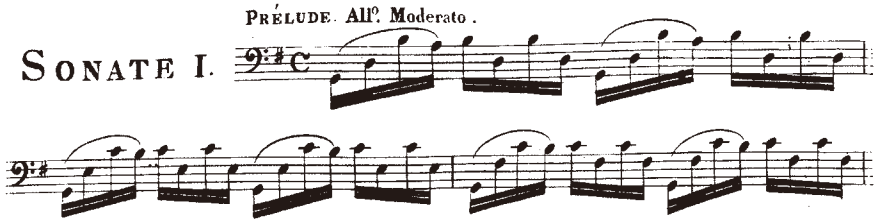
[10]「無伴奏チェロ組曲」東京書籍，ISBN 978-4-487-80017-9 C0073
[11] Bärenreiter, ISMN M-006-50572-2
[12] J.S. Bach, Sechs Suiten, Edition Breitkopf 8714, ISMN M 004 18089 1

とはないが，AMB を弾くにはバロック・スタイルの弓の方が，後の時代の先が重くなった弓よりははるかに仕事がし易く，そのようなタイプの弓で弾いてみると，なぜ音楽がそのように書かれたのかが頭だけでなく，身体の自然な動きとしても理解できるのである。

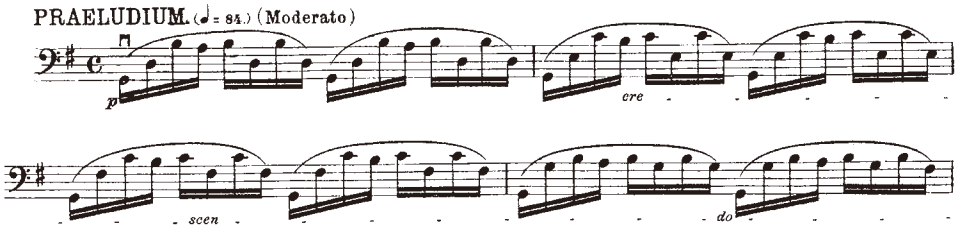
およそ世紀の変わり目（18 世紀から 19 世紀）を境として，音楽は文法や修辞学，美しい発音をもって語るものから，歌うものへと徐々に変わっていった。スラーは語り口を示すものからもっと長い文脈を表すものとなり，スラーと言葉遣い，また管楽器のタンギングや弦楽器の弓の返しとは段々無関係になっていった。以下の譜例は時代によってバッハの音楽への好みが変わっていったことを端的に表しているが，今述べたように，これらを実践する道具がこのような変化を促すものであったことも見逃されるべきではない。

（AMB，1727-32 年）

（初版，1824 年）




（ペータース版，1911 年）



## 「現代」の音

さて, 今私達の生きている時代に目を向けてみよう。筆者より年輩の世代が知っている音, 脳裡に描いてきた「楽器の音」の多くは, 20 世紀前半の巨匠達によって形成されてきたものである。ヴァイオリンならクライスラーやハイフェッツ, チェロならカザルスやフォイヤマン, ピアノならホロヴィッツやルービンシュタインといった人たちの SP 録音は, 当時多くの人に夢を与えたものであり, また奏者ならそのようになりたいと目指したものであった。しかしそのような録音の多くは, 奏者の存在が作曲家或いは作品を凌駕していたものともいえる。「誰々が弾くショパン」「誰々が弾くあのソナタ」であって, 作品は必ずしも最重要関心事ではなかった。もちろん, 彼ら自身がそのように考えていたと言いたいわけではないが, 文献に忠実な演奏を求める風潮が必ずしもなかった当時, 彼らがときには自由気ままに音やリズムを変え, 好きなテンポや表現をもって弾いていたことは否定できない。その音を聞いて育ってきた次の世代にとって, 偉大な巨匠の演奏や音は大きな壁ともなり得るものであり, 作曲家はその壁の向こうに見え隠れする存在であったと言えなくもない。

どの時代, どの国にあっても, 多かれ少なかれ音楽はマスターが弾くのに倣って学ぶものであり, それぞれの流派があった。能や歌舞伎などの日本の伝統芸能は代々そのようにして受け継がれ, 今もそれが守られているものだと理解しているが, このような一対一に近い伝承は別に日本だけに限ったことではなく, フランス革命の産物といえる「音楽学校」ができるまでは, 多かれ少なかれ似たような状況で音楽は伝えられてきたのであった。

20 世紀の前半から半ば頃, 二度の世界大戦によって技術者が減り, 機械がなくなり, また物資の流通が悪くなったこともあって, ガット弦は次第にスチール弦に取って代わられていった。しかしスチール弦は, 国や地方によっては子供のために（先生が四六時中調弦をしてやらなくても済むように）代用品として広がった面もあり, 当初は粗悪な音質を持つものであった。それは, ハイフェッツやフォイヤマンの録音の幾つかで, どの弦をスチールに替えたかが一目（一聴）瞭然に判るほどに音質の異なるものであり, 筆者には到底それがより良い音とは思えない。もちろんその後研究は進められ, スチール弦の音質も良くなってはきたとはいえ, 当然のことながら基本的に金属的な音質, 音色の悪さや変化の乏しさと, 絶え間なくかかるヴィブラートの流行とはどうも無関係ではないように思われる。発音の仕方や音の減衰の仕方もガット弦とは異なることから当然ボウイングの技術も変化し, ヴィブラートは徐々に, 熱病ではなく, 最も美しいこととされるようになってゆき,「歌うこと」とは即ちヴィブラートをかけることと解され, 音楽のなかにある「言葉」は美音追求の名の下に

ないがしろにされ，人はその揺れた音で何を語るかを忘れがちになっていった。

## 21 世紀の音

古楽の考え方，音楽史の中に楽器の変遷や演奏習慣の変化をも含めて考えることは昨今徐々に定着してきており，ロマンティックな味付けのバッハ演奏はあまり好まれなくなって来つつある。20 世紀初頭の演奏から考えるとそれは驚くほどの違いであり，同じ曲とは思えないことさえある。しかしそれは，自分の（あるいは先生の）趣味本位に考えるのではなく楽譜を見つめるということや，本来音楽家が当然するべきであった資料研究，演奏法の変遷などの研究を，学者だけでなく演奏者もようやくやり始めたということにすぎない。

## 古楽的アプローチ

楽器は何も替えず，奏法の表面だけを真似る古楽風な演奏も増えており，これは必ずしも歓迎できるものではない。それは楽器にとっても奏者の心理にとっても，どこか自然に反するものだからである。歴史的に演奏法に変化があったことを認め，そこから何かを学ぼうとするのはもちろんよいことであるが，そのような「古楽的アプローチ」を売り物にしている場合，現象として起きているのは「ヴィブラート禁止」といった表面的規則を設けることであり，ヴィブラートをしない代わりにどうやってその旋律を歌い，音楽を表現するのかということは充分に吟味されているとは言い難い。

ホルンやクラリネットなど，ヴィブラートをかけないことが一般的とされている楽器を除いて，音を鳴らすときに多少なりともヴィブラートをかけることは既に 100 年の伝統を持ち，奏者の殆どはそのような方法で学んできているのであるから，異なった方法を取り入れるにはまず奏者が充分に納得し，その方法で表現ができるところまでの時間が必要である。指揮者の号令一つでオーケストラが表面だけを整えても，説得力のある演奏になるはずもなく，またそれが音楽を歴史的・客観的に捉えた優れた演奏だと思われるのだとすれば，それは音楽という創造的行為の衰退でしかない。しかしもちろん，奏法の変遷が広く認知されるに至った今，どの時代の音楽も同じ演奏法で事足れりという姿勢が歓迎されるはずもない。

## 不思議な時代

20 世紀後半，特に最後の四半世紀は，世紀前半からの流れを受け継ぐ音と，それを見直し，それ以前の音を探ろうとするものの両方が混在した時代と言えるだろう。ドミナントという

ナイロン弦は1974年頃初来日したイツァーク・パールマンが使用していたもので，彼と共に日本に上陸したといってもよいようなものだが，彼の演奏の素晴らしさも手伝ってあっという間に拡がり，今までに聴いたことのない音質のヴァイオリンがどんどん一般的になっていった。チェロもまたスチール弦の研究がさらに進んで，今では小さく弾くことが不可能かと思われるほど大きな音のする弦が，ごく一般的に使われている。しかしその一方で，昔ながらの製法や道具が研究され，音楽学もまた科学的に進歩した。原典資料に基づき信頼に足る楽譜が出版され，今まで信じられてきた作曲年代が改められ，音やリズムが訂正され，場合によっては作曲者さえ違っていたことが明らかになった。楽器製作の研究も進んで，優れたガット弦やオリジナル楽器のコピーも作られるようになっている。

## 弾き継がれていくべきもの

「あらゆる進歩にもかかわらず，われわれが過去の時代の芸術や音楽を必要としていることは明らか」とアルノンクールは言っている[13]。別のところで彼はさらに押しすすめて，「過去の音楽は現代音楽となった」とさえ言っている。現在のように，同じ音楽を繰り返し聴き楽しむことは新たな習慣であり，さらに音楽を各時代の楽器や様式にしたがって演奏し，専門料理店のように楽しもうとする音楽享受のあり方は，言わば最も新しい方法なのである。

好むと好まざるとに拘わらず，また意識的・無意識的の別を問わず，演奏に至るには楽器や奏法，ピッチ，楽譜，会場など数多くの選択がなされる。そしてその全ては，音楽によく寄与し，意味を深めるべきものである。モダンの楽器は大きく滑らかで均質な音がするようになったが，それは元々，より大きな会場での演奏という需要に応えたものであった。しかし今私達は，音楽によっては大きな会場で演奏するのが良いとは限らないことをも学んできている。音楽が言葉となるには多くの雑音や破裂音，よく響いた音も短く止まった音も必要なのであり，滑らかで均質な音は言葉を聴き取りにくくするものだからである。またオリジナル楽器はそのような言葉作りに適しているものの，それを用いることが自動的によい音楽を約束するわけでもない。そこには言葉を発しメッセージを送ろうという意志がなければならず，聴く側にもそれを受け取る用意がなければならない。また選択の結果メッセージがどのような楽器で演奏されるにせよ，その良さが正しく聴き取れる場所で演奏しなければ意味がない。

素晴らしい人類の遺産ともいうべき音楽を現代の生活に繁栄させるか退廃してゆくに任せ

[13] アルノンクール著「古楽とは何か」( 音楽之友社 ) 第一章「古楽器は是か非か」

るか，受け継がれるのも忘れ去られていくのも，全ては私たち次第であり，次の「時代の音」の音色は私達の選択如何にかかっているのである。

# ラゲール多項式の積の展開公式　II

高　橋　光　一

任意の指標の二つのラゲール多項式（Laguerre's polynomials）の積を和に展開する新しい公式を提示する。

## 1.　ラゲール多項式

ラゲール多項式は，区間$[0, \infty)$における重み付き直交性をもつ多項式の一種である。[1, 2, 3]　すなわち，

$$L_n^{(\alpha)}(x)=\frac{e^x x^{-\alpha}}{n!}\frac{d^n}{dx^n}(e^{-x}x^{n+\alpha})$$
$$=\sum_{r=0}^{n}(-1)^r\binom{n+\alpha}{n-r}\frac{x^r}{r!}, \tag{1a}$$

$$\int_0^\infty dx e^{-x}x^\alpha L_n^{(\alpha)}(x)L_m^{(\alpha)}(x)=\delta_{n,m}\Gamma(\alpha+n+1)/n!,\quad \mathrm{Re}\alpha>-1 \tag{1b}$$

ここで，$n, m$ は 0 以上の整数である。ラゲール多項式の積を和に直す公式として，次のものが知られている[1, 2, 3]：

$$L_m^{(\alpha)}(x)L_m^{(\alpha)}(y)=\frac{\Gamma(m+\alpha+1)}{(m!)^2}\sum_{n=0}^{\infty}\frac{(xy)^n}{\Gamma(n+\alpha+1)}L_{m-n}^{(\alpha+2n)}(x+y) \tag{2a}$$

$$L_m^{(\alpha)}(x)^2=\frac{\Gamma(m+\alpha+1)}{m!}\sum_{n=0}^{\infty}\frac{2^{m-n}(2n)!\,(2m-2n-1)!!}{\Gamma(n+\alpha+1)}L_{2n}^{(2\alpha)}(x) \tag{2b}$$

いずれも，左辺の二つのラゲール多項式において指標は同一である。前稿[5]で，われわれは (2b) を任意の指標に一般化した展開公式を見いだした。このときの展開係数がいわゆるクレブッシュ - ゴルダン係数 (CG 係数) である。CG 係数の母関数表記は，ラゲール多項式が群 SO(3) の表現の基底と対応することを利用して [6] で与えられているが，[5] ではその形を二重調和振動子モデルによって明示的に与えたのであった。本稿では，任意の指標と任意の変数を持つラゲール多項式の積を和に展開する公式を，同じモデルを用いて提示する。これは (2a) の一般化である。

## 2.　二重調和振動子（DHO）関数

文献 [5] に従って，次のような演算子を導入する：

$$a=i\left(\frac{1}{c}\frac{\partial}{\partial\zeta}+\frac{c}{2}\zeta^*\right),\qquad a^\dagger=i\left(\frac{1}{c}\frac{\partial}{\partial\zeta^*}-\frac{c}{2}\zeta\right)\tag{3a}$$

$$b=i\left(\frac{1}{c}\frac{\partial}{\partial\zeta^*}+\frac{c}{2}\zeta\right),\qquad b^\dagger=i\left(\frac{1}{c}\frac{\partial}{\partial\zeta}-\frac{c}{2}\zeta^*\right)\tag{3b}$$

$$a'=i\left(\frac{1}{c'}\frac{\partial}{\partial\zeta}+\frac{c'}{2}\zeta^*\right),\quad b'=i\left(\frac{1}{c'}\frac{\partial}{\partial\zeta^*}+\frac{c'}{2}\zeta\right)\tag{3c}$$

$$a'^\dagger=i\left(\frac{1}{c'}\frac{\partial}{\partial\zeta^*}-\frac{c'}{2}\zeta\right),\quad b'^\dagger=i\left(\frac{1}{c'}\frac{\partial}{\partial\zeta}-\frac{c'}{2}\zeta^*\right)\tag{3d}$$

プライムのあるものとないものとは線形関係にある。すなわち

$$a=ua'+vb'^\dagger,\ b=ub'+va'^\dagger\tag{4a}$$

$$a'=ua-vb^\dagger,\ b'=ub-va^\dagger\tag{4b}$$

$$u\equiv\frac{1}{2}\left(\frac{c'}{c}+\frac{c}{c'}\right),\ v\equiv\frac{1}{2}\left(\frac{c'}{c}-\frac{c}{c'}\right),\ u^2-v^2=1\tag{4c}$$

ここで，$c, c'$ は任意の実数，$\zeta$ は複素数，$^*$ は複素共役を表す。$\begin{pmatrix}a'\\b'^\dagger\end{pmatrix}=\begin{pmatrix}u&-v\\-v&u\end{pmatrix}\begin{pmatrix}a\\b^\dagger\end{pmatrix}$ であるから，(4) は $a^2-b^{\dagger 2}$ を不変にする 2 次元ローレンツ群 $O(1,1)$ を定義する。

ゼロでない交換関係は

$$[a, a^\dagger]\equiv aa^\dagger-a^\dagger a=1=[b, b^\dagger]=[a', a'^\dagger]=[b', b'^\dagger]=1\tag{5a}$$

$$[a', a^\dagger]=[b', b^\dagger]=u,\ [a', b]=[b', a]=v\tag{5b}$$

と，これらのエルミット共役で与えられる。これらを用いて，規格化された DHO 関数 [4]

$$|\zeta, \zeta^*;\ n, \alpha, c\rangle=\frac{1}{\sqrt{n!(\alpha+n)!}}(a^\dagger)^{n+\alpha}(b^\dagger)^n|\zeta, \zeta^*;\ 0, c\rangle\equiv|\zeta, \zeta^*;\ \mathbf{n}, c\rangle\tag{6a}$$

$$|\zeta, \zeta^*;\ n, \alpha, c'\rangle=\frac{1}{\sqrt{n!(\alpha+n)!}}(a'^\dagger)^{n+\alpha}(b'^\dagger)^n|\zeta, \zeta^*;\ 0, c'\rangle\equiv|\zeta, \zeta^*;\ \mathbf{n}, c'\rangle\tag{6b}$$

をつくる。$\mathbf{n}\equiv(n_a, n_b)\equiv(n+\alpha, n)$，また，$|\zeta, \zeta^*;\ 0, c\rangle$, $|\zeta, \zeta^*;\ 0, c'\rangle$ は消滅演算子によって 0 になる（すなわち $a|\zeta, \zeta^*;\ 0, c\rangle=b|\zeta, \zeta^*;\ 0, c\rangle=a'|\zeta, \zeta^*;\ 0, c'\rangle=b'|\zeta, \zeta^*;\ 0, c'\rangle=0$）基底状態である（基底状態に対応する関数を 0 関数と呼ぶことにする。）：

$$|\zeta, \zeta^*;\ 0, c\rangle=\frac{c}{\sqrt{4\pi}}e^{-c^2\zeta^*\zeta/2},\ |\zeta, \zeta^*;\ 0, c'\rangle=\frac{c'}{\sqrt{4\pi}}e^{-c'\zeta^*\zeta/2},\tag{7a}$$

$$\int_{-\infty}^{\infty}dx\int_{-\infty}^{\infty}dy\,|\zeta, \zeta^*;\ 0, c\rangle^2=\int_{-\infty}^{\infty}dx\int_{-\infty}^{\infty}dy\,|\zeta, \zeta^*;\ 0, c'\rangle^2=1\tag{7b}$$

ただし，実数 $x.y$ を用い $\zeta=(x+iy)/2$ である。

(6a)はラゲール多項式を用いて次のように表される：

$$|\zeta,\zeta^*;\mathbf{n},c\rangle=\frac{c}{\sqrt{4\pi}}\sqrt{\frac{n_b!}{n_a!}}(-ic\zeta)^{n_a-n_b}L_{n_b}^{(n_a-n_b)}(c^2\zeta^*\zeta)e^{-c^2\zeta^*\zeta/2} \tag{8}$$

したがって，われわれの目的は，積 $|\zeta,\zeta^*;\mathbf{m},c\rangle|\zeta,\zeta^*;\mathbf{n},c'\rangle$ を DHO 関数の一次結合として展開することと同等である。

## 3.　展開の漸化式

以後，DHO 関数を表すのに，特に断らない限り，変数 $\zeta,\zeta^*$ をあらわに書かないことにする。また，簡単のため規格化因子のない関数を考え，$|\mathbf{n}\rangle$ の代わりに $|\mathbf{n})$ の表記を用いることにする。すなわち

$$|\mathbf{n})=(a^\dagger)^{n_a}(b^\dagger)^{n_b}|0\rangle=\sqrt{n_a!n_b!}\,|\mathbf{n}\rangle=\frac{c}{\sqrt{4\pi}}n!(-ic\zeta)^{a}L_n^{(\alpha)}(c^2\zeta^*\zeta)e^{-c^2\zeta^*\zeta/2} \tag{9}$$

また，パラメータ $c'$ の DHO 関数は $|\mathbf{n})'$, $|\mathbf{n}\rangle'$ などとプライムを付けて表すことにする。

DHO 関数の積は

$$\begin{aligned}|\mathbf{m};\mathbf{n})&\equiv(a^\dagger)^{m_a}(b^\dagger)^{m_b}|0\rangle(a'^\dagger)^{n_a}(b'^\dagger)^{n_b}|0\rangle'\\&=a^\dagger|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n})-\frac{1}{2}|\mathbf{m}-1_a)(a^\dagger+b)|\mathbf{n})'\\&=a^\dagger|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n})-\frac{u+v}{2}|\mathbf{m}-1_a)(|\mathbf{n}+1_a)'+n_b|\mathbf{n}-1_b)')\\&=a^\dagger|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n})-\frac{u+v}{2}(|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n}+1_a)+n_b|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n}-1_b))\end{aligned} \tag{10}$$

である。ここで $j$ を整数として $\mathbf{m}-j_a\equiv(m_a-j,m_b)$, $\mathbf{m}-j_b\equiv(m_a,m_b-j)$ である。同様に

$$|\mathbf{m};\mathbf{n})=a'^\dagger|\mathbf{m};\mathbf{n}-1_a)-\frac{u-v}{2}(|\mathbf{m}+1_a;\mathbf{n}-1_a)+m_b|\mathbf{m}-1_b;\mathbf{n}-1_a)) \tag{11}$$

(11) で $\mathbf{m}\to\mathbf{m}-1_a$, $\mathbf{n}\to\mathbf{n}+1_a$ とすると

$$|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n}+1_a)=a'^\dagger|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n})-\frac{u-v}{2}(|\mathbf{m};\mathbf{n})+m_b|\mathbf{m}-1_a-1_b;\mathbf{n})) \tag{12}$$

これを（10）に代入して

$$|\mathbf{m};\mathbf{n})=\frac{4}{3}\left(a^\dagger-\frac{u+v}{2}a'^\dagger\right)|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n})+\frac{m_b}{3}|\mathbf{m}-1_a-1_b;\mathbf{n})-\frac{2}{3}(u+v)n_b|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n}-1_b) \tag{13a}$$

$m_b$, $n_a$, $n_b$を減らす式も同様に書き下すことができる：

$$|\mathbf{m};\mathbf{n})=\frac{4}{3}\left(b^\dagger-\frac{c'}{2c}b'^\dagger\right)|\mathbf{m}-1_b;\mathbf{n})+\frac{m_a}{3}|\mathbf{m}-1_a-1_b;\mathbf{n})-\frac{2c'}{3c}n_a|\mathbf{m}-1_b;\mathbf{n}-1_a) \tag{13b}$$

$$|\mathbf{m};\mathbf{n})=\frac{4}{3}\left(a'^\dagger-\frac{c}{2c'}a^\dagger\right)|\mathbf{m};\mathbf{n}-1_a)+\frac{n_b}{3}|\mathbf{m};\mathbf{n}-1_a-1_b)-\frac{2c}{3c'}m_b|\mathbf{m}-1_b;\mathbf{n}-1_a) \tag{13c}$$

$$|\mathbf{m};\mathbf{n})=\frac{4}{3}\left(b'^\dagger-\frac{c}{2c'}b^\dagger\right)|\mathbf{m};\mathbf{n}-1_b)+\frac{n_a}{3}|\mathbf{m};\mathbf{n}-1_a-1_b)-\frac{2c}{3c'}m_a|\mathbf{m}-1_a;\mathbf{n}-1_b) \tag{13d}$$

(13) の具体例を挙げると ($u+v=c'/c$, $u-v=c/c'$ に注意して)

$$|1,0;0,0)=\frac{4}{3}\left(a^\dagger-\frac{c'}{2c}a'^\dagger\right)|0;0) \tag{14a}$$

$$|0,1;0,0)=\frac{4}{3}\left(b^\dagger-\frac{c'}{2c}b'^\dagger\right)|0;0) \tag{14b}$$

$$|1,1;0,0)=\left[\left(\frac{4}{3}\right)^2\left(a^\dagger-\frac{c'}{2c}a'^\dagger\right)\left(b^\dagger-\frac{c'}{2c}b'^\dagger\right)+\frac{1}{3}\right]|0;0) \tag{14c}$$

$$|1,0;1,0)=\left(\frac{4}{3}\right)^2\left(a^\dagger-\frac{c'}{2c}a'^\dagger\right)\left(a'^\dagger-\frac{c}{2c'}a^\dagger\right)|0;0) \tag{14d}$$

$$|1,0;0,1)=\left[\left(\frac{4}{3}\right)^2\left(a^\dagger-\frac{c'}{2c}a'^\dagger\right)\left(b'^\dagger-\frac{c}{2c'}b^\dagger\right)-\frac{2c'}{3c}\right]|0;0) \tag{14e}$$

$$|0,1;1,0)=\left[\left(\frac{4}{3}\right)^2\left(b^\dagger-\frac{c'}{2c}b'^\dagger\right)\left(a'^\dagger-\frac{c}{2c'}a^\dagger\right)-\frac{2c}{3c'}\right]|0;0) \tag{14f}$$

ただし

$$|0;0)\equiv|0)|0)'=\frac{cc'}{4\pi}e^{-(c^2+c'^2)\zeta^*\zeta/2}=\frac{cc'}{\sqrt{4\pi}c''}\left(\frac{c''}{\sqrt{4\pi}}e^{-c''^2\zeta^*\zeta/2}\right)\equiv\frac{cc'}{\sqrt{4\pi}c''}|0)'' \tag{15a}$$

$$c''=\sqrt{c^2+c'^2} \tag{15b}$$

(15a) で与えられる新しい 0 関数 $|0;0)$ は，次の演算子を作用させると 0 になる：

$$a''=i\left(\frac{1}{c''}\frac{\partial}{\partial\zeta}+\frac{c''}{2}\zeta^*\right),\quad b''=i\left(\frac{1}{c''}\frac{\partial}{\partial\zeta^*}+\frac{c''}{2}\zeta\right) \tag{16}$$

演算子 $a, b, a', b'$ との関係は (4) と同様である：

$$a=u'a''+v'b''^\dagger,\quad b=u'b''+v'a''^\dagger \tag{17a}$$

$$a'=u''a''+v''b''^\dagger,\quad b'=u''b''+v''a''^\dagger \tag{17b}$$

$$u'\equiv\frac{1}{2}\left(\frac{c''}{c}+\frac{c}{c''}\right),\ v'\equiv\frac{1}{2}\left(\frac{c''}{c}-\frac{c}{c''}\right),\ u''\equiv\frac{1}{2}\left(\frac{c''}{c'}+\frac{c'}{c''}\right),\ v''\equiv\frac{1}{2}\left(\frac{c''}{c'}-\frac{c'}{c''}\right) \tag{17c}$$

(13), (14), (15) から直ちにわかることであるが，$|\mathbf{m},\mathbf{n})$ は $a''^\dagger$ と $b''$ の一次結合，および $b''^\dagger$ と $a''$ の一次結合の適当なベキを $|0;0)$ に作用させたものの線形結合である。このとき

例えば，$\alpha a''^{\dagger}+\beta b''$ が $(\gamma b''^{\dagger}+\delta a'')|0;0)$ に左から作用しているときは，$\alpha\gamma a''^{\dagger}b''^{\dagger}$ と $\beta\gamma$ が残る。このことを考慮すると，DHO 関数は次のように表されることがわかる：

$$|\mathbf{m},\mathbf{n})=\sum_{r=0}^{r_{\max}}C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}a''^{\dagger m_a+n_a-r}b''^{\dagger m_b+n_b-r}|0;0) \tag{18a}$$

$$r_{\max}=\min(m_a+n_a,\ m_b+n_b) \tag{18b}$$

当然のことながら，$C_0^{0,0,0,0}=1$ である。(18a) の右辺で，$a''^{\dagger}, b''^{\dagger}$ のベキが最も高次の項が $a''^{\dagger m_a+n_a}b''^{\dagger m_b+n_b}$ になるのは $|\mathbf{m},\mathbf{n})$ の定義から明らかである。

$$a^{\dagger}-\frac{c'}{2c}a'^{\dagger}=\alpha a''^{\dagger}+\beta b'' \tag{19a}$$

$$b^{\dagger}-\frac{c'}{2c}b'^{\dagger}=\alpha b''^{\dagger}+\beta a'' \tag{19b}$$

$$\alpha=u'-\frac{c'}{2c}u''=\frac{3c}{4c''},\quad \beta=v'-\frac{c'}{2c}v''=\frac{2c'^2-c^2}{4cc''} \tag{19c}$$

を使い，(18a) を (13a, b) に代入して，展開係数の指標 $m_a, m_b$ に関する次の漸化式を得る：

$$C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}=\frac{c}{c''}C_r^{\mathbf{m}-1_a,\mathbf{n}}+\frac{4\beta}{3}(m_b+n_b-r+1)C_{r-1}^{\mathbf{m}-1_a,\mathbf{n}}+\frac{m_b}{3}C_{r-1}^{\mathbf{m}-1_a-1_b,\mathbf{n}}-\frac{2c'n_b}{3c}C_{r-1}^{\mathbf{m}-1_a,\mathbf{n}-1_b} \tag{20a}$$

$$=\frac{c}{c''}C_r^{\mathbf{m}-1_b,\mathbf{n}}+\frac{4\beta}{3}(m_a+n_a-r+1)C_{r-1}^{\mathbf{m}-1_b,\mathbf{n}}+\frac{m_a}{3}C_{r-1}^{\mathbf{m}-1_a-1_b,\mathbf{n}}-\frac{2c'n_a}{3c}C_{r-1}^{\mathbf{m}-1_b,\mathbf{n}-1_a} \tag{20b}$$

同様に

$$a'^{\dagger}-\frac{c}{2c'}a^{\dagger}=\alpha' a''^{\dagger}+\beta' b'' \tag{21a}$$

$$b'^{\dagger}-\frac{c}{2c'}b^{\dagger}=\alpha' b''^{\dagger}+\beta' a'' \tag{21b}$$

$$\alpha'=u''-\frac{c}{2c'}u'=\frac{3c'}{4c''},\quad \beta'=v''-\frac{c}{2c'}v'=\frac{2c^2-c'^2}{4c'c''} \tag{21c}$$

と (18a), (13c, d) から

$$C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}=\frac{c'}{c''}C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}-1_a}+\frac{4\beta'}{3}(m_b+n_b-r+1)C_{r-1}^{\mathbf{m},\mathbf{n}-1_a}+\frac{n_b}{3}C_{r-1}^{\mathbf{m},\mathbf{n}-1_a-1_b}-\frac{2\,cm_b}{3c'}C_{r-1}^{\mathbf{m}-1_b,\mathbf{n}-1_a} \tag{22a}$$

$$=\frac{c'}{c''}C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}-1_b}+\frac{4\beta'}{3}(m_a+n_a-r+1)C_{r-1}^{\mathbf{m},\mathbf{n}-1_b}+\frac{n_a}{3}C_{r-1}^{\mathbf{m},\mathbf{n}-1_a-1_b}-\frac{2\,cm_a}{3c'}C_{r-1}^{\mathbf{m}-1_a,\mathbf{n}-1_b} \tag{22b}$$

を得る。(20a), (20b) および (22a), (22b) に意味があるのは，右辺の $C$ 係数の少なくとも一つが (18b) の条件を満たす場合である。また，$C$ 係数は $c'/c$ の関数である。

## 4.　積の展開

(18a) で，すべての$C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}$が知られたとする。この左辺は（8）より

$$|\,\mathbf{m},\mathbf{n})=\frac{cc'}{4\pi}m_b!\,n_b!(-ic\zeta)^l(-ic'\zeta)^{l'}L_{m_b}^{(l)}(c^2\zeta^*\zeta)L_{n_b}^{(l')}(c'^2\zeta^*\zeta)e^{-c'^2\zeta^*\zeta/2} \tag{23}$$

ここで $l=m_a-m_b$, $l'=n_a-n_b$ である。

(18a) の右辺のΣ記号の中は（15），（9）を使って

$$C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}a''^{\dagger m_a+n_a-r}b''^{\dagger m_b+n_b-r}\,|\,0\,;\,0)$$

$$=\frac{cc'}{4\pi}C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}(m_b+n_b-r)!(ic''\zeta)^{l+l'}L_{m_b+n_b-r}^{(l+l')}(c''^2\zeta^*\zeta)e^{-c''^2\zeta^*\zeta/2} \tag{24}$$

と書き換えられる。$s\equiv c^2\zeta^*\zeta$, $t\equiv c'^2\zeta^*\zeta$ とおいて (18a)，(23)，(24) より

$$L_{m_b}^{(l)}(s)L_{n_b}^{(l')}(t)=\frac{c''^{l+l'}}{c^l c'^{l'}m_b!\,n_b!}\sum_{r=0}^{r_{\max}}(m_b+n_b-r)!\,C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}L_{m_b+n_b-r}^{(l+l')}(s+t) \tag{25a}$$

$$c'/c=\sqrt{t/s} \tag{25b}$$

これが求める展開式である。(25b) より，

$$\frac{c^l c'^{l'}}{c''^{l+l'}}=\left(\frac{s}{s+t}\right)^{l/2}\left(\frac{t}{s+t}\right)^{l'/2} \tag{26}$$

であるので

$$\bar{L}_m^{(l)}(s)\equiv m!\,s^{l/2}L_m^{(l)}(s) \tag{27}$$

という関数を定義すると (25a) は次のようにコンパクトに表される。

$$\bar{L}_m^{(l)}(s)\bar{L}_n^{(l')}(t)\equiv\sum_{r=0}^{r_{\max}}C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}(t/s)\bar{L}_{m+n-r}^{(l+l')}(s+t) \tag{28}$$

ここで，$\mathbf{m}=(m+l,\,m)$, $\mathbf{n}=(n+l',\,n)$ である。なお，まえに述べたように $C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}$ は $c'/c$ の関数であるので，（28）では $t/s$ の関数ということになる。

## 5.　漸化式の解

漸化式（20），（22）の解を一般的に求めるのは難しい。しかし，特別の場合には比較的簡単に解くことができる。

(i) $C_0^{0,0,0,0}=1$ より

$$C_0^{m_a,m_b,n_a,n_b}=\left(\frac{c}{c''}\right)^{m_a+m_b}\left(\frac{c'}{c''}\right)^{n_a+n_b} \tag{29}$$

(ii) $\mathbf{m}=(m_a, 0), \mathbf{n}=(n_a, 0)$

$$C_r^{m_a,0,n_a,0}=\delta_{r,0}\left(\frac{c}{c''}\right)^{m_a}\left(\frac{c'}{c''}\right)^{n_a} \tag{30}$$

(iii) $\mathbf{m}=(m_a, m_b)$, $\mathbf{n}=(0, 0)$

$$C_r^{m_a,m_b,0,0}=\frac{m_a!\,m_b!}{r!(m_a-r)!(m_b-r)!}\left(\frac{c}{c''}\right)^{m_a+m_b-2r}\left(\frac{c'}{c''}\right)^{2r} \tag{31}$$

(iv) $\mathbf{m}=(m_a, 0)$, $\mathbf{n}=(0, n_b)$

$$C_r^{m_a,0,0,m_b}=(-1)^r\frac{m_a!\,n_b!}{r!(m_a-r)!(n_b-r)!}\left(\frac{c}{c''}\right)^{m_a}\left(\frac{c'}{c''}\right)^{n_b} \tag{32}$$

## 6. $C$係数の積分表示

(25a) において $C$ 係数は $t/s=c'^2/c^2$ の関数である。$t=ks$ ($k=c'^2/c^2$ は定数) とおいて両辺に $e^{-(1+k)s}((1+k)s)^{l+l'}L_m^{(l+l')}((1+k)s)$ をかけ $s$ で積分すると

$$\begin{aligned}&\int_0^\infty dse^{-(1+k)s}((1+k)s)^{l+l'}L_m^{(l+l')}((1+k)s)L_{m_b}^{(l)}(s)L_{n_b}^{(l')}(t)\\&=\frac{1}{m_b!\,n_b!}\sum_{r=0}^{r_{\max}}(m_b+n_b-r)!\,C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}(k)\frac{(1+k)^{(l+l')/2}}{k^{l'/2}}\\&\quad\times\int_0^\infty dse^{-(1+k)s}((1+k)s)^{l+l'}L_m^{(l+l')}((1+k)s)L_{m_b+n_b-r}^{(l+l')}((1+k)s)\end{aligned}$$

右辺の積分は，$\mathrm{Re}(l+l')>-1$ のとき（1b）より $\delta_{m,m_b+n_b-r}\Gamma(l+l'+m+1)/((1+k)m!)$ なので，あらためて $l+l'+m\equiv m_a+n_a-r$ で $r$ を定義し

$$\begin{aligned}&\frac{(1+k)^{-1-(l+l')/2}}{m_b!\,n_b!\,k^{l'/2}}(m_a+n_a-r)!\,C_r^{\mathbf{m},\mathbf{n}}(k)=\int_0^\infty dse^{-(1+k)s}s^{l+l'}L_{m_b+n_b-r}^{(l+l')}((1+k)s)L_{m_b}^{(l)}(s)L_{n_b}^{(l')}(ks)\\&m_a=m_b+l,\quad n_a=n_b+l'\end{aligned} \tag{33}$$

という$C$係数に対する積分表示を得る。

## 7. DHO 関数の複素共役を含む積の展開

（18）で与えられる展開式は，広がり $c$ と $c'$ の二つの DHO 関数の積から，広がり $c''=\sqrt{c^2+c'^2}$ の DHO 関数の和を得る方法を与えたものと見ることができる。これは，演算子の行列要素を，二つの状態 $|\mathbf{m}, c\rangle|\mathbf{n}, c'\rangle$ と $|\mathbf{l}, c''\rangle$ に関して求めるときに便利である。このとき，条件

$$c^2+c'^2=c''^2 \tag{34}$$

は，遷移 $|\mathbf{m}, c\rangle|\mathbf{n}, c'\rangle\rightarrow|\mathbf{l}, c''\rangle$ に伴う一種の保存則と自然に対応している。

積の一方が複素共役，すなわち $|\mathbf{m}, c\rangle^*|\mathbf{n}, c'\rangle$ のときは，上記の遷移は $|\mathbf{n}, c'\rangle\rightarrow|\mathbf{m}, c\rangle|\mathbf{l}, c''\rangle$ となり，期待される保存則 $c'^2-c^2=c''^2$ は (34) と相容れない。この場合，展開式はどのように表されるであろうか。この問題は，生成演算子について，(3) により次の関係があることに注意すれば簡単に解決できる：

$$a^{\dagger *}=-b^{\dagger},\ b^{\dagger *}=-a^{\dagger} \tag{35}$$

したがって，$\mathbf{m}=(m_a, m_b)$ にたいし

$$|\mathbf{m}, c\rangle^*=(a^{\dagger m_a}b^{\dagger m_b}|\mathbf{0}, c\rangle)^*=(-1)^{m_a+m_b}|\bar{\mathbf{m}}, c\rangle \tag{36a}$$

$$\bar{\mathbf{m}}\equiv(m_b, m_a) \tag{36b}$$

つまり，遷移 $|\mathbf{n}, c'\rangle\rightarrow|\mathbf{m}, c\rangle|\mathbf{l}, c''\rangle$ を，実質的に別の遷移 $|\bar{\mathbf{m}}, c\rangle|\mathbf{n}, c'\rangle\rightarrow|\mathbf{l}, c''\rangle$ と見なすことにより展開式（18）を適用できると同時に，この見直しに伴い期待される保存則 $c^2+c'^2=c''^2$ を条件（34）と両立させることができるのである。

## 参考文献


[1] Morse, P.M. and Feshbach, H. *Method of Theoretical Physics*（McGraw-Hill, New York 1953）Ch. 6.

[2] Gradshteyn, I.S. and Ryzhik, I.M. *Table of Integrals, Series, and Products*（Academic Press, San Diego 1994）§8. 970.

[3] 森口繁一　宇田川久　一松信『数学公式Ⅲ－特殊関数－』（2002）§26.

[4] 高橋光一　『東北学院大学教養学部論集』**151**（2008）pp 143-146.

[5] 高橋光一　『東北学院大学教養学部論集』**153**（2009）pp 39-45.

[6] Miller, W. Jr. *Clebsch-Gordan Coefficients and Special Function Identities. II*, J. Math. Phys. **13**,（1972）827.

# 山形県尾花沢盆地におけるスイカ生産に関する気候学的バックグラウンド

菊　地　　立

# Climatological Background on the Watermelon Cultivation in Obanazawa-Basin, Yamagata Prefecture

KIKUCHI Ritsu

## 1. は じ め に

山形県の内陸に位置する新庄盆地，尾花沢盆地，山形盆地は，農業生産の構成においてそれぞれ際だって異なる特色を持っている。山形県の農業の特色として，米に次いで果実生産がよく知られ，全国1位のサクランボやラフランスを始め様々な果物が生産されている。果物の生産は海岸平野の庄内地区ではメロンとカキなどで約40億円の産出額であるのに対して，内陸の村山地区（山形盆地）はサクランボの約200億円を筆頭にリンゴ，ブドウ，西洋ナシ，モモなど多様な品目で400億円を超す産出額を計上（2007年）し，山形県の果物生産は内陸が中心である。そんな中で, 同じ盆地であるが尾花沢盆地は果樹園がほとんどなく，畑地では主にスイカの栽培が行われている。「尾花沢スイカ」は近年ブランドとして確立し，全国的にも名前が知られるようになってきた。県別の年間生産量では第1位の熊本県，第2位の千葉県に次いで山形県は第3位にあるが，スイカ出荷の最盛期である7，8月に限ると山形県の出荷量は全国一である。山形県内の生産地区を見ると，その8割以上が尾花沢盆地周辺となっている。なお，尾花沢盆地の北隣にある新庄盆地では果樹栽培もスイカ栽培もごくわずかで，畑地では葉菜類が主要な作物である。このような栽培品目の違いは，適地適作の観点からバックグラウンドとしての自然条件と結びついていると推察し，統計調査と現地調査を試みた。ここでは，とくに尾花沢スイカに注目して報告するが，研究の対象範囲は図1に示したように北は尾花沢市から南は天童市までである。

スイカ生産の盛んな市町村は沖縄県から北海道まで全国に分布するが，それらのホーム

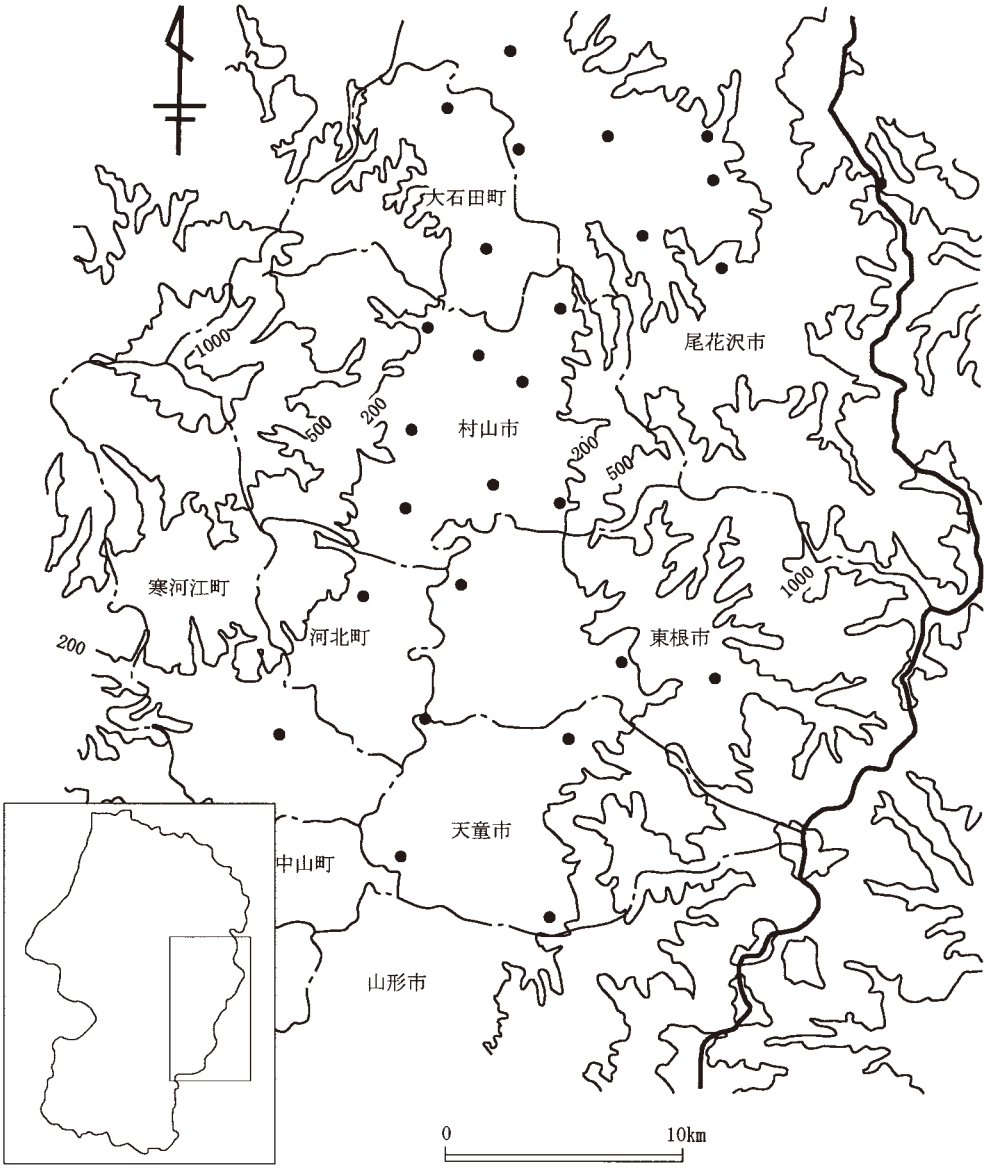



図１　研究対象地域と気温観測地点（●印）の配置

ページを閲覧すると，栽培適地の条件として火山灰土壌のため柔らかく水持ちのよい土であること，日照時間が長いこと，昼と夜の温度差が大きいこと，などの記述が共通して読み取れる。栄養分の少ない火山灰土壌が甘みをつくる，という解説も見られる。本論では，尾花沢盆地もこれらの自然的条件を満たしているかどうか，あるいは山形県内の他地区と比較して有利な条件となっているかについて検討していきたい。

尾花沢スイカの産地形成過程については，斉藤（1987）の報告がある。それによれば，山

形県のスイカ栽培は日本海沿岸の庄内地方で始まったが，1960 年代以降内陸の尾花沢盆地の生産が伸び，県内の他地域を圧倒していった。農林水産省の統計によると日本全体のスイカ生産量は 1967 年が最高で，その後は次第に減少し近年はほぼ半減している。この状況の中で尾花沢盆地の生産は増加傾向を示し，1980 年代後半に栽培面積 800 ha に達した。現在もほぼ同規模を維持している。

尾花沢盆地は山形県の北東部に位置し，行政的には尾花沢市と大石田町で構成される。東側は奥羽山脈，西側は月山・葉山に連なる平均約 1,000 m の山地に挟まれ，南側と北側は低い丘陵によって隣接する山形盆地と新庄盆地から分けられている。最上川が盆地の西寄りを北流し，これに注ぐ支流沿いには河岸段丘が発達しており，流路に沿った低地は水田，段丘上は畑が広がっている。尾花沢市は面積 372.3 $km^2$ で人口 19,910 人（2009 年 4 月），大石田町は面積 79.59 $km^2$ で人口は 8,596 人（2009 年 4 月）である。

## 2.　農業産出額の構成

農林水産省の資料を基に, 表 1 に当地域における各市町別農業生産額および構成比率（2001～1006 年平均）を示した。それによれば，尾花沢盆地の尾花沢市，大石田町においては米の生産が金額の上でも構成比率の点でも大きな地位を占め共に 40% を超えて他の 4 市に比べて相対的に高く，次いで野菜の比率が 30 および 40%，これに対して果実の比率が 1% ないしそれ以下と極めて小さい。一方山形盆地の東根市，天童市，寒河江市では野菜の比率が 10% 以下で低く米の比率も比較的低い反面，果実の比率がいずれも 50% を超えており，中でも東根市と天童市は高い。このように前 2 者（尾花沢盆地）と後 3 者（山形盆地）では大きく異なった生産構成となっており，二つのグループに分けられる。そして，両者の中間にある村山市は中間的な特徴を示し，米，野菜，果実のいずれも両グループの中間にあたる構成比率である。

本研究で注目したスイカは，表 1 では野菜に含まれている。そこで，スイカ生産量の最も多い尾花沢市を取り上げ，同市で生産に力を入れている米，スイカ，肉用牛の品目に絞って 1997～2006 年の推移を表 2 に示した。それによれば，尾花沢市の農業生粗産総額は近年減少傾向で，最高の 114.7 億円（1998 年）から最低の 87.7 億円（2005 年）へ 10 年で約 24% の低下となった。農業粗生産総額のうち米が上記のように約 40～50%，スイカは約 20～30% で年々の上下はあるが長期的には一定の割合を維持している。これに対して肉用牛の生産が生産額, 比率とも増加傾向で, 10 年前は 10% 前後であったものが近年 15～16% となってきている。これら 3 項目を合わせると，粗生産額全体に占める割合が 80% を超える。す

表 1　農業生産額構成の比較（2001 年～2006 年の平均）

| | 農業生産額（千万円） | 米（千万円） | 構成比（%） | 野菜（千万円） | 構成比（%） | 果実（千万円） | 構成比（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 尾花沢市 | 926.2 | 415.5 | 44.9 | 281.7 | 30.4 | 20.0 | 0.2 |
| 大石田町 | 280.0 | 131.2 | 47.1 | 113.0 | 40.1 | 3.3 | 1.2 |
| 村 山 市 | 791.5 | 308.5 | 39.0 | 173.0 | 21.9 | 204.3 | 25.8 |
| 東 根 市 | 1330.3 | 170.0 | 12.8 | 36.0 | 2.7 | 975.5 | 73.3 |
| 天 童 市 | 1174.7 | 199.2 | 16.9 | 63.5 | 5.4 | 780.7 | 66.4 |
| 寒河江市 | 862.2 | 178.5 | 20.7 | 72.5 | 8.4 | 452.0 | 52.4 |

農林水産省 HP によりデータ収集

表 2　尾花沢市の農業粗生産額推移（単位： 100 万円）

| | 農業粗生産額 | 米 | 構成比(%) | スイカ | 構成比(%) | 肉用牛 | 構成比(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1997 | 10,630 | 5,209 | 49.0 | 2,774 | 26.1 | 1,167 | 11.0 |
| 1998 | 11,470 | 4,856 | 42.3 | 3,275 | 28.6 | 1,195 | 10.4 |
| 1999 | 11,260 | 4,810 | 42.7 | 3,360 | 29.8 | 1,240 | 11.0 |
| 2000 | 10,480 | 4,550 | 43.4 | 2,900 | 27.7 | 1,340 | 12.8 |
| 2001 | 9,460 | 4,130 | 43.7 | 2,570 | 27.2 | 1,230 | 13.0 |
| 2002 | 9,790 | 4,090 | 41.8 | 2,410 | 24.6 | 1,860 | 19.0 |
| 2003 | 8,920 | 4,500 | 50.4 | 1,710 | 19.2 | 1,410 | 15.8 |
| 2004 | 9,370 | 4,140 | 44.2 | 2,510 | 26.8 | 1,430 | 15.3 |
| 2005 | 8,770 | 4,050 | 46.2 | 2,120 | 24.2 | 1,410 | 16.1 |
| 2006 | 9,260 | 4,020 | 43.4 | 2,590 | 28.0 | 1,390 | 15.0 |

尾花沢市ホームページより

なわち，尾花沢市の農業は米とスイカと肉牛が三本柱であることが明瞭で，県内他市町村に比べ際だった個性を持っている。なお表 1 では野菜全体でも約 30% なので，尾花沢市の畑作物はスイカが圧倒的に優占し，その他の野菜はほんの数 % に過ぎないことになる。以上のことから，尾花沢盆地はスイカ生産に特化した農業であり，それだけスイカ栽培に適した条件を持つと推察される。

## 3. スイカ栽培の季節

尾花沢盆地におけるスイカ栽培について，生産農家のホームページ記事，および現地における生産者への聞き取りから，当地域の作業暦はおおよそ次のようになっている。

①スイカ畑の準備： 尾花沢盆地は豪雪地帯なので，春の雪解けが遅い。完全に雪が解けるのは平地でも 4 月に入ってからとなることも多い。スイカの収穫時期から逆算した苗の植え付け時期を確保するために，畑地面にビニールマルチを施し地温の上昇をはかる必要がある。ビニールマルチを設置するのは雪が積もる前の前年秋（10 月頃）で，

雪が解けた4月はじめにはマルチの上にビニールトンネルを加え，さらに温度上昇を促進する。

②苗の購入と植付け： スイカの苗は専門業者から購入する。4月下旬から5月上旬にかけてビニールマルチに穴を開けて苗を植え付ける。苗の植え付けは約1週間の間隔を開け，3回くらいに分けて行う。これは，その後の作業や収穫時期が重ならないようにすることが目的である。

③蔓の整頓： 5月下旬になると，スイカの蔓が延びビニールトンネルに溢れるほどになる。このころ，1株あたり4ないし5本の蔓を残して剪定し，さらに延びた蔓をUターンさせて風通しと日当たりを確保する。蔓が伸びるに従い複数回Uターンさせる。

④摘果： 5月末～6月始めに花が咲くので，人工的に受粉させる作業をする。下旬までに摘果を行う。通常1株に2個程度の実を残して育てる。時期を見計らってビニールトンネルは撤去され，露地栽培に切り替わる。

⑤登熟と収穫： 7月に入ると急速に実が肥大してくる。上旬に肥大したスイカの下に台を据え，全体に色づきがよくなるように適宜実を回転させ，均等に日光が当たるようにする。さらに，梅雨明けとなって日中の気温が高い時期になると，太陽熱による過剰な温度上昇を避ける目的で，スイカにワラをかぶせる。収穫は7月20日頃から始まり，村山市では7月25日頃から8月10日過ぎまでが最盛期，尾花沢市では，8月中・下旬がピークとなる。

⑥出荷： 出荷のシステムは「農協共販」という共同出荷と「任意組合」という自主出荷の二つのルートがある（間宮：2009）。

農協共販： 多くの農家は収穫したスイカを共同選果場に運び，そこから農業協同組合を通して市場に送られる。このルートは農家にとって作業負担が少ないものの，品種や製品の品質について様々な取り決めによる制約があるほか，費用がかかる。

任意組合： 農家が個人あるいはグループで自主的に出荷・販売をする方式は，手数料などの費用が少ないので直接収入が増えるが，労働負荷が大きい。

## 4. スイカ栽培地域の分布

次に，対象地域における土地利用の詳細を調べた。スイカ畑は前記のようにビニールトンネルを設置して行われるので，その季節に撮影された空中写真をみると明確に読み取ることができる。写真1は，村山市本飯田のスイカ畑である。写真撮影時は苗の植え付けから約1か月経過しており，整然とビニールトンネルが並んでいる。そして，写真2aは同じ場所の

空中写真（google　earth による）で，ビニールトンネルのスイカ畑が灰色の縞模様として写っているので，判別は容易である。同時に，その周囲にある果樹園（この場所ではサクランボ）についても判別が可能である。写真を見ると，サクランボは樹木なので陰の長さで一般の野菜畑と区別され，その樹影が等間隔に並んでいることから雑木林や杉林などと明確に異なる。ただし，サクランボとリンゴの区別などは困難なので，ここでは果樹園として一括して判定した。写真 2a からスイカ畑（白）と果樹園（赤）をそれぞれ多角形ポリゴンに置き換えると写真 2b のようになる。

このようにして空中写真からスイカ畑と果樹園を抽出し，分布図を作成した（図 2）。対象地域は北は尾花沢市から南は東根市の北部までである。スイカ畑は北半部，果樹園は南半部と明確に別れていることが分かる。白色で示されたスイカ畑は前述のように尾花沢盆地の中央に分布する河岸段丘上に集中し，その中心地では畑に使われている土地のほとんどがスイカ栽培に供されている状況である。本図の作成に当たっては明確にビニールトンネルが読み取れたものに限定したが，空中写真の撮影日にはまだビニールトンネルが無く，黒いビニールマルチだけが縞模様として見えるものも多かった。その畑はビニールトンネルの設置がこれから行われると推測されることから，それらを含めるとさらにスイカ畑の占有率は大きく

写真 1　スイカの栽培風景と総合気象観測装置（村山市本飯田）

写真 2a　上空から見た村山市本飯田の畑地

写真 2b　村山市本飯田のスイカ畑（白）と果樹園（赤）

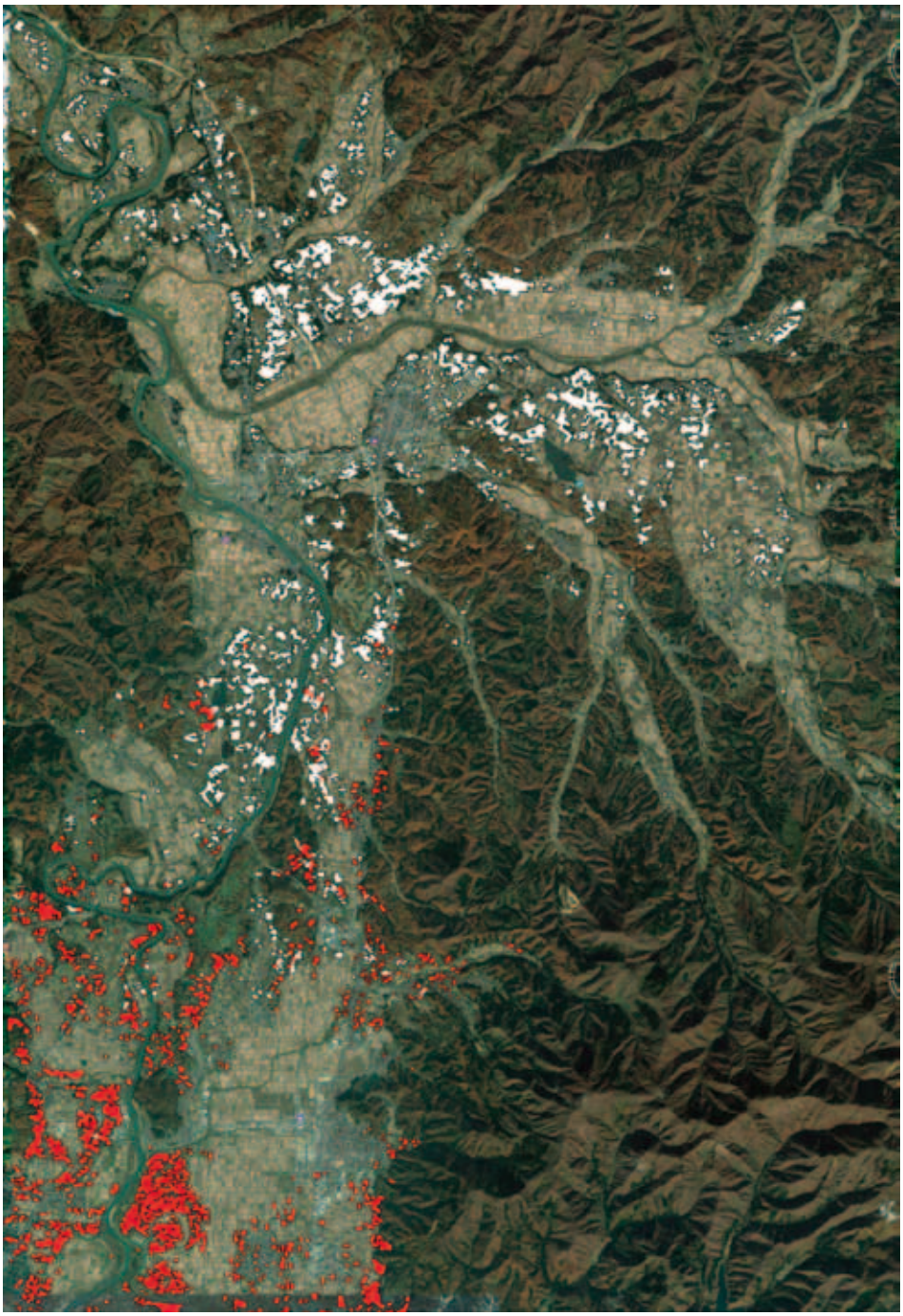


図 2　尾花沢盆地及び山形盆地北部におけるスイカ畑（白）と果樹園（赤）の分布

なるはずである。スイカ畑は大石田町および村山市の北部まで多く見られるが，それより南へ向かって次第にまばらとなり，山形盆地に入ると急になくなる。ここにスイカ生産域の南限が読み取れる。一方，赤色の果樹園は尾花沢盆地では全く読み取れないが，村山市域に入るとまばらに分布するようになり，さらに南へ行くほどその面積は増加する。本図の範囲より南へ続く東根市や天童市では，さらに大規模な果樹園地帯が広がっている。図 2 から果樹園の場合も北限があると見ることができ，村山市北部は両者の移行帯すなわちスイカと果樹の混在する地域となる。このことが表 1 の生産額構成比率に表れている。なお，果樹園は中央を北流する最上川の両側に形成された自然堤防に大規模なものが多く，東西の山麓部に形成された小扇状地や緩斜面には小規模なものが断続している。ただし山形盆地における果樹栽培の中心は，この図の範囲より南方にある乱川扇状地や立谷川扇状地である。

## 5.　スイカ栽培のバックグラウンド

山形県において尾花沢市と大石田町はスイカ生産の中心となっている。全国的にはスイカの生産が減少傾向にある中で，当地域の生産は 1960 年代後半から急速に伸び，1980 年代半ばにピークに達した後もほぼ 20 年間にわたって同レベルの生産を維持している。このことは，尾花沢盆地がスイカの栽培にとって好条件を備えていることを示すと推察されるので，スイカ栽培の盛んな他県との比較，スイカ栽培の行われない山形盆地との比較などを通して，この地域のスイカ栽培を支える自然的バックグラウンドを検討したい。

### (1)　土壌条件

農林水産省の統計によれば，スイカの生産は南は沖縄県から北は北海道まで広く行われており，県別生産量の第 1 位は熊本県，第 2 位は千葉県が安定的に占めている。第 3 位は上記 2 県に比べて生産量がかなり少なくなり，山形県，鳥取県，長野県などが交互に入るが，最近の数年については山形県が第 3 位を確保している。生産地域が全国に広がることから，栽培の条件は厳しくないと見ることもできるが，生産の盛んな地域を比較したところ，土壌条件に共通点があることが分かった。熊本県では生産の中心は植木町など県北部にあり，ここは阿蘇山の麓にあたる。千葉県では県の北東部に広がる下総台地に栽培中心があり，ここは関東ロームと呼ばれる火山灰起源の土壌である。鳥取県は県西部が中心で大山の北麓に位置する。このように，いずれの生産地も火山の山麓および火山灰土壌で，いわゆる「黒ボク土」であることが共通する。尾花沢盆地についてみると，栽培中心地は火山山麓には該当しないが，国土交通省国土調査課による表面土壌分類図によるとこの地域もまた火山灰由来の「黒

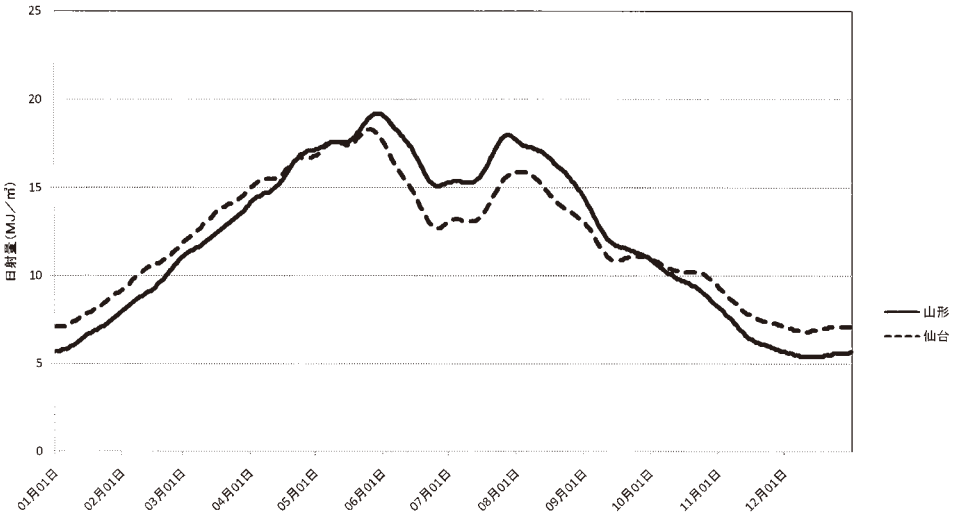



図３　山形と仙台における日射量の年変化（平年値）

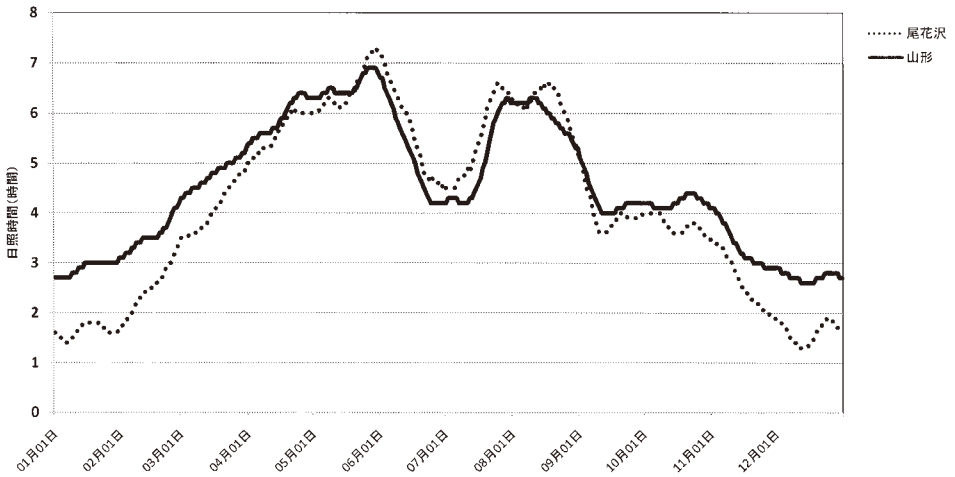



図４　アメダス尾花沢とアメダス山形における日照時間の年変化（日別準平年値）

ボク土」となっている。そして，スイカの栽培が見られない東根市や天童市の土壌は砂礫や粘土など扇状地堆積物および河川堆積物に由来するものとなっている。以上のことから，尾花沢盆地のスイカ地帯は火山灰を起源とする黒ボク土という点で，他県のスイカ主産地と共通する条件を備えている。

### (2)　気候条件

スイカは熱帯アフリカ起源の野菜で，日射を好みやや乾燥した気候であることが望ましいとされる。東北地方では山形県の他に秋田県と青森県で生産され，宮城県や岩手県など太平洋側の地域ではきわめて少ない。そこで，宮城県仙台市の仙台管区気象台と山形地方気象台

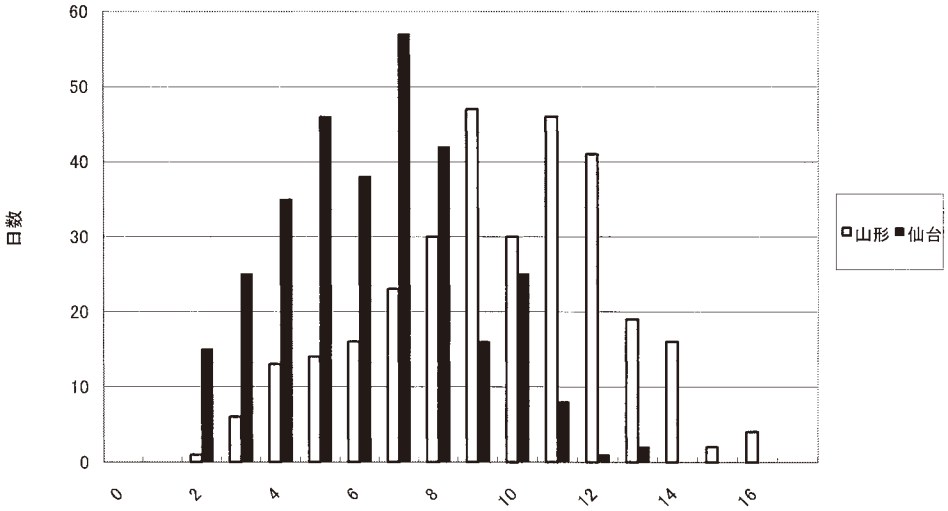



図5　山形気象台と仙台管区気象台の気温日較差度数分布（8月：1991～2000年）

の観測データを用い，全天日射量の日別平年値を図3に示した。それによれば，冬から春にかけては仙台の方が日射量が多いが，5月頃に逆転して9月末までの間は山形の方が10～15%多くなる。10月以降は再び仙台の方が多くなる。山形の日射量が多い期間は，スイカやサクランボの開花から実が熟すまでの期間に相当するので，これらの作物にとって有利な気候条件といえる。尾花沢についてはアメダス観測点に日射量のデータがないため日照時間を用い，山形の日照時間と比較して図4に示した。それによれば，尾花沢は山形に比べ冬期間は日照時間が大幅に少ないものの，5月から8月までの期間は山形より多く，その差が約10%となっている。つまり，仙台より山形，山形より尾花沢の方が夏は太陽の恵みが豊かである。

また，スイカや果樹にとって重要なのが昼と夜の温度変化であることから，上と同様に仙台と山形の8月の気温日較差に関してヒストグラムを作成した（図5）。それによれば，仙台では日較差が7℃にピークがあり，10℃を超える日はきわめて少ないのに対して，山形では9℃ないし11℃に日数のピークがあり，最大で16℃を記録した。12℃以上の日数が10年間で80日を超え，平均して月間の4分の1を占めている。このように山形盆地は仙台平野に比べて夏の天候がよく，気温変化が大きいという条件を備えていることになる。なお，尾花沢は山形より気温日較差がやや小さくなる。

### (3)　スイカの主産地と出荷時期

東京都中央卸売市場のうち青果物の取扱量が最も多い大田市場における2007年のスイカ取扱量を図6，西日本で最も取り扱い量の多い大阪中央市場の取扱量を図7に示す。大田市

場においては，スイカの入荷が4月から増加し，7月のピークを中心に8月までがシーズンとなっている。その内訳を県別に見ると，熊本県は5月，千葉県は6月，山形県は8月に第1位となり，これら上位3県は明確に出荷時期をずらして競合を避けていることが分かる。大阪中央市場の場合は，4，5月はほぼ全量が熊本県産で占められ，6月には鳥取県，7，8月は石川県が首位，8月はわずかな差で長野県と山形県が続く。基本的に西日本の産地からは大阪の市場を中心に出荷し，東日本の産地からは東京にスイカが集まるという傾向が伺える。ただし，鳥取県のスイカは関西を拠点とする大手スーパーとの契約栽培で生産を拡大した歴史からほぼ大阪のみに出荷されていたものが，契約先の規模縮小に伴って出荷先を東京市場にも拡大し，一方山形県は最近になって大阪市場への出荷が大きく伸びているという変化も見られる。

以上のように産地ごとに出荷時期が異なることは，スイカの栽培において生育促進あるいは抑制という工夫が施されていると考えられる。熊本県においては，2月に苗を植えて3月に開花と受粉，そして収穫のピークを5月の大型連休に合わせている。このために，スイカの栽培は大型のハウスで行われ，冬の間はハウス内を暖房して生育促進を図る。千葉県は熊本県よりやや遅い3月はじめに苗を植える。やはり大型のハウスを利用した栽培であるが，ここの特色はハウスの中にさらにビニールトンネルを設置し，二重トンネルとするところにある。ビニールは断熱効果が小さいため冬期の夜は温度が下がりやすく，これを暖房で補うと経済的負担が大きいので，それをカバーする工夫となっている。

スイカの温度要求量として有効積算気温が2,000度日となっている。熊本県についてはアメダス菊池，千葉県についてはアメダス佐倉のデータを用い，日別準平年値で有効積算温度を求めたところ，2,000度日に達するのは熊本県は6月末，千葉県は7月20日頃となった。この条件で露地栽培するとこの日付が収穫期となってしまうので，5月ないし6月に収穫するためには栽培促進が必要である。ハウス栽培にすると内部の温度を外気に対して約10℃上げることができる（内嶋： 1982）ので，これを加味して上記のアメダス地点の有効積算温度を再計算してみると，熊本については6月中旬まで早めることができる。さらに2月1日から3月末まで暖房によって10℃を加えることができれば，5月10日には2,000度日を超えることが分かった。同様にして千葉県において6月中旬に2,000度日を確保するためには，3月下旬からハウス栽培を続ければよく，暖房は必要としないことになる。これらに対して，尾花沢においては4月23日に日平均気温が10℃を超え，そのままの経過で8月12日に2,000度日に達する。実際には，雪解けや春先の低温の影響から開花・受粉が6月中旬以降にずれ込むのを避けるため，ビニールトンネルでカバーして生育の遅れを取り戻していることになる。このように，熊本県や千葉県では施設農業で大きな資本投資と燃料消費を行

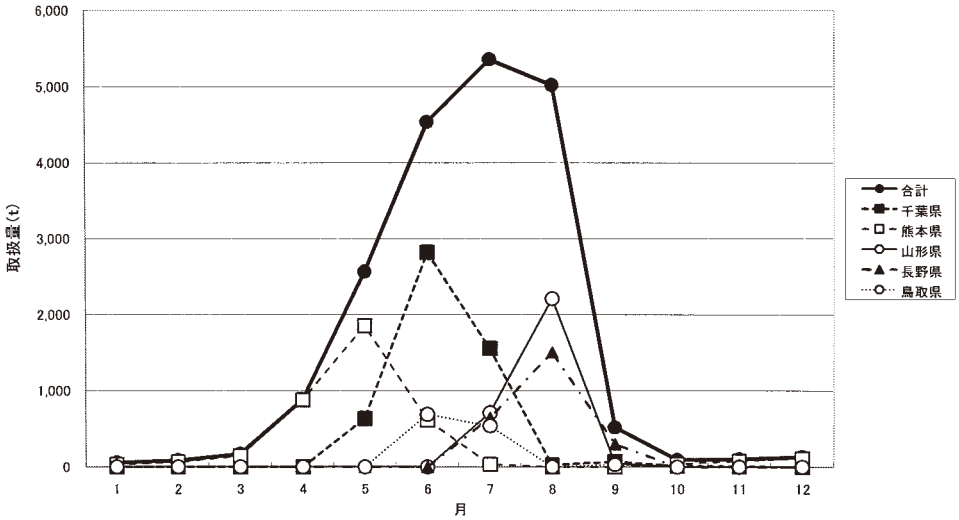



図 6　東京都中央卸売市場（大田市場）におけるスイカの取扱量年変化（2007 年）

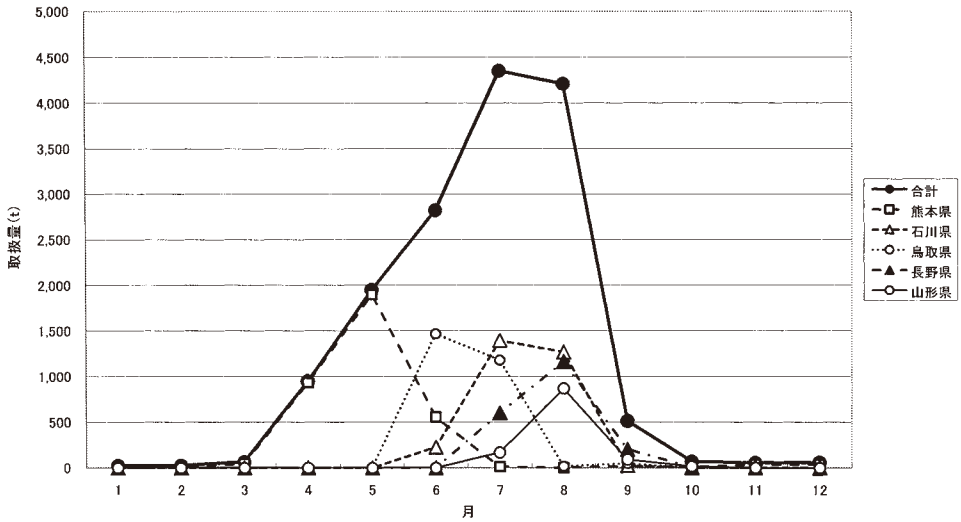



図 7　大阪市中央卸売市場におけるスイカの取扱量年変化（2007 年）

い出荷時期を大きく前倒ししているのに対して，尾花沢盆地のスイカ栽培はビニールマルチ及びトンネルという比較的簡便な寒さ対策で済んでいることになり，その点からも当地域はスイカ栽培に有利な条件を持つと考えることができる。

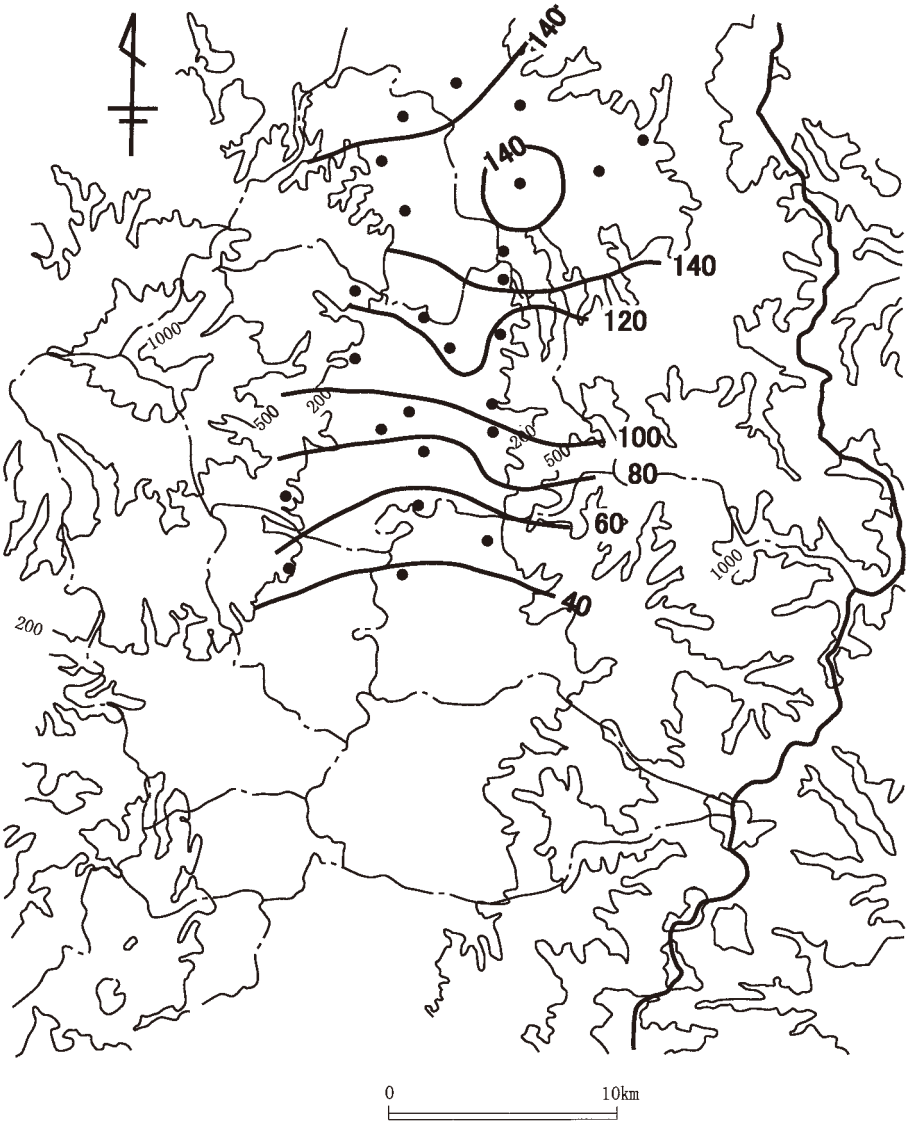



図 8(a)　積雪深分布（単位： cm）　2008 年 1 月 27 日

## 6. 考　　察

### (1)　尾花沢盆地で果樹栽培ができない

尾花沢盆地がスイカ栽培の適地であることは上記に示したとおりであるが，ではこの地域で果樹栽培がほとんど見られない理由は何かをさぐる。スイカも果樹も乾燥した畑地で行われ，単位面積の粗生産額で比較すれば果樹の方が経済的メリットは大きいと予想される。それにもかかわらず果樹栽培が行われないのは，果樹に不向きな条件があると見られる。そこ

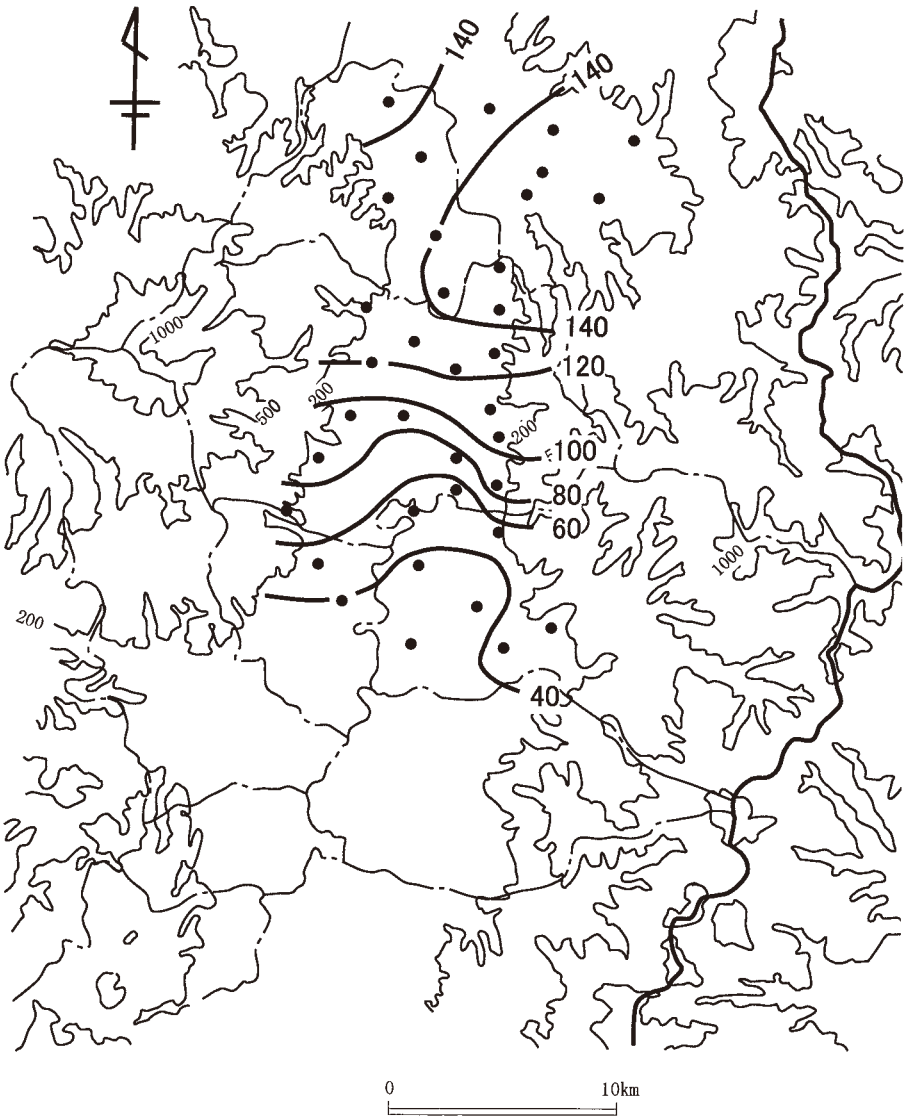



図 8(b)　積雪深分布（単位： cm）　2008 年 2 月 29 日

で，現地においてスイカから果樹に切り替えることの是非を尋ねたところ，複数の人が尾花沢盆地の豪雪が果実生産を阻害していることを理由に挙げた。それを確認するため，積雪調査を試みた。調査は標尺による移動観測で，2008 年 1 月 27 日と同年 2 月 29 日に実施した。前者はいわゆる爆弾低気圧の通過で 3〜4 日間降雪が続いた翌日に当たり，後者はシーズン中最深積雪が現れる頃とされる時期として選んだ。調査範囲はほぼ図 2 と同じである（図 8a, b）。それによれば, 1 月 27 日は積雪深の最大値は尾花沢盆地の中央部における 158 cm で，尾花沢市・大石田町から村山市に入ると急に浅くなり，東根市の北部では 40 cm ないしそれ

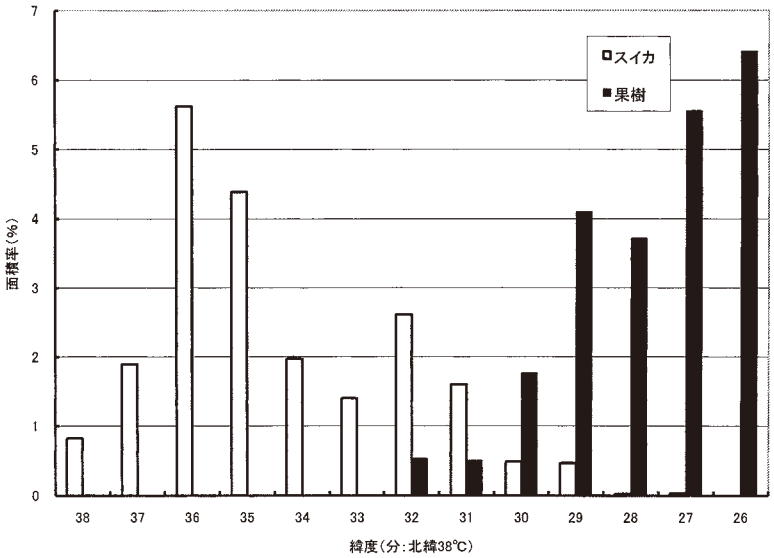



図 9　スイカ畑と果樹園の面積率の南北分布
対象地域を緯度 1 分，経度 10 分の長方形に区切り，それぞれスイカと果樹園が占める面積の比率として求めた

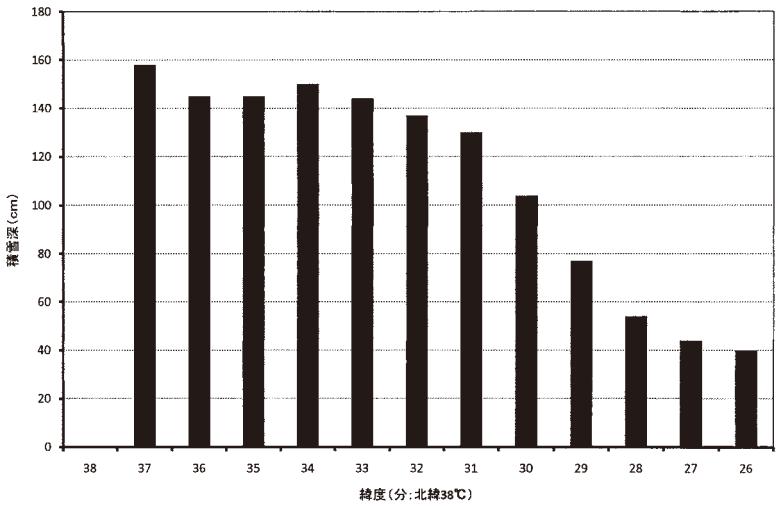



図 10　積雪深の南北分布（2008 年 1 月 27 日）

以下であった。2 月 29 日の場合も，最深積雪が上とほぼ同じ場所で 155 cm，やはり村山市に入ると急に雪は少なくなり，東根市では 40 cm 以下を示した。2 回の調査に約 1 ヶ月の時間差があるが，積雪分布の状態はほとんど変わりが無く，山形盆地に対して尾花沢盆地の積雪は約 4 倍という大きな差があり，村山市から尾花沢市・大石田町へかけて大きな落差が見られた。この積雪深急変地帯がスイカ生産地域と果実生産地域の移行帯に重なることは興味深い。それを直接的に比較するため，図 2 から緯度を 1 分ごとに区切って切り出し，その中

のスイカ畑と果樹園の面積率を求め南北分布を見ると図 9 のようになり，また図 8a から積雪深の緯度分布を求めると図 10 となる。スイカ畑の面積率は北緯 38 度 36 分の所に最大値があり，おおむね一山型の分布形をなして北緯 38 度 29 分まで，一方果樹園は北緯 38 度 32 分から現れ南へ向かって面積率が上昇する形となる。そして北緯 38 度 29 分から 32 分の範囲が両者の混在域であることを示している。ここは村山市の北部に当たり，同時に積雪深は 80 cm 前後から急に深まって 140 cm に増加する地帯に一致する。

積雪調査の際，北緯 38 度 31 − 32 分の果樹園北限地帯においてサクランボ園を観察したところ，枝には 1 m を超えるような雪が積もり，今にも折れそうな様子であった。また，サクランボは成熟期に雨に当たると実割れを起こすため，それを避けるために鉄パイプで組み立てた骨組みだけのハウスを作り，これにビニールの屋根をかけるが，その鉄パイプの一部が雪の重量で変形していた。以上のことから，豪雪による果樹の枝折れ，およびビニールハウスの損傷被害という点で，尾花沢盆地は果樹栽培に関しては大きなハンデキャップがあると判断される。加えて，果樹にとっては砂礫質の乾燥した土壌が適しているのに対して尾花沢盆地の河岸段丘は粉のような黒ボク土であり，雨が降ると泥濘となって果樹の根にとって悪影響があること，黒ボク土は有機質が少なく栄養分に乏しいことなども不利な条件と推察される。

### (2) 山形盆地でスイカ栽培が難しい

山形盆地では果実の栽培が盛んである一方，スイカの生産がほとんど無い。その背景としていくつかの条件が挙げられるであろう。

a) 山形盆地は扇状地と最上川の自然堤防が発達しており，ここがもっぱら果樹園として利用されている。扇状地は砂礫質，自然堤防は砂質土壌で，ともに水はけがよく乾燥していることから果樹にとって好適な土壌条件であるが，柔らかく水持ちのよい土壌を好むスイカにとっては不利な条件である。

b) 山形盆地と尾花沢盆地の気温差が大きい。尾花沢盆地は，最も需要の多くなる 7・8 月に収穫時期を迎えることができるような気温条件であることは既に述べたとおりである。スイカ栽培の範囲が尾花沢市，大石田町，村山市北部に集中し，その南限が見られることから（図 2），この作物分布と気温分布との関係を見るために，気温調査を実施した。調査は，自記サーミスタ温度計に日射を避けるシェルターを取り付け，図 1 に示した 26 地点で地上約 1.5 m に設置して行った。調査期間は 2007 年 4 月〜9 月 22 日, 2008 年 4 月〜10 月 31 日で，各年とも観測終了日は全地点同一であるが，観測開始日は雪解けなどの関係から地点により多少のばらつきがあった。調査結果の中から，2007 年 7，8 月の月平均最高気温分布を図 11

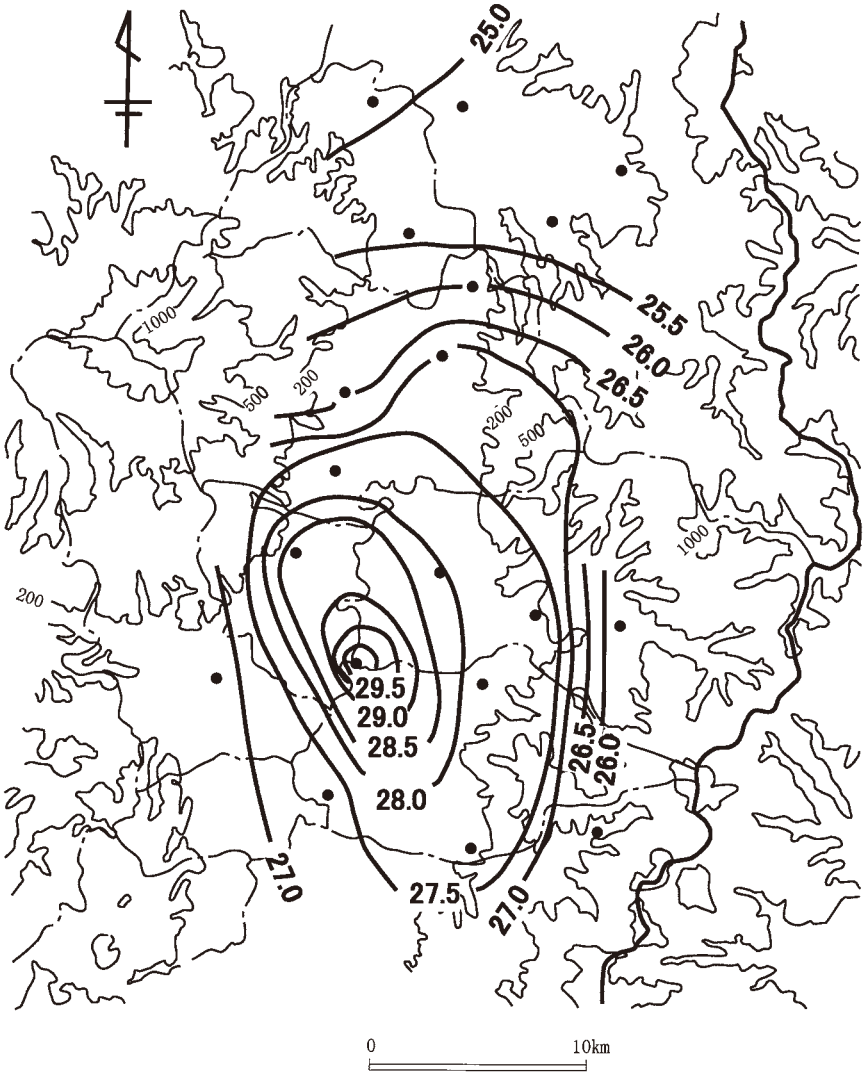



図 11(a)　2007 年 7 月の月平均最高気温分布

に示した。図によれば，7 月に比べ 8 月の最高気温は全体として 5℃ほど高いが，地域的な分布パターンはよく似ており，最も気温が高いのは山形盆地の中央部，最も気温が低いのは尾花沢盆地の西部または東部となっており，両者の気温差は平均して約 5℃，日毎に比較すると最大の日には約 10℃に達する。尾花沢盆地と山形盆地は海抜高度がほぼ同じ（100～130 m）で水平距離にして 30 km 前後と近いにもかかわらず，これだけの気温差が見られることは興味深い現象である。また，尾花沢盆地内部の気温差は比較的小さいが，山形盆地との中間に当たる村山市北部において大きな気温勾配が見られ，二つの盆地の間に顕著な気温落差を形成している。この気温急変帯は，図 2 におけるスイカ栽培地域の南限域にほぼ一致

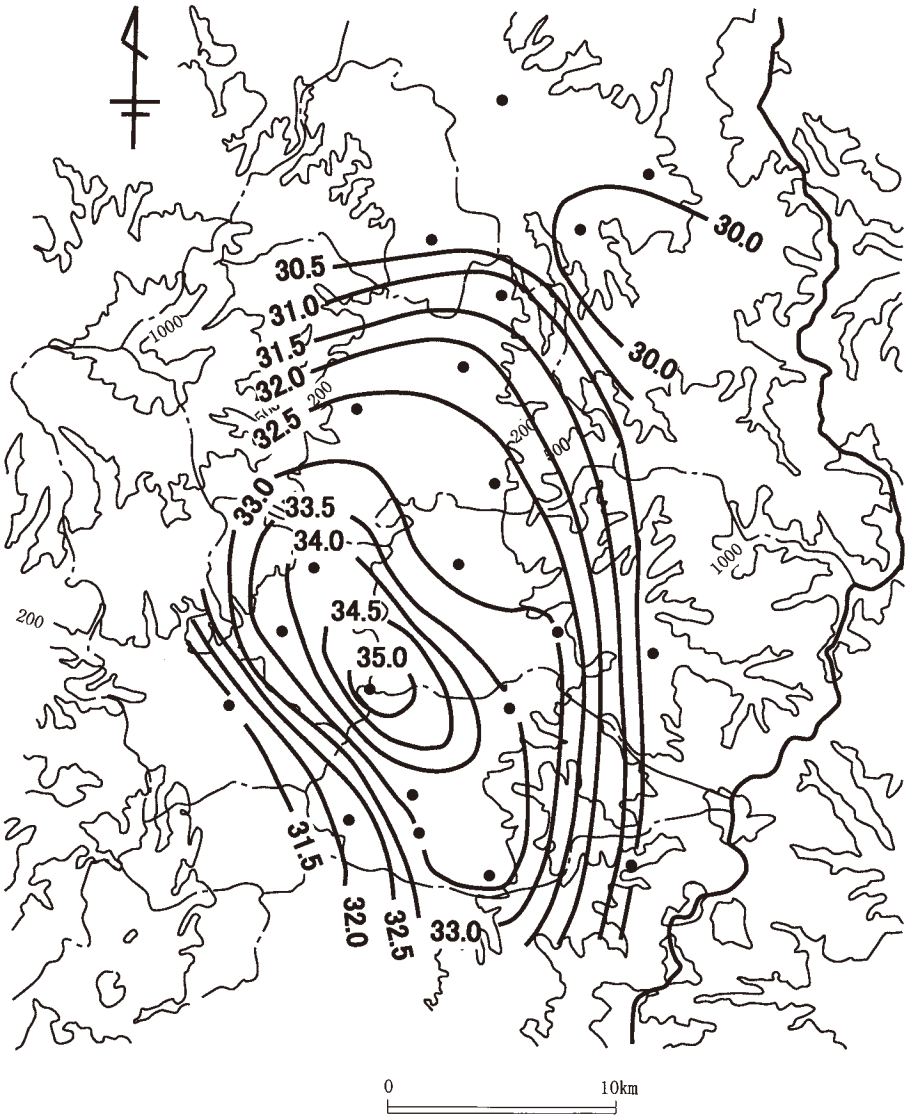



図 11(b)　2007 年 8 月の月平均最高気温分布

していることが注目される。2008 年の調査結果（図省略）においても 2007 年とほぼ同様のパターンであった。

以上のように，大きな地形的障壁のない二つの地域にこれだけ大きな気温差が生じることは他に例が少ないと考えられる。そして，両盆地の作物の違いを考慮すると，この気温差が作物の違いのバックグラウンドとして大きな意味を持つ可能性がある。上記気温急変帯の南半部にあたる村山市北部でスイカを栽培している農家の話によれば，その畑のスイカは 7 月 20 日頃から収穫を始め，8 月 10 日前後には終了する。これに対して尾花沢市内のスイカは

8月に入ってから収穫が始まり，最盛期は8月中・下旬となる。収穫時期を早く終わらせる理由として，村山市内の畑は梅雨が明けると気温が急上昇して日射も強まるため，スイカの内部が昇温して品質が落ち日持ちが悪くなる危険があることを挙げている。その対策として，写真3のように梅雨明け直前からスイカの実の上に稲ワラを載せて日よけとしている。東根市や天童市など山形盆地の中央部は村山市よりもさらに高温なので，それだけスイカには不利な温度環境となり，そのことがスイカ栽培を阻害している理由のひとつと推察される。それに対して，尾花沢市内は気温が低いので梅雨明け後に晴天が続いても高温障害は起こりにくく，また晴天がスイカの糖度を上げるために味がより上昇すると言われている。

写真3　スイカの実にかぶせた稲ワラの日除け

## 7. お　わ　り　に

山形県内陸にある尾花沢市を中心にスイカ生産が活発であることに注目し，そのバックグラウンドとしての自然環境について主に気候条件の面から検討を加えた。スイカの生産は沖縄県から北海道まで日本全国で行われていることから，基本的に気候条件による制約は少ないと判断される。しかし，全国の生産量が長期的に減少傾向にあり，1960年代中頃のピーク時には130万トンあった生産が近年は60万トン台と半減する中で，尾花沢地区の生産量

は1960年代末から1980年代にかけて急成長し，その後も20年以上にわたって約800 haの作付け面積を維持している点に注目した。山形県のスイカ生産量は1位の熊本県，2位の千葉県に次いで第3位につけているが，7～8月の夏スイカに限れば第1位となっている。近年は「尾花沢スイカ」として東北地方はもちろん東京市場や大阪市場でもブランドを確立している。その背景について検討した結果，次のような特徴が挙げられる。

(1)　全国の主な生産地についてホームページの記事を参照したところ，スイカ栽培に適した条件として，柔らかく水持ちのよい黒ボク土壌であること，日照時間が長いこと，昼と夜の温度差が大きいこと，などが共通しているようである。

国土交通省の資料により表層地質を確認したところ，尾花沢盆地は黒ボク土壌となっており，他のスイカ産地と共通する。次に日射量について太平洋側の仙台管区気象台と山形地方気象台を比較すると，山形の方が5月から9月にかけて約15%多く，アメダスの日照時間で見ると，尾花沢盆地は山形盆地よりもさらに長時間であることが分かった。また，気温日較差についても仙台と山形で比較したところ，日較差の頻度分布において仙台が7℃が最多で10℃をこれることは少ないのに対して，山形は12℃を超える日が全体の4分の1に昇る。以上のように，尾花沢盆地はスイカ生産に適するとされる条件をすべて満たしている。

(2)　全国に多くのスイカ産地があり，それぞれ収穫時期を調整して競合を避けていることが分かった。東京大田市場と大阪中央市場における出荷状況を見ると，第1位の熊本県は5月，第2位の千葉県が6月，第3位の山形県が8月が市場取扱量のピークとなっている。このため熊本県と千葉県は大型の施設を使ったスイカ栽培が行われ，冬期には暖房も使われるのに対して，尾花沢盆地は生育前半にビニールトンネルを利用するものの，おおむね露地栽培によってスイカの温度要求量である有効積算気温2,000度日に達するのが8月上旬となり，このことが夏スイカの生産を支えていることが確認された。

(3)　尾花沢盆地のスイカ栽培は最上川の支流沿いに広がる河岸段丘上で展開され，果樹栽培はほとんど見られない。当地で果樹栽培が行われない理由として，冬期の豪雪がある。2008年1月27日と2月29日に積雪調査を実施したところ，東根市内は40 cm以下であるのに対して尾花沢盆地は160 cm近くあり，4倍の開きがあることが分かった。この積雪のため，果樹の枝が折れ，鉄パイプで組んだハウスが破損することが果樹を育てることを困難にしている。

(4)　一方南隣の山形盆地では，果樹栽培が盛んであるがスイカ栽培はほとんど見られない。二つの盆地を対象に気温調査を試みたところ，最高気温の分布では山形盆地の中央部で高く尾花沢盆地で低いというパターンとなり，その差が月平均で約5℃，最大の日は10℃に達することが分かった。両盆地間の気温差は春から夏にかけて継続する。スイカが熟する時

期に高温で日射の強い環境に置かれると，実の内部が高温障害を生じて品質劣化し，日持ちが悪くなることが農家の聞き取り調査で分かった。すなわち，山形盆地の高温がスイカ生産への阻害要因のひとつとなっている。

## 謝　辞

本研究では，調査対象地域の多くの方々に観測の協力をいただいた。特に村山市本飯田においてスイカ栽培をしている菊池　功氏からは，観測装置の設置に加えスイカ生産に関する多くの情報提供を得ることができた。また，本論文を作成するに当たり，地域構想学科学生の藤本展子嬢に地図作成を支援していただいた。以上の方々に対し，ここに記して深い感謝の意を表したい。

## 参　考　文　献

間宮亮輔：山形県尾花沢地区におけるスイカ生産の発展・維持要因．東北学院大学教養学部地域構想学科卒業論文要旨集．(2009)
斉藤　功：山形県，尾花沢スイカの産地形成．筑波大学地球科学系人文地理学研究グループ調査報告 9．pp. 51-62（1987）
内嶋善兵衛：「農林・水産と気象」．現代の気象テクノロジー　4．pp. 93-94，朝倉書店（1982）
農林水産省 HP：農林水産統計総合データベース（http://www.tdb.maff.go.jp/toukei/toukei）
尾花沢市 HP：「尾花沢市の農業」．2005 年農林業センサス結果報告書．（http://www.city.obanazawa.lg.jp/files/20080602154436nougyou.pdf）
東京都中央卸売市場 HP：（http://www.shijou.metro.tokyo.jp/torihiki/）
大阪市中央卸売市場 HP：（http://www.pref.osaka.jp/fuichiba/sikyo/sikyo.html）

# 仙台藩（伊達藩）に於ける日置流印西派の伝播

黒　須　　憲

# Spread of the Heki school Insai group to the domain of Sendai（Date）

KUROSU Ken

**Abstract**

The Heki school Insai group spread to the domain of Sendai by the founder's "Yoshida Isuiken Insai（Kuzumaki Genhatirou Shigeuji）" eldest son's "Yoshida Iyo Shigekatsu"

キーワード：弓術，流派，印西派，仙台藩

## 1. は　じ　め　に

弓術流派，日置流印西派は吉田流出雲派四代，助左衛門重綱の嫡女と婚した吉田一水軒印西（葛巻源八郎重氏）[1] を流祖とし，徳川家康，秀忠，家光の将軍家三代に仕え，将軍家の流儀として各地で栄えた弓術流派である。流祖印西は初め関白秀次に仕え，その後，越前福井の結城中納言秀康，忠昌に仕え，大阪の役後，老齢のため息子の九馬助重信が，三代将軍家光に仕えた。その後子孫もまた射芸をよくし，代々籏元に列する事になった。[2]

仙台藩における弓術は三十三間堂の通矢競技で活躍した，日置流雪荷派が有名であるが，[3] 印西派についてはこれまで特に述べられる事は無かった。

今回，『伊達世臣家譜』『伊達世臣家譜続編』『仙臺藩家臣録』『仙臺金石志』を主な資料として調査を行った結果，印西派の仙台藩（伊達藩）への伝播について興味ある事実が明らかになった。

## 2. 仙台藩の弓術

慶長十三年（1608），伊達政宗は松平姓を賜り，陸奥守に任ぜられた。伊達氏は慶長十九年（1614）に政宗の庶長子秀宗が，伊予宇和島十万石に封ぜられ，宇和島藩と仙台藩となり，

幕府との関係も固まった。[4)]

仙台藩では，寛政元年（1789）の著と思われる『伊達重村諸芸調申付覚書』[5)] に，「諸芸帳江被仰出候御書付　五通　広指南も仕，弟子取立候流儀カト被思召候」とあり，日置流弓術と雪荷派弓術の二流があげられている。さらに「当時指南等之無様に御聞覚被遊候」として，武田流軍法大星同流弓法鳴弦，印西派弓術，武田流弓術，大弓，当流半弓，竹林流半弓，八幡流小弓の八流派があげられている。

また，寛政四年（1792）五月の高田甚左衛門による『御家中士凡諸藝道傳来調書跋』[6)] では射術の部として，日置流・大弓，雪荷流，武田流，武田流弓法鳴弦蟇目，印西流，竹林流半弓術，当流半弓，八幡蟇目流小弓，三好流由全弓・玉箭弓，田原籐太秀郷流，日置流があげられている。前記の『伊達重村諸芸調申付覚書』と同年代のため，全く同様の流派名があげられているが,『伊達重村諸芸調申付覚書』ではその調査を行う上で, 形式上の様々な要点, 留意点, 注意事項が指示してあり, その様式に則って記述されている。したがって, この『御家中士凡諸藝道傳来調書跋』は伊達重村の命により実施された，藩内における諸芸の調査に基づき作成された調査書の写しであると考えられる。

『御家中士凡諸藝道傳来調書跋』によると印西流（派）は寛政四年（1792）頃には笹町権平の門人，大番組，桑折権太夫によって伝承されていた。

### 3.　印西派伝書

印西派関係のまとまった伝書類は今回確認することはできなかった。

仙台市在住，長岡氏の所蔵されている『日置流弓之条々』巻子本は印西派の目録である。

奥書には

吉田九馬助重春

| | | |
|---|---|---|
| 明暦二 | 五月吉日 | 守屋六右衛門景重 |
| 元禄五 | 五月吉日 | 志賀又悦 |
| 享保十二 | 正月吉日 | 上遠野下野秀景 |
| 享保二十一 | 五月吉日 | 木村三四郎　可暢 印　花押 |

福井清太夫殿

とあり，印西二男，将軍家師範である吉田久馬助重春より伝えられたことが確認できる。

箇条は63箇条で12の「秘歌」と「日置流弓法渡の条々」で構成されている。紙質装丁共に貧弱で，写しであると思われる。

目録の箇条は以下の通りである。

日置流弓之条々

1. あし踏を定むる事
2. 五の胴の事
3. 弓構えの事
4. 引様の事
5. 箭速の事
6. ごうじゃくの事
7. 恰合の事
8. 折目掛の事
9. 縮の事
10. つよ矢つまの事
11. 細矢のかけの事
12. 強かけの事
13. 村雨の事
14. 掛けの腕口の事
15. 朝嵐の事
16. 十文字の事
17. 紅葉かさねの事
18. 弓にぎる様の事
19. 津のみの事
20. 遠矢射ようの事
21. かけあいの事
22. 弦三所に納る事
23. 矢づまと云こと四つ有の事
24. 骨合筋道の事
25. 弓に曲尺を当てる事
26. 弓に骨肉皮と云事有
27. 引ぬ矢束の事
31. 具足弓射様の事
32. 狭間の矢射ようの事
33. さまをかざると云事
34. 同射様，敵三所を射る事
35. 狭間を切寸方の事
36. ふし抜きこうじさま射様の事
37. 弦なり射様の事
38. 山なりの射様の事
39. 矢蔵に上るに射手拵とて唯の者は弓射る事不成事有る事
40. 夜の弓射ようの事
41. 鑓脇の射ようの事
42. 打根を弓に添えて射ようの事
43. 弓に太刀長刀持添て射様の事
44. 船中にて弓射ようの事
45. 親の敵可射矢の根の事
46. 甲具足さねなど射ようの事
47. 物を可射抜弦拵の事
48. 矢の根に抜薬付ける事
49. ゆかけ雨露にぬれさる仕様の事
50. 中拳の事
51. 弓早く射て能所の事
52. 矢番はやく射やうの事
53. 弓を鑓に用る事有る事
54. 弓に錦包みと云事
55. 我の手に合て握りを定る事
56. 弓に劔を当てる事

28. 弓にくさびと云事
29. なしわりと云事
30. 矢のわかれの事
57. 弓ちから稽古すべき事
58. 弓は自満の末に発と云事
59. 矢筋見ようの事
60. 鹿ねらい処の事
61. 魔縁化生の者を射則誦文の事
62. 敵射則も誦文同所
63. 化生の物可射矢の根の事

岡山藩や江戸印西（60箇条）[7] で伝えられている内容とほとんど同じである。吉田重脩が目録60箇条を選定し，元禄年間吉田印契が講釈本を編んだと伝えられている。

## 4. 『伊達世臣家譜』[8]

仙台藩の家臣の状況を知る資料として『伊達世臣家譜』，『伊達世臣家譜続編』[9]，『仙台藩家臣録』[10] がある。『伊達世臣家譜』の原本は宮城県博物館に所蔵されており，仙台藩士八百九十九家の家譜が漢文体で記述され，それぞれ家格に分け十七巻百九十九冊に著述されている。藩の儒学者，田辺家三代，田辺希文・希元・希績が藩主の命[11] を受け編纂したもので，藩主に献呈された府庫秘蔵の藩撰家譜である。

希文・希元親子二代が，安永元年（1772）から寛政四年（1792）の20年の歳月を要し苦心経営によって成立した。『伊達世臣家譜』の前編には明和元年～寛政二年までの約30年間の記事が収められている。

田辺希績が表した『伊達世臣家譜續編』69冊は寛政十一年に編纂され，明和年中で終了し，その後明和六年（1769）から寛政二年（1790）までの事実を書き継いで続編甲集とし，さらに寛政二年七月より文政七年（1824）までの記事を書き継いで続編乙集とした。

印西派関係の記事として次のようなものが見られる。

### （1）『伊達世臣家譜』巻之十二，平士之部

吉田姓源，其先出吉田伊豫（始め勘右衛門と称す）重勝，不知其先，以為祖，吉田伊豫重勝，其裔為虎間番士，保五百七十七石七斗三升之録，今稱吉田豊之進直光是也，直信家録曰，其先出自藤原時長二十四世孫久徳六左衛門秀直，以秀直第三男久徳六左衛門某為祖，秀直領江州犬上郡久徳，因子焉，自此世属佐々木家之麾下，佐々

木家亡，仕織田信長，使明智日向守某援中国之兵日，六左衛門亦與近江士人同副其事，七人阿閉淡路守父子，池田伊豫守，後藤喜三郎，多賀新左衛門，小川土佐守，久徳六左衛門是也，信長没後，織田家漸衰，於是浪散有日，秀吉太閤勤仕于霾，六左衛門以副明智之事憚之，六左衛門死，其子重勝尚幼，以吉田源八郎重氏有親戚之好為之養子，以冒源姓，重氏則印西一水軒是也，重勝雖當續重氏之家，此時重氏霾仕中納言秀康卿，在越前曰，重勝有故而去，遂不果之，於是改氏山崎時年十八，松平右衛門大夫告顛末於今井宗薫，以請仕當家，貞山公及聞祖先之擧，慶長六年擧小姓，賜四百五十石在近習霾有年，重勝雖有故不續重氏之家，以自幼有養育之恩，元和九年請官改氏吉田云，此事實與宗家譜不異，今附于此，以備他日之考云，以重勝第七男吉田長太夫重親為祖

中略

印西派射術幕下之士吉田九馬助重信，以得其伝

後略

**(2)『伊達世臣家譜』巻之十一，兵士之部（其二）**

吉田初稱久徳又山崎，性源，其先出自久徳六左衛門，闕名以六左衛門第三男山崎伊豫初稱勘右衛門又圖書重勝為祖，其裔為虎之間番士，今保五百石餘七十七石七斗三升之禄先世近江人，而仕佐々木家佐々木家滅，與池田伊豫守阿閉孫五郎後藤喜三郎多賀新左衛門小川土佐守，同属織田上總介信長信，長為明智所滅，重勝時幼，以瓜葛之好，吉田印西養以為嗣，印西亦近江人，後越前中納言秀康卿，居城結城之日，父子俱仕領国就越前日，重勝去國，及稱山崎勘右衛門，慶長六年松平右衛門大夫，托今井宗薫，報其顛末於貞山公，於是給禄四百五十石，以仕当家有日矣，以義家之恩不忘，懇請之，元和九年復氏吉田，…中略…重勝初擧小姓，後遷武頭，甞學印西派之射干其父，克究其傳，重勝子圖書重時，慶安三年三月襲父之職，後略

**(3)『伊達世臣家譜』巻之十二，平士之部（其二）**

吉田姓源，其先出自吉田伊豫重勝，不知其先，以伊豫重勝為祖，其裔虎之間番士，而保五百五十石餘之禄今稱吉田豊之進直光是也，以重勝第四男六左衛門重朝為祖，其裔為虎之間番士，今保三百三十石八斗之禄，重朝寛永七年貞山公末，給三領六口擧小姓，承応三年義山公時，遷武頭，是時選足軽三十四人習射術，以為弓隊云，先是寛永七年受新田五十石父　　中略

在職凡三十年，甞學印西派射術於幕府士吉田九馬助重信以得其傳

後略

また『伊達世臣家譜』巻之十三，平士之部にも吉田茂清について大方他と同内容の事が記されている。

## 5. 『仙臺藩家臣録』[12)]

### (1)　第一巻 6，吉田勘右衛門

一拙者祖父吉田伊予生国伊予国近江，曾祖父久徳六左衛門三男，先祖仕佐々木家勤仕之処，江州没落以後，属織田信長公・池田伊予守・阿閇淡路守・同孫五郎・後藤喜三郎・多賀新左衛門・久徳六左衛門・小川土佐守彼是近江士七人同然勤仕之内，信長公依御生害浪人に罷成，其節祖父伊予幼少故，同国吉田印西依親戚之因養之後嗣に仕，印西は関白秀次公に帰復以後，越前中納言秀康公関東結城城御在城之刻，父子共に被召抱越前へ御入国以後，伊予事は不慮に立除，山崎勘右衛門と苗字を改，慶長六年貞山様へ松平右衛門大夫殿より右の旨趣今井宗薫を以被仰達被相頼付て，先祖之品々被聞召届候之条，御小姓に可被召使被仰出，則知行四拾五貫文奥山出羽を以被下之，数年勤仕以後，養父印西に幼少之内得養育候得共，不慮に家督苗字相続不仕候之条，印西方へ為報恩，苗字吉田に相改申度之旨，元和九年に貞山様へ遂言上，苗字吉田に罷成其後図書と名を改，貞山様御代に御武頭被仰付之寛永十五年伊予と名を改 …後略
延寶五年三月二十六日

### (2)　第四巻 26，吉田覚左衛門

一拙者儀親吉田伊予九男，先祖之儀嫡孫吉田勘左衛門委細申上候。寛永弐十年十月義山様親伊予所へ被為成候時分，拙者九歳にて始て致御目見，被召出度願於江戸戸田喜太夫披露，御在国之時分御小姓組へ可被相加之由被仰出候処に，御下向被成御小姓衆大勢表へ被相出候砌故，於虎之間可被召仕之旨慶安四年被仰付，依之兄吉田圖書願，於江戸伯父吉田九馬助方より弓稽古も為仕，…後略
延寶五年三月二十六日

## 6. 『仙臺金石志』[13)]

原夫。吉田図書源重時は。江州佐々木秀義の后裔。而吉田伊豫源重勝の嫡男。久徳六左衛門の英孫なり。母は江州野洲郡立入氏源綱義の女。重時武州江府に於いて産まれるなり。久徳の家。先代佐々木に仕え後織田信長公に事し，しかれば重勝幼き而親戚の之以て吉田印西の養子と為す。而て越前中納言秀康卿に仕え侍臣と為す又物換星移慶長年中，十有八歳而仕倍于政宗卿山崎勘左衛門と號して昼夜近く侍二十四年経て羅弓矢精卒百有餘人預かり之を督す尋常弓馬の業騎射の故実を以て盡く受け吉田家流傳を受け故元和九年氏改め吉田と為す矣。而ち以来其の弟子日益に進み其の尤も伝授者数十輩選び其の後重時於亦如斯父子皆勤というべき也曽

…後略

## 7. ま　と　め

### (1) 吉田伊豫重勝

上記の資料から，仙台藩に印西派を伝えた人物は，日置流印西派の流祖，吉田一水軒印西（葛巻源八郎重氏）の長男，吉田伊豫重勝であった事が明らかになった。

吉田伊豫重勝は印西派の流祖葛巻源八郎重氏，吉田一水軒印西の養子で，藤原時長二十四世孫，久徳六左衛門秀直の子，久徳六左衛門某の三男である。久徳家は江州犬上郡久徳を領し代々佐々木氏に仕えた。父久徳六左衛門は佐々木氏の臣であったが，織田信長に滅ぼされると，やむを得ず，近江士七人（阿閉淡路守親子，池田伊豫守，後藤喜三郎，多賀新左衛門，小川土佐守, 久徳六左衛門）と共に織田家に仕えることになった。しかし, 主家であった佐々木氏の恩義もあり，明智光秀による本能寺信長襲撃に加担し，一旦豊臣秀吉に仕えるが責任を追求され，遂に殺される事となった。

重勝はこの時江州で生まれ，幼いため親戚である葛巻源八郎重氏の養子となった。源八郎は関白秀次に仕えるが，当然重勝も養父印西に随い射術を学んだ事は容易に想像がつく。しかも廻りには吉田家をはじめとする弓術の名人，達人，一派をなした射手が大勢おり，否応なしに一流の射術を学ぶ環境にあったといえる。その後，重勝は印西と共に越前中納言秀康卿に仕え，侍臣となり，仙台藩に仕えるまで約 18 年間印西と共に過ごした。射術の錬磨研鑽に励み盡く吉田家流の伝を修めた。印西も長男は早世し二男九馬助は子細有って幼少より他国にあったため, 重勝を自分の後継者として考えていたと想像できる。[14)] しかし, 慶長年中,

重勝は山崎勘右衛門と名を変え，仙台藩に仕える事になった。

重勝が仙台藩に仕えることになった経緯は不明であるが，秀康の兄，松平忠輝の正室が伊達政宗の長女五郎八姫（いろはひめ）であったことも関係していたのかもしれない。

重勝は仙台藩に勤め，24年間藩士を指導し，射術の弟子は百有餘人にもなった。その中で皆伝を受けた者は数十人おり，嫡子の重時も父の射を極め，その伝を受け，慶安三年（1650）に家督を嗣いでいる。[15] またその他の男子，重勝第四男六左衛門重朝為祖，重勝第七男吉田長太夫重親為，重勝九男吉田覚左衛門などは，その頃江戸で名を為した伯父にあたる吉田九馬助重信（将軍家家臣籏元幕臣）に教えを受け，江戸印西派の射術を学んでいる。

何故名を変え，仙台藩に仕えることになったのか，理由は定かではない。しかし仙台藩への仕官が松平右衛門大夫や，今井宗薫の世話で行われた事や，仙台藩で百五十石を賜り，最終的には八百石になった事などから（印西の越前で五百石と比べると十八歳の若輩にしては良い待遇と言える），印西との不仲とか，悪事ではなく，真にやむを得ない事情により改名する事になり，別れなくてはならなかったと考える。20年後の元和九年（1623）に養父印西の恩に報いるため氏を吉田に戻している事実からも印西との仲が理解できる。

### (2)　吉田流と印西派

重勝は十八才の時何らかの理由で名前を変え印西と別れ，今井宗薫の世話で伊達政宗に仕える事になったが，仙台藩にはすでに父印西と争い，吉田流の正統伝系者と認められた吉田助左衛門重隆が四千石の高禄で抱えられていた。

「明良洪範」[16] によると吉田助左衛門豊雄（豊隆）は吉田流『唯授一人之伝』の伝承をめぐって葛巻源八郎印西と争い，流伝の全である360箇条を受けることになり，正統後継者に決定した。その後，伊達家に仕え，正宗より浪人分にて四千石を領した。これにより仙台藩に日置吉田流が伝えられることになったが，助左衛門は，継承問題で争った葛巻源八郎が印西派という一派をたて，その二男久馬助重信が将軍家の指南役についたことを聞き，この不満を公儀へ訴え出るために仙台藩を辞して江戸に出て，生涯浪人の儘過ごすことになった。[17] その後，仙台藩吉田流は屋崎隼人によって受け継がれ，幕末まで継承された。

開藩当初，戦国大名であった伊達正宗は武術を奨励し藩士の武術教育に熱心だったと考えられる。伊達男という言葉がある通り奇抜で派手好きとされている。当時の武将の一般的な一流好みから，東北の大藩として当時最も有力な弓術流派である吉田流の正統伝系者を迎えたのではないだろうか。これは藩の実力を示す宣伝行為でもあったとも考えられ，それ故四千石という破格の俸給を与えたのではないだろうか。

印西二男の吉田九馬助重信が将軍家の弓術師範として仕えるようになってから，江戸で隆

盛をみるようになった印西の射術は，将軍家の弓術として有名になり諸国で真似をし，採用する藩も増えていった。印西の射術を学ぶ者は次第に増え，弟子もふえて，やがて印西派と呼ばれるようになった。

印西は，吉田家本家の吉田助左衛門豊隆と『唯授一人之伝』をめぐり争いを起こし，結果的に敗北し，本家との間にわだかまりを残す結果となった。しかし，その後実力を有する故に越前藩に仕える事になった。本家の吉田家にとっては，庶流である葛巻源八郎重氏の出世は，妬みや嫉妬の対象であった。

親戚であり，当然顔見知りである重勝が仙台藩に仕えるにあたりこれらの事に配慮し，相当意識したことは想像できる。年齢も同年齢であり，ライバル意識や妬み，また庶流としての遠慮などもあったのではないだろうか。吉田豊隆は仙台藩が認めた弓術師範で公認流派であり，これをさしおいて印西派を流布させる訳にはいかず，公に名前を名乗れず，この事が仙台藩で印西派が隆盛を見なかった理由の一つではなかったかと考える。

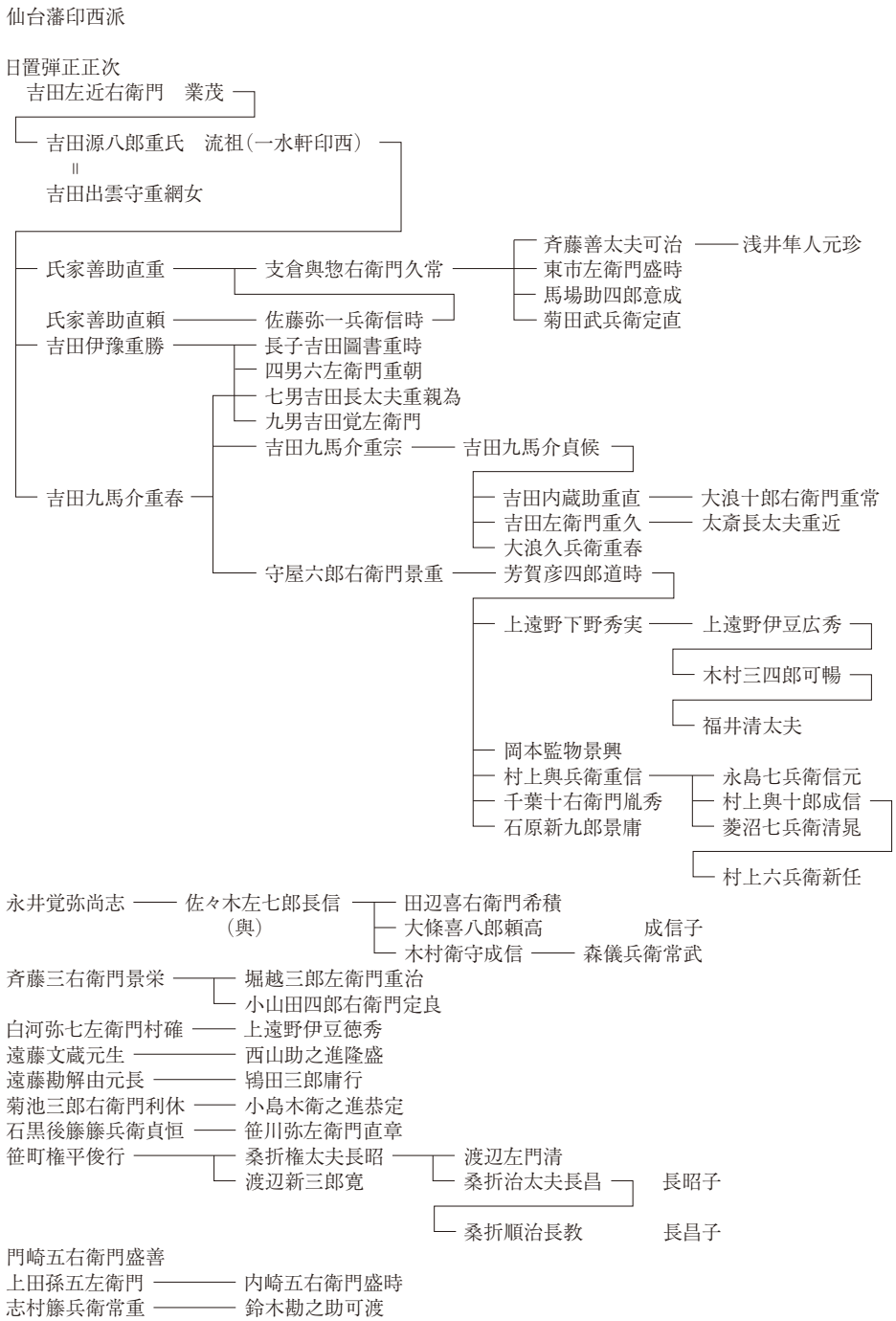
### (3)　まとめ

吉田伊豫重勝は，幕府公認の印西派弓術の伝系者である，九馬助重春（重信）よりも長い期間印西と生活を共にしており，直接指導を受けている。印西自身も自分の後継者として認め，多くの知識と技術を伝えたものと考えられる。ただし，仙台藩における本家吉田助左衛門豊隆に対する遠慮から，公に名乗る事ができず，弓術家として世に出る事が出来なかったと考えられる。

重勝は人物，技量共に抜群であったろうにも関わらず，吉田家系図，印西派系図にその名は見られず，仙台藩での活動についても弓術家というよりはむしろ弓馬の馬術家として高名で，新田開発など政治家として活躍している。その子供達もそれぞれ一家を立て独立し仙台藩吉田家は幕末まで繁栄した。

以上のような事から，現在示されている多くの印西派の系図に，葛巻源八郎重氏印西の長子として吉田伊豫重勝を明記すべきで，仙台藩に印西派を伝え，代々家臣となった重要な人物として認識するべきである。一般に早世したといわれている長男は重勝の事なのかも知れない。

仙台藩における印西派の系図をまとめた。



## 注及び参考資料

1） 永禄五年（1562）生まれ，慶長七年（1602）没　七十七歳。近江国蒲生郡葛巻の出。吉田出雲守重綱の娘婿になる。しかし重綱と不和になり吉田左近右衛門業茂に学び，妻の姓の吉田一水軒印西と改称した。その技は精妙を極め，印西派と呼ばれるようになった。

2） 日本弓道系図　東北大学図書館蔵，御家中士凡諸藝道傳来調書跋　宮城県図書館蔵，武芸小傳

3） 樋口臥龍（1939）弓道講座　第十四巻　雪荷派（史実偏）其一仙臺藩當流射藝史．雄山閣：東京，pp. 223-240.
樋口良助（1919）仙台藩日置流雪荷派射藝史略　宮城県図書館蔵
黒須　憲（1983）長岡家所蔵「弓術伝書」を通じてみた日置流雪荷派の仙台藩における伝承について．東北学院大学論集　一般教育 第 79 号：仙台，pp. 85-110.
黒須　憲（1988）仙台藩日置流雪荷派弓術の系譜　東北学院大学論集　一般教育　第 90 号：仙台，pp. 96-76.
黒須　憲（2009）仙台藩における通矢技術の伝承　東北学院大学教養学部論集　第 152 号：仙台，pp. 1-10.

4） 鈴木　亨編（1981）歴史と旅臨時増刊号　藩史総覧　秋田書店：東京，p. 62.

5） 東京帝国大学編（1912）大日本古文書　家わけ第三　伊達家文書之八　東京帝国大学文科大学　資料編纂掛：東京，pp. 258-272.
2877「伊達重村諸芸調申付覚書」
参考：他の武術流派として次のような流派名が見られる。
前者は
一宮流居合，影山流居合，今枝流居合，宮流居合，柳生流兵法，八条流剣術，願立剣術，一刀流剣術，当田流兵術鑓，四兼流剣術，新陰疋田流鑓，当無辺流鑓，鏡智流鑓，風伝流鑓，日下一旨流鑓，穴沢流長刀，鈴鹿流長刀，静流長刀，信玄流軍学，謙信流軍学，正伝流軍学，東条流軍学，山形流軍学，真極流柔，制剛流柔，無双流捕手，荒木流捕手，外記流鉄炮，不易流鉄炮，中筒流鉄炮，南蛮櫟木流鉄炮，統一流鉄炮，小笠原流躾，天文，関流算法，中西流算法
後者として
州一流居合，真極剣流居合，勝身流居合，以心流居合兵術，越し香新流居合，一道流剣術，天流兵術，一風流兵術，神道流剣術，心眼流剣術，守真一流剣術一是流兵術，明徳飯篠流兵法，三上流剣術，忠信立剣術，剣徳流剣術，林崎夢想流兵術，心厳流剣術，無辺流兵術，愛宕夢想流理方兵法，岡野流十文字鑓，聖徳太子流長刀，寂影流長刀，藤田流鎌，三徳当流三道具，武田流旧法，長沼流軍学，山本流軍法兵土要術一騎前，楠流兵術，北條流軍書，小幡流軍法，有り常流軍法要術，神学橘家，二条流軍馬，日極流軍馬，二宮流軍馬，武田流軍馬，大征流軍馬，三留悟音流捕手，三上流捕手，一風流捕手，忠信流棒，三上流棒，影山流棒，永盛流棒，生流知子法鉄炮，井上流鉄炮，三国伝東条流鉄炮，伊勢流礼法躾方，曽我流書札，飛鳥井流書法，垂加流神道，宗源神学
右之内にも広く指南等仕候流儀有之候は，可申上事

6） 高田甚左衛門著　御家中士凡諸藝道傳来調書跋　宮城県図書館蔵
〇日置流・大弓
一，目録　　一，許射術巻一冊并図形之巻一冊
一，印可　　一，鳴弦蟇目七巻　　一，蟇目本紀
一，大秘法張明見之巻　一，神道秘奥之明見之巻（唯授一人）
外に
不志ん弓
師より傳系当時大内長之助門人　　松本喜惣太

○雪荷流射術
一，目録巻　一，三人書巻　一，射礼巻　一，縄張巻
一，地祭巻　一，弓図巻　一，箭図巻　一，火箭巻
一，蟇目鳴弦巻　一，印可巻　一，箭細工之書
一，辻的射的書　一，射術集儲書
右巻物拾本折本三冊伝授ノ者二御座候
一，唯授一人極秘ノ書弐拾弐是
段々傳系当時葛岡源七門人　高城宅三郎
右同人門人
大番組堂形弓指南役　山内小藤太
右家業人当時　芳賀軍吉　市川友四郎　菱沼友七
○武田流射術　鳴弦蟇目
一，目録　一，免許　一，印可　一，唯授一人
段々傳系当時男沢十右衛門門人　大番組　熊谷多仲
○武田流弓法鳴弦蟇目
伝授の次第
伝授仕候事
同流別系の元祖
段々伝授当時大波平右衛門門人　鹿又喜平太門人　丹野卯太夫
○印西流　伝授の次第
一，目録　一，許　一，印可　一，印可以上皆傳
但唯授一人一子相伝にと申義相立不申印可以上の伝授を以て皆傳と能成候由の事
段々傳系当時笹町権平門人　大番組桑折権太夫
○竹林流半弓術　伝授の次第
一，免許　一，印可迄にて皆傳にいたす候
段々伝系当時木村三四郎門人　大番組　坂本幸蔵
○當流半弓　伝授の次第
一，表ヶ条　一，許　一，印可　一，唯授壱人
右北條甚兵衛□□に御座候処身技傳の内百十六ヶ条有の内極秘密射方口伝有のヶ条七ヶ条右の内許十七ヶ条の内弐ヶ条の大事印可七拾五ヶ条の内極意秘術弐ヶ条唯授一人三ヶ条秘密の伝死会七ヶ条のつさん事
右の外に弓矢の伝并に□の□□火矢射方口伝の由事
段々傳系当時早井七郎左衛門門人　北條甚兵衛
○八幡蟇目流小弓　伝授の次第
一，免許　一，印可　一，極意
段々傳系当時佐藤右斎門人　皆傳　佐藤太助
○三好流　由全弓　玉箭弓　伝授の次第
一，伝授　一通りにて不相知候由の事
段々傳系当時平山七左衛門門人　江戸定詰御足軽床頭　林善蔵
○田原籐太秀郷流弓　伝授の次第
一，弓道極秘五巻　一，比岐め　鳴弦事　一冊
但　変生男子引目
　　護生引目
　　セ向生引目
　　軍中引目
一，御前的書一冊　一，犬追物書一冊　一，弓道秘伝書
段々傳系当時山内源太夫門人　山内小藤太
○日置流射術　伝授の次第

一，目録　　一，許　　一，印可　　一, 一子相伝鳴弦蟇目
段々傳系当時屋崎靱右衛門門人　屋崎又三郎　屋崎甚三郎

7）浦上榮（1960）日置流弓術六拾箇條衍義　日置當流の講釈本及び注解
徳山文之介（1970）日置流弓目録
徳山勝彌太（1949）日置流弓目録六十ヶ條釈義

8）平重道解題（1975）伊達世臣家譜．仙台叢書（復刻版）．宝文堂出版販売株式会社：仙台，

9）平重道・斉藤悦雄編（1978）伊達世臣家譜続編．宝文堂出版販売　株式会社：仙台，

10）佐々久（1978）仙台藩家臣録　株式会社歴史図書社：東京，

11）忠山公，宗村伊達氏二十二世，六代藩主，寛保三年～宝暦六年在任，宝暦六年（1756）五月二十六日没，三十九才

12）佐々久（1978）仙台藩家臣録　第一巻　株式会社歴史図書社： 東京，

13）鈴木省三篇（1927）仙臺金石志下巻　墓碣　仙臺叢書　仙臺叢書 刊行會： 仙臺，p. 15.

14）早川純三郎他編（1912）明良洪範　巻二十三　國書刊行會： 東京，p. 320.

15）前掲書　伊達世臣家譜　巻之十一，兵士之部（其二）p. 141.
恩不忘，懇請之，元和九年復氏吉田，・・・中略・・・重勝初　擧小姓，後遷武頭，嘗學印西派之射干其父，克究其傳，重勝子圖書　重時，慶安三年三月襲父之職，す又物換星移慶長年中，十有八歳而　仕倍于政宗卿山崎勘左衛門と號して昼夜近く侍二十四年経て羅弓矢 精卒百有餘人預かり之を督す尋常弓馬の業騎射の故実を以て盡く受 け吉田家流殿を受け故元和九年氏改め吉田と為す矣。而ち以来其の　弟子日益に進み其の尤も伝授者数十輩選び其の後重時於亦如斯父子 皆勤というべき也曽（かつて）

16）早川純三郎他編（1912）明良洪範　巻二十三　國書刊行會： 東京

17）早川純三郎他編（1912）明良洪範　巻二十三　國書刊行會： 東京，p. 320.
「古助左衛門病気の時一通りの六十二ヶ條聟養子の源八郎に渡すといえども　中略　雪荷六左衛門吉田勘左衛門竹林孫左衛門など吉田豊雄より二百餘條を傳えてその門人には二百八十ヶ條を以て伝授あり吉田助左衛門のみ三百六十ヶ條を伝う」

## セース・ノーテボームを読む　1

# 『フィリップと他者たち』

吉　用　宣　二

セース・ノーテボーム（Cees　Nooteboom）は1933年にオランダ，デンハーグで生まれた。それはすでに多くのことを語っている。同年にヒトラーはドイツで政権を取った。戦争，ドイツによる占領。爆撃による父親の死。厳格なカトリック寄宿舎学校での教育。彼は否応なしに，歴史と世界の激動の中に投げ込まれていた。そして，私の関心は，ノーテボームが，戦争と戦後のヨーロッパをどう生きたか知ることである。誰もが生きているのだが，それを記録する人は少ない。さらにその生を隅々にまで表現できる人間はまれである。人間の生の証言ができるのは文学だけである。私が知りたいのは，一人の人間が何を見，経験し，どのように感じ，考えたかである。冷戦についてどんな意見を持っていたか，そんなことではない。風をどのように感じたか。海をどのように見たか。喜びや悲しみ，怒りはどのようなものであったか。作家は社会学者ではない。人間が生きるその具体的なありようを語るのである。

要するに，生の証言として彼の本を読んでいる。だがそれはノーテボーム個人への関心というのとは違う。私は彼の人生について，彼の本で描かれた以上に知らない，つまり彼が本の中で語っている姿が，私にとって彼なのだ。それは「本当」の彼ではないかもしれない。あるいは小説家にとって「本当」の著者は存在するのだろうか。要するに私は，ノーテボームの本の中で描かれている，6歳の時，父親と一緒に家のバルコニーからドイツ軍の爆撃によって遠くでロッテルダムが燃えているのを見たあの少年がその後どう生きたか，知りたいのである。それは，彼の文学が「私小説」であるということではない。それどころか，彼は自分のことをあまり語らない。私が述べているノーテボームは，彼が小説や詩，旅行記の形で，描いている彼である。抽象的な思考の形ではなく，日常の具体性の中で何をどう考え，感じるか，いわば彼のコスモロジーを知りたい。それを彼は文学や旅行記などの形で記している。自分についてほとんど語らずに，文学の形で，自分を表現している。たとえば夢がとりあえず日常世界のオブジェを借りてきて，それに何かの意味作用を付与することによって，語るように，ノーテボームは，自己を，世界のオブジェ，イメージ，観念，具体性を借りて語るのである。彼は自分に世界を媒介させる，自分を無にして歴史や世界を読むことで，自分を語る。あるいは自分とは何か，という普遍的な問いが，自分は世界であり，歴史である

というふうに，転換される。だからノーテボームを読むことは，私には20世紀の一人のヨーロッパ人の精神史を読むことなのである。

私は，1994年ドイツに滞在していたとき，ノーテボームと「出会った」。その年のフランクフルト書籍見本市のテーマ国はオランダであった。ノーテボームの『儀式』がドイツ語に翻訳され，「ツァイト die　Zeit」紙のベストセラーリストに載っていた。私はそれを読んだ。川端康成，楽茶碗が重要なイメージを作る小説で，その時は深く考えなかったが，それはなにか心に残った。それから，ノーテボームのドイツ語版の本が出ると買っていた。そのうちにドイツ語版の８巻の全集が出た。そして私はその全集版を読み始め，今すべてを読み終えたところである。こうして出会ったのは偶然だが，何か必然性のようなものを感じる。私にどこかでつながる何かがあるに違いない。これから試みたいと思う，「ノーテボームを読む」は，私自身を読むことにつながっている。多分，それは，人間が20世紀のかなり残酷な世界の中に生きるありようと関わっている。

ノーテボームは不思議な作家である。彼は詩，小説を書いたが，同時に多数のコラム，夥しい旅行記を書いた。彼はカトリックの寄宿舎学校で，ギリシア語，ラテン語を学び，英語，フランス語，スペイン語，ドイツ語に習熟している。これらの言語の知識は，世界のかなりの部分を旅行できる資格を与えている。彼は多数の作家論，書評を書いているが，特に崇拝する作家としてフォークナーとボルヘスを挙げている。全集の第１巻は「詩」，2，3巻が小説，残りの４巻は旅行記，最後の巻がエッセー，文芸批評などである。その小説の舞台がオランダであるのはまれで，スペイン，ベルリン，日本，タイなど「外国」が多い。今私は，これらの旅行記が展開している，果てしない表象の海の中で揺られているのだが，ノーテボームにとって，人間が作りだしたイメージ，観念，表象の宇宙が，文学なのである。

私は彼の本をドイツ語訳で読んだ。私は彼が語るオランダ文学や文化の知識しか持っていないので，オランダ文学の文脈で彼を語ることはできないが，彼の眼がどんなに非ヨーロッパ世界に向けられているにせよ，またそのヨーロッパ・非ヨーロッパという枠組みにおいても，ヨーロッパ文学として彼の文学を読んでいる。

彼は言葉の完全な意味において，旅する人である。そしてその彼の旅の途上に，私が出会ったとしても不思議ではない。私はこの出会いの喜びを語りたいと思う。文学は具体的な細部の表現に命がある。私はこれから個別に，第二巻の小説から「読み」始めたい。小説，旅行記，コラム，文芸欄，そして最後に第１巻の詩を論じる予定である。私はこれらのものを読んだ。そしてそれについて自分の言葉で表現することで，私にとって読むことが，暫定的にせよ，完成する。それは長い旅になるだろう。ノーテボームという道連れと一緒の。私はこの数年，毎日ノーテボームを読んできた。ノーテボームは，窓の外の木のように，見上げる

空のように，いつもそこにいる。ノーテボームを読むとは，そのような自分を読むことだ。どうして私は読み続けているのか。そのことが，またノーテボームを読むことと呼応している。

## 『フィリップと他者たち』

この小説は1955年に出版された（1958年にドイツ語の翻訳）。ノーテボームが22歳の時の作品である。だがこの小説について語ろうとすると，当惑する。どう語っていいのか分からない。一つの視点を決めて切り込んでいく方法は，この作品に対して不当であるように見える。想定すべき視点が多すぎるので，それを絞ることもできない。処女作にはその作家のすべてが含まれているという思いがまた，語ることを難しくする。私は勿論その後のノーテボームの文学を知っている。だが後のノーテボームからそれを読むことは，その作品を制限することになるだろう。おそらく作家は多数の可能性の中の一つか少数のものを選び，それを伸ばす形で成長する。だからその潜在的な多数の可能性をあらかじめ制限することは，不当な解釈となるだろう。文学は本来全体的な表現を目指すものなので，ますます語ることが難しくなるのだ。

ノーテボーム自身は，この作品に関して，作家はどのように生まれるのかと，自分の「誕生」を振り返っている（「いつ人は作家であるのか」）。

「なぜ私はある日，Hilversumの公共読書室で読書机に座り，それを私の書き物机にしたのか。私はそれを意識的に決心したのか。私が知るかぎり，そうではない。しかしなぜ私はその時，大理石模様の固い装丁の，一種のノート，黄色っぽい繊維の，悪い紙のノートを持っていたのか。そのノートを私は，そこに私の最初の小説が記されていたので，40年後にデンハーグの文学博物館に送ることになった」[1)]。

「私は，既述のノートを買ったとき，すでに作家だったか。あるいは，私が，伯父さんのアレクサンダーは奇妙な男だった，とそこに書いたとき，初めて作家になったのか。〈…〉私たちがもう一度，Hilversumの公共読書室に半世紀もどるならば，そこでその20歳の著者はまさにその最初のノートを一杯に書きあげたところだ。一つの幻想主義的なテクストが生まれた，文学の同時代像と一致していないし，戦後のオランダの，当時のリアリズムの逐語性から遠く離れていた」[2)]。

「私のノートには『フィリップと他者たち』の第一章が書かれていた。私はそれを，私の近くに住んでいた唯一の作家のところに持って行った。私は彼を知らなかった，それでも彼は原稿を持った若い，見知らぬ男に対して好意的だった。彼はMax　Dendermondeという

名前で，今年フロリダで死んだ。〈…〉Dendermondeは，私の原稿を読み，それをQuerido社に持ち込んだ。Querido社は，1933から1940年の困難な時期のドイツの亡命文学にとって，最後にドイツによるオランダの占領によってその出口が閉ざされるまで，重大な意味を持っていた出版社だった。戦後その出版社は二人の婦人によって経営されていたが，そのうちの年長の女性，厳格で高貴だった彼女がその第一章を読み，私が書き続けることができるように300グルデンを提供した。この額は当時，一冊の本を書くのに十分だった，そしてそれを私はまたした。あなたに本当のことを言えば，私は今なおどのようにしてか知らない。それはまるで私の中から流れ出て行くかのようだった，まるでそれは，決して行われなかったにもかかわらず，私がすべてを思い出すかのようだ。私は文学的な無垢をまだ完全に所有していた（と思う），そして私は何によっても妨げられていなかった，作家がこの文学的な無垢を失ってしまったときに，執筆の際に作家を邪魔する何によっても。3か月後に私は完成した，しかしその時何か奇妙なことが起こった。まだ出版されていない最初の本を書いた誰かは作家なのか。ひょっとしたら，これは，教皇が密かに枢機卿を任命し，この秘密を彼の胸の中に保って置くとき，その状況と比較されるかもしれない。In　pettore。それがだから私だった，作家　in　petto（心の中に）。他の誰もそれを知っていないほどよく。後から見ると，この時代はひょっとしたら私の人生の美しい時だった。〈…〉それから私の本が現れた，前世代の恐れられていた批評家，Greshoffが，情熱的な書評を書いた，そして私は作家だった。人は，もし他者が，人は作家であると言ったならば，作家である。その後，初めて問題が現れる。すべてはひとりでに展開する，この瞬間まで。つまり旅することと書くことの無限に長い，素早く過ぎ去った時間，遠くに常に私たちのそんなに特別な，個性的な文学の中からの二人のもっと以前の旅人，書く人にとって招く光，つまり私の変わることのない導きの星であった，SlauerhoffとCouperus，そしてすべての，後に別の空の方向からやってくることになった，別の人たち。私が今ここに立つならば，それは一つの中断されることのない線であるように見える。もちろんそれはそうではない。私はかつて書いた，「魂の転生は生の後ではなく，生の間に行われる」。それは，私が同様に書いた別の文と矛盾しているよう見える文だ，つまり，「私はおそらく千の生を持っている，しかし私はその一つを取る」。あなたがたは，選ぶことができるだろう。とにかくすべての年月の間，私の人生における一つの定数がある，それは，その中で私が書いている言語，それを私は他のどれとも交換したくない言語である。それは，その中で私の祖国の抒情詩が書かれている言語，その中で私の友人たちが書いている言語である。一つのかけがえのない道具，私の人生の愛，私の存在の中心が，常に企てられる探索行にもかかわらず，オランダにある，他のどこにもない，その理由である」[3)]。

Querido 社は，ホルクハイマーとアドルノ著『啓蒙の弁証法』を 1947 年に出した，アムステルダムの出版社である。ひょっとしたらノーテボームと同じ人が担当したのかもしれない。ここで私が言いたいのは，この出版社に示されているような，自由の精神である。エラスムスの人文主義，デカルト，スピノザたちを包括する精神風土の中からノーテボームは生まれてきた。この精神風土をノーテボームはここでは詩人・作家の Slauerhoff と Couperus，あるいはオランダ語として挙げているのだが，自由な言語表現，それを可能にする価値への信頼を彼が失うことはない。

ノーテボームは，書く前に，すでに文によって書かれていることを知っていた。言語表現がすでに無限になされていた。それは，それでもいま言語による表現は可能かを問題化する。「言語によって語る」ことがこの処女作のテーマである。ノーテボームは言語媒体を用いて語ることを試みた。その試みは，処女作としては，十分に社会的に認められた。つまり果てしない文学世界へ旅立つパスポートが与えられた。それがこの作品の意義である。

だがそのような概念的説明は少しもこの作品について語っていない。しかしそれについて具体的に語り始めようとすると，ためらう。異なったテーマの展示室のある美術館を次々と見て回るように。フィリップがそこを巡る「主人公」だが，「他者たち」はそれ固有の世界を持っている。そうしてフィリップもそのようなひとつの固有のノマドなのだと知る。だが「他者たち」のそれぞれの固有な世界はその固有の謎とともに ― というかどの人間も謎なのだ ― 投げ出されているだけだ。そのそれぞれの固有な世界に何かの関連を見出そうとすること ― それが「読む」ことである ― は可能なのだろうか。他者は，他者でとどまる。それが世界である。

世界はすでに語られたものとして存在している。ノーテボームはそれを読む喜びを知っている。そしていま言語で語る喜びを知る。彼自身の物語を語る，そのコンパスとなるものかすでに語られた言葉たちである。本の冒頭に Cnstantijn　Huygens と，ポール・エリュアールの詩句が掲げられている。それは世界が既に語られたものとして存在していることの謂である。そしてそれがかなり迷路めいたこの小説の導きの糸となる。それは物語を ― あるいは文学を ― 求める旅なのだ。

## 1. 「語る」，「枠」を作る

それによって「作家」が誕生した，その物語はどのように始まるのか。何が，どのように表現されるのか。

「私の伯父さん，アントニン・アレクサンダーは奇妙な男だった。彼を初めてみたとき，

私は10歳で，彼はおおよそ70歳だった。彼はGooiの醜い，巨大な家に住んでいた，その家は奇妙な役に立たない，ひどく醜い家具で一杯に詰め込まれていた。私は当時まだほんとに小さくて，ベルまで届かなかった。ドアをどんどんたたいたり，郵便物投入口の蓋をぱたぱたさせること，それを私は他の場合にいつもしていたのだが，私はここではあえてしなかった。結局，私は途方にくれて家の周囲を歩いてまわった。伯父さんのアレクサンダーは黄色っぽい保護カバーのついた，色褪せた紫色のビロードの，ぐらぐらした安楽椅子に座っていた。そして彼は，私がかつて見たもっとも奇妙な男だった。各々の手に2つの指輪をはめていた。私が6年後，再び，今度はとどまるために，彼の所へ来た時，私はその金が真鍮で，赤や緑の石（私にはルビーやエメラルドを身につけている伯父さんがいる）が色鮮やかなガラスであることを認識することができた」(S. 13)。

「奇妙さ」は他者の特性である。奇妙なことは，その解明を要請する。伯父さんばかりでなく，世界 ― それは他者の世界である ― の「奇妙さ」に向かう。冒頭の文はこの物語の展開を内包している。伯父さんの「奇妙さ」は，フィリップが後に出会う「奇妙さ」の原型を示している。だから，もうしばらく伯父さんのところにとどまり，その「奇妙さ」が描写されなければならない。

伯父さんはフィリップに何か持ってきたか尋ねる。お祝いをしようと言い，「夜遅くバスで出かけ，水辺に座り，雨の中を歩き回り，誰かにキスすること」(S. 14) を決める。Loosdrechtの水辺に座ると，「霧や靄が水の上にかかり，奇妙な小さな夜の音がする。それで私は最初，伯父さんが低い声で泣いているのに気づかなかった」(S. 15)。

伯父さんは独身で，「私は，〈私〉となった思い出と結婚している」(S. 16) と言う。チェンバロを演奏し，フィリップをバッハ氏に紹介する。フィリップが眠った部屋には，古い写真，「インドネシアの少年の写真」，「アレクサンダー，君の友からPaul　Swooloのために」の献辞のある本，蓄音器，ローエングリーンのレコードなどで一杯だった。フィリップが蓄音器のクランクを回し，レコードをかけると，伯父さんが飛んできて，レコードを取りあげるが，そのとき，ひっかき傷ができた (S. 21)。

フィリップが外へ出ると，明るい金髪の少女，びっこの少年がいる。少女はフィリップを誘うが，少年はとどまり，「フィリップはイングリッドと一緒に行く」と叫び始める。彼女は，雑貨屋でフィリップにカンゾウ飴がありますかと尋ねさせ，その間に，両手いっぱいの干しブドウを万引きした。彼らは，それを近くの空き地，「アフリカ」で一緒に食べる。「まだ開いている口で彼女はひどく素早く私にキスをし，私の口は濡れ，彼女の歯を感じることができた。その後彼女は走り去った」(S. 24)。伯父さんの家の垣根に紙きれがある。「お前の伯父さんはホモだ」。その時伯父さんが出てくる。「列車の時間だ，ここにトランクがある」。

伯父さんは消えた。不可解な出来事が起こり，不可解な人々が現れる。フィリップはただそこにいる。

6年後フィリップは，伯父さんの所にとどまる。フィリップは伯父さんの謎めいた言葉を聞いている。「私たちの生活の唯一の現実の理由は，ふたたびパラダイスに達することにある。それは不可能であるのだが。しかし私たちはそれにまったく近づくことができる。誰かがパラダイスに近づくと，人々は彼に対して抵抗し始める。私が完成のあり得ない状態に近づくと，私は小さくなる。しかし私が小さくなる一方で，私は彼らの眼の中では大きくなる。彼らが抵抗しなければならない何かになる」(S. 25)。

「それは島と同じだ。島が小さくなればなるほど，その排他性が増大する。しかし最小の島はすでにもう海である。私たちのまわりの人々が海なのではなく，私たちがなろうとしており，私たちが目の前に見，私たちの名前をもっている神が海なのだ。私たちは絶え間なく，私たち自身の神存在に反抗して生きている」(S. 26)。

「神になることは人々にとって恐ろしいことだ。神は恐ろしいものである。なぜなら彼は完全だから。そして完全なものほど人間が恐れるものはない。それと奇妙なもの，つまり神性の名残，可能性のこの無限の等級ほど恐れるものはない」(S. 26)。

「おまえは狂気であること，一人の神となる試みを決して止めてはならない」(S. 27)。

伯父さんのこれらの言葉は，何を意味しているのか分からない。しかし，フィリップの旅はこの伯父さんの言葉が暗示している方向に向かう。その言葉を理解する試みが彼の旅となる。

フィリップは蓄音機をいじくり，伯父さんに写真の少年について話させる。パウルは隣の家に，父親と二人で住んでいた。オランダ領インドから休暇中で，彼の母はその土地の女だった。伯父さんは彼が庭を歩いているのを見た。「パウルの猛獣の眼は私をもう離さなかった」(S. 30)。パウルは「俺の庭から出ていけ。おまえはもう年よりだ」と言った (S. 30)。「それはもう40年も前のことだ。パウルは当時10歳で，だから私はずっと年上だった」(S. 30)。その一週間後，ピカピカに磨いた靴，長い黒い靴下，新しい水兵のスーツを着たパウルは，「今日を誕生日にしたい」と宣言する。その午後「友達を連れてこい」(S. 32)，「俺は，その中にそれらが俺のためにあると書かれている，本がほしい」(S. 33)。伯父さんが「私の友達の贈り物」として持っていったのが，フィリップが見た本だった。「その午後，私たちは彼の誕生日を祝った，私は窓辺に座っていた，彼は本のページを合計していた。彼は私を忘れたと思った」(S. 34)。パウルはオランダ領インドに戻り，その家は売りに出され，伯父さんはそれを買った。パウル　Sweelooは伯父さんにとって他者である。それは美しく，残酷な存在だ。

物語はここで終わることも可能だろう。でも伯父さんは純粋な他者ではない。他者たちの世界の中間的な存在 ― ここで私はヘルメスと呼びたいのだが ― である。フィリップは他者を探さなければならない。旅に出なければならない。それは物語の内在的な方向である。

そして物語は続くのだが，その方向はこの第一章にすでに織り込まれている。伯父さんがパウルを求めたように，フィリップもパウル的存在（中国人の少女）を探し求めるだろう。旅の途上で様々な他者に出会うだろう。そして彼らはそれぞれ謎を，自分の物語を持ち，それをフィリップは聞くだろう。人間とはそれぞれの物語なのだ。そしてそれは他者として謎のままとどまる。フィリップはそれを聞き，記録する。

この小説は，伯父さんがパウルのことを語るように，物語的な枠を作りながら，展開する。「アフリカ」の少女の物語がある。伯父さんの「パウル」の物語がある。それは勿論物語全体の中で位置を与えられているのだが，一方でそれとは独立した物語を持っている。フィリップが出会う「他者」たちはそれぞれ物語を語る（枠を作る）。その物語の中にまた枠が，別の夢や話が挿入される。どれもが夢を語っているようなものなので，そしてどの夢も自動的に解釈を要請するので，読者は当惑する。それぞれの物語は解釈が提示されるのではないので，読者はこれらの物語の海の中を漂流するしかない。フィリップの旅と帰還という，月並みな枠で小説は終わるのだが，この異常な「枠」構造は，増殖する物語をとりあえずおさめておこうとしているかのように見える。そこには，ノーテボームの，言語によって語ることの強烈な喜びがある。文体の揺れは，表現衝動の振幅の激しさを示している。

## 2.　旅

物語を求めることがフィリップの旅となる。旅もまた強力な物語的トポスであるが，それは物語群との遭遇に導く。出会いは偶然だが，その偶然性を高める方法が存在している。それをノーテボームは「聖杯伝説」のトポスで語っている。旅にも何か論理が必要だ。それが最初にプロヴァンスで与えられる。

「そして今，それが起こった日から何日後に私がアルルでジャックリーンと踊っていたのか，だれも尋ねてはならない」(S. 36)。語りは時間，場所を自由に飛び越えることができる。それは物語の自由である。

彼女と別れたあと，古いローマ時代の墓地，「糸杉がそこに誇らしく，神秘的に立っていた。月が謎に満ちて，青味がかり石棺の上を照らしていた。私は墓にもたれ，その石の冷たさが私の肉体の中にしみていくのを感じた」(S.　38)。そのとき，フィリップは後ろでフランス語の詩を唱える声を聞く。そのひどく肥った男は，「Maventer」（ma は「magnus，大きい」，

venter は「腹」）（S. 40）と名乗り，物語を語りたいと言う（S. 39）。そして男は，プロヴァンスの谷の小さな村のホテルで待てと言い，去る。

「あの晩私は Maventer を待っていた。というのは，家具は他の晩のように近づいてくる夜の後ろに隠れるのではなく，大きく不安にさせながら私の周囲にとどまっていたから。まるで，それらが最後には私の一部であると言いたいかのように。そしてまた，部屋の中にすみついた匂い，古くなった木材，川で地方の固い石鹸で洗われたベッドのシーツの匂いも以前よりももっと強く，独立的だった」。「いつも時計の音のもとで眠る男が，時計がちくたくならなければ，起きてしまうように，私は窓辺に行った，Maventer が来るのを見るために。〈…〉〈オランダ人，出て来い，お前に物語を語ろう〉」（S. 48）。小説の「地」の文はリアリズムの文体で客観的な描写がされている。一方で，人が語る物語の文は現実を描写していない。 Maventer は「動物の墓地」で語る。「私はここに座っていた。そして彼女が来た。〈あなたは Maventer ですね〉」。彼女は円を描き，「私は円の中にいる，あなたはいない。私が質問できるように，あなたは足を円の中に置かねばならない」（S. 49）と言う。Maventer の話を聞きながら，フィリップは思う。「私は突然，それは現実の世界でないことを知った，というのは，モノたちはとても生きており，自分自身によって所有されており，第二の，別の現実の中にあったからだ。その現実は突然認識可能に，眼に見えるものとなり，私に触れ，私を解放し，私は Maventer の声の方に漂い進んだ」（S. 50）。この「第二の現実」は文学のことである。つまり言葉によって作り出された表象の世界だ。だからこの「少女」（中国人の少女）も，文学世界のヘルメス的存在である。そして Maventer はこの少女が語ることを語る。少女がこの土地に来た時，少女は案内の男と夜，町の通りを歩いた。男は本屋を見せた。ウインドーには薄い本が一冊だけあった。彼らが図書館に入ると，本はどこにもなかった。案内の男は，死んだ一人の若者のことを語る。いつも病気だったその小さな少年は，書くことのできた唯一の人間だった。他のだれも詩，物語，本を書くことはできなかった。少年が死んだとき，彼は第一章だけを完成していた。男はその薄い小さな本を指した。「私は，そこはとても悲しかったので，この国を離れた」と少女は言った（S. 53）。

この小説において他者たちが語るのは「夢」である。そして夢の中ほど，事物が象徴性を帯びるところはない。そこでは虚構と現実の枠が取り払われる。だから，フィリップは，Maventer を介さずに，直接少女と交信する。「〈プラタナス〉と彼女は言った，〈それはあなたの後ろに立っているわ〉。私は振り返った。〈何を見ているのかね〉と Maventer は尋ねた。〈どんな文字を描いているの〉と私は彼女に尋ねた。〈K，R，U，S，A，そして A。それは一つのおかしな言葉よ〉」（S. 54）。

少女が Maventer に語る別の物語。「雨が降っていた，夜だった，私（少女）は駅にいて，

市街電車に乗った。向かい側に男がいた，〈何を見ているのか〉とその男。〈あなたの手を〉。それは痙攣的に動いていた。〈演奏する前は，いつもそうなのだ〉とその男。無料の切符があるので，私はその男について行った。光がアスファルトの上で，暗い深い水の表面の上でのように泳いでいた。ホールは大そう奇妙だった，ぼやけたオレンジ色の光の中に立っていたおおよそ百台のグランドピアノ，ピアノに座っている人たちは互いに話している，一つのささやき声が私を一台のピアノに導いた。ステージにピアノはなく，ただ一つの椅子があるのが見えた。あの男がステージに上がると，私たちは立ち上がり拍手した。彼はお辞儀をし，椅子に座り，私たちが静かになるまで待った。私たちは演奏を始めた，その曲の名前は思い浮かばなかった，音楽が終わったとき，彼は立ち上がり，歓声に感謝し，再び座った，私たちは演奏を続けた，それは古い，うっとりさせる音楽だった，私たちは演奏をし，終わると，彼は立ち上がり，私たちの拍手に感謝した」(S. 55f.)。

少女が語ることを，Maventerが語る。フィリップがそれを聞いていることを，小説は語る。この少女の話は，「語ること」（文学）の困難や，フィリップがそうであるように，「聞くこと」が芸術家の仕事となっていると，解釈できるだろう。フィリップが出会う他の「他者」たちもそれぞれ夢や物語を語るのだが，それらはこの小説という枠の中におさまらない，独自の魅力を持っている。ノーテボームは何であれ，言葉で語りたいのだ。「他者」たちが饒舌に独り言のような事柄を語るように。他者たちは語る存在である。そしてフィリップはステージの男のように聞くのである。

Maventerは語り続ける。「私は彼女がそこに座っていたその様子を覚えている。それはまるで彼女が，木々や他のものたちの独立した生，意識した生を自分の中に受け入れたかのようだった，彼女は，そこに生育している銀モミの木の影と震えになった，しかし彼女は，夕べを自分の中に受け入れることができるために，広がり，伸びた。〈…〉あの晩突然新たに生まれたあの谷を一人の狂気の女の手の中に受け入れるために」(S.　57)。少女は万物照応を象徴しているのだろうか。少女は去る。そして「お前が来た，私に物語を語らせるために。彼女は語られた状態にある，そして今私は老いることができる」(S. 58) とMaventerは話を終え，去る。そしてフィリップは「彼女をいつか見出すだろう，と思った。どこかで」(S. 58)。

伯父さんが「奇妙さ」の記号を見せることによって，フィリップを旅に送り出したならば，Maventerは「少女」を語ることで，フィリップの旅に目標を与える。少女を見つけることが旅の目的となる。少女とは「語り」のことなのだ。少女は，彼女を見出すまでの旅を可能にする。つまりフィリップはその旅の内容を語ることができる。その内容はまた別の他者たちの語りで満たされる。その語りの全体が，小説，文学なのである。あるいはノーテボームはそれを文学だと考えている。

## 3. 他 者 た ち

フィリップの旅が新たに始まる。フェイ（Fey）という女性が登場し，それからフェイのところに至る経過がフラッシュバックの形で語られる。どうして「時間通り」ではなく，フラッシュバックなのか。このフラッシュバックの手法は，小説は，時間を飛び越えることも，また振り返ることもできることを証明しようとしている。小説には，自然科学的な時間も空間の法則もない。文学における語りは絶対的に自由である。

フィリップは，「アフリカ」の少女に引きまわされた。同様に，小説の中の女たちは，フィリップの理解を構うことなく，自分の存在を生きている。彼女たちは，男たちと違って，もっと現実的である。彼女たちは物語を現実に即した形で語る。男たちの夢や観念の語りとは対照的に，伝統的なリアリズムの手法で語られる存在だ。ここでも語りの多様性が試されている。Anything goes。

フェイは，廃墟のようなところに住んでいる。「彼女が批判的に，信心深く花を切り取るために選び出すとき，私は彼女の口のこの特徴的な動きを見る。彼女は上の唇を上の門歯におしつけ，下唇をいくらか前に突き出す。子供たちは，昆虫を引き裂くときにそれを時々する，そして私はこの動きを彼女に何度も見たので，〈…〉その時彼女の顔が何か残酷な，ひょっとしたら悪魔的な様相を帯びるのを知っている。投げやりな苦さや眼の中の辛辣なあざけりといった，彼女のいつもの表情がひとかたまりになり，眼はもっと小さく，硬くなり，もっと黒く，そしてそれが既にそうであったよりももっと閉ざされたものになる」（S. 63）。他者性はこのように具体的な形で認識される。

フィリップは花を切り取るのを手伝う。小説の中ではおそらくすべてが別の何かを参照指示する記号となる。だからこの「花」が何を意味しているのか，と考えこむ。だがそのような細部が夥しく存在するので，私はただ混乱するだけだ。すべてが何かを意味しているように見え，それが一点へと収斂しない。読者は意味ありげな細部の海に投げ出され，その中を漂うばかりである。

フェイは語らないが，彼女も物語を持っている。「私たちは花をたくさん切り取った。私は彼女が頭を深く茂みの中に傾けるのを見た。今彼女の素晴らしい頸の線が粗く切られた髪の下にもっとつよく現れるのを見た，首の右側の前に彼女はある手術の，長めの痕跡を持っていた。彼女はそれを隠さなかった，容易に可能だったが。それもあの残酷なものと野性的なものの奇妙な印象に貢献していた。私は彼女が怒り，興奮しているのを見るといつでも，その傷跡が血を流し始めるのを期待した」（S. 65）。だがその「傷」は語られない。

それからフェイに出会うまでが語られる。ヒッチハイクの旅とヴィヴィアン Vivian との

出会いがリアリズムの手法でフラッシュバックされる。

「人が（大きな，汚れた都市）に到着すると，あるいは早朝に出発すると，一つの灰色の光が開き，最初の人々が市街電車やバスに乗りに来る。彼らは互いに黙って手の動きであいさつをする，あるいは道路を横切ってなにかの呼び声で。私はそこを走り，それを聞く」（S. 67）。この小説では，出会った人々，他者がテーマであり，その途中の旅，都市や風景，それぞれの土地の人々の生活は，小説の点景をなしている。だがそれは，後に終わることのない旅の，夥しい記録を書くことになるノーテボームを萌芽の形で示している。

「私は当時初めてパリに来た，私は島の岸の壁のわきに横になり，高い木々の後ろの都市の息遣いに耳を傾けた。その時私はヴィヴィアンに会った，そして彼女はカレー Calais への結合肢であった。すべては整えられていた，それはまたいつも一つの物語である」（S. 70）。

小説の中でイニシャティヴをとるのはいつも女である。「彼女は大きすぎる声で笑った，私がそのように笑う顔を探したとき，目の周囲に多くの線のある，まったくありふれた顔を見出した，苦しみを持っているあるいは持っていた人間のように。私は誰かがそんな顔をしていて，そんなに笑うのは滑稽だと思った」（S. 70）。

「奇妙な」が伯父さんの存在を示す記号であるならば，「苦しみ」はヴィヴィアンの記号となる。カフェで彼らは，アメリカ人と思われ，酔った労働者に絡まれる。「フランスのプロレタリアートはアメリカの資本主義者に飲み物を提供する」（S. 71）。結局フィリップは，ヴィヴィアンに600フランを払ってもらう。「アイルランドの男ならは彼らの多くと戦っただろう」（S. 74）とフィリップは思う。そのような事件の後でヴィヴィアンは，男に去られ，子供を養子に出さねばならなかったこと，その子に会うことは許されていないこと，手首を切って自殺しようとしたことを語るのである。小説の中の他者たちは誰もが傷を抱えている。他者とは傷の物語である。

物語の進行は，「旅」で展開される。ヒッチハイクで誰が一番早くカレ―に着くか，競争することが決められた。カレーで雨の中（小説ではほとんどいつも雨が降っている。あるいは著者は雨を降らせている），短い革ジャケット，ジーンズの若い男についてユースホステルに行く。

「私はカレ―を憎んだ。地面は柔らかくなり，ぬかるんでいた，家々はこの雨の中動くことなく，みじめに立っていた。青白い大人の顔をした，汚い子供たちが死ぬほどの退屈さ以外の他の認識できる情動を持たずに不潔なカーテンの後ろで私たちを観察していた。家の間にあちこちに隙間があり，そこにゴミや錆びた鉄が散らかり，汚い犬が私たちにほえた」（S. 82）。プロヴァンス，パリ，カレー。フィリップが通過するどの都市も美しいものとして描かれていない。それは日常世界であり，それから離脱しでフィリップが放浪しているからだ

ろう。フィリップ（そしてノーテボーム）は若く，外の世界に目を向けることはできなかった。小説の「他者たち」は，フィリップの内面世界の別の自我たちである。

そのカレーで，フィリップは，翌日港のパスポート事務所の行列の中にヴィヴィアンを見つける。彼女は海岸から船の方に別れの合図をしてと言うが，フィリップは彼女の船を見つけられない。その後すぐに，その海岸でフィリップは，中国人の少女の姿を見る。が，彼女はすぐに消える。少女との出会いは物語の終わりを意味する。だからここでは少女は，旅を続けること（物語を続けること）を促すように束の間姿を現すが，すぐに消えなければならない。

「だからそれは，私が彼女を追う最初の道路だ。だがどこへ。後に彼女をパリやピサで見たと言う人々がいた，しかしそれはこの事柄に何か影響をするだろうか。それは一つの物語である，そして私はこの物語を一度語った，一人の友人に，しかし第三人称で。そしてゆっくりと彼は後ずさりした，彼女の足跡をたどりながら。それでもって，私ではなく，ある別の人が問題となった。というのは，私はそれが私の身に降りかかったことを望まなかったから。ある別の男は，Auberge に着き，彼女が到着しすぐに出発したことを知った。彼女は行き先に疑問符を書いていた。彼，私ではなくその別の男は，都市の名前をいくつか書き，あてずっぽうに指を置いた，ブリュッセルが当たった，だから翌日彼は出発した，それが他の誰でもなく，カレーからデューンキルヘンの方へヒッチハイクをしている私であることを知りながら」(S. 86)。ここは「私」＝フィリップが語っているのではない。物語そのものが語っているのである。物語がメタ物語を作る（枠を作る）形で展開するように，その物語の中の「私」は物語を支配する主人公ではない。代替可能な人物，物語の中の任意のひとコマである。

フィリップが行くのは道路である。道路は結び付け，引き離す。物語へ運び，導く。道路は文体である。「なぜ私は，他の人たちが働いている間，雨の中，道端に立っているのか。私は今，一つの道路が何であるのか知っている，私は道路を見，知ったからだ。最初と最後の太陽によって赤とピンクに祝福されて。雨によって抱擁された地平線に終わりながら，粒状でひび割れており，窒息させる埃で一杯の。その埃は私の周囲で渦を巻き，私の中に入り込む，はいずり，くねくねし，周囲の山々よりも過酷な顔を持って。道路，森の秘密の中に寝かせられて，あるいは突然昼の道路から夜の道路へ変わりながら，それへの憧れと一緒に，そしてもし人が遠くまで歩み，疲れているなら，行かねばならない，すべての道路。疲れて」(S. 86)。これはそのままケルアックの『オン・ザ・ロード』の中にあることも可能だろう。後の旅行記（旅をめぐる文）の中では，その移動＝「道路」自体が問題となるのだが，ここでは道路は「他者」に導く，中間地帯である。

ヒッチハイクでフィリップはルクセンブルクへ行く。「私はまだ町の外部にいた，雨が降っていた。フェイは彼女の小さなスポーツカーを止め，ライトで私の顔を照らした。彼女は言っ

た，〈Alyscamps 通りのあるアルルで Dans Arles，ou sont les Alyscamps〉。彼女がそれを知っていたこと，どこから，なぜ彼女がそれを知っていたのかは私にとってどうでもよかった。そしてこの廃墟へ，私が今座っている，廊下に来た。そして私は雨を友人のように見ている。なぜ私は彼（雨）と遊ばないのか。〈ええ〉と彼は言った，〈一緒に遊びに行かないか〉。私たちは一緒に出て，彼は私に，どのように運河の水を堀りかえしたか，花を閉じたかを見せた。彼は素早く私の間を走り，小さな手で茂みに触れた。〈私を肩の上に載せて〉と彼は言った，そして私はそうした。だから，フェイが〈他の人が来たよ〉と呼んだ時，とても濡れていた」（S. 92）。

Dans Arles，ou sont les Alyscamps は，Maventer がアルルで唱えた歌の中の言葉である。「ゆっくりと昔のローマの墓地に下っていく Alyscamps 大通り」（S. 38）という文もある。これは，フェイが，伯父さんや Maventer と同様にヘルメス的存在であることを示している。そしてフェイは二人の「他者」をフィリップに合わせる。だがこの「雨」は何だろうか。この小説の中ではよく雨が降る。道路のように，循環を意味しているのだろうか。あるいは小説の中では雨も降らせることを示したいからか。そして小説は，ここでまたかなり「奇妙な」二人の若者に語らせるのである。

「なぜなのか私は正確に言うことが出来ないのだが，彼は私に石灰を思い出させる。私が彼のところへいくと，彼は鏡の前に立っていた。〈…〉〈私はナルシスを演じている〉と彼は言った。彼の声は乾いてかさかさで，正しい響きを持っていなかった。まるで誰かが二つの石灰石をこすり合わせているかのように」（S. 93）。その青年，ハインツは彼の物語を語り，フィリップは聞く。小説の中の人物たちは，みんな何かを喪失し，時代と世界の中を迷い，彷徨している。ハインツは，かつてのカトリックの修道院学校での精神的な共同体，そしてその喪失を語る。これはノーテボームが何度か語っている，彼自身のドミニコ派とアウグスティヌス派の修道院学校の経験を踏まえている。

ハインツは，修道院学校で，「ミサ委員会のメンバーだった」。「別の生徒たちの世俗的な意図のためにミサをラテン語で書く」ことが仕事だった。認められると，「それは厳かに煙草のブリキ箱の中に入れて埋められた，〈その木〉の下に。私が幸福だった時があった，他の少年たちとその木のもとに立ち，紙の入ったブリキ箱を埋めたので，水をまいたあとで，その水を飲んだので。〈…〉朝，庭の中ですべてがどんなに湿っていたか知っているか。太陽は何度も新たに生まれた，草や木の上の水滴の中で，そうしてまるで小さな新しい太陽が緑の中で花咲き始めたように見えた，神々が最後にうっとりとして息をひそめるまで」（S. 98f.）。

「私は自分が当時なぜ幸福だったに違いないのか知っている，とりわけ冬に。ベンチが毎朝冷たく，私たちができるだけ多く着こんでいたときに。〈私たち〉。そして私がそこに属していたので，幸福だった」。「今，私はもうそこに属していない。どこにも属していない，他の人間にも属していない，他の人間たちは寒い，というのは，彼らはさまざまな仕方で彼らの部屋の中で寒いのだ」(S. 100)。

精神の共同性から疎外されていること，それがハインツの不幸である。彼は「病気」として兵役を免除される。それからトラピスト修道院へ入る。「クリスマスの前夜，私はガラス窓の中で輝いていた。外には孤独，そして孤独の後ろに，私が降りなければならない一つの村。村の後ろには再び孤独。雪が降っていた，静けさが足の下でささやいていた。誰もそれに異論を唱えることはできない。雪はそれに属していた。雪は私の靴の下で低くきしまねばならなかった。月もそれに属していた，月は私のために掲げられた，私が青春時代に戻る旅をしていたので。トラピスト修道院の鐘もそれに属していた，〈…〉修道院の中のどこかで一人の僧がロープをひっぱっていた，彼はそれを私のためにしたことを知らない。私がその修道院に，他の男たちに入るように促す理由から行くのではないことを私は変えることはできない。他の男たちは神を愛していたが，私はこの男を知らなかった，他の男たちは世界の改宗に出て行ったが，世界は罪を犯し続け，改宗されないだろう。〈…〉僧たちから見れば，私は一人の詐欺師だっただろう，神を冒涜するものだっただろう，世界の立場から見れば，私は一人の愚かものであった」(S. 102)。「お前は病気だ, 司祭になることは可能ではない」(S. 103）と，その修道院からも出される。そして彼はヒッチハイクをし，ヨーロッパを放浪している。

もう一人の男，サルゴン（本名はジョン。有名なアッシリアの王，サルゴン三世にちなんで）はカーテンの後ろに立ち，話す。彼はシティの会社で働いていたが，ラジオのニュースの声に魅せられ，解雇された。彼はその声をめぐる夢を語る。幾晩も連続する長い夢であるが，一つの独立した物語ということができる。彼はその夢の中で「うっとりさせる華奢な緑色の石からできた高い家々のある通りを眺めた。しかし私はこの通りに入ることはできなかった。入ろうとすると，青色の粉のバリケードが形成され，それは私を噛んだ」(S. 106)。ある夜の夢の中で，「私は通りの中に入ることができた，私は不安を持った。〈…〉人が長いあいだ求めていたものを得ることは，はじめは不安にさせる。家々の緑までそれは日常的な世界だった，その上にはなにか名状しがたい情愛のようなものがあった，それが私の不安を穏やかに取りさり，愉快な有頂天にとってかわらせた。私は歌い始め，花を買い，突然，この町が特別な町ではないことが明らかになった。人が幸福ならば，物事はそのように見えるのだ，と私は思った，世界はいつもそうなのだ，私たちは世界を私たち自身の不安か不幸の

色で染めているのだ。しかし世界は本来いつもそうなのだ。だからその世界を描写することは難しい。私自身を描写しなければならないだろうから。世界は私たち自身の色を帯びているから」（S. 107）とサルゴンはカーテンの後ろで語る。

その夢の中の街で，サルゴンは，「極楽鳥」に出会う。それを彼はジャネットと呼びかけるが，その鳥は，Lace さんの店のショーウィンドーに飾られている剥製である。サルゴンはその店の前でメリー・ジェーンと知り合い，彼らはジャネット解放同盟を形成した。それからかなり後で二人は Lace さんの店でジャネットを買い，公園へ行く。メリー・ジェーンは，Thubbs 司祭が今日死んだと言う。サルゴンは，礼拝の際に司祭の助手をしていた。メリー・ジェーンは，「私は司祭に嫉妬していた，あなたが私よりも彼が好きだと思っていたから」と言う。「まるであなたが他の少年には属していないかのような，彼らの間の異邦人であるかのような，その周りで何か特別なことが起こっている，誰かであるかのような」（S. 110）。「〈彼は死んだの〉。彼女はうなずいた。それが私の夢の終わりだった。私は彼女がぼやけ，曖昧になるのを見た。彼女の顔の曲線と優美な線が彼女のドレスの華奢な優美なオレンジ赤の上でもう一度アラバスターのように息づくのを見た。そして彼女は，小さな気をわずらう彫像のように，意味のない装飾として花束と詰め物をされた極楽鳥をもって消えた」（S.110）。サルゴンはその夢から覚め，「私を苦しめていたのは，どこかで誤りを犯したと言う意識だった」（S. 110）と思う。

次の夢の中で，彼はメリー・ジェーンと散歩する。「あの都市には夕べがたくさんあった。すこし不確かにおずおずと夕べが沈んできて，すべてを親しげな闇で満たした。その闇の中でメリー・ジェーンは語ることができた，〈どこかに司祭の声が彼自身と同じくらい遠く離れて，埋葬されている。丸い黒いプレートの上に Thubbs 司祭の声，奇妙じゃなくて〉。〈…〉その日に私が目覚めたとき，私は以前住んでいた通りに行こうとした，そこに Lace さんの店があるに違いない。それはカーテンが絶望的な調度を隠している，貧しい通りだった。子供たちはそこで遊んでいる，子供はいつもどこでも遊ぶものだから」（S. 111）。

「私はジャネットが食料品の間に孤独にいくらか滑稽に立っているのを見た。〈やあ，見知らぬ人〉と彼女の声が私の後ろで言った。それは夢の中の声ではなかったが，私はそれに違いないと思った。彼女（メリー・ジェーン）は私を認識しなかった，私が彼女を夢から知らなかったら，私も彼女を認識しなかっただろう。彼女は変装していた，私ほど大きかった，厚い靴底と高いヒールの靴。顔の中の最初の崩壊の兆候を彼女は厚く塗り隠していた」（S. 112）。店の主人は，10 年前に Lace さんからこの店を引き受けたとき，その鳥を，そのために貯金している隣の子供たちのために取っておくように言われた，と言う。「〈黙りなさい〉と私の後ろの声。〈私はそれを買った〉と私はメリー・ジェーンに言った。〈すべてを理解す

るために，あなたは何度見なければならないの〉とメリー・ジェーン。彼女は鳥の脚を持ってカウンターから引っ張った。〈おまえは失せろ〉と彼女。それはジャネットが私たちの間の床に落ちた時，叫んだかのようだった。頭は割れ，乾草のはみ出た内臓の方へ転がった。かつてよりももっと死んで，薄気味悪い固い足が板の上，埃の真ん中で空中に突き出ていた，埃はミニチュアの爆撃の際のように高いところで飛んでいた」（S. 113）。

サルゴンは何を語っているのか。彼の夢の内容が重要なのではない。サルゴンは「語る」喜びを語っているのである。彼はラジオの声に魅せられる。そしてその声によって夢の中に導かれる。今度は声を聞くのではなく，それを語るために。語ることの快楽のために。フィリップは，サルゴンがラジオの声を聞いたように，それを聞くのだが，サルゴンもフィリップの分身なのだ。この小説全体が，フィリップの「語り」なのであるから。物語の原型は，伝承である。こんなことがあったと伝える＝語ることだ。ノーテボームはここでその原型を反復しているのである。

サルゴンは夢を語る。そして夢から覚めたあとの出来事（しかし夢の物語は続いている）を語る。そのすべてをサルゴンはカーテンの後ろで語る。枠の中に枠が形成される。夢の中では，どのモノも何か別のモノを表す記号となるので，これは解釈を過剰に要請する「夢」＝話である。解釈自体が目的ではなく，ここでは解釈を要請する文体が試みられている。そのような文体も存在し，ノーテボームがそれを書くことができることを自分で証明している。この夢はほとんど一つの独立した物語である。だがそれではこの小説全体の構造が壊れてしまう。それで過剰な枠づけがされる。「とサルゴンはカーテンの後ろで語った」。それをフィリップが聞くかどうか，問題ではない。これは，他の人物の語りのように，サルゴンの独白である。サルゴンがその後ろで語るカーテンは，告解の際の小窓である，彼は神の前で告白しようとしている。

サルゴンが夢の中のこととして話す，街，夕闇の接近のイメージは美しい。それは社会との接点を失い，放浪する彼の共同体の夢を語るものなのだろう。ハインツは過去の精神的共同体の喪失に苦しみ，サルゴンは自分の夢の世界に迷い込んでいる。そしていま放浪している。「二人は原始的な彫像の，美化された非人格の中に立っていた，ノスタルジー，苦悩と願望を持つ人」（S. 113）。「ひょっとしたら，ハインツとサルゴンのまわりを雲のように包んでいたのは孤独だった。〈…〉人間のしるしを刻むところの孤独があらわれるだろう。人間性を証明するしるしを。私たちはそれに慣れなければならない，と私は思った。ひょっとしたらこの時期は，実際の孤独を待つこと以外のなにものでもない」（S. 114）。

彼らはもう一年以上も一緒だった。サルゴンはハインツを「子供が学校へ毎日いく道を知っているように，知っている」（S. 118）と言う。「そして時の経過とともに君はとてもたくさ

んの生を集め，君にはまるで彼らが君の肩の上にしゃがんでいて，君が重苦しくなり，君がそれらから逃れるために，語り始めるように思われるのだ。しかし彼らはとどまって，君をゆっくりと描く，彼らは彼らの重さを，息苦しさを君の顔の上に，手の中に描く。君は，どんなに私が醜いのか見たかい。一年が短く過ぎると言う人々は，その過ぎさった一年の中で何が起こったのかを語るためにもう一年を必要とすることを忘れているのだ」(S. 118f.)。その「さまざまな生」をフィリップは旅の中で聞く。その生はとても語りつくせるものではない夢の形で，あるいは寓話として語られる。しかしそれを聞くことがフィリップの世界体験なのである。ハインツとサルゴンは再び旅に出る。彼らの話は語られたのだから。

フィリップは，ルクセンブルグへ行く。公園のすべてのベンチに恋人たちが座っている。ここで恋人たちとフィリップの間で，愛の可能性をめぐる会話がギリシア劇の合唱を思わせる形で行われる。小説にはこのような劇形式も可能であることを試しているかのように。フィリップは，「君たちの愛撫は死すべきもの」(S. 120) と言う。愛撫の後でも相手は，「不安を引き起こすもの，見知らぬ肉体」(S. 120) でとどまる。彼ら，「われわれが手元にここに持っている女性は，唯一の女性だ。彼女は一つの秘密で，われわれは彼女を彼女の秘密の光の中に保つ，そして彼女は情愛によって着せかえられる」(S. 121)。フィリップは，その唯一性は思い込みにすぎないと言う。彼ら，「その唯一の女性は生成する。彼女の身振りが彼女を明らかにする。彼女は，彼女が言うこと，われわれがそれから聞くことの中から生まれる。彼女は，きっかけを与えるためにわれわれが彼女に与えるいくつかの機会によって姿をとる」(S. 121)。フィリップ，「もし私が一つのベンチを見つけ，別の女とそこに座るならば，私は自分を失わないだろうか」(S. 121)。彼らは「君の懐疑の過酷さ」に言及し，言う。「人は終わりに生きているのではない，そうではなく今生きている。今，ひとつの肉体の緊張の中，その肉体をなでる手の繊細の中に。今，ひとつの口の秘密言語の中に，その口の上に置かれる，ある口の願望の中に」(S. 122)。「そうだ」とフィリップは言った。

この小説は他者性を巡る物語である。サルゴン，ハインツたちは「私」にとって他者である。だが彼らもまた世界にとって他者である。他者性とは，「自己」性の裏側だ。自己がいて他者がある。そして自己もまた自分にとって他者となる。「属していない」ことは，個人の不幸ではない。それは人間存在の条件である。だれもが属していない。誰もが互いにとって他者なのだ。それを認めることから，人間関係が，愛が始まる。この「会話」劇は，フィリップの内面のドラマとして，他者が自己の中に回収されずに，他者でとどまることの中に愛が生まれることを述べている。外の世界への旅が，内面の旅と重なる。「中国人の少女」は，その内面と外面の境界に現れる存在である。

小説の中の女たちは具体的に描写されている。ヴィヴィアンもフェイも，サルゴンやハインツのように多くを語らない。その代わりに，ヴィヴィアンはフィリップの体に触れ，フェイは花を摘み，そしてフィリップとボール遊びをする。「時々誰もいない時に，私はボールで遊ぶの」(S. 123)。フェイはフィリップと一緒にボール遊びをする。「フェイは頭を後ろにそらせ，半ば目を閉じ，私を見た。〈私はたくさんの男と寝た。私はその間ずっと少年とボール遊びをしなかった〉。私たちはボール遊びをした。彼女がボールを捕らえるために飛び上がるとき，あるいはそれを投げるために，身をそらす時，動物のようだった。一度彼女はボールを手にして私のところに来た。〈そのボールは幸福だと思う〉と彼女は言った。〈私はそれをいつも捕らなければならない，でもできるだけ固く投げて〉。そして彼女が自分の場所に立った時，私はボールを高く，月まで遠く投げた，そしてボールは一瞬の間冷たく危険に輝いた。〈ここに君の幸福がある，捕まえて〉。〈…〉ひょっとしたら何時間もボール遊びをした」(S. 124)。フェイは多くを語らないが，ボール遊びは，フィリップとの会話である。ルクセンブルクの公園の「愛をめぐる会話」に従った，他者との交感である。

## 4. 中国人の少女

それは，フェイが何かを決意したことを暗示しているが，同時にフィリップにとっても一つの転換を示している。フィリップは出発し，北に向う。サクランボ収穫の仕事。Texel 島で「地面にひざまずき，玉ねぎを掘った」(S. 126)。そうして秋になり，ある朝早く，「私がデンマークの国境を越えたとき，パスポート検査の後で，スタンプを観察し，見た，KRUSAA，Inrejst。振り返った，そして彼女はそこに立っていた」(S. 127)。KRUSAA とは，Maventer が少女について語る間に，フィリップが少女の幻像を見，現れた言葉である。言葉を介して少女が出現する。

ここはもうリアリズムのスタイルではない。自然科学的な客観性を思わせる乾いた文体が続くが，その内容は，例えば，サルゴンが語る夢の世界と同等である。少女が語ることは，フィリップが旅の終わりに達し，外部世界は反転し内面世界となることを意味している。

「今 Krusaa のパスポート検査から出てくる人は，ひょっとしたら私を見ることができるだろう，というのは，私はそこの道路の右に立っていて，彼女に言っているのだ，〈ハロー，至る所で君を探したよ〉」(S. 128)。これは，この物語全体をフィリップが語っていることを，改めて確認させる文だ。この枠づけが，物語の本来の構造である。この「枠」が物語を規定している。

彼らはヒッチハイクでコペンハーゲンへ行く。この時，フィリップは好きなことを語る。

読書，絵を見ること，夜のバス，水辺に座ること，雨の中を歩き回ること，時々誰かにキスをすること。彼女は，「道路の上で歌うこと，歩道に座る，ひとりごとを言う，あるいは雨が近づいてくるので，泣くこと」（S. 129）が好きだ。

フィリップが伯父さんと一緒に水辺に行ったように，彼らは市街電車で海の見えるところまで行く。Nyhavn というところ。彼らはボートに座る。「〈あなたは私のために名前を考え出さねばならないわ〉。〈…〉私は手を彼女の顔の周りに置いた，というのは，手はそのために作られていたから。彼女の高い頬骨の形は私の手の平の中にあった，眼を閉じて，と私は言った，彼女のまぶたにキスをするために。南部の沼の縁に見る花のように紫色の。〈君をマッシュルーム Champignon と名付けるよ〉。私が手を離したとき，彼女は突然笑った，彼女の顔は愛らしさで覆われた，その一方，光が彼女の歯の上で戯れ，隠れ，眼の下に追いかけられた，眼は大きく，今なお不可解だった」（S. 130）。これは彼女の世界に入る，通過儀礼のようなものだと思う。そして彼女の世界は，美のイメージの宇宙である。

彼女は小さな蓄音器を持っている。伯父さんも古い蓄音機を持っていた。少女は，伯父さんの存在が示していたものと等価である。フィリップは「そこに私が，自分が美しいと思った詩を書き入れている小さな本」（S.　131）を持っている。彼女はレコードをかけた。スカルラッティのソナタの行列 Cortège。「Havngade から三艙のボートがこちらに来るのを見ることは奇妙な眺めだった。それらは枝とマツムシソウ Skabiosen で飾られていた。秋の色の旗をつけた最初のボートには，室内オーケストラが身じろぎせず座っていた」（S. 131）。「一方，チェンバロ奏者が Cortège を演奏していた。〈それはスカルラッティ自身よ〉と彼女はささやいた。私は，それが，アレクサンダー伯父さんをときおり訪問し，私が姿を見ずに紹介された男であることを思った。〈赤毛の男はヴィヴァルディよ〉。彼女は膝の上で本を開いた。〈そこにエリュアールがいるわ〉。本の中に私はエリュアールの詩句を読んだ。〈君の眼と一緒に僕は変わる，月と一緒に変わるように〉。〈なぜ私はそんなに美しいのか / 私の主人が洗うので〉。彼は私たちに手を与え，座って私たちに加わり，私たちと話した。あの晩私たちは多くの人と話した，私は彼女に私の従者（私の持っていた詩集）からの多くの男たちを紹介したからだ。例えば，E.E. カミングズ。〈私が旅したことのないどこかで，喜んですべての経験の向こう側に，君の眼は彼らの沈黙をもつ〉。この詩は次の言葉で終わる，〈君の眼の声はすべてのバラよりももっと深い，だれも，雨でさえもそのような小さな手をもっていない〉。〈…〉それは素晴らしい夕べだった。私たちの後ろの都市は沈黙していた。〈…〉優しい音楽に Hans　Lodeizen が，再び言った。〈私は私の家の中に住んでいる / 時々私たちは互いに出会う / 私はいつも君なしに眠り / そしていつも私たちは一緒だ〉」（S. 132f.）。

Hans Lodeizen の詩の中の「君」は，「私」の中の他者のことだろう。その他者と時々出会

う。別れているが，いつも一緒だ。フィリップは旅に出て，他者たちに出会った。他者たちはフィリップの精神世界の中の他者であった。しかし「私」の中の他者に彼は旅に出ることがなければ, 出会うことはなかった。その旅の導き手は伯父さんであり, 中国人の少女であった。彼らはヘルメス，使者である。そして知らせが ― 言葉で媒介された美の世界，文学の存在 ― がフィリップに伝えられたとき，彼らは去る。ここで円環が閉じる。フィリップは，世界，歴史を含み持つ自分を見出した。もう旅は必要ではない。あるいは，すべてが旅になる。「朝方，都市が青白くなり始めたとき，ボートたちは離れていった，そして私たちは水辺にそって人間たちのもとへ戻っていった」(S. 133)。

フィリップが見出したものは，彼がそれを去り，何かを探しにでた，もとの日常世界である。彼自身を作った，現実，歴史世界である。螺旋状に上昇しながら，彼はもとの場所に戻るのだ。「雨は降り続けていた，壁面の窪んだ棚の前で窓の前のイメージのように花咲いた。そして私は，世界の愛おしさはすべての人間といっしょに新たに始まるということ，それは解釈されえないということ，伯父さんが言ったように〈パラダイスはとなりにある〉ということを，考えた。私たち自身も驚くべき存在であるということを私は見た。なぜなら，私たちがこわれやすく，失敗した神々であり，はじめから失われた存在であるので，情愛を引き起こす存在であることを。でも私たちはいつでも話すことができる。だれもが遊ぶことができる」(S. 135)。

少女との別れが残されている。出会いと別れは, 文学のもっとも基本的なトポスの一つだ。若いノーテボームがそのトポスを書かずに済ませるはずがない。別れの前に彼女の存在が ― ルクセンブルクでの会話の「一回性」の理念にしたがって ― 記憶される。「誰かを愛することは奇妙だった, 私はそれをしたことがなかった。私は彼女におけるすべてを知覚した，彼女の顔に関して，彼女が言い，言わない事柄に関して，彼女が身支度するその仕方に関して。〈…〉彼女は，大人遊びをしている子供のように真剣に口紅を塗った」(S. 135)。

別れはノルウェーの海岸で起こる。「私は知っていた，彼女を探したこと，そして見出し，彼女が私の一部となり，それにもかかわらず彼女は離れていくだろう，一人で離れていくだろうということを知っていた」(S. 136)。「私は彼女を行かせた。私は泣いた，〈雨が降っている〉と私は言った，〈雨が降っている〉。しかし彼女はなにも言わなかった，ただ両手で私の首のまわりをつかみ，私の口にキスをした。長く。それから彼女は出て行った。私は手をドアのまわりに留めて，彼女が消えていくのを見た。時折，たくさんの雲の後ろから現れて，月が彼女を照らした。そのとき彼女は，月からやってきて，郷愁から戻っていく，少女のようであった。〈戻っておいで，どこでも同じだよ〉。その後，長く経ってから，あるいはその後しばらくして，私はアレクサンダー伯父さんのところへ戻った。〈お前かい，フィリップ〉

と彼は尋ねた。私が庭の中に入ったとき。〈そうだよ，伯父さん〉。〈何か持ってきたか〉。〈いいえ，伯父さん〉，と私は言った，〈何も持ってこなかったよ〉」（S.　137）。

## 5.　終　わ　り　に

ノーテボームが書いているように，『フィリップと他者たち』（最初のドイツ語訳のタイトルは『天国は隣にある』）は，批評家 Jan　Greshoff によって好意的に批評をされた（『夢遊病者的な確実性』，1955 年）。「言われなければデビュー作だとは思わなかっただろう。経験のある名人の作品と思うほど，極上の，良く作られた作品」[4] と彼は書いている。「それは最初から最後まで私を魅了した，語りの筆致 Duktus，語り手の着想の豊かさによって，そこから生活が成立している奇蹟を彼が新しく直接的に体験することにより，彼の筆との単なる接触の力で古い錆を，洗われたばかりの金に魔法で変えるという彼の能力によって」[5]。Greshoff は青春とか旅とかの個別のモチーフを語らない。そうではなく「詩的なもの」という概念を提示する。詩的なものは，「物体の予期しない互いの接合の中で出会うことができる，あの不安にさせる契機」[6] である。それは「二重の経験」に伴われる。「その存在について彼が予感もしていなかったものについての測り知れない驚きと，彼がはじめて気づいたものがすでにずっと前から，生まれる前から彼に親しいものであったという，一つの深い，強烈な確実さ」[7]。これは私によれば，フィリップが出会う現実と，すべてが文学によって語られているという事柄である。「詩的なもの」という概念でもって，この小説の見たところの無秩序（私が，「枠」を作ることでノーテボームが統一性を作りだそうとした，と考えたもの）が統合される。その統一性について Greshoff は言う。「どの意味の後ろにも裏の意味，〈…〉どの響きの中にも一つの隠された響き。〈…〉この第二の現実から出発し，彼は見たところ無関連で，偶然的である物語の統一と必然性を発見する。ノーテボームは自分のために一つの中間世界を創造した，それは夢でも現実でもない，その中には両者の本質的特徴が解きほぐせないほど織り込まれている」[8]。

それを可能にしているのがノーテボームの文体である。「ファンタジーに銅版画の最終的な正確さを与える，能力」。「ノーテボームは夢を彼のクリアな，透明な，免れられない精密さの中で作り上げる，一方いわゆる現実はそれが現にあるもの，あらねばならぬものに還元される，つまり一つの漠然とした，意味のない，非現実的な観念に。この小説を読むと，人は，日常の営みが我々に全く頻繁に忘れさせることを意識する。つまりただつじつまの合わないことだけが一致しているということ。〈…〉我々は喜んで不条理が彼の自然な要素であるという事実を受け入れる。その結果，我々は，彼とともに，すべてが可能であるとみなす。

彼は我々にすべての奇妙きわまるものを完全にノーマルと思うように教える。我々の真の故郷を形成するように選び出されている奇蹟を我々が待っているという確信にひとたび達したならば，我々を驚かせるものはなにもない。〈…〉我々は，すべては，分析されるためにではなく，受け入れられるために，書かれたのだと理解する地点に達する」[9]。

現実は文学であり，文学は現実である。詩的なものは両者を統合する。だから「ノーテボームのファンタジーを解釈すること，あまりに多く説明することは，この本から何かを取り去り，その著者に不正を行う。というのはまさに説明されないものと説明できないものの中にすべての生の意味と美があるからだ，それゆえにまた芸術作品の中に現れてくるような生の中に」[10]。「この本の意味と価値は，それがいかなる解決も探していない，それゆえにまた供給しないということ，それが一つの世界像の単純化を得ようと努めるのではなく，むしろその複雑化を得ようとしていることの中にある。それを終わりまで読むものは何も学ばなかった，前よりももっと多くの知を所有していない。しかし彼の予感はもっと豊かに，圧倒的になった」[11]。

世界はそれ自体として複雑である。世界を単純と思うものは ― あるいは人間は「単純（ノーマル）」という観念を現実に当てはめることで，すこしでも安心しようとする ―，他者を見ない，あるいは見たくない。この Greshoff の文は，後のノーテボームを預言しているように見える。世界を複雑化すること，他者（ヨーロッパ近代の人間にとっての他者）を古代や中世に，あるいは非ヨーロッパ世界に求めること，それがノーテボームの文学であるからだ。

私は，小説の中の個々の「物語」が小説の枠から突出していて，それをおさめるために「枠」がいくつも作られていると述べた。それぞれの枠の中の別の物語はとても暗示的であるので，読者である私もこのようにかなり長く語らずにはいられなかった。それは物語の，イメージを喚起する力が強いということだ。ノーテボームは言葉で媒介されたイメージの力，その果てしない豊かさをここで発見した。その発見の旅が，フィリップの旅であった。

その旅の帆を膨らませ，押し進めていたのは，言葉で語る欲望，喜びである。小説の中で，サルゴンやハインツに彼らの内奥の物語を語らせていたものだ。そのほとばしる物語を，とりあえずまとめあげようとする枠構造の増殖，それは同時に，語るスタイル，文体の実験となっている。そしてノーテボームはここで言葉によって語る試みに確かな手ごたえを感じた。一人の作家が誕生した。22 歳の作家の処女作の意味はここにある。その内容の混沌は，また時代のそれである。第二次世界大戦後，荒涼としたヨーロッパ精神。人間とは何かという問いは，小説とは何かという問いと重なる。小説は必然的にメタ・フィクションとなる。フィリップの問いは，時代と通底している。本当に無名の青年の小説が出版されたこと自体が，一つの時代的な刻印なのだ。フィリップの姿は，ビートニクのそれを思わせるが，何かを求

めて放浪の旅に出る動機は，戦争で破壊されたヨーロッパの若者たちにとってより切実なものであった。ケルアックの『オン・ザ・ロード』が出たのは，1957 年のことである。若者たちは放浪していた。ノーテボームは，ここから文学の，生の果てしない旅に出たのである。

『フィリップと他者たち』„Philip und die Anderen“（Helga van Beuninger のドイツ語訳）は全集版による。Cees Nooteboom : Gesammelte Werke Band 1. Romanen und Erzählungen 1.（Aus dem Niederländischen von Helga van Beuninger und Hans Herrfurth）. Frankfurt am Main（Suhrkamp） 2002. ここからの引用は，本文中にページ数を記した。なお，脱稿後に，全集第 9 巻が出版された。Gesammelte Werke Bnad 9. Poesie und Prosa 2005-2007. Frankfurt am Main（Suhrkamp）2008.

## 注

1） Nooteboom, Cees : Wann ist man Schriftsteller ? In : Gesammelte Werke 8. Essays und Feuilletons.（Aus dem Niederländischen von Helga van Beuninger. Herausgegeben von Susanne Schaber）. Frankfurt am Main（Suhrkamp）2006. S. 295.
2） Ebd. S. 296.
3） Ebd. S. 297f.
4） Greshoff, Jan : Traumwandlerische Sicherheit.（Aus dem Niederlämdischen von Magda Moses und Bram Opstelten）. In : Der Augenmensch Cees Nooteboom.（Herausgegeben von Daan Cartens）Frankfurt am Main（Suhrkamp）1995. S. 63.
5） Ebd. S. 63.
6） Ebd. S. 63.
7） Ebd. S. 64.
8） Ebd. S. 64.
9） Ebd. S. 65.
10） Ebd. S. 66.
11） Ebd. S. 66.

Cees Nooteboom lesen 1 Philip und die Anderen

Ich habe fast alle Bücher Cees Nootebooms, die ins Deutsche übersetzt sind, gelesen. Und ich möchte darüber schreiben, was ich dabei gedacht habe. Dadurch wird das Lesen für mich vollendet. Ich bin interessiert daran, wie Nooteboom, der 1933 in den Niederlanden geboren ist, gelebt hat, was er gedacht, gefühlt hat, und wie er darüber geschrieben hat. Das möchte ich wissen, nicht als seine abstrakten Gedanken, sondern als die konkreten Einzelheiten, ich denke, seine Kosmologie. Es wird dazu beitragen, zu erklären, was es bedeutet, dass ich in der Welt im 20. und 21. Jahrhundert lebe.

Ich will mit dem 2. Band der gesammelten Werke in der deutschen Ausgabe beginnen.（Der erste Band enthält Gedichte, die ich am Ende behandeln werde.）Diesmal handelt es sich um seinen Erstlingsroman, „Philip und die Anderen“. Das ist eine Geschichte der Reise des jungen Philips. Philip verlässt seinen Onkel, reist per Anhalter in Europa herum, trifft die Anderen und kehrt zum Onkel zurück. Sein Onkel, Maventer, der über ein chinesisches Mädchen erzählt, das Philip suchen wird, und Fey, die Sargon und Heinz einführt, sind Hermes, der Schutzgott der Reisnden. Die Frauen, die Philip auf der Reise trifft, zeigen einen konkreten Aspekt der Welt, wie Vivian, die ihren Sohn losschicken musste. Andererseits sind die Männer in ihren Vorstellungen befangen, wie Heinz, der in der katholischen Klosterschule gelernt hat, aber aus der geistigen Gemeinschaft vertrieben wurde, und Sargon, der sich in einer Traumwelt, die sich um einen ausgestopften Paradiesvogel dreht, verirrt hat. Philip hört, was sie erzählen. Aber die Geschichten der Anderen sind so selbstständig, dsss sie die Einheit des Romans zu sprengen drohen. Deswegen wird gerahmt, was man erzählt. Was das chinesische Mädchen erzählt hat, erzählt Maventer und das hört Philip. Philip hört, was Sargon geträumt hat und erzählt hat. Eine immer höhere Dimension des Erzählens wird gebildet. Das chinesische Mädchen, das am Ende gefunden wurde, gehört nicht der realistischen Kategorie an, sondern ist ein imaginäres Wesen. Aus dem Grammophon, dss sie bei sich hat, ertönt Musik von Scarlatti, der dann leibhaftig erscheint. Als sie aus dem Heft, in dem Philip schöne Gedichte eingetragen hat, liest, erscheinen Dichter wie Paul Éluard. Das Anders-sein erscheint in der Form der Literatur, d.h. der Welt der Vorstellungen, die durch die Sprache vermittelt ist. Die Anderen, die Philip gefunden hat, wandern in der unendlichen Welt der Vorstellungen. Im Roman geht es um deren Entdeckung und die Freude an dem sprachlichen Ausdrücken.

Die Anderen im Roman sind Philips Doppelgänger. Also ist die eigene Innenwelt einem selbst fremd. Die Fremdheit wird durch die Literatur vermittelt. Die Reise zu den Anderen wird die Reise der Literatur. Die unendliche Reise auf der Suche nach dem inneren und äußeren Anderen hat Nooteboom mit diesem Roman begonnen.

# 英語における語頭の /j/ と語中の /j/ のふるまいの違い

高　橋　直　彦

## 0. 摘　要[1]

本稿では，標準英語の /j/ が生起位置に応じてふるまいを異にし，その違いが形態音韻的配置型の違いによるものであることを論ずる。こうした違いを示さぬ非標準方言もあるものの，そうした方言もまたここで想定する枠組で統一的に説明可能であることを併せて指摘する。

１節では本稿の依拠する枠組の概要を提示する。具体的には，英語の不定冠詞をデータとし，これまでに提案されてきた三つの枠組，即ち，（I）構造主義流 IA 方式に基づく異形態という概念を援用する枠組，（II）生成文法流 IP 方式に基づく変更規則という概念を援用する枠組，（III）ひな形（照合）方式＝TM 方式に基づくひな形という概念を援用する枠組，この三者を比較参酌し，枠組（III）が説明理論として妥当性をもつものであることを論ずる。これを承けて 2 節では，「不定冠詞＋/j/ 始まりの単語」という連鎖の示す音形を観察するが，その際，1 節で支持した TM 方式（III）の予測するところとは一見矛盾する音形が予測されるように見えるものの，これは実は見かけ上のものであり，語頭と語中とで /j/ の配置型が標準英語で異なることによるものであることを論ずる。併せて，語頭と語中でこうした違いを示さぬ非標準英語の音形の場合は /j/ の配置型の語頭・語中での同一性に起因するものであることを示す。

## 1. 英語の不定冠詞： IA 方式 vs. IP 方式 vs. TM 方式[2]

周知のように，英語の不定冠詞は，直続要素初頭の音形の違いに応じた交替を示す。即ち，音声レベルで二形式で具現する。

---

（1） 本稿をまとめるにあたって，東北学院大学教養学部言語文化学科平成 21 年度原典講読の受講者である以下の学生諸君（あいうえお順）との討議が大いに参考になった。大里奈美，小野夏姫，菅野由佳，小屋薫里，鹿野栄子，田口知世，村上理奈のみなさん。記して感謝申し上げる。

（2） ここに示す分析は，高橋（2000：VI. 補説）で提示した英語の不定冠詞 a/an の分析に加筆したものである。なお，不定冠詞についての通時的考察は本稿の直接の関心事ではない。

（1）

| | 子音始まりの要素の直前 | vs. | 母音始まりの要素の直前 |
|---|---|---|---|
| 1 | a book | vs. | an egg |
| 2 | a big egg | vs. | an elegant book |
| 3 | a really big egg | vs. | an extremely thick book |
| 4 | a historic scene | vs. | an historic scene |

表の 1-3 から分かるように，この交替現象を規定している因子は直続要素の音環境 —— 子音始まりか母音始まりか —— であって，直続要素の統語・語彙範疇ではない[(3)]。左欄の a book，a big egg，a really big egg では book が名詞，big が形容詞，really が副詞であるが，全て子音始まりであるし，右欄の an egg，an elegant book，an extremely thick book では egg が名詞，elegant が形容詞，extremely が副詞であるが，全て母音始まりである。

次に，4 から分かるように，当該規定因子は（音環境という）言語内の因子（(intra) linguistic factor）[(3)] であって，綴字（spelling）というパラ言語的な因子（paralinguistic factor）ではない。左の historic と右の historic とが同一の綴字であるにも拘わらず a ～ an という交替を示すのは，historic～historic 双方の第一音節に強勢がなく，先頭の [h] 音が随意的に出没するためである。もちろん，左の historic が [h] 音ありの子音始まりであり，右の historic が [h] 音なしの母音始まりである。

では, 言語外の因子（extralinguistic factors）に関してはどうであろうか。これに関しては，大きく 2 つの因子に分けて考えるべきものと思われる[(4)]。第 1 は，基本的に言語外因子ではあっても言語という認知領域と直接に接しており，外界と言語とのインターフェースの役割を担いつつ，身体を有する生身の人間の音声活動の基盤と大枠を規定している因子である。これは，性質上，生理学 / 解剖学 / 物理学等々の隣接諸分野の知見を援用しつつ明らかにすべき種類の制約であって, いかなる人間もこの制約の下で音声活動を行なっている。例えば，生理学的 / 解剖学的 / 物理学的に生成不可能な音や聴取不可能な音は，当然のことながら人

（3）「音環境」という因子，という言い方は註（5）でもう少し厳密な形で規定し直す。

（4）N. Chomsky の「ミニマリスト・プログラム」では，近年の言語理論の方向性を特徴付けている思考法の一つである「最小限出力条件（bare output conditions）」が提唱されている。これは，「言語機能の認知（演算 / 計算）システムには，それに接する運用システムたる（1）調音・知覚システムと（2）概念・意図システムにより諸条件が課され，制約される」という趣旨のものである。（裏返せば，こうした「外側からの」動機づけを持たぬ構成物はよほど強力な動機づけがない限りは措定し得ないとも解釈可能な条件である。）本稿の文脈では，第一に，（1）の課す条件・制約のみを考察の対象とし（2）の課す条件・制約は考察しない。第二に，（1）のさらに「外側にある」動機づけ（本文の次のパラグラフで「第 2 の因子」と呼んだもの）に関しても，本文で以下述べる理由で考察の対象から外す。この第二の点に関する本稿の立場は Chomsky の立場と基本的に同じであると思われる。

間言語では決して使用されることがないし，さらに，（他の条件が同じであれば）生成・聴取が困難な音ほど回避される傾向を示すことになる。

第 2 の因子は，上記第 1 の言語外因子よりもさらに「外側」に位置づけられるべきものであって，これにはいわゆる「社会言語学」（もしくは，むしろ「言語社会学」と呼称すべき分野）が好んで取り上げる類の因子が含まれる。しかしながら，この領域に属するとされる因子たる「人種」やら「気候」やら「社会変動」等々は，なるほど確かに音変化の「誘因（trigger）」とはなり得るものの，こうした言語「外」の誘因を幾ら並べても，「可能な音変異 / 変化 対 不可能な音変異 / 変化」を規定している言語「内」の機構の本質は基本的に解明し得ない。「言語」学は正に後者（言語「内」機構）の解明を目指す。分かりやすく極端な例で言えば，仮にこのレベルでの言語外の因子（例えば政治的な因子）がとてつもなく強靭なものであったとしても，それが言語内および前パラグラフで述べた意味での言語外の因子に照らして不可能な言語形態を強いるものであるような場合には，言語のレベルでそうした言語形態が実現を見ることは当然のことながら決してない。従って，本稿では，この領域に属する因子は基本的に勘案の対象としない。（ただし，こうした点に関しては，Mielke（2008）の知見も参照のこと。）

さて，以上の因子分解を前提とした上で，英語の不定冠詞 a/an をもう少し厳密な形で分析してみよう。結論から述べるなら，この問題に対しては，従来想定されてきた典型的な二つのアプローチ，（I）IA 方式 =「異形態方式」と（II）IP 方式 =「規則方式」とがいずれも，看過すべからざる「致命的な誤謬（pernicious abberations）」と呼ぶべき性質の難点を抱え込んだものであることが分かる。そして，こうした方式の抱えるいずれの難点をも内抱しないアプローチとして，（III）筆者が 1988 年より（名称に紆余曲折はあるものの）一貫して想定している TM 方式 =「ひな形（照合）方式」を援用した分析例が妥当性をもつものであることが分かる。

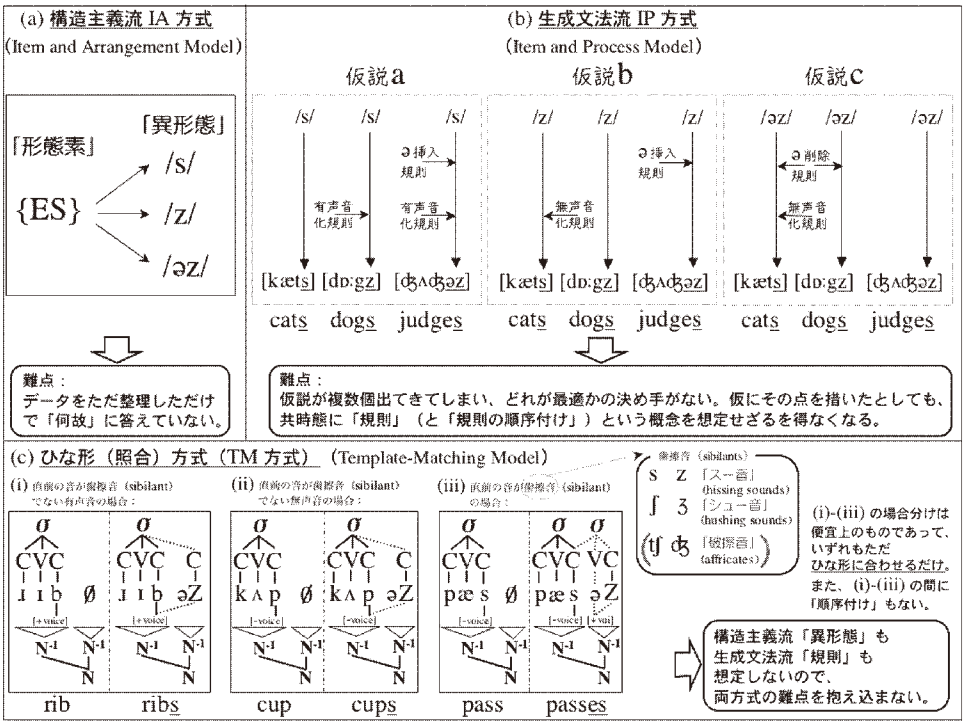
この点は，上記三方式それぞれの説明法の基本方針の違いを，もう少し関しやすいデータである「英語の規則複数形」の場合と比較参酌すると分かりやすい。（2）と（2’）の図式を参照されたい。（2）は英語の規則複数形に対する上記三方式の説明力の違いを，理論の得失とともに例示したものであり，同じ内容を別の観点から捉え直したものが（2’）である。不定冠詞 a/an の場合も基本的に全く同様である。（3）が英語の不定冠詞に対する上記三方式の説明力の違いを，理論の得失とともに例示したものであり，同じ内容を別の観点から捉え直したものが（3’）である[(5)]。

---

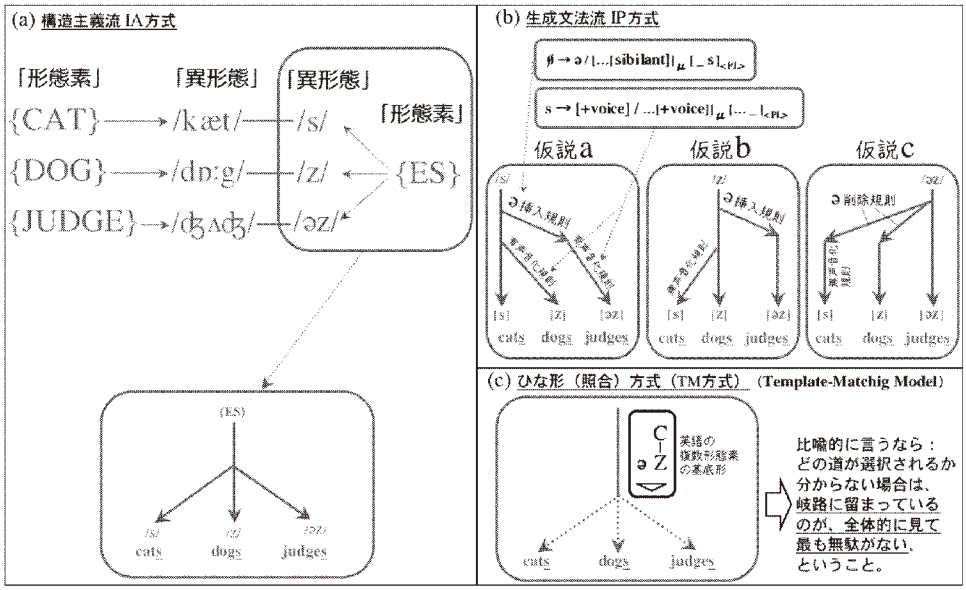
（5） 註（3）で予告したように，ここで「音環境」という因子，という言い方をもう少し厳密な形で規定し直そう。Č の記号は，両音節の配置型が可能な場合，そしてその場合に限り（両）音節に連

（96 頁へつづく）

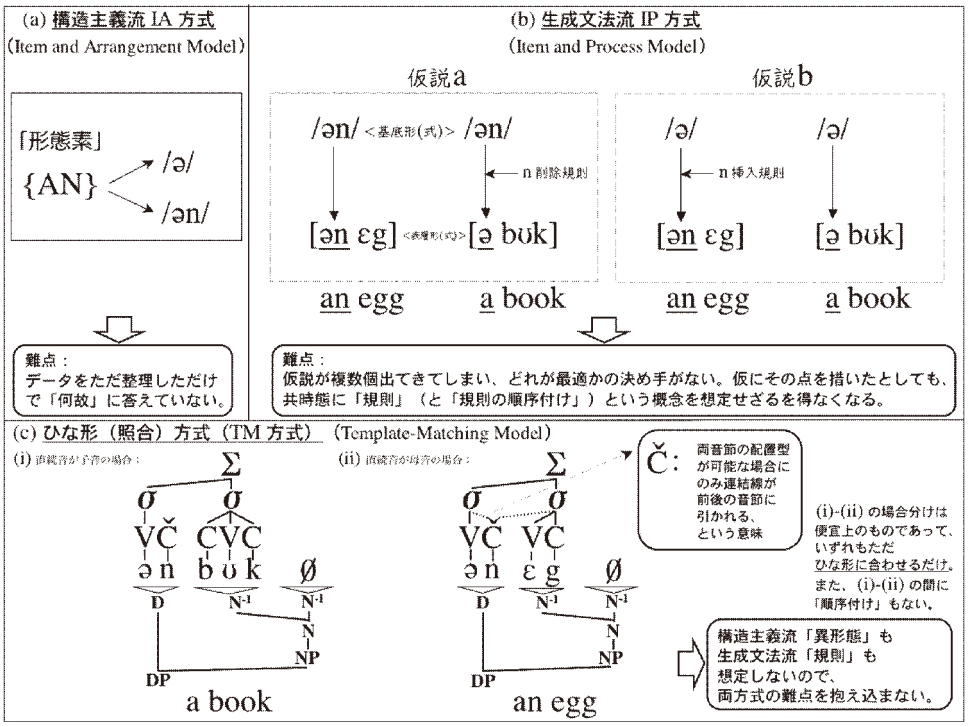
(2)


(a) 構造主義流 IA 方式
(Item and Arrangement Model)
「形態素」
「異形態」
{ES}
/s/
/z/
/əz/
難点：
データをただ整理しただけで「何故」に答えていない。
(b) 生成文法流 IP 方式
(Item and Process Model)
仮説a
仮説b
仮説c
/s/ /s/ /s/
/z/ /z/ /z/
/əz/ /əz/ /əz/
ə 挿入規則
有声音化規則
無声音化規則
ə 削除規則
[kæts] [dɒ:gz] [ʤʌʤəz]
cats dogs judges
難点：
仮説が複数個出てきてしまい、どれが最適かの決め手がない。仮にその点を措いたとしても、共時態に「規則」（と「規則の順序付け」）という概念を想定せざるを得なくなる。
(c) ひな形（照合）方式（TM 方式）（Template-Matching Model）
(i) 直前の音が摩擦音（sibilant）でない無声音の場合：
(ii) 直前の音が摩擦音（sibilant）でない無声音の場合：
(iii) 直前の音が摩擦音（sibilant）の場合：
σ
CVC
C
VC
ɹ ɪ b ø
ɹ ɪ b əZ
k ʌ p ø
k ʌ p əZ
pæ s ø
pæ s əZ
[+voice]
[-voice]
N-1
N
rib ribs cup cups pass passes
摩擦音（sibilants）
s z「スー音」(hissing sounds)
ʃ ʒ「シュー音」(hushing sounds)
ʧ ʤ「破擦音」(affricates)
(i)-(iii) の場合分けは便宜上のものであって、いずれもただひな形に合わせるだけ。また、(i)-(iii) の間に「順序付け」もない。
構造主義流「異形態」も生成文法流「規則」も想定しないので、両方式の難点を抱え込まない。

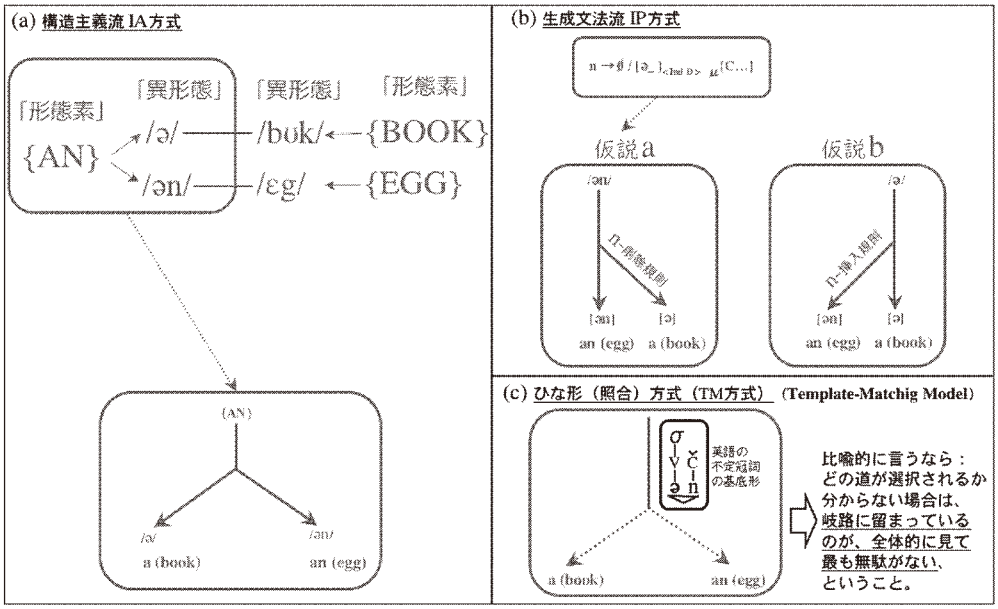
(2')


(a) 構造主義流 IA方式
「形態素」
「異形態」
{CAT} → /kæt/ — /s/
{DOG} → /dɒ:g/ — /z/
{JUDGE} → /ʤʌʤ/ — /əz/
「形態素」
{ES}
(ES)
/s/ /z/ /əz/
cats dogs judges
(b) 生成文法流 IP方式
ø → ə / [...[sibilant]]μ [ _ s]<PL>
s → [+voice] / ...[+voice]]μ [... _ ]<PL>
仮説a
仮説b
仮説c
ə 挿入規則
ə 削除規則
有声音化規則
無声音化規則
[s] [z] [əz]
cats dogs judges
(c) ひな形（照合）方式（TM方式）（Template-Matchig Model）
C
ə Z
英語の複数形態素の基底形
cats dogs judges
比喩的に言うなら：どの道が選択されるか分からない場合は、岐路に留まっているのが、全体的に見て最も無駄がない、ということ。

(3)


(a) 構造主義流 IA 方式
(Item and Arrangement Model)
「形態素」
{AN}
/ə/
/ən/
難点：
データをただ整理しただけで「何故」に答えていない。
(b) 生成文法流 IP 方式
(Item and Process Model)
仮説a
/ən/ <基底形(式)> /ən/
n 削除規則
[ən εg] <表層形(式)> [ə bʊk]
an egg
a book
仮説b
/ə/
/ə/
n 挿入規則
[ən εg]
[ə bʊk]
an egg
a book
難点：
仮説が複数個出てきてしまい、どれが最適かの決め手がない。仮にその点を措いたとしても、共時態に「規則」（と「規則の順序付け」）という概念を想定せざるを得なくなる。
(c) ひな形（照合）方式（TM 方式）（Template-Matching Model）
(i) 直後音が子音の場合：
(ii) 直後音が母音の場合：
Č：
両音節の配置型が可能な場合にのみ連結線が前後の音節に引かれる、という意味
(i)-(ii) の場合分けは便宜上のものであって、いずれもただひな形に合わせるだけ。また、(i)-(ii) の間に「順序付け」もない。
構造主義流「異形態」も生成文法流「規則」も想定しないので、両方式の難点を抱え込まない。
a book
an egg

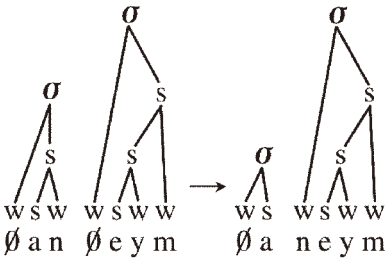
(3')


(a) 構造主義流 IA方式
「形態素」
「異形態」
「異形態」
「形態素」
{AN}
/ə/
/bʊk/
{BOOK}
/ən/
/εg/
{EGG}
{AN}
/ə/
/ən/
a (book)
an (egg)
(b) 生成文法流 IP方式
仮説a
仮説b
n 削除規則
n 挿入規則
an (egg)
a (book)
(c) ひな形（照合）方式（TM方式）（Template-Matchig Model）
英語の不定冠詞の基底形
a (book)
an (egg)
比喩的に言うなら：どの道が選択されるか分からない場合は、岐路に留まっているのが、全体的に見て最も無駄がない、ということ。

因みに，IA 方式と IP 方式との間で交わされた理論上の攻防の歴史的経緯に関しては Hockett（1954）等を，また両方式を止揚した TM 方式のもつ妥当性に関しては高橋（1995, 2005）等をそれぞれ参照されたい。

なお，Kiparsky（1979：428-9）は an aim が a name のように発音される場合を（4）のような派生で示しているが，この説明は，以下の点で妥当性を欠くものである。① 変更規則に依拠している。② an aim と a name の相違（速い発話速度の場合を除き，前者のみが両音節的な n）を把捉できない。③ 不定冠詞に異形態を想定している。④ 引用形式以外 an は単独では実現し得ない（註（5）参照）ということを理論的に予測できない。

（4）




以上，本節では，英語の不定冠詞の分析として，（I）異形態を援用する IA 方式，（II）変更規則を援用する IP 方式，（III）ひな形を援用する TM 方式，の三者を比較し，方式（III）が説明理論として妥当であることを見た。

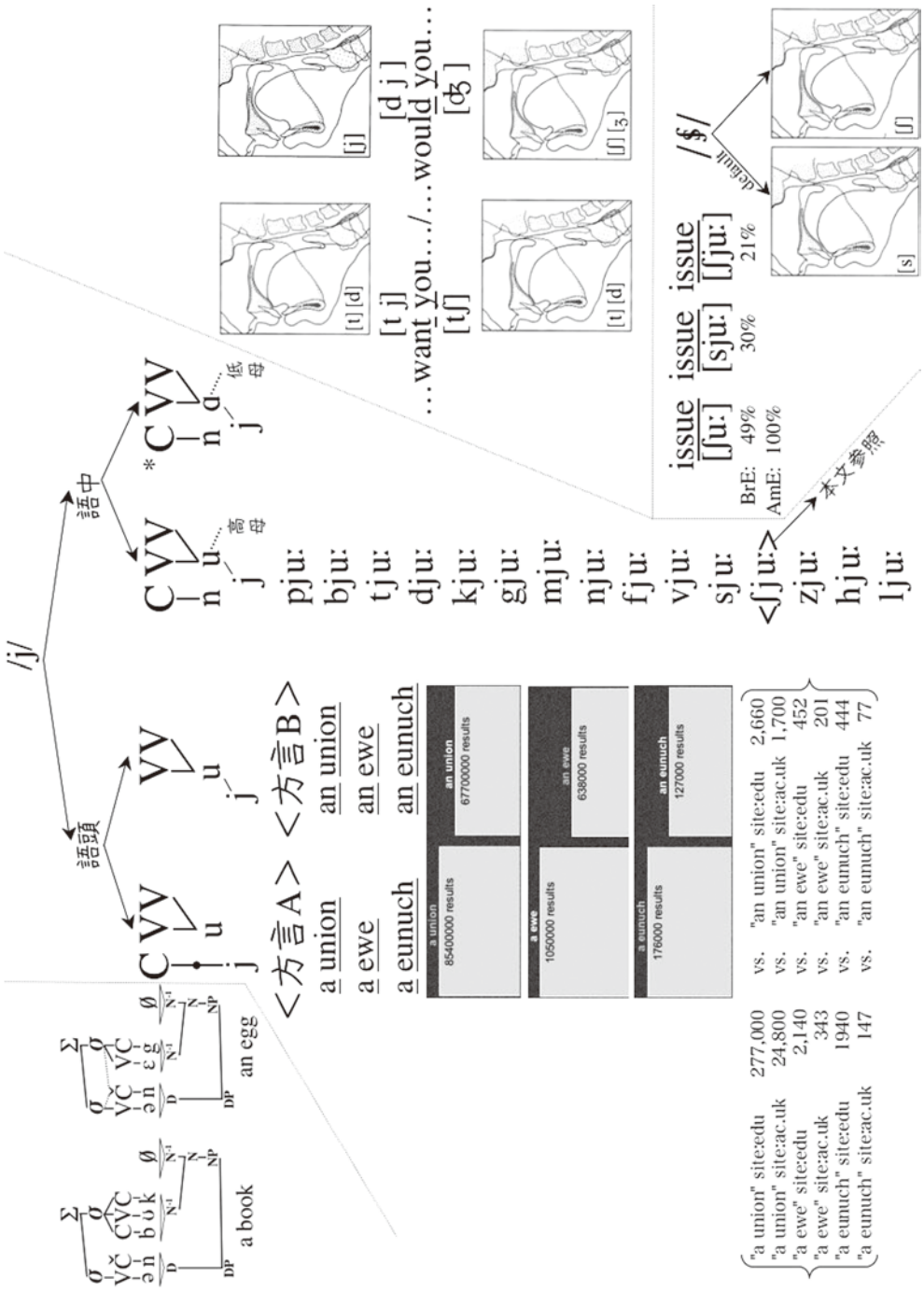
## 2.　英語における /j/ のふるまい

本節では，前節を承けて，連鎖「不定冠詞 +/j/ 始まりの単語」の示す音形の観察を通じ，本題である英語の /j/ のふるまいについて考察する。TM 方式の予測するところとは一見矛盾する音形が，実は，語頭と語中とで /j/ の配置型が標準英語で異なることによるものであること，こうした違いを示さぬ非標準英語の音形は /j/ の配置型の語頭・語中での同一性に

---

（93 頁より）
結されることを示す。その証拠に「引用形式」（citation form）という特殊なケース以外 an が単独で発話されることはない。これに対して，in Itary の in 等は，子音が後続したり前置詞残留等で文末に生起した場合でも――即ち，両音節的にならない場合でも――常に発音される。つまり，Č が関わるタイプの両音節性は，不定冠詞にのみ想定されるという語彙情報が必要となる点で，もはや純粋に音声的な性質のものではなく，形態音韻的な性質をも併せ持つ，という点で興味深い。言わば,「弾音のケース（純粋に音声的なケース）」と「連濁等のケース（形態音韻的なケース）」（cf. 高橋（2000：註（16））のちょうど中間的な性質を有すると見做される（cf. 高橋（2000：註（23））。

(5)


/j/
語頭
語中
a book
an egg
DP
NP
N'
N
D
σ
Σ
CVV
VV
C VV
* C VV
高母
低母
pju:
bju:
tju:
dju:
kju:
gju:
mju:
nju:
fju:
vju:
sju:
<ju:>
zju:
hju:
lju:
<方言A>
<方言B>
a union
a ewe
a eunuch
an union
an ewe
an eunuch
85400000 results
677000000 results
1050000 results
638000 results
176000 results
127000 results
"a union" site:edu 277,000 vs. "an union" site:edu 2,660
"a union" site:ac.uk 24,800 vs. "an union" site:ac.uk 1,700
"a ewe" site:edu 2,140 vs. "an ewe" site:edu 452
"a ewe" site:ac.uk 343 vs. "an ewe" site:ac.uk 201
"a eunuch" site:edu 1940 vs. "an eunuch" site:edu 444
"a eunuch" site:ac.uk 147 vs. "an eunuch" site:ac.uk 77
[t j]
[d j]
…want you…/…would you…
[tʃ]
[dʒ]
issue [ʃu:]
issue [sju:]
issue [ʃju:]
BrE: 49% 30% 21%
AmE: 100%
default
/ʃ/
本文参照

起因するものであること，を示す。なお，（5）に本節全体の結論を図式化しておくので，随時参照されたい。（図中の口腔断面図は Laver（1994）より一部改変の上拝借した。）

方言 A（標準方言）は連鎖「不定冠詞＋/j/ 始まりの単語」を a union，a ewe，a eunach 等と発音し，方言 B（非標準方言）は同連鎖を an union，an ewe，an eunach 等と発音する。つまり，前者は /j/ を「子音扱い」し後者は「母音扱い」していることになる。図ではそれぞれの形式の下に Google Fight での検索結果を掲示してある。非標準方言の形式が意外に多いことが分かる。ただし，インターネット検索というものは，便利な反面，そのままでは文脈を全く考慮せずに「何でも拾ってくる」といった難点もある。そこで，「英語圏・米語圏それぞれの教育機関」という縛りをかけた結果もその下に示しておく。ここでは非標準方言の形式がかなり減っていることが分かる[(6)]。

さて，ここで TM 方式にとっては次の点が（一見）問題となる。即ち，理論としては A，B 双方の方言形を共に出力可能でなければならぬのに，new [nju:] 等のデータに鑑みると，いま考察の対象としている「不定冠詞 ＋ /j/ 始まりの単語」の示す音形に関しては，理論が一律に，方言 B（非標準方言）に見る連鎖 an union，an ewe，an eunuch 等のみを予測してしまい，方言 A（標準方言）の連鎖 a union，a ewe，a eunuch 等が不当に排除されてしまうという点である。この問題はいったいどのような形で回避すればよいのであろうか。1 節で述べた論点からするならば，少なくとも枠組としては TM 方式自体は保持する（即ち，a/an の基底形として（3'c）は想定し続ける）ことが前提となる筈である。

結論から述べるなら，この問題は次のように考えればよい。（3），（3'），（5）の左上のデータ（*a book* vs. *an egg*）を見れば分かるように，a/an の基底形中の Č が両音節の要素として実現するための一要件は，直続要素が V（=「母音扱い」）ということである。要するに「直続要素が V（=「母音扱い」）ならば不定冠詞は an として実現し，直続要素が C（=「子音扱い」）ならば不定冠詞は a として実現する」ということである。ならば，A，B 双方の方言形を共に出力可能とするためには，以下のように想定すればよいという結論に至る。即ち，「方言

（6）　もとよりこれでも万全ではない。というのも，an union 等の形式が英語圏教育関連ページに記載されたからとて，これを以てページ作成者が当該形式を容認しているとは必ずしも見做せず，例えば「an union 等の形式はけしからん」との趣旨で，論の展開上行きがかりとして引用したにすぎないという可能性も排除されないからである。また，誤植ということもあり得る。例えば，（これはサイトではないが）Reetz and Jongman（2009：7）には次の 1 文があるが，「an usual word」は「an unusual word」の間違いであろう。Whenever a term is introduced, it is printed in **bold** in the text and its transcription is given in the index if it is an usual word. しかしながら，本稿ではこうした問題には立ち入らない。本稿の趣旨は，規範的判断を下すことではなく，両形式を認めた上で，それぞれの基になっている配置型を特定すること，両形式を導出可能な理論を構築することにあるからである。その点で，教育上の問題とは切り離して考えねばならない。

A の union 等の語頭の /j/ は C（=「子音扱い」）であり，方言 B の union 等の語頭の /j/ は V（=「母音扱い」）である」と理論上見做せばよい，という結論に達することになる。要は，語頭の /j/ の配置型に関しては，図（5）の「語頭」の如くに＜方言A＞，＜方言B＞に関してそれぞれ想定すればよい，ということである。＜方言A＞の /j/ は理論上一個の子音扱いであり，＜方言B＞の /j/ は理論上一個の子音扱いではなく，後続母音の一部を成す前要素である，と見做す訳である[(7)]。そして，「語中」の場合は，図の「語中」（の左欄）に示したように，new [nju:] 等は A，B 双方の方言形共に /j/ は理論上「後続母音の一部を成す前要素」と見做すことになる。つまり，/j/ の扱いが＜方言A＞では「語頭」と「語中」で異なり，＜方言B＞では「語頭」と「語中」で同じ，となる訳である。このことは，/j/ の扱いを純粋に音声的な観点から捉えるのではなく,「語頭」や「語中」といった概念にも言及するという意味で「形態音韻的配置型」の問題として捉える，ということを意味する[(8)]。

ここで三点ほど付言すべき点がある。第 1 点。図で「語中」左欄に示したような音連鎖は，項目によって多少不安定なものがある。例えば，安定した [pju:]，[bju:] 等に対して，[tju:]，[dju:]，[nju:]，[sju:]，[ʃju:] は [j] の有無に関して（＜方言A＞，＜方言B＞とは別種の，英米差等の）方言差を示す，という点である（cf. *tune*，*duke*，*new*，*suit*，*issue* 等）。いずれも /j/ の前が coronal sounds（舌頂音）であるという共通項がある。このうち，*issue* は興味深い方言差を示す（図 (5) の右下）ので，以下であらためて採り上げることにする。

第 2 点。図で「語中」右欄を参照されたい。「/j/ が理論上後続母音の一部を成す前要素と見做される」ケースでは，当該後続母音に全ての母音が許容される訳ではない。少なくとも /j/ に低段母音が後続するような連鎖は排除される（*[njɑ:]）。

第 3 点。周知のように，. . . want you. . . ，. . . would you. . . 等は随意的に「口蓋音化＋破擦音化」を示す（図 (5) の右）。この点も後程採り上げる。

このように，英語では，/j/ は形態音韻上様々な興味深いふるまいを示すことが分かる。いま「英語では」と言ったが，/j/ に限らなければ，実は類似のふるまいをする音は他の言語にも観察される。例えば，声門閉鎖音 [ʔ] は，「理論上後続母音の一部を成す前要素と見做される」ケースがドイツ語，中国語，英語で観察される（<http://raspberries.jp/glottal.html> に音声を載せてある）。

---

(7) ここでは分節素の内部構造論には立ち入らない。

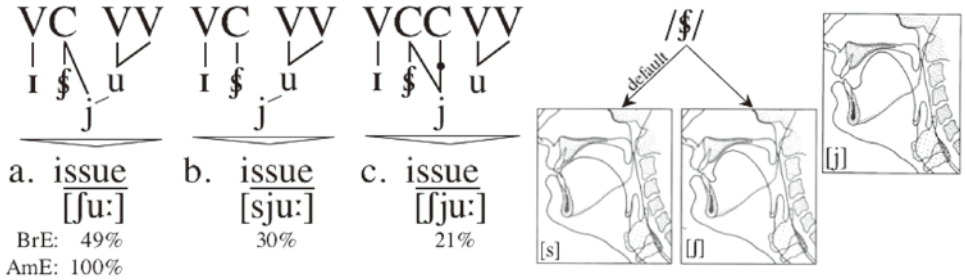
(8) ついでに指摘しておくと，例えば street 等では音節初頭に関して，子音が 3 個連鎖しているとされたり，当該連鎖が CCC と表記されたりすることがある。しかしながら，（英語の音節構造の正式な定式化は本稿の範囲を超えるものであるので，ここではこれ以上立ち入らないが，）こうした陳述は記述的には妥当に見えても説明的には妥当性を欠くものである。

（6）

a. Guten Abend [guːtˈn̩ˈʔɐːbə̯nt][9]
b. ting yin yue [tʰiɴ in ʔyɛ] ～ [tʰiɴ iɴ yɛ][9] 听音乐 / 聽音樂
c. an icy dessert [ən̩ aɪsiː dɔzɜːt] ～ [ənˈʔaɪsiː dɔzɜːt]

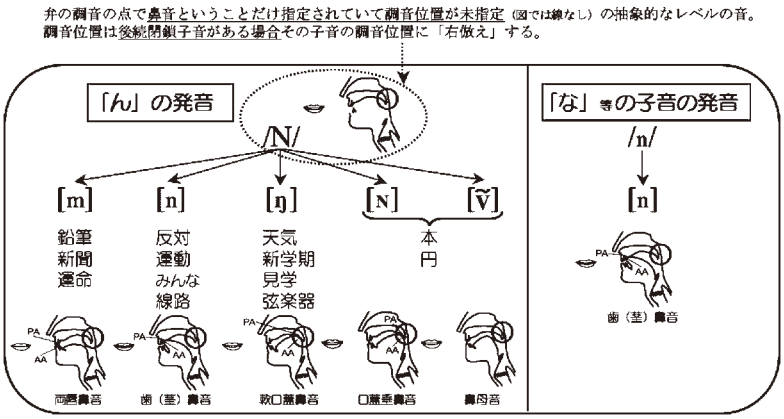
さて，上で付言した第 1 点と第 3 点に関わる /j/ の特異性の問題に移ろう。まず，第 1 点の *issue* の方言差（図（5）の右下）の問題から考える。結論を先に述べるなら，これまでの考察を基に，それぞれの方言形は以下の（7）のように分析可能である。図中の記号 / ʃ / は，本稿で臨時に考案した記号であり，内容としては，「基底でまだ [s] とも [ʃ] とも特定されていない抽象的な段階の音」を便宜上表す記号とする[10]。

（7）




（9）　Guten Abend は，英語話者がとかく […nɐ̯…] とアンシェーヌマンを適用して発音しがちであるが，ドイツ語の標準発音は […nˈ ʔɐ…] である。また，拼音では，「听 / 聽」は ting と転写されるが，ng の部分は例えば英語の king 等の [ŋ]（軟口蓋鼻音）とは異なり，[n]（口蓋垂鼻音）である。また yin yue「音乐 / 音樂」の部分も英語話者がとかく […nyɛ̯…] とアンシェーヌマンを適用して発音してしまいがちであるが，これも [in ʔyɛ]（もしくは速い発話 and/or やや sloppy な発音等では [in yɛ]）である。

（10）　これは，ちょうど，日本語話者が「ん」で表記される音を，（実現形レベルでは様々な音として生起するものの）抽象的なレベルでは基本的に「同一の音」であると無意識裡に把捉しているという直感（だからこそ「ん」という同一の文字で表記するのであろう）のケースと類似している。この抽象的なレベルの音を便宜上 /N/ で表記すれば，以下のような図式を想定できる。



a では /j/ の口蓋音性（palatality）の影響で［ʃ］で実現し[11]，b では /j/ の影響を受けずにデフォルトの [s] で実現し，c では /j/ の影響で [ʃ] と実現するのに加えて子音扱いの /j/ も [j] と実現している。c は語中であるにもかかわらず /j/ が子音扱い（C と連結）されており，その意味で有標の音形と目される。それを反映してか米音で 0%, 英音でも 21% の使用に留まっている[12]（有標性と頻度が必ずしも直接連動する訳ではないが）。なお，ここでは（7a–c）間の「関連性」を /ʃ/ を軸に捉えた訳だが，立場によっては，こういった「関連性」自体を理論で把捉する必要性を疑問視する向きもあり得よう。それはちょうど，日本語で「ちょうふく」と「じゅうふく」（重複）との共時的関連性を捉える必要性がないのと同様だ，という訳である。しかしながら，ここでは（7a–c）の音形が「ちょうふく」〜「じゅうふく」の場合ほど乖離してはいないということに加えて，/ʃ/ という原音素的要素の導入によって共時的関連性を理論的に云々し得るようになっていると見做し，一応（7）のままにしておく。（因みに，傍証として，（7a–c）のうち複数の形式をレジスターごとに使い分ける話者もいる。）

次に，上で付言した第 3 点に関わる /j/ の特異性の問題に移ろう。図（5）の右に示したように，. . . want you. . . ，. . . would you. . . 等は随意的に「口蓋音化＋破擦音化」が生じる。この「口蓋音化＋破擦音化」が you の語頭の /j/ に起因するものであることは明らかであるが，面白いことに，同じく /j/ で始まっていながら「口蓋音化＋破擦音化」を（少なくとも「破擦音化」を）引き起こさない形式もある。

（8） a. I want you. [. . . t j. . . ]〜[. . . tʃ. . . ]

a’. I want Yosaku. [. . . t j. . . ]〜*[. . . tʃ. . . ]

b. Would you be able to hear at such a distance ? [. . . d j. . . ]〜[. . . ʤ . . . ]

b’. Would Yosaku be able to hear at such a distance ?

[. . . d j. . . ]〜*[. . . ʤ . . . ]

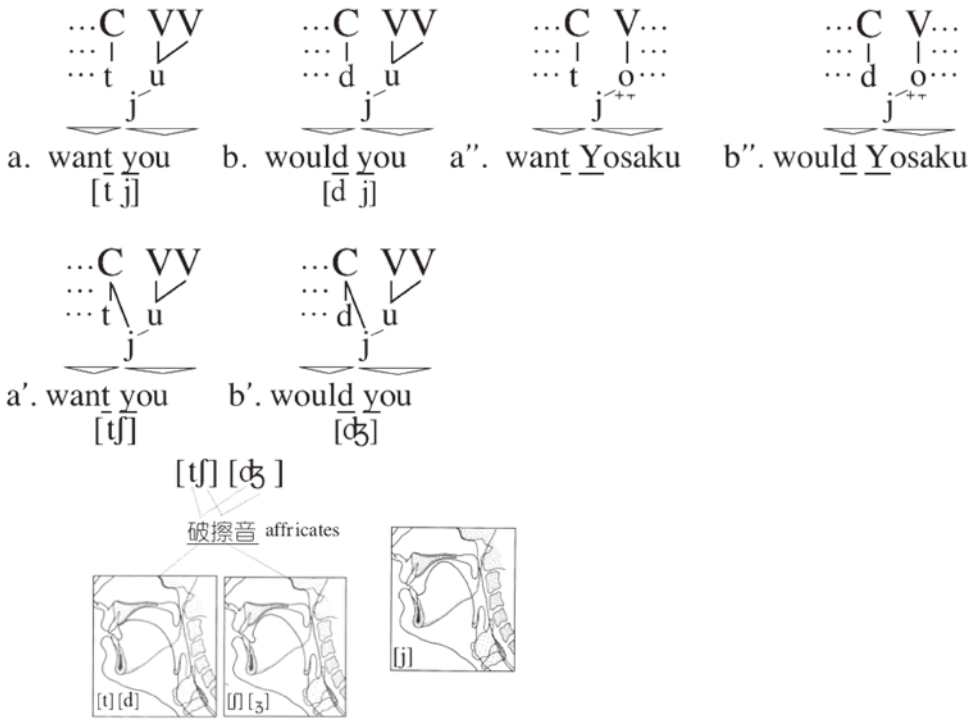
これはどのように考えればよいであろうか。おそらくは，「（口蓋音化＋）破擦音化」を阻む因子は，当該語彙項目が「固有名詞」である点に求められると思われる。同じく人物を指す語彙ではあっても，you が具体的に誰かを特定する機能をもったものではなく指示的汎用性をもった形式であるのに対して，固有名詞は，性質上（偶然の一致を除けば）具体的にある人物に特定的に割り当てられたものである。そうした言わば「特権的な」語彙項目に対して

（11） /j/ は ambisyllabic であるため「短い」と想定する（cf. 高橋（2000））。

（12） Wells（1990 : 379）。

「（口蓋音化＋）破擦音化」を適用してしまうことが憚られるといった心理が無意識裡に働いているものと推定される。以上の考察から，you と Yosaku とは /j/ に関して以下に示す配置型の違いがあると想定することが可能となる[13]。

（9）




## 3. 結　　語

本稿では，TM 方式を理論的枠組として想定し（1 節），以下の点を論じた。即ち，標準英語の /j/ は生起位置に応じてふるまいを異にするが，その違いが形態音韻的配置型の違いによるものであることを論じ，併せて，こうした違いを示さぬ非標準方言もまたここで想定する枠組（TM 方式）で統一的に説明可能であることを論じた。加えて，論考の過程で /j/ の示す特異性を三点ほど指摘し，それに対する理論的説明も試みた（2 節）。なお，2 節で「理

（13）　このような事象は，1 節で本稿が否定した，言語形式に影響を及ぼす「言語社会学的な因子」の一例と見做せるのではないか，との反論もあり得る。しかしながら，当該事象は言語社会学的な因子というよりは，語用論的な因子と考えた方が当を得ている。加えて，本文で言う「固有名詞」というカテゴリーは既に言語カテゴリーとして文法化された概念である。

論的には〈方言 A〉〈方言 B〉共に説明されねばならぬ」としたが，この点はいかなる枠組にも等しく課された課題なのであって，TM 方式を想定したがために抱え込んだ課題であるなどと誤解してはならない。

## 参 照 文 献


Chomsky, N.（1995） *The Minimalist Program*, MIT Press.（外池滋生･大石正幸（訳）（1998）『ミニマリスト・プログラム』翔泳社 .）

Hockett, C. F.（1954） "Two Models of Grammatical Description', *Word* 10, 210-31 ; Joos, M.（ed.），（1957） *Readings in Linguistics*, American Council of Learned Societies, 386-99.

Kiparsky, Paul（1982） "From cyclic phonology to lexical phonology', In H. van der Hulst and N. Smith（eds.）, *The Structure of Phonological Representations*, vol. 1, Dordrecht : Foris, 131-75.

Laver, J.（1994） *Principles of Phonetics*, Cambridge University Press.

Mielke, Jeff（2008） *The Emergence of Distinctive Features*（*Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory*）, Oxford University Press.

Reetz, H. and A. Yongman（2009） *Phonetics: Transcription, Production, Accoustics, and Perception*（*Blackwell Textbooks in Linguistics*）, Wiley-Blackwell.

高橋直彦（1995）「現代日本語の動詞の活用」，『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』第 110 号，東北学院大学，107-78.

――――（2000）「弾音の生起環境」，『東北学院大学英語英文学研究所紀要』第 29 号，東北学院大学，67-114.

――――（2005）「英語の否定接頭辞 in-，un- の形態音韻論」，『東北学院大学教養学部論集』第 142 号，東北学院大学，53-75.

Wells, J. C.（1990） *Longman Pronunciation Dictionary*, Longman.

# Tilesius und Japan
# Teil 1 : Tagebuchauszüge über Ankunft und Aufenthalt in Nagasaki 1804/5

Frieder Sondermann

**Vorbemerkungen**

Die erste russische Weltumseglung in den Jahren 1803 bis 1806 ist in ihrem Ablauf und den Resultaten wohlbekannt. Dazu haben vor allem die Publikationen der Reiseteilnehmer beigetragen. Abgesehen von den verschiedenen bereits während der Reise nach Europa übermittelten Etappenberichten der Beteiligten, die in vielen verschiedenen europäischen Zeitschriften und Journalen bekannt gemacht wurden, erschienen damals die folgenden Bücher über die Expedition :

— Adam Johann von Krusenstern publizierte sein Werk über die Reise der *Nadeshda* zugleich auf Russisch und Deutsch zwischen 1810 und 1813 ; dann gab es eine von ihm abgelehnte mangelhafte englische Übersetzung, und nach mehreren vergeblichen Anläufen 1821 eine französische Ausgabe.

— Urey Lisianski [Juri Lisianskoy] berichtete über die Reise der *Newa*, die 1804 ab Hawaii nach Russisch-Amerika gesegelt war und erst von Südchina an mit Krusensterns *Nadeshda* die Rückreise angetreten hatte. Die russische Fassung seines Buches mußte er zwei Mal überarbeiten, und die von ihm selbst angefertigte englische Ausgabe kam 1814 auf den Markt.

— Georg Heinrich von Langsdorff veröffentlichte 1812 seine deutsch geschriebenen[1] naturhistorischen *Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803 bis 1807* mit Informationen über seinen Abstecher nach Kalifornien und die Rückkehr auf dem Landweg über Sibirien, die sehr bald auch in einer englischen Version vorlagen. Fast zeitgleich mit Krusensterns Werk hatte er bereits 1810 bei Cotta in Tübingen zusammen mit dem Biologen Friedrich Ernst Ludwig Fischer die wichtigsten während der Weltumseglung entdeckten Pflanzen auf Französisch beschrieben.

— Selbst der im Gefolge des Gesandten mitreisende Kommissionär der Russisch-Amerikanischen Kompagnie, Fedor Shemelin, veröffentlichte 1816 und 1818 ein zweibändiges Werk über diese Reise.

Diesen umfassenden Berichten gemeinsam war, dass sie unter den Augen der russischen Zensur entstanden und daher kaum Einblick in das zum Teil dramatische Geschehen hinter den

[1] Vgl. dazu den Brief von Christian Müller an Palis, 4. IV. 1813 : "Als ich einmal K[upferberg]. ein bischen bitter über die gänzliche Untauglichkeit seiner unwissenden u. doch eingebildeten Korrektoren schrieb, führte ich Sie, lieber Palis, als Muster eines trefflichen Korrektors an, der aus dem undeutlich, unrichtig, schwülstig u. höckerig geschriebenen Langsdorf ein sehr fließendes, korrektes u. wohlstilistisches Werk gemacht hat." Hier zitiert nach der Textwiedergabe im ZVAB-Angebot des Antiquariats Koppel.

Kulissen gewähren konnten. Das geschah erst jüngst durch die Veröffentlichungen von privaten, in dieser Form für eine Publikation eigentlich nicht gedachten Aufzeichnungen, etwa denen des bereits auf der Rückreise verstorbenen russischen Gesandten Nicolai Petrovich Rezanov (russ. : Krasnojarsk 1995 ; jap. : Tokyo 2000), des Priesters Hieromonk Gideon (Kingston, Ont. 1989), oder des vierten Offiziers Hermann Ludwig von Loewenstern (engl. : Fairbanks 2003 ; russ. : St. Petersburg 2003 ; dt. : Lewiston 2005). Sogar mit der Publikation des kompakten russischen Tagebuchs vom stellvertretenden Kapitän Makary Ivanovich Ratmanov ist bald zu rechnen. In all diesen privaten Aufzeichnungen spiegelt sich die subjektive Sicht der Reise und der teilnehmenden Gefährten wieder. Somit ist es möglich, ein komplexes Psychogramm der unausbleiblichen Spannungen und Konflikte zu erstellen.

Nur auf den ersten Blick verwunderlich ist, dass der als Illustrator von Krusenstern und Langsdorff hochgelobte eigentliche erste Naturalist dieser Expedition, Wilhelm Gottlieb Tilesius, nicht mit einem “opus magnum” in Erscheinung getreten ist. Darüber soll hier kurz berichtet werden.

## A. Zu Tilesius

Tilesius wurde 1769 in eine bürgerliche Familie in Mühlhausen/Thüringen geboren, wo er auch das Gymnasium besuchte.[2] Es schloss sich ein langes Studium der Medizin in Leipzig an, das von 1795 bis 1796 durch eine Studienreise in Begleitung und auf Kosten des Grafen Johannes Centurius von Hoffmannsegg nach Portugal unterbrochen wurde. Danach erfolgte 1797 die “Habilitations-Dissertation”. Die medizinische Promotion ermöglichte ab 1801 ihm eine Dozententätigkeit neben der ärztlichen Praxis. Die verstärkte Publikations- und Herausgeberarbeit (u.a. für den in Rußland aktiven Naturkundler Peter Simon Pallas) führte bereits 1801 zu einem ersten, abgelehnten Ruf nach Dorpat in Rußland. Ein zweites Angebot für ein Lehramt in Moskau nahm Tilesius zwar an, trat es dann aber wegen der Aufforderung zur Teilnahme an der Weltumseglung durch Krusenstern nicht an. Von 1803 bis 1806 nahm er nun an der ersten russischen Expedition um die Welt teil und verblieb danach

[2] Vgl. den Artikel von W. Heß über Tilesius im 38. Band der *Allgemeinen Deutschen Biographie* (München 1894, S. 298f.). Autobiographische Notizen machte Hans Hasert in seiner Hausarbeit *Das Leben des Wilhelm Gottlieb Tilesius von Tilenau* ... (masch. Potsdam 1965) bekannt, worauf sich die hier folgenden Ausführungen auch stützen. Haserts Arbeit enthält keine Seitenzahlen, die hs. im Exemplar des Mühlhäuser Stadtarchivs, Sign. : 86/102 ergänzt wurden.

bis 1814 in St. Petersburg als Mitarbeiter der russischen Akademie der Wissenschaften. In der russischen Metropole heiratete er im Mai 1807, hier wurde 1808 der Sohn Adolph geboren, der seit dem Frühjahr 1809, als die Eltern geschieden wurden, in der Obhut des Vaters verblieb.[3]

Im Sommer 1814 kehrte Tilesius nach Deutschland zurück. Er schied in Unfrieden von Russland, weil er meinte, dass man ihm gegebene Versprechen nicht gehalten habe. Nun verbrachte er die folgenden Jahre als Privatgelehrter zumeist in seiner Heimatstadt Mühlhausen, unterbrochen durch Aufenthalte in Göttingen, Leipzig und Dresden. Zwar erwirkten ihm seine Publikationen die Mitgliedschaft in verschiedenen naturwissenschaftlichen Gesellschaften, und er war sowohl 1815 in Göttingen wie dann auch wieder von 1827 bis 1830 und 1832 als Privatdozent in Leipzig tätig[4], aber ansonsten versuchte er sich erneut als Arzt niederzulassen, um die kärgliche russische Rente aufzubessern, weil er nie einen Ruf an eine deutsche Universität erhielt.

Er war also schon zu Lebzeiten fast in Vergessenheit geraten. Symptomatisch dafür ist ein wohl an Philipp Franz von Siebold geschriebener Brief[5] :

> Leipzig 20 Maerz 1850.
> Hochgeehrter Freund !
> Ich habe so eben Ihr dringendes Schreiben vom 16 dieses Monaths erhalten und meinen Sohn gebeten es sogleich zu beantworten, da ich selbst ein invalider abgelebter Greis von 80 Jahren bin und meine eigene Schrift nicht mehr sehe sondern blos nach dem Gefühle und der Gewohnheit schreibe, Sie scheinen als ein junger Mann mein Alter vergessen zu haben ich bin der letzte noch lebende von der Krusenst. Erdumseeglung, alles was ich waehrend derselben gesammelt habe, ist in Petersburg und ich habe nichts als Abbildungen und Beschreibungen, die Sie bey meinem Sohne sehen und wenn sie aufgefunden sind, auch von ihm erhalten koennen, da er sie nicht selbst publicieren wird, die Japanischen Krabben und Krebse sind alle treu nach dem Leben gemalt und seit meiner Invaliditaet habe weder ich noch ein anderer etwas davon publicirt, meine Tagebücher[6] aber sind noch vorhanden, in welchen die kurzen Beschreibungen stehen aber mein Gedaechtnis ist dahin, ich habe aber in den Jahren meiner Jugend auch waehrend der Erdumseeglung Jahr vor Jahr alles aufgeschrieben welches mein Sohn, wenn Sie ihn besuchen, wieder hervorsuchen kann
> Meine Geldverluste habe ich vergessen und die Altersschwaechen und Unpaeslichkeiten ertrage ich mit Gedult ; es kann ja nicht lange mehr dauren und Greise meines Alters koennen mich noch beneiden
> Ihre warme Theilnahme und Ihr gütiges Anerbieten hat mich aber innigst gerührt und schon aus Dank-

[3] Zum Verlauf der gescheiterten Ehe gibt es aufschlussreiches Material in den Briefen von Tilesius an Krug und Horner.

[4] Diese Informationen stellte zuerst Prof. Dr. Günther Sterba zusammen, dem ich viele wertvolle Hinweise verdanke; vgl. jetzt auch http://histvv.uni-leipzig.de/dozenten/tilesius_von_tilenau_wg.html.

[5] Ich danke Herrn Constantin von Brandenstein-Zeppelin (Burg Brandenstein, Schlüchtern), in dessen Besitz sich Siebolds Autographensammlung befindet, für die freundliche Überlassung einer Kopie dieses Briefes..

[6] Erstaunlich ist der Plural. Siehe dazu weiter unten !

barkeit wünschte ich dass Sie noch manches von meinen Japonicis publiciren moechten besonders die Medusen welche das beste sind – die Seesterne und Seeigel, in meinem Pracht Exemplar vom Link de Stellis marinis habe ich mehre neue Japon species asterinarum [?] hinzugefügt, auch Kleins Echino dermata haben dergleichen bekommen und die Crustacea microscopica Japon.　welche das Leuchten des Meeres bewikken [!] sind im Krusenst Atlas abgebildet[7], aber meine Kraft ist erschoepft.
Leben Sie wohl　　Dr Tilesius senior.

Tilesius hat viel publiziert, zumeist Fachartikel, jedoch keine umfassende naturgeschichtliche Monographie.　Im Mühlhäuser Stadtarchiv gibt es die von ihm selbst zu Sammelbänden gebundenen Sonderdrucke seiner eigenen zahlreichen Aufsätze.　Auch war er vorübergehend als Rezensent für die "Göttingischen gelehrten Anzeigen" tätig[8] und hat Lexikonartikel zu naturkundlichen Themen verfasst.

Ihm wurde jedoch kein die Zeiten überdauerndes Andenken zuteil, was auch damit zusammenhängt, dass über ihn keine akademische Würdigung in Form einer Biographie erschien.　Zwar war er mit Eduard-Friedrich Poeppig, dem Leiter des Leipziger zoologischen Instituts, bekannt[9], der ihm solch ein ehrendes Werk als Denkmal setzen wollte.　Doch es kam anders.　Otto Hübner schreibt dazu[10] :

Des Hofraths gedruckte Werke und seinen handschriftlichen Nachlaß händigte der Sohn dem Professor Ed. Poeppig in Leipzig aus, der des Verstorbenen Biographie schreiben wollte.　Poeppig starb 1870, ohne eine Biographie verfaßt zu haben, und das gesamte Material kam mit der Bibliothek des Professors in fremde Hände.

Wie es scheint, kehrten also nicht alle Unterlagen wieder nach Mühlhausen zurück :　die Briefe an Tilesius etwa fehlen mehrenteils, und die großformatigen Illustrationen landeten – auf welchen Irrwegen auch immer – in der Kustodie der Universität Leipzig.

---

[7] Bei den im Brief erwähnten Werken handelt es sich um Johannis Henrici Linckii *De Stellis Marinis : Liber Singularis/Tabularum Aenearum Figuras Exemplis Nativis Apprime Similes Et Autoris Observationes Disposit Et Illustravit Christianus Gabriel Fischer. . . Accedunt Edw. Ludii, De Reaumur, Et Dav. Kade Huius Argumenti Opuscula*.　Lipsiae :　Schusterus 1733.
und
– Klein, Jakob Theodor :　*Naturalis Dispositio Echinodermatum*. Gedanum 1734. Quart. 78 S. 34 T., respektive die stark erweitere Neuausgabe von Nath. Gdfri. Leske (Leipzig　1778) mit 54 Tafeln.

[8] Vgl. bei Oscar Fambach *Die Mitarbeiter der Göttingischen gelehrten Anzeigen 1769–1836* (Tübingen 1976) S. 510 die registrierten Rezensionen : *1818* : 694. 697. 713. *1819* : 837. 849. 1785. 1841. *1820* : 1249. 2067. *1821* : 57.

[9] Das ergibt sich aus einem Brief von Tilesius an Krusenstern "Leipzig d 1 Febr 1834" [! =1843], aus :　Estnisches Historisches Archiv, Tartu (EAA) Krusenstern Font 1414, inv. 1, record 38, p. 58f., in dem der Besuch von Krusensterns Sohn Paul mit Tilesius' Sohn Adolph bei Poeppig erwähnt wird.　Dieser Bestand wird im folgenden zitiert als :　EAA 1414.

[10] Vgl. in :　*Mühlhäuser Geschichtsblätter* 1905/06, S. 77 – zu korrigieren ist das Sterbedatum Poeppigs :　der 1798 geborene Erforscher von Latein- und Südamerika starb bereits 1868.

## B.1. Publikationspläne zur Weltumseglung

Nur drei Punkte sollen hier im Zusammenhang mit Tilesius' Plan einer illustrierten Publikation zur Weltumseglung hervorgehoben werden. Vorausgeschickt sei, dass es sich von selbst verstand, dem Kapitän das Recht auf die erste öffentliche Bekanntmachung des Verlaufs der Expedition und ihrer wichtigsten Ergebnisse einzuräumen.

a) Tilesius dachte bereits frühzeitig in St. Petersburg an eine (voreilige) Publikation, wie sich aus einer brieflichen Mitteilung von Horner an Krusenstern vom 6. Mai 1807 ergibt[11] :

> Man sagt mir, daß Tilesius bald Hochzeit machen werde : mir hat er noch nichts gesagt. Sein Project mit R. ist bey der ersten UnterRedung manquirt, weil Til zu wenig verbarg, daß Ihm um Geld zu thun wäre.

Das Projekt scheint eine illustrierte Ausgabe der Weltumseglung gewesen zu sein. Der als finanzstarker Förderer der Wissenschaften bekannte Graf Nikolai Petrowitsch Rumiantzev oder der reiche Besitzer des Gorenki-Parks bei Moskau Graf Alexey Kirilovich Razumovsky könnte der angesprochene Sponsor gewesen sein. Verständlich wird das Vorpreschen von Tilesius, wenn man berücksichtigt, dass er zu diesem Zeitpunkt Heiratspläne schmiedete und dringend Geld brauchte.

b) Tilesius stand 1811 in Verhandlungen mit dem Pariser Verleger Leclerc, der eine französische Edition offiziell ankündigte, die aber nie zustande kam[12] :

> Monsieur,
>
> Dans ma lettre du 23 mars dernier, que vous avez insérée, dans le *Bulletin* du no. 49 des *Annales des Voyages*, je vous mandois que M. *Tilésius*, naturaliste célèbre et habile dessinateur, étoit connu par sa superbe *Flora Lusitanica*, publiée à Berlin par M. le comte de *Hofmanseg*. Je crois devoir vous prévenir que j'ai commis une erreur involontaire en avançant ce fait. [...]
>
> Les *Tableaux topographiques de la Chine, Du Japon et du Brésil*, auquel M. Tilésius travaille, feront partie de son *Voyage pittoresque autour du monde*.
>
> J'ai l'honneur d'être, etc., etc. LECLERC.

c) Um 1811 trug Tilesius an der Last verschiedener Verpflichtungen: ein nicht unwichtiger Teil davon waren die Illustrationen zu Krusensterns Werk – und deren Kommentierung. Tilesius schaffte es zwar, seine Abhandlung *Naturhistorische Früchte der ... Erdumseeglung*

---

[11] Aus: EAA 1414-3-22.

[12] *Annales Des Voyages, De La Géographie Et De L'Histoire*, [hrsg.v. Malte-Brun]. Diese Zeitungsnotizen waren sicher in erster Linie als Hinweis Leclercs an andere Verleger gedacht, um sich das Vorrecht der Publikation zu sichern. Das Zitat stammt aus Band 15 (1811), S. 399, die hier korrigierte Fehlinformation Leclercs war im Band 14 (1811) S. 129 erschienen.

über die Seequallen und den Orang-Utan im Band 3 (1813) quasi als Zwischenbericht unterzubringen. Doch seine ausführlichen Erläuterungen zu den Illustrationen in Form eines vierten Teiles zu vervollständigen, das war dem detailversessenen Naturforscher unmöglich. Zwar sollen sie 1819 vollendet worden sein, aber weder bis 1826 noch später hat sie der jeweils dafür vorgeschlagene Verleger Kummer oder Hartknoch in Leipzig ediert. Der Leidensweg dieses Projektes lässt sich aus verschiedenen Briefen rekonstruieren. Hier sollen nur ein paar Stationen genannt werden.

Schon vor der Ausgabe seines eigenen Werks zur Weltumseglung schrieb Krusenstern aus St. Petersburg am 10/22. Dezember 1810 nach Zürich an den befreundeten Astronomen Horner[13] :

> Ich bin in großer Verlegenheit mit ihm er hat noch garnichts von seinen Arbeiten geliefert, und wird sich für entsetzlich beleidigt halten, wenn ich den dritten Band ohne ihn schließe ; er kann garnichts beendigen.

Als Krusensterns Werk dann erschienen war, und die Erklärungen von Tilesius zu den Illustrationen immer noch nicht abgeschlossen waren, klagte Krusenstern wiederum in einem Brief an den Astronomen (Ass 1818. III. 26.)[14] :

> Ich forderte vor mehr als einem Jahre Tilesius auf, s. Erklärungen der Kftafeln zu beendigen, um sie mit m. hydrographischen Arbeiten vereint herauszugeben, allein er hat mir nicht einmal auf m. Brief geantwortet. Ich habe gelesen, was Oken über ihn in s. Isis gesagt hat. Sehr ungeschliffen ist es von diesem Natur Philosophen, einen Mann wie Tilesius öffentlich zu beleidigen, aber ganz schuldlos ist T. nicht.

Nachdem auch in den folgenden Jahren immer noch keine Kommentierung aus Tilesius' Feder bei Krusenstern vorlag, schrieb ihm der Kapitän eher resigniert[15] :

> Der Wunsch, Ihre Tafel-Erklärungen gedruckt zu sehen, ist sehr gerecht, aber ich fürchte, daß es auch hier schwerlich seyn wird, daß es gedruckt werde. Haben Sie denn alle Tafeln schon vollendet ? Ich bedaure, daß mein Vermögen es mir nicht erlaubt, den Druck auf meine Kosten zu veranstalten und daß man auch eben keine Unterstützung von Seiten der Regierung erwarten darf weil die Finanzen überall sehr zerrüttet sind.

Leider haben sich die Briefe von Tilesius an Krusenstern nicht erhalten, so dass man nur aus den glücklicherweise von Tilesius kopierten Antwortschreiben des Kapitäns, die der gekränkte Naturalist zudem in roter Tinte mit seinen eigenen rechtfertigenden Kommentaren versah, auf den Fortgang dieser Angelegenheit schließen kann[16] :

---

[13] Aus: Zentralbibliothek Zürich, Horner-Nachlass, Ms M 5.136, im Folgenden zitiert als ZBZ M 5.

[14] ZBZ Ms.5. Zu Okens Artikel in der *Isis* vgl. Anm. 20.

[15] Krusenstern an Tilesius (Petersburg, d. 16. Octobr. 1823), aus: Stadtarchiv Mühlhausen/Th., Tilesius-Bibliothek Nr. 82/515, hier zitiert nach Hasert (s. Anm. 2) 106f.

[16] Krusenstern an Tilesius (vom 10. Juli 1824), zitiert nach : Stadtarchiv Mühlhausen/Th., Tilesius-Bibliothek Nr. 82/515, vgl. Hasert (s. Anm. 2) 108 - 111. Tilesius hatte den Krusenstern-Brief abgeschrieben, weil er dessen Handschrift nur schwer lesen konnte. Der Kommentar von Tilesius steht hier in Klammern (. . .).

> Die TafelErklärungen habe ich nicht bekommen, auch ist es nicht warscheinlich, dass Hartmann sie drucken wird. Man ist überall so arm geworden, daß auch nur wenige das Werk anschaffen würden, so reichhaltig es auch ist. Schade, daß Ihre Arbeit nicht fertig war, als ich meine Reise drucken ließ. (Wie konnte ich dies, da ich 13 Jahre lang am Krusenst. Atlas arbeiten und auch noch meine academischen Abhandlungen und Pallas Zoographia / Rosso Asiatica 3 Bände im Druck während der Zeit meines Aufenthalts (10 Jahre) liefern muste, ich war ja schon mit Arbeit überhäuft und konnte gar nicht an meine eigene Arbeit denken.)

Ein weiteres Schreiben des Kapitäns aus dem Jahr 1826 zeigt, dass in dieser Angelegenheit immer noch kein Fortschritt erzielt worden war[17] :

> Was Ihr Manuscript des vierten Bandes meiner Reisebeschreibung betrift, so bitte ich Sie inständigst es mir zuzuschicken Aber auf eine nicht kostspielige - aber doch sichere Art. Ich laße es vielleicht doch noch einmal drucken d.h. nicht auf meine eigene Kosten, wo nicht, so soll es in meiner *Bibliothek* als ein Andenken von Ihnen aufbewahrt werden. Ich habe Anstalten getroffen, daß meine Sammlung, die nicht gros aber auserlesen ist, nach meinem Tode nicht zersplittert werde.

Wenn Tilesius sein Manuskript abgeschickt hätte, müßte sich eine Nachricht darüber im Briefwechsel zwischen Krusenstern und Horner (bis 1834) finden. Das ist nicht der Fall, also ist Tilesius dem dringenden Wunsch Krusensterns wohl nie nachgekommen. Selbst dieser Bildkommentar in Manuskriptform muss als verloren gelten, und Tilesius' Nachlässigkeit ist wenigstens z.T. mit dafür verantwortlich. Ein ähnliches Schicksal erlitt beispielsweise auch sein Herbarium zur Südsee-Flora, das an den Prof. der Botanik Christian Friedrich Stephan (1757-1814) in Moskau gekommen war[18] :

> Sie wünschen zu wissen, wo meine Südsee Gewaechse hin gekommen sind ?, diese hat ein gewisser Prof. Stephan, der sie publiciren wollte, behalten ist aber gestorben bevor er etwas publicirt hatte, sein Sohn welcher Besitzer seines Herbariums und seiner Bibliothek geworden ist, ist auch sein Nachfolger im Amte scheint aber kein grosser Botaniker zu seyn und beantwortet keine Briefe.

Überhaupt trennte sich der überlastete Tilesius nicht erst nach dem Abschied von St. Petersburg von vielen Teilen seiner Sammlung, sei es, dass er sie an kompetentere Kollegen zur Bearbeitung und Publikation weitergab, sei es, dass ihm zunehmend klar wurde, dass er selber einfach nicht in der Lage war, sich in alle Bereiche der immer rascher expandierenden und spezialisierenden Naturkunde einzuarbeiten. Ein sehr bescheiden klingender Brief (St Petersburg d 1. Octobr 1810) an den berühmteren Kollegen Carl Peter Thunberg, der mehr als 30

---

[17] St. Petersburg, 22. Julii 1826, zitiert nach: Stadtarchiv Mühlhausen/Th., Tilesius-Bibliothek Nr. 82/515, vgl. Hasert (s. Anm. 2) 115.

[18] Laut Brief von Tilesius an Carl Adolph Agardh (1785-1859), (Mühlhausen d 20 Novembr 1816), aus : Universitetsbiblioteket Lund, Saml. Agardh, CA [811-13].

Jahre vor Tilesius in Japan gearbeitet hatte, führt das klar vor Augen[19] :

> Sollten Ewr. Hochwohlgeb. alsdann auffallende Fehler oder *Defecte* bemerken ; so bitte ich gehorsamst mich zu *corrigiren* und zu belehren, ich bin selbst überzeugt, daß meine Versuche außer meinen Lieblingswißenschaften, den Fischen Mollusken und Zoophyten, mangelhaft ausfallen müßen. Mit den Säugethieren Vögeln Amphibien und Insecten habe ich mich wenig beschäftigt und bin in ihrer Kenntniß und Bearbeitung sehr zurück. In der *Botanik* bin ich ganz fremd, weil ich mich blos mit den *Fucis Conferven, Ulven usw*. beschäftigt habe, in der *Mineralogie* ebenfals, weil ich nur auf Versteinerungen und vulkanische Producte Rüksicht genommen.

Hinzu kam die bereits erwähnte ungewöhnlich starke Kritik durch Lorenz Oken, der Tilesius öffentlich der Hinhaltung und Inkompetenz bezichtigte[20] :

> Indem wir Tilesius die Entdeckung sichern, sind wir aber keineswegs Willens, ihn auf Loren [=Lorbeeren] zu betten. Daß ihm die feinriechenden Franzosen diese Ehre vor der Nase weggenommen, dieß ist er selbst Schuld, und hat es zehnfach verdient für die Sünden und resp. litt. Prellereyen, die er sich gegen das Publicum erlaubt hat. Erstens hat dieser vielgereiste Mann die sonderbare Gewohnheit, alles nur halb und stückweise zu beschreiben, und meist die Hauptsachen zu vergessen [..] Das zweyte aber ist sein sonderbares und tadelhaftes Betragen gegen das Publikum, wegen dem man ihn vor Gericht belangen könnte. In Krusensterns großer und theurer Reise hat er nehmlich eine Menge Thierabbildungen gegeben, und dem Kr. von Band zu Band versprochen, die Beschreibung nachzuliefern ; allein das Werk ist geschlossen, und Tilesius hat sein Wort nicht gehalten. Er ist aber privatrechtlich schuldig, es zu halten ; denn wir andern haben die Tafeln gekauft, und theuer bezahlt.

Eine andere, später geplante Publikation, die Tilesius auf einem Konzeptblatt mit möglichen Titeln von Büchern niederschrieb, ließ sich nicht mehr umsetzen[21] :

> Ansichten von Nangasaki oder Beschreibungen und Abbildung der Nationalphysiognomien Schädelformen, Nationaltrachten Bedürfniße/Secten,/und /Kupfer [?]/Naturproducte der Japaner in zwanglosen Heften.

---

[19] Universitätsbibliothek Uppsala, Thunberg-Nachlass, G 300 ad.

[20] *Isis, oder encyclopädische Zeitung* 1817, Sp. 1511, die Fußnote ist hier leicht korrigiert. Die vollständige Anklage Okens ist in der Internetpräsentation dieser Zeitung nachzulesen. Ein Brief von Tilesius an Krug vom 18. April 1817 belegt, dass er den Vorwurf gelesen hat, aber nicht widerlegen konnte : *Der Ocken schreibt ja auch immer in die Welt hinein : "Warum liefert Tilesius nicht die Beschreibung der vielen neuen und wichtigen, im Krusensternschen Atlaße abgebildeten Thiere ?" und ich muß immer noch dazu still schweigen, weil ich nicht oberflächlich seyn will sondern gründlich! und doch auch kein Genie bin, das alles so leicht aus dem Ermel heraus schütteln kann. Sehen Sie, so hat jeder Mensch seine Noth, die meinige besteht blos in gelehrten Gewißensbißen, ich mache mir Vorwürfe, daß ich nicht so schnell arbeiten kann, als es die Menschen verlangen.* (aus : Archiv der Akademie der Wissenschaften in St. Petersburg, Font 88, 2, 85). In der *Isis* 1818, Heft 2, Sp. 243-247 setzte Oken seine Kritik an Tilesius fort. Vgl. dazu auch den Kommentar von Horner an Krusenstern (Zürich, den 24. Febr. 1819), aus : EAA 1414-3-22, Bl. 160:
*Ihr Briefchen v. 25. Sept. habe ich durch Tilesius bekommen. Er ist der alte unzufriedene Prätentionsvolle Mensch. Seine Erklärungen hätte er nun wohl können in Ruhe laßen; aber der Biß von Oken hat ihn wahrscheinlich aufgeregt.*

[21] Aus : Stadtarchiv Mühlhausen/Th., Tilesius-Bibliothek Nr. 82/515. Der erwähnte Buchhändler Johann Friedrich Keyser lebte von 1788-1829, Tilesius nennt Pfefferkorn als dessen Nachfolger. Ein ausführlicherer Entwurf zu diesem Plan findet sich in : Staatsbibliothek zu Berlin PK Hss.-Abt., Tilesius-Nachlass Nr. 5, siehe Anm. 25.

## B.2. Etwas zu den verstreuten Archivalien

Im Folgenden sollen persönliche Aufzeichnungen von Tilesius zu Japan vorgestellt werden, weil sich dieser Teil seines Tagebuches im Mühlhäuser Nachlass erhalten hat. Zu bedenken gilt, dass diese Erinnerungen in der vorliegenden Form sicher nicht für eine Veröffentlichung gedacht und daher auch nicht druckreif abgeschlossen waren. Das Tagebuch entstand aus Aufzeichnungen während der Reise, es wurde später immer wieder mittels Exzerpten aus eigenen und anderen Werken ergänzt.

Teil 1 und 3 des Tagebuchs sind nicht mehr vorhanden. Als Erklärung dafür müssen Tilesius' eigene Worte herhalten[22] :

> Er laß nun einige Jahre Collegia in Göttingen, wurde aber durch Blumenbachs u. Hymlys Brodneid bestimmt abzugehen und sich wieder nach Leipzig zu wenden. Hier verzung [?] ihn der Schmerz über Rosenmüllers Tod und des Verlusts von seinen ReiseMerkwürdigkeiten, die mit als R. Eigenthum versiegelt und verauctionirt wurden. Niedergeschlagen von so vielem Unglück, blieb er in Mühlh. in obscuro sitzen.

In einem zeitlich näherliegenden Brief an Franz Mertens in Bremen (Mühlhausen d 21 August 1820) schrieb Tilesius wesentlich knapper und nur andeutungsweise[23] :

> Dieses Unglück hatte zur Folge, daß der gewöhnliche Gang meiner Geschäfte ins Stocken gerieth und ich auch manchen literarischen Verlust erlitt.

Wie dieser Verlust wirklich zustande kam, läßt sich also nicht genauer erklären. In späteren Lebensjahren hat Tilesius wohl immer wieder dieses ihm verbliebene Tagebuch in Händen gehabt, wie sein Brief an den Kreisphysikus Dr. Becker (Leipzig, d. 30. December 39) belegt[24] :

> Ich bin verdrießlich, nichts erheitert mich als Musik und das Tagebuch meiner Reise.

Natürlich ist der Verlust des 1. und 3. Teils bedauerlich. Doch zum Glück gibt es die Möglichkeit der teilweisen Rekonstruktion aus Tilesius' Zeitschriftenbeiträgen, den Abschriften für Freunde und nicht zuletzt aus den Briefen. Hinzu kommen sein vielleicht noch im

---

[22] Hier zitiert nach Hasert (s. Anm. 2) 95, der ein von Tilesius angefertigtes, im Nachlass befindliches Bewerbungsschreiben aus dem Jahr 1823 wiedergibt. Es ist nur schwer nachvollziehbar, dass nach Johann Christian Rosenmüllers Tod (1771–1820) die Verauktionierung von dessen Hinterlassenschaften zum Verlust der bei ihm lagernden handschriftlichen Tagebuchteile von Tilesius führen konnte.

[23] Aus : Hunt Institute for Botanical Documentation (Carnegie Mellon University) Pittsburgh, Mertens Nachlass.

[24] Vgl. in : Mühlhäuser Geschichtsblätter 11 (1910/11) S. 128. Auch hier findet sich kein Wort vom Verlust des ersten und dritten Teiles des Tagebuchs.

Russischen Marinearchiv vorhandenes offizielles Tagebuch und die in der St. Petersburger Akademie der Wissenschaften hinterlegten Materialien, die ergänzt werden durch den Berliner Teil-Nachlass, der wohl Abschriften aus Teilen des originalen Tagebuches bietet.[25]

## C.1. Beschreibung des Tagebuchs und editorische Leitlinien

In diesem Artikel geht es also vorerst nur um die Beschreibung des erhaltenen Teilbandes 2, der sich im Stadtarchiv Mühlhausen/Th. in der Tilesius-Bibliothek befindet und die Signatur : Nr. 82/291 trägt.

Äußerliche Beschreibung :

Annähernd A4 Hochformat, gebunden (wie vieles aus seinen sich zerstreuenden Manuskripten), mit der Umschlagaufschrift:

I. Tagebuch meiner Reise um die Welt

Auf Krusensterns Erdumseglung

Nucahiva Kamtschatca Japan China

Zum Seitenumfang, Inhalt und Nummerierung

Auf das oben mit einer Zierschrift und dann mit einer langen Nebenbemerkung versehene Innenblatt folgen die durchnummerierten Seiten 1 bis 264. Da das Tagebuch aber durch etliche lose eingelegte und befestigte Blätter ergänzt wurde, und da dennoch manche Seiten nicht beschrieben wurden, ist diese Zählung mit Vorsicht zu genießen. Zwar ist der Inhalt im großen und ganzen chronologisch angeordnet, aber durch Einfügungen unterbrochen, die vorausgehenden oder nachfolgenden Beschreibungen zuzuordnen sind.

Der Berichtzeitraum umfasst die Zeit vom Mai 1804 bis zum Januar 1806, jedoch folgen

---

[25] Im Tilesius-Nachlass in der Staatsbibliothek zu Berlin PK Hss.-Abt. gibt es etwa die folgenden Texte zu Japan:
- Nr. 5 Ansichten von Nangasaki oder Beschreibungen und Abbildung der Nationalphysiognomien Schädelformen, Nationaltrachten Bedürfniße und Naturproducte der Japaner in zwanglosen Heften. (8 Blätter)
- Nr. 8 (Reisenotizen, 1.5.-29.5. 1805, 8 doppelseitig beschriebene Blätter)
- Nr. 11 (Diverses : über die Japaner, das Japanische Meer und die Bewohner von Kamtschatka, 8 Bl.)
- Nr. 18 (über Taifun, 11 S., Exzerpte aus Isaac Titsings *Illustrations of Japan,* London 1828, S. 97-100)
  Zum nicht mehr vorhandenen 1. Teil der Reise, vgl. etwa ebenda die
- Nr. 13 (Fragment eines Reiseberichtes von 1804, betr. Brasilien. Mit e. Zeichnung von Sta Cruz, 22 December 1803. Festung Sta Cruz auf der Insel Atomery von der Landspizze aus, 7 Bll.)
- Nr. 14 (bibliogr. Ergänzungen zu den Reisenotizen über Teneriffa und Oratova, 1 Bl.)
- Nr. 15 (Notizen über eine Seereise, Februar bis April ... o.J.=1804, 4 Bll.)
- Nr. 16 ("Brasilien Annotationes" div. Notizen über Brasilien und einen Wasserfall hinter der Reismühle, 1 Bl.)
  Vgl. auch den umfangreichen Anfang des hs. Tagebuches im Archiv der Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg, Font IV, Op. 1 / d. 800.

auf die anfänglichen, langen Textteile zu Nukahiva[26] und Kamtschatka erst ab S. 33 tagebuchartige Eintragungen beginnend mit dem Datum vom 16. August 1804 aus Kamtschatka, wiederholt unterbrochen durch unchronologische Bemerkungen wie z.B. Briefkopien, Pack-, Pflanzen- und Tierlisten.

Daraus ergibt sich, dass der Entstehungsverlauf dieses Tagebuches nicht kontinuierlich gewesen sein kann. Wesentlich später datierte, aber in den fortlaufenden Text integrierte Bemerkungen lassen erkennen, dass Tilesius noch 1833 an diesem Tagebuch arbeitete.[27] Diese Handschrift stellt eine z.B. für die Vorlesungen in Göttingen oder Leipzig, oder auch für eine spätere Publikation überarbeitete Version früherer Aufzeichnungen dar, kann also nur mit Einschränkungen Anspruch auf spontan niedergeschriebene Impressionen erheben - auch da, wo der Verfasser solche Bemerkungen später beibehält.[28] Interessant ist, dass Tilesius das Tagebuch von Hermann Ludwig von Loewenstern bereits während der Reise einsehen konnte, denn er notiert dies unter dem 8. April 1805.[29]

Er hat Detailinformationen aus den inzwischen publizierten Werken von Krusenstern[30] aber kaum von seinem Konkurrenten Langsdorff übernommen bzw. mit Kurznotizen auf die Illustrationen hingewiesen, auch andere Quellen konsultiert und inkorporiert, aber nicht immer als Nachträge gekennzeichnet.

Ein Beispiel für die Tilesius bei der Reise vorliegende Literatur zu Japan sei genannt. Natürlich hatte man die beiden "Klassiker" zu Japan an Bord, Engelbert Kämpfers Werk wie auch Thunbergs *Flora Japonica*, denn auf sie wird immer wieder im Tagebuch referierend hingewiesen.[31] Bemerkenswert ist, was Tilesius am 27. Jan. 1810 an Thunberg schreibt[32] :

---

[26] Über diesen Aufenthalt erscheint bald ein Werk von Elena Govor, in dem auch die Tagebuchaufzeichnungen von Tilesius berücksichtigt werden.

[27] So etwa auf S. 250, wo er auf das *Pfennig Magazin* 1833, S. 12f. verweist.

[28] Vgl. etwa beim Datum 6. Febr. 1805 (S. 93) zu einer ihm „ in der Folge der Jahre" abgejagten Camelien-Zeichnung.

[29] Hasert hat viele dieser Jeremiaden über die mitreisenden Rezanov, Bellingshausen und Horner notiert, kannte aber nicht das Tagebuch von Loewenstern mit seinen bissigen Ausfällen gegen Tilesius, mit dem er sich erst auf der Rückreise in St. Helena aussöhnte.

[30] Tilesius bezog sich dabei immer auf die deutsche Quartausgabe.

[31] Vgl. im Tagebuch auf S. 262 die Literaturliste bezügl. Japan und vgl. auch die Liste der zu Beginn der Erdumseglung gekauften Bücher, in: Krusenstern-Font der Akademie der Wissenschaften zu St. Petersburg (f. 290, Bl. 4-7):
Bl. 4 (eine zeitgenössische Kopie der Bestellliste) "Copenhagen d. 31 August 1803. Fried. Brümmer.", gegengezeichnet von "Major Friderici" [Bücher und Papier].
Bl. 5 (kopierte Liste der zoologischen Bücher, die Langsdorff von Tilesius erhalten hat)
Bl. 7 (Tilesius' Vorschlagsliste an Rezanov von zum Kauf bestimmten Büchern).

[32] Dies Zitat wie auch das folgende stammt aus einem Brief von Tilesius an Thunberg, der sich jetzt im Thunberg-Nachlass der UB Uppsala befindet, vgl. Anm. 19.

Dem seeligen *Martin Vahl* in *Coppenhagen* kaufte ich die damals (1803) vorhandenen *Fasc. Icon. Florae Japonicae fol. maj.* von Ewr. Hochwohlgeb. ab. Wenn Ewr Hochwohlgeb. davon noch Fortsezzungen liefern sollten, so bitte ich gehorsamst auch für mich um ein Exempl. Ich bin durch meine Handzeichnungen vielleicht im Stande Ewr Hochwohlgeb. dazu einige Beyträge zu liefern, im Fall Sie die coloriten nach frischen Pflanzen entworfenen Abbildungen vorziehen sollten. Ich bedauerte damals, daß mir gerade der Buchhändler *Brummer* in *Coppenhagen* ein *defectes Exemplar* Ihrer *Flora Japonica in* 8° gegeben hatte.

sowie in einem weitern Brief an Thunberg vom 5. Sept. 1810[33] :

Je n'avois pas manque de porter avec moi tous Vos ouvrages en egard de Japon et celles de Kaempfer sur le Japon c'avoir la Flora Japonica la traduction allemande de Votre Voyage et la françoise par LaMark plus complette, mais les acta Suecica et les memoires de Harlem je n'ai consulté qu'après le voyage tant, que je les aie trouvé dans la Bibliotheque de l'Academie.

Im Tagebuch gibt es nicht viele Illustrationen, die dann auch zumeist in den fortlaufenden Text eingefügt sind und kaum die Zeilenhöhe übersteigen. Viele der später „geschönten" Roh-Skizzen finden sich in den beiden Moskauer Skizzenbüchern, die als authentisches, während der Reise gefertigtes Material um so höheren Quellenwert besitzen.[34] Nur weniges ist noch in Mühlhausen vorhanden.

Editorische Hinweise

Der Text soll weitgehend wort- und buchstabengetreu wiedergegeben werden (das y wird aber nicht mit dem von Tilesius verwendeten Umlaut versehen), in Zweifelsfällen erscheint die leichtere, verständlichere Lesart oder eine Markierung [?][35] ; die ungewöhnliche Interpunktion wird beibehalten, auch wenn die Groß- oder Kleinschreibung nicht immer zweifelsfrei zu klären ist. Abkürzungen werden beibehalten, aber Reduplikationsstriche der Konsonanten und verschliffene Wortendungen stillschweigend aufgelöst.

Viele Überschriften erstrecken sich über die linke und rechte Seite des aufgeschlagenen Buches. Sie werden hier im Fettdruck wiedergegeben. Dagegen entfallen die Trennlinien unter der Überschrift und vor Fußnoten des Originals. Alle Seitenzahlen werden links gesetzt, obwohl sie im Original außenbündig sind. Die unterschiedlichen Tinten können nicht markiert werden, da mir nur eine monochrome Kopie des Tagebuches vorliegt. Der Ver-

[33] Tilesius schrieb zwei Briefe an Thunberg auf Deutsch, einen auf Französisch und die weiteren auf Latein.

[34] Die beiden postkartengroßen Alben werden in der Nationalbibliothek Moskau aufbewahrt (Font 178 M 10693 a und 10693 b). Abbildungen daraus finden sich u.a. in Alexey von Krusensterns russischer synoptischer Edition der damaligen Berichte zur Weltumseglung (St. Petersburg 2005) und in der Ausgabe der russischen Zeitschrift *Bosmotschnai kollektija* 2001 Nr. 3 (6) S. 122-131.

[35] Ergänzungen in eckigen Klammern stammen nicht von Tilesius, sondern von mir.

wendung von verschiedenen Schriften im Manuskript (vor allem bei Eigennamen, Fachbegriffen und Fremdwörtern) kann nur annähernd Rechnung getragen werden.

Die Exzerpte bestehen vorwiegend aus den Teilen des Tagebuches, die von biographisch-historischem Interesse sind, also kaum die zumeist naturkundlichen Notizen, denn Tilesius' Auslassungen über Flora und Fauna sind wohl nur noch für die Taxonomie von Belang. Die kurzen meteorologischen Bemerkungen sind meist beibehalten und für Temperaturangaben gilt die unkomplizierte Umrechung : der Schmelzpunkt von Wasser beträgt auf der Réaumur- wie der Celsiusskala 0°, der Siedepunkt 80°R, ist also ähnlich wie Celsius, nur etwas niedriger. Die Zeitangaben beziehen sich auf den damals in Westeuropa bereits gängigen gregorianischen, nicht den alten julianischen Kalender, der in Russland noch bis Anfang des 20. Jahrhunderts verwendet wurde (damals also um 12 Tage verschoben).

## C.2. Die Auszüge zum Japanaufenthalt (Tagebuch S. 55 - 110)

D. Tilesius. Fortsezzung des Tagebuches
auf der Reise um die Welt

Instructio peregrinatoris. Linnéi Amoenit. acad.
tom V. (osbeckii laud.) §V.[36] [*]

NB !! Sollte jemand von unserer Reisegesellschaft, oder wer es auch sonst seyn möchte, dieses Buch zufällig oder absichtlich bey meinem Leben oder nach meinem Tode in seine Hände bekommen ; so wiße er, daß dieses lediglich zu meiner eigenen Notiz geschrieben und nicht für andere bestimmt ist, daß ich in dieser Niederlage meiner geheimsten Gedanken und Gefühle, die mein nicht beneidenswerthes Schicksaal betreffen, meinen gepreßten Herzen Luft gemacht und in diesem Buche gleichsam meinen einzigen stummen Vertrauten auf dieser Reise gehabt habe, er wiße, daß er bey meinen Lebzeiten nicht zu dieser Lectüre berechtigt und ohne meine Einwilligung sich mir nicht zu einem Vertrauten aufdringen dürfe : denn es würde sehr ungerecht seyn jemanden nach momentanen leidenschaftlichen Äuserungen beurtheilen zu wollen, der in der Folge, wie es die geheime Geschichte des menschlichen Herzens und Verstandes lehrt, vielleicht ganz anders denkt, und in glücklichern Tagen alte Beleidigungen und Kränkungen zu vergeßen und zu vergeben gewohnt ist. - Rache ist jedem guten Menschen fremd, und sein Gedächtniß hat keinen Raum für Kränkungen : zu seiner Rechtfertigung aber muß der unvorsichtige Betrogene, der das Mißtrauen so theuer erkauft hat, unangenehme Thatsachen, die seinem Gedächtniße lästig sind, einem unempfindlichen Papiere anvertrauen, um gegen Verläum-

[36] Der Hinweis bezieht sich auf das Lob Linnés für Pehr Osbeck, der 1750-52 bis nach Canton in China gereist war und viele Pflanzen mitgebracht hatte, und findet sich in : Caroli Linnaei *Amoenitates Academicae ; Seu Dissertationes Variae Physicae, Medicae, Botanicae*, Teil : 5. Stockholm, 1760 [Erlangae : Palm, 1788]

dungen, Bosheit und Selbstsucht und Dünkel anderer geschüzzt und zur Selbstvertheidigung bey rachgierigen und feindseeligen Angriffen bereit zu seyn. geschrieben den 12 *Novembr* 1805. Meine täglichen Beschäftigungen, die man ebenfals nicht für andere niederschreibt, braucht auch niemand zu wißen, man sieht auch daraus, daß dieses Journal nicht bestimmt ist, durch den Druck bekannt gemacht zu werden. Was davon soll gedruckt werden, will ich schon selbst extrahiren und wenn ich todt bin; so ist es gar nicht wichtig, weil ich allein die naturhistorische *Autopsie* besorgte.

[... – dann ab S. 55]
[...]
Freytags den 5 Octobr 1804.
Fast den ganzen Tag Windstille. Der geringe Wind der uns einige Stunden langsam vorwärts beförderte, wehete blos früh. Wir segelten heute in das Japanische Inselmeer herein, sahen auf beyden Seiten hohe Insel Berge, auf der einen den großen rauchenden Vulcan in deßen weiten offenen Krater man gleichsam hineinsehen konnte, auf der andern einen Zuckerhutförmigen Pik, zwischen ihnen hindurch gieng unsere Straße, vor uns lag die Küste mit ihren schroffen Bergen an denen jedes Plätzchen benuzzt und bebauet war, an dem Fuße der Berge lagen Dörfer mit schönen weißen Häusern englischen Gärten und Lauben; auf den Gipfeln und Bergrücken zogen sich ganze regelmäßige Alleen von Nadelholz und die Schluchten der Berge waren mit anderm dichterem Gebüsche bepflanzt, so daß jede Parthie einen malerischen Anblick gab und dieser unsern ersten Eintritt in das Japanische Inselmeer lachend und angenehm machte, es wurden auch heute mehrere Ansichten gezeichnet, zumal da wir uns gegen Mittag dem Lande mehr näherten. Eine Menge Fischerbote (und Piroken mit 2 und 3 Segeln, welche die Küsten überall bewachten, näherten sich uns neugierig bis auf einen Kanonenschuß, zogen sich aber dann furchtsam wieder zurück, wir beobachteten sie durch die Fernröhre und bemerkten deutlich wie sie sich hauffenweise auf dem Verdecke versammelten und neugierig aus den Seitenluken herausgafften. Mehrentheils hatten sie ein großes und 2 kleine Seegel welche der Länge nach zusammen genäht scheinen und aus einem glänzenden Zeuge bestanden. Ihr Steuerruder hatte einen sehr langen Hebel, welcher bis an den großen Mast reichte und erst hier von einem Manne regiert wurde. An den Seiten des Schiffes befanden sich Gitterwerk und Geländer. Ungeachtet ihnen unsere Japoneser mehrmals zurieffen in der Landessprache und winkten ; so ließ doch ihr Mißtrauen nicht zu, daß sie näher an uns heran gekommen wären. Es zeigte sich heute Nachmittags noch eine größere rothe Krabbe auf der Oberfläche des Meeres, als vorgestern und ein baumstarker und 16 Ellen langer Stab mit Seetang und Entenmuscheln besäet welcher sich langsam auf der Meeresfläche fortwälzte. Nachts sahe man einen entfernten Vulcan brennen und glühende Steine auswerfen, wahrscheinlich war es derselbe, den wir heute früh rauchen gesehen hatten.
Krusenst. 1. p. 271 glaubt er sey Unga der durch die Verfolgung der Christen berühmt geworden ist. Cap Kagul

**56. Japanisches Meer japanische Küste. Einfahrt in die Bay Kiusiu in welcher *Nangasaki* liegt**

Sonnabends den 6 Octobr 1804 +*Tiphoone S. p. 216*.

Heute hatten wir etwas weniger Windstille, als gestern, dafür aber etwas Contrairen Wind. Wir segelten mehrere steile Felsenklippen und einzelne Inseln vorbey, unter denen auch ein rauchender Vulcan war, neues aber zeigte sich heute weiter nichts. Es waren zwar heute wieder viele Bote und Fischer Barken im Meere, es wollte sich aber keiner an uns heran wagen, wir bemerkten, daß sie weit schiefer gegen den Wind segeln konten als wir. Unsere Böte waren beyde im leztern+Orkane zertrümmert worden, daher war es nicht möglich unsere Japoneser, die die Küste hier eben so unerfahren sind als wir, nach Lotsen an Land zu schikken, daher bleiben wir auch heute noch in Rüksicht der Lage von *Nankasaki* ungewiß.

Sontags den 7. Octobr 1804.
hatten wir warmes sonniges Wetter und etwas Windstille, sahen nur wenig Küsten und hatten wenig zu zeichnen, sahen ferner Wallfische und Schmetterlinge auch groß schwimmende Krabben und paßirten die Insel *Gotto*, wie man glaubte – ich entwarf die nautischen Ansichten und peilte sie, der Erfolg und die fernere Erfahrung wird es ausmitteln ob die beygesetzen Nahmen die richtigen sind. *Dies diem illustrat docet et corrigit*.

Montags den 8. Octobr 1804
hatten wir warmes sonniges Wetter und Windstille, die bisweilen durch günstige Winde etwas unterbrochen wurde und wodurch wir etwas vorwärts kamen. Ich zeichnete heute die mehresten Ansichten, so wohl vor als Nachmittags auch einige Böte und Fische als z.B. *Cnupera Jap* und die kleine *Coryph. hippmia* die hier kaum 1 Fuß lang ist und sich von der Brasilischen unterscheidet durch einen blauen Rand am Unterkiefer durch einen Einbug am Oberkiefer durch ein geringere Anzahl von Flecken und Strahlen in den Floßen. Wir erhielten ferner früh durch ein Fischerbot einen kleinen Heering den dieße Leute in großer Menge gefangen hatten (*Clupea Encrasicolus*) Nach den Landesgesezzen hätten diße Leute schon blos darum den Kopf verlieren müßen, weil sie mit uns gesprochen hatten, deshalb waren sie eben so abgeneigt, uns als Lotsen zu dienen, als ihre Nahmen und Wohnort, ja so gar nicht einmal die benachbarten Landspizzen und Inseln zu nennen. da wir nun ganz nahe vor dem festen Lande zu seyn glaubten und bey der Ungewißheit und Mangelhaftigkeit der Charten die Lage von *Nangasaki* nicht bestimmen konnten, so wurde eine Canone abgefeuert, um einen Lotsen zu ruffen. An statt des Lotsen aber kam ein Wachtbot, welches uns durch unsere Japoneser examinirte und sodann Nachricht nach *Nangasaki* brachte, wo rauf kurz darauf ein Polizeybot angefahren kam und nun unsere Papiere eben so untersuchte wie voriges und uns befahl Anker zu werfen.

**57. Japonische Polizey, Wach und Kriegs oder *Banjosböte*, *Examen*, Entwaffnung, Besuch der *Hollander u. Banjos*.**

Dienstag den 9. Oct. 1804 noch vor Anker auf dem ersten Ankerplatze.
warmes helles Wetter Sonne und Windstille. Heute lagen an die 10 Fahrzeuge von Wacht Polizey Stadthalterschaft *Fisen* usw. zu beyden Seiten unseres Schiffes vor Anker und beobachteten uns durch Fernröhre mit äußerstem Mißtrauen. Abends kamen die *Repraesentanten* des *Gouverneurs* von *Nangasaki* wieder angezogen und wurden durch eine Menge kleiner Böte begleitet. Auf dem großen Bote welches durch einen Baldachin bedeckt wurde, befanden sich 2 Böden oder Verdecke, wo auf dem obersten, von dem Baldachin bedeckt, die Repraesentanten des *Gouverneurs* saßen. Unten saßen auf schönen Matten die Secretairs des *Gouv*. und an dem Vordertheile waren die Bogen und Pfeile und die Insignia der Macht und Iustiz überhaupt aufgestellt. Auf den übrigen Böten, die zum Theil mit Flaggen und Gehängen umgeben war, befand sich Jap. Musik welche in der Nähe nachließ, man hörte bloß eine Art Trommel oder *Tambourin*. Die Audienz, bey welcher auch die Herrn der holländ. *Factorey* zugegen waren, hatte denselben Anstrich, und gab dieselben Scenen wie gestern Abend. Heute lernte ich den Herrn *Baron Pabst*, wie es schien, einen Freund und Beförderer der Wissenschaften kennen, welcher von Japanischen Malern für nicht geringen Unkosten von Haven Naturproducten und Costumen interessante Zeichnungen machen läßt. Heute Abends wurde der Japan. *Passport* abgeliefert und eine Uibersezzung von dem Briefe des Kaysers an den Jap. Hof auf Morgen nachzuschikken versprochen, auch wurde Pulver vorrath und Gewehre abgegeben. Um 10 Uhr nach Ablieferung von allem diesen erhielten wir Erlaubniß nach dem Haven vorzurükken und fingen an uns vorzubuxiren. Bey dem Verhör der Japoneser schien sehr viel Aufmerksamkeit und ruhiges Nachdenken zu herrschen. Sowohl dieser Zug, als auch die ungemeine Industrie, die überall in dem Geräthe und Einrichtungen, Bergen und Flüssen der Japone-

ser herrscht, würde mir beßer gefallen, als ihre sklavische Unterwürfigkeit und ihr fast entehrender Respect gegen ihre Oberen.　Indeß gehört auch dieses zu ihren Glück und Wohlstand.
Heute Abend kurz vor Ankunft des Hoc. [?] Guvern. erhielten wir die verlangten Victualien von d. Holländern namentlich Rettige, Zwiebeln Knobl. Eyer, Schweinefl.　Speck Reis Hüner (*rostro adunce*) und Hähnen, Knoblauch und Zwiebeln.　Um 1 Uhr des Nachts musten wir kurz vor dem Papenberge, wieder vor Anker gehen, nachdem uns 60 bis 70 Böte herein buxiert hatten.

**58**.　**in der Einfahrt　im Angesicht der Japa** //
Mittewochs den 10 Octobr 1804.
Früh helles Wetter, Mittags Gewitter und Regen.
Wir lagen heute ohngefähr eine ViertelStunde vor dem Papenberge vor Anker.　Ich zeichnete diese Gegend nebst den umliegenden Wacht Polizey und Stadthalterschafts Piroken.
Abends ging die alte *Comedie* wieder los, es kamen die *Repraesentanten* des *Gouverneurs* und gaben unserm Capt. und Gesandten wieder Audienz, heute waren die Holländer weggeblieben und die Japoneser waren vergnügter und offener machten uns auch Hoffnung, bald in den Haven promoviert zu werden.　Abends zeichnete ich einige Trachten der Matrosen des Fürsten *Fisen* und Japonesische Gerichtspersonen, Dollmetscher und Bedienten nach der Natur, so daß ich gestehen muste, heute eine gute Erndte gemacht zu haben.
Heute wurden Pulver und Gewehr abgeliefert.
Donnerstag den 11 Oct. 1804
nichts neues, die gestrigen Zeichnungen angefangen auszuführen, sonniges Wetter.　Heute kamen die Justizräthe nicht aus der Stadt

Freytags d. 12. Octobr. 1804.　Früh wurde ich vor der ganzen Schiffsgesellschaft empfindlich von dem Gesandten beleidigt, weil ich ihn nicht gesehen und seinen Gruß nicht erwiedert hatte.　Mittags kamen die Justizräthe wieder und übersezzten nebst den Dollmetschern den Brief des Rußischen Hofes an den Japanischen Hof.　Bey Tische beschimpfte mich gar der Gesandte unter dem Vorwande einer falschen Beschuldigung vor der ganzen Gesellschaft und da ich ihn an die Worte erinnerte, die ich ihm in Gesellschaft des Herrn *General Koschlef Gouverneur* von *Kamtschatka* gesagt hatte, daß er sich nicht zu sehr gegen mich vergehen sollte, weil ich über ihn klagen würde, so schimpfte er mich so gar einen Schuft, einen Taugenichts und einen Schurken　Dies haben alle Herrn der TischGesellschaft gehört, so auch, daß er mir mehrmals mit Arrest gedrohet hat.

**59.　nischen Küste vor Anker.** ***Grammistes Iris perca sexlineata Thunbergi***
Sonnabends den 13. Octobr. 1804.
Den ganzen Tag Regen. Da ich nur immer darauf bedacht seyn muß meinem beständigen Beleidiger auszuweichen um neuen Beleidigungen zu entgehen ;　so kann ich nicht auf Kunst und Wissenschaft denken ja ich muß mich so gar vom Tische und aus jedem Zimmer entfernen wo dieser Mensch hingeht.　Heute kamen die Japoneser nicht an das Schiff.

Sontags d. 14 Octobr 1804.
Heftigen Wind sonniges kühles Wetter.　Abends und Morgens 11º *Reaumur* am Mittage steigt es immer bis 18-20º *R. Therm*.

Montags d. 15 Octobr 1804.　sonniges Wetter. Mittags kamen die Ober *Banjos* aus der Stadt wieder hieher und verhandelten mit den Gesandten.　In diesen Verhandlungen aber scheint nichts von Erheblichkeit aus-

gemacht zu werden: denn wir bleiben immer auf dieser Stelle liegen und es scheint der abwechselnde Besuch, wo immer andere *Banjos* und wie es scheint, von höhern Range kommen, nur darum gemacht zu werden, um uns von Zeit zu Zeit hinzuhalten. Bey jedem Besuche geht die große Condel voran und die kleinen darum herum, so bald wir die Trommel hören, so wissen wir, daß sie kommen werden. Sie führen jedes mal ihre Treppe in einem besondern Bot bey sich, und wenn sie heraufgestiegen sind so gehen sie an die *Cajute* und sezen sich, ziehen aber vorher die Pantoffeln vor der Thür aus und die Dollmetscher knien vor sie nieder und sprechen. Man bringt täglich frische Lebensmittel auf Rechnung an unser Schiff, die Preise aber wissen wir nicht. Heute kamen folgende : Rettig Knoblauch oder beßer Zwiebellauch, Möhren oder Karotten, Schweinefleisch, eine Art schlechter ungenießbarer Rinottenbirn. Batatten, Brod, Reis, Castanien, Toback und Fische ; ihr Toback ist harig oder in Gestalt feiner Zwirnfäden und stark. Die Fische aber sind alle von einer *Species* die größten einen Fuß lang und haben die Gestalt der Karpfen, aber von prächtigen Farben [...]. Er gehört also unter die *Abdominales* bildet ein neues *Genus* welches zwischen *Clupea* und *Cyprinus* oder *exocitus* wird zu stehen kommen. Diese Fische müßen hier häufig seyn, man bringt sie fast täglich und nicht sparsam, an Geschmack sind sie so delikat, wie Karpfen. (*S. Thunberg perca sexlineata* ?)
*Grammistes Iris* *Grammistes Blochii*

**60.**
Noch habe ich auf der vorigen Seite blos die generischen nicht aber die spezifischen Kennzeichen des neuen Fisches angegeben, es sind folgende : [...]
Botanische Bemerkungen und Zeichnungen werde ich hier nicht machen, denn wir haben kein Vieh auf dem Schiffe, wie die Holländer, zu deßen Nahrung grünes Futter gebracht werden müste, daher wird es mir nicht so gut wie H. Thunberg gelingen, Blumen aus demselben herauszusuchen.
Dienstags den 16 Octobr vormittags wurden wir wieder einige hundert Schritte durch 68 Japanische Böte vorbuxirt, so daß wir an die Stelle wo die 5. Chinesischen Schiffe vor Anker lagen, nämlich hinter den Zuckerhuth förmigen Berg (*Tacabogu*) zu stehen kamen und nunmehro die Wohnung des *Gouverneurs*, die beyden kaiserlichen Wachen und die Stadt *Nangasaki* im Hintergrunde sehen konnten. Der Anbick [!] ist angenehm, zu beyden Seiten grüne Berge, an denen alles bewohnt und jedes Plätzzchen benuzzt ist, um uns herum eine Menge Wachtböte und Fahrzeuge mit Neugierigen Abends sowohl diese Wachtböte als die Dörfer, Forts *Gouverneurs* Wohnungen und Wachtplätzze am Lande durch unzählige Papierlaternen erleuchtet. Jedes Dorf am Ufer ist mit Wappentüchern behangen, zwischen denen Fahnen aufgesteckt sind, an jeder Fahne ist zugleich ein Laternenpfahl eingeschlagen und so ist Nachts jede Fahne mit einer Laterne erleuchtet. Wir sahen Abends mehrere hundert Lichter und die regelmäßigen Entfernungen und Reihen der Lichter an den Einzäunungen der Dörfer und Wachplätzze giebt eine schöne Illumination, welche mit den Widerschein der Feuer und Laternen der Wachtböte, welche sich in dem Wasserspiegel repräsentiren, in Europa eine Feyerlichkeit verrathen würde. Hier aber ist es alle Abend so.

**61.** ***Cancer pelagicus fuscus Astacus fasciatus Jebi Japon. Balanus corona n sp.***
Sontags den 21 Octobr 1804.
Kamen die Japanischen Unteroffiziers und holl. Dolmetscher an Bord und meldeten, daß wir noch 20 Tage auf dieser Stelle liegen bleiben, nicht an Land fahren noch mit den Holländ. nach Japan communiciren noch handeln dürften, daß uns der *Gouverneur* alle Lebensmittel die wir bestellten gratis schiken wolle, diese sind aber auffallend sparsam eingegangen: denn ich eße mich oft nicht halb satt. Ferner meldete man uns daß morgen die Hollandischen Schiffe heraus buxirt würden und den kaiserl. Wachen und anderen Forts salutiren müsten. Wir merkten nachher wol daß sie auch jedem *Banjos* salutiren musten, denn sie schoßen auch bisweilen noch in der Dämmerung und Dunkelheit.

Montags den 22 Octobr. 1804.
Heute haben die Holländischen Schiffe den ganzen Tag fast ununterbrochen canonirt und man muß glauben, daß sie ihren Pulvervorrath bis über die Hälfte blos für erzwungene *Complimente* aus ihrem groben Geschüzz, verschoßen haben. Als einige unserer Officire dies als einen Vorzug vor uns ansahen, meynten die Dollmetscher, es sey blos, weil die Holländer schon 200 Jahre lang unterthänig wären. Heute zeichnete ich eine Krabbe (*Brachiurus olivaceus cancer pelagicus fuscus*.) *Thai* auf welcher ein 6 zackiges Kegelgehäuse (*Balanus coronoideus sexmucronatus*), *Ray* festsaß, ferner eine Squille *Astacus fasciatus*, *Jebi* die mit den prächtigsten Farben prangte. Der Schwanz dieser leztern ist so fleischig, daß das Thier davon recht merklich ins Gewicht fällt. Beyde erhielten wir unter den spärlichen Nahrungsmitteln aus der Stadt. Die nathist. Beschreibung ist in der *Fauna J*. zu finden.

**62. Japan vor dem Haven von Nangasaki am //**
Weibertracht. leuchtende Salpenfäden
Mittewochs den 24 October 1804. Hier ist die Temperatur sehr veränderlich und das Wetter macht leicht Flüße, gestern war es noch 22º *Reaum*. *Therm*. und heute ist es schon um 4o kälter, dabey ein rauher und schneidender Wind und regnigt. Einige sind heiser geworden mir hat die Luft rheumatische Zahnschmerzen verursacht. Demohngeachtet laßen sich neugierige Weiber aus Nangasaki auch heute um unser Schiff herum fahren und begaffen uns Mehrere von ihnen spielen auf Guittarren. Sie tragen eben so weite Schlafröcke, wie die Männer, einige von schwarzer Seide andere braun, an den Canten gestickt und Scharrlach rothe Unterkleider, ihr schwarzes Haar tragen sie hoch frisirt mit einer breiten Warschette die hinterwärts überhängt mit Querhölzern durchstochen ist und mit Band und Ringen oder Gehängen ausgeschmückt ist. An den Fingern tragen sie blizzende Ringe und die verheyratheten haben die Mäuler beständig offen und zeigen ihre schwarzen Zähne. Heute kamen auch die Holländischen Dollmetscher und brachten Victualien : Hühner, Enten, Schweinefleisch, Rettich, Radieschen, Möhren, Zwiebeln, Sallat Brod, Batattas, Fische, Krebse, Salzheringe, Nudeln, frisches Waßer, Sacki, Soya, Eyer und Birne. Es wurden ihnen auch mehrere Fragen vorgelegt, die sie sich von dem *Gouverneur* zu unserer Notiz sollten beantworten laßen, ob wir z.B. Briefe mit den beyden holländischen Schiffen nach *Batavia* und *Amsterdam* abgehen laßen dürften ? u.s.w. Nach 3 Tagen wurde uns dies abgeschlagen und nur dem Capt. und Gesandten ein Brief, den aber der *Gouverneur* zu vor lesen muste abzuschiken erlaubt, ich werde also nichts abschicken können
Donnerstag den 25 Octobr 1804 trübes Wetter sehr warm (22º) und windstill. Heute zeigte sich ein großes Fahrzeug, die Dollmetscher unseres Proviantbots versicherten Abends, der Prinz *Tchinguding*[37] ein Neffe des Kaysers sey in demßelben hier angekommen und man habe deshalb nicht früher mit den Victualien hieher kommen können. Nachts sehr dunkel und helles Leuchten des Seewaßers, in welchem sich leuchtende Salpenfäden zeigen. Die vielen Condeln [!] und die unzählige Menge Laternen auf demselben und auf den Wachtpläzzen am Ufer und auf den Bergen welche alle Nächte unterhalten werden macht einen glauben man läge im *Golfo* von *Venedig* vor Anker

**63. Papenberge *Kaki. Perca Coryphaen. Sphyraena Scamber glaucus*.**
Freytag den 26 Octobr 1804 warm und windstill. Abends Leuchten des Waßers. Heute kam der Holländ. Dollmetscher und benachrichtigte uns, daß man uns am Lande einen Bezirk zu unserm Aufenthalt einzäunen und abstecken würde, in welchem innerhalb 3 Tagen einige Wohnungen errichtet seyn sollten. Sie hatten die Gegend abgezeichnet in einem conturirten Plane, nach welchem sie uns die Stelle demonstrirten, mit sich ge-

[37] In den verschiedenen Aufzeichnungen findet sich eine abweichende Schreibung der Eigennamen ; vgl. zu diesem japanischen Prinzen etwa die Macao-Papiere im Mühlhäuser Tilesius-Nachlass, wo Tilesius seine Schreibung mit der von Krusenstern vergleicht.

bracht.
Sonnabends d. 27. Octobr. 1804.
Kamen die Dollmetscher und brachten Lebensmittel, als: Brod, Radieschen, Lectuch, Rettig, Zwiebeln Eyer (Nudeln, welche außerordentlich weis und sauber geformt waren) Schweinefleisch und gelbe ovale Apfelartige Früchte, welche die Japoneser *Kaki* nannten (*Thunberg* flor. 157. Diopyros *B. pomis ovatis obtusissimis carne molli aurantiaca adstringenste*. Sie haben eine süßen fast eckelhaften Geschmak und viel zusammenziehendes, 6 Samen, wie Bohnen oder Kürbiskerne von brauner glänzender Farbe auch hart, es sind aber noch zwei leere Fächer, und der Kelch bleibt mit dem Stiele an der Frucht, also nicht wie Thunberg sagt (*orulamenta fare semper serilia*). 8. raro 9 et 10.) Bey Kaempfer nennen es die Japoneser Sina no kaki, auch *Fato Jaki* und *Jamma Kaki. Am. exot. Kaempferi fasc. V. p. 805. fig. p.*)
Sonntags den 28 Octobr 1804. kühle und windig.
Heute wurden wieder Fische gebracht darunter waren 3 Species die wir noch nicht gesehen hatten, nämlich eine *Coryphaena rubens pent*.* oder Stuzzkopf, ein Barsch *Perca*, ein Stöcker (*Scomber glaucus* und eine Hechtart Sphyraena *Chox*, die sich von allen bekannten Hechten durch doppelt Rückenflossen unterscheidet.
Auch kamen heute die Banjos und versiegelten die Briefe des Gesandten, welche die Holländer mit nach Batavia nehmen sollten, die im November von hier absegeln werden, sie führten heute weder Trommel noch kamen auch in keinen 2 decker Condel.

---

* *Coryphaena rubens* komt der *Pentadactyla* am nächsten
*Perca sexlineata Thunbergi* der Bestreifte Perlenmutterbarsch
*Scombes glaucus* die Japanische Bastardmakrele variert hier so sehr wie die Barsche und unterscheidet sich von der unsrigen durch Zeichnung und Farbe
Der *Chox* dürfte leicht ein neues Genus bilden, er kommt sehr klein vor, ähnelt einigermaßen der *Belone* ist aber nicht so grün und hat auch nicht so langen Schnabel
Die erste Rükenflosse hat 6 knöcherne zugespizzte Strahlen, ist *Sphyraena Jap*.

**64. Japan vor den Haven von Nangasaki am Papenberg**

Montags d. 29. October 1804 warm und sonnigt.
Heute kamen die *Banjos* wieder brachten von dem *Gouverneur* einen Freundschaftsbrief nebst einigen Geschenken von *Tobak* Thee Nudeln *Confituren* und dergl., an den Gesandten und brachten ihn nebst seinem Gefolge unter dem Hurrah der Matrosen an den vorgestern erwähnten und abgestekten und eingezäunten Plazz an Land, wo sie eine Hütte aufgebauet haben. Die Herren kamen aber bald wieder zurück und es schien, daß sie eben keine sonderliche Unterhaltung am Lande gefunden hatten. Nachts war der ganze P[l]azz mit Laternen erleuchtet und schien durch die Illumination eingeweiht zu werden.
Die *Confituren* und das Zuckerwerk der Japoneser ist so sauber und nett geformt, daß man es dem ersten Anblick zufolge für Kunstwerke aus Elfenbein und von bunter, schön gefärbter und lakkirter DrechslersArbeit halten sollte.

Dienstags den 30 Octbr 1804. sonnigt und warm früh trübe und neblicht. Heute erhielten wir Enten und Brodt auch Zwiebeln und Rettig Soy u. dergl. aber keine Fische. Heute führte ich die Zeichnung vom Hechte und dem Stuzzkopfe aus die Makrele aber mußte ungezeichnet bleiben, weil die Fische schon so faul ( in 2 Tagen) geworden waren, daß man es nicht vor Gestank dabey aushalten konnte, wir bekommen sie immer schon halb faul aus der Stadt. +

Mittewochs den 31. Octobr. sonnicht und warm

Heute früh fuhren einige Herren vom Schiffe an das Land und belustigten sich in dem kleinen mit Sand bestreuten Stückchen Ufer das für uns abgesteckt ist, mit Ballspiel. Sie brachten einige Pflanzen mit, die ihnen die Japoneser, auf Ersuchen, außerhalb dem Zaune, heraus gerißen hatten.　Es waren folgende:
*Tuffilago Japonic*a, deren Stiele von den Jap. gegeßen werden.　*Tsua Chrysanthemum Indicum*　*Nogikf* das kleine gelbe Figur　+ es zeigt das mangelhafte
*Vitis vinifera* ? . . . . .　　*Jebich*　das weiße riechende
*Rosa multiflora* . . . . .　　*Noiki, iki*
*Andropogon ciliatum*　　*Caro Kaja*.
*Allium odorum* (wie *scabiosa*) *Nobis*

**65.**
Donnerstags den 1 Novembr 1804.　sonnigt und warm Heute gieng ich zum erstenmale mit der Gesellschaft an Land und sammelte folgende Pflanzen und Insecten.
1. Vicia haba.　*Fen* vulgo *Adsi mame, Kadsi Mami, Haschu mami*
　　*Kaempfer am. exot. Fasc. V. pag 836.*
2. *Tuffilago Japonica*.　*Tswa. Nohanna*.
3. *Panicum verticillatum*. *Tsieku vulgo Awa*.
4. *Andropogon ciliatum*　*Karo Kaja*
5. *Phalaris arundinacea*　*Simakaja, Dsin*　*vulgo Karrias, Kaempfer 899*.
6. *Veronica virginica*.　*Tobi vulgo Tarannoo. Kaempfer a.e. f. V. 886*.
7. *Chrysanthemum Indicum*　*Kikokf. kikf. kiko no hanna kiku kikf. K. 875*.

*Tacca oder Inaga* (*mantis bicorpis*. Wen der Naturforscher Mittelspersonen braucht
　　das taugt nicht wie figura + zeigt
Am Seeufer fand ich eine beträchtliche Menge kleiner Krabben (*c. marmorati*　*Kami* J.)
auch Stachelaustern und Mießmuscheln Kräusel und Kegelschnecken von einem muntern kleinen Einsiedlerkrebse bewohnt, ganz so, wie in *Nukahiwah* und *Brasilien*, es liefen auch hier und da Seeaßeln und *Onisoi marini* umher. [...]

Freytags den 2 Novembr. 1804.　sonnigt und warm, dabey aber dennoch windig und Nachts besonders kalt und feucht, so, daß man sich fast zu jeder Tageszeit anders kleiden muß und dennoch zieht uns die abwechselnde und schnell veränderte Tem[p]eratur von der Hizze zur Kälte häuffige Rheumatismen zu, die mehresten von der Schiffsgesellschaft sind mit Schnupfen, Gliederschmerzen　Flüßen und Catharren geplagt.　Der Jäger und noch einige andere sind auch noch seit *Kamtschatka* mit Spülwürmern behaftet, ob sie gleich nie dergleichen gehabt haben. Sollten sich diese von dem häuffigen Fischgenuß herschreiben ?　— Nachts leuchtet das Seewaßer ziemlich stark und an windstillen sonnigen Tagen zeigt sich hier eine große Beroe oder eine glockenförmige gestreifte belebte Haut nahe an der Oberfläche des Meeres, welche unter die Würmer gehört und wahrscheinlich mit dazu beyträgt, außerdem aber giebt es auch eine Menge kleiner Squillen und *Gammari pedati* welche, wie unsere öftern Versuche und Beobachtungen ausgewiesen haben, zuverläßig leuchten.

**66.**　Perca fasciata und aurata　　**Japan vor dem** //
Sonnabends den 3 Novembr 1804.　sonnigt und warm
Heute brachte man, als das Bot mit den Victualien Vorrath ankam unter den Fischen, welches wieder die vorigen Species nemlich die von pag 63 und eine *Perca fasciato punctata* n.sp. eine neue mit borstenartigen Kiemen und vier großen hakenförmigen Schneidezähne in jedem Kiefer, mit abgerundeten Floßen und 6 Querbin-

den um den Leib versehene Barschart enthielt. [...]
Der Gesandte fuhr heute wieder mit seiner Suite an Land und bey dieser Gelegenheit wurde ihm wieder ein zweimaliges Hurrah von den Matrosen auf den Rahen geruffen.

Sontags den 4 Novembr 1804
Unter den heutigen Fischen befand sich wieder eine andere schön orangerothe und goldglänzende grosse Barschart. (*Perca aurato rubescens*). Der Kiemendekkel war kaum merklich gezähnelt, das hintere Blatt aber oberwärts mit 3 Stacheln bewaffnet, der Unterkiefer hervorstehend, der Körper mit kleinen Schuppen besezzt. Die Zunge war hinten dick und breit angewachsen, die Spizze derselben aber dünn und dreikantig, die Floßen abgerundet und gelben Canten, die vordere Rückenfloße an jedem knöchernen Strahl mit einem dunkeln Fleck bezeichnet.
Abends hatten wir nach einem schwülen heißen Tage ein ziemlich starkes Gewitter mit vielem Regen und heftigen Windstößen die Wachtböte der Japoneser, die sich beym Winde nicht auf ihren Anker erhalten können, hatten sich sämtlich entfernt.

**67. Haven von Nangasaki** leuchtende Krebse und Medusenbrut.
Montags den 5 November 1804. warm sonnigt und windig.
Es befanden sich unter den heute vom Lande gebrachten Fischen einige sehr große gelbe Barsche [...] und Hechte [...]
Heute kamen zugleich mit dem Proviantbote die Dollmetscher und brachten die Nachricht, daß die Holländischen Schiffe auf günstigen Wind warteten und in kurzem absegeln würden, wo wir alsdann ihre Pläzze einnehmen sollen. Sie äußerten zugleich daß das gute Wetter diesen Herbst auf eine ungewöhnliche Weise angehalten habe und daß die rauhe Jahreszeit sich nun bald zeigen würde. Abends war das Seewaßer so hellleuchtend wie ich es noch nie gesehen habe.
[...]

**68. Japan vor dem Haven von Nangasakki hinter** //
Dienstags den 6 Novembr 1804 sonnigt aber kalt und windig 13º *Reaum*.
Heute untersuchte ich die Flocken und schleimigte Körper des Seewaßers welches gestern Abend so hell leuchtete unter dem Mikroskop, es waren grössentheils Mollusken.
[...]

**69. dem Pfaffenberge auf dem zweiten Ankerplazze.**
Mittewochs den 7. Novembr 1804 kalt und windig. Sonnenschein
Heute vormittags fuhren wir an Land, unter andern schon angeführten Pflanzen fand ich auf unserm Landungspläzzchen das *Rucedanum Japonicum* (*Kaempfer a. exot. f.* V. 825)
[...]
Sowohl die Dollmetscher als auch die Wächter in Kibatsch sind auf keine Weise zu bewegen uns einen Schritt außerhalb dem verhaßten entehrenden Zaune zu erlauben, wir dürfen keine Pflanze selbst abreißen; sondern sie bringen jede Blume, auf die wir aus dem Gefängniß hinweißen.
Donnerstag den 8 Novembr 1804. trübe neblicht und kalt
Ich fuhr heute in Gesellschaft des H.v. Krusenstern u. Dr. Horner an Land, der Gewinn war aber nicht gros. Heute früh gingen die Holländer unter Seegel und legten sich am Papenberge vor Anker.
Nachmittags kamen die Dollmetscher und meldeten uns, daß wir morgen früh vorbuxirt werden und den Anker Plazz der Holländer einnehmen sollten.

Freytag den 9 Novembr 1804. sonnigt, kalt und windig. Nachmittags und Abends kamen die *Banjos* an das Schiff und ließen uns durch einige 60 Böte im Haven herauf buxiren bis gegen die beyden kaiserlichen Wachen. Die Meerenge oder der Canal des Havens in welchen wir hier vor Anker liegen, ist sehr eng und leicht die schmalste Stelle welche schon von einem Ufer ganz und gar bestrichen werden kann. Auf dem Wege dahin paßierten wir die Bergspizze deren Felsen mittels einer Art von Grotte durchbrochen sind, die in ein kleines hinter dem Felsen liegendes Fort oder Wachthaus führt, das ganz mit Wappentücher behangen und mit blauem Tuche eingezäunt ist, es stecken, wie gewöhnlich mehrere Fahnen Wimpel und Ehrenzeichen darauf und liegen 2 Wachbarken davor. Die Japanisch. Dollmetscher reden überall von Canonen, welche in diesen Forts oder Wachthäusern stehen sollen, ich habe aber noch nichts dergl. bemerken können. Als wir auf unsern vorigen Ankerplazz buxirt worden waren; so war dies Fort und die Grotte, welche den Eingang in daßelbe bildet täglich voll Menschen besonders Weiber welche die Neugierde dahin gezogen hatte und welche uns durch Fernröhre besahen und dann ein Bot mietheten und um unser Schiff herum fuhren ich habe einige dieser Szenen nebst dem Berge und seiner Grotte gezeichnet.

**70. Japan, im Haven von Nangasaki zwischen den** //

Sonnabends den 10 November trüb, neblicht und kalt, es wird heute abgetakelt.

Sontags den 11. Nov. 1804. sonnigt und warm.

Heute fuhr ich mit dem Bote, welches die Rahen und Stangen vom abgetakelten Schiffe an Land brachte, an unsern Plazz (*Kibatsch*) wir hatten jezt weiter zu fahren, als von unserm vorigen Ankerplazze und musten dicht vor der Felsenspizze vorbey, hinter welcher sich das kleine vorerwähnte Fort, wie in einer Kluft oder Grotte befindet verbirgt und welches seinen Eingang durch einen Felsengang hat, der nach der andern Seite hinaus sieht, Da ich beym vorgestrigen Vorbeypaßiren, theils wegen der Schnelligkeit theils wegen der Dunkelheit nicht mit der Vue auf dieses Fort fertig wurde ; so vollendete ich die Zeichnung heute. Am Lande fand ich einige Krabben, wie ich sie in *Teneriffa* schon gesehen hatte [...].

Unter den Nahrungsmitteln, welche während meiner Abwesenheit waren ans Schiff gebracht worden, befanden sich Krebse, der Steuermann hatte einen vollständigen für meine Sammlung aufgehoben, es war derselbe, den ich auf dem *Marquezas* Eiland *Nukahiwah* schon gesehen und mit dem Nahmen *Astacus miliaris*. bezeichnet hatte, nur kleiner und dunkeler.

Montags den 12 Novembr sonnigt und warm.

Dienstags den 13 Novembr sonnigt und warm, obgleich windig

Die Temperatur steigt und Mittag und besonders Nachmittags bis 22º *Reaumur* und fält in der Nacht gewöhnlich bis 8º *Reaumur*

Mittewochs den 14 Novembr trübes und Regenwetter, windig

Heute kamen die Holl Dollmetscher ans Schiff und meldeten, daß eine Chinesische Junke zur Aufnahme unserer Ladung ans Schiff kommen sollte, weil der Capit. einige Vorstellung von einer höchst nöthigen Ausbeßerung des Schiffes gemacht hätte und weil auch nunmehro das Wetter immer rauher und unfreundlicher werden müste.

Donnerstags den 15 Novembr. Buxierten die Japanischen Böte die Chinesische Junke zu uns herunter und baten sich einen großem Anker aus, damit sie neben unser Schiff vor Anker gehen könnte, sie wagten sich aber aus Unwißenheit so nahe heran, daß beyde Schiffe bey, dem starken Winde fast aneinander gestossen wären. Alles was nur einen Pinsel führen konnte, zeichnete nun diese Junke ab. Auch rükten nunmehro die Dollmetscher mit dem Antrage heraus, daß wir während der Ausbeßerung unseres Schiffes, darauf wohnen sollten.

**71. beyden Kayerlichen Wachen, auf dem dritten AnkerPlazze**

Freytags den 16 Novembr fuhr ich an das chinesische Schiff, um seine innere Einrichtung zu besehen. In einem Raume deßelben wurden 2 große Spinnen gefangen deren Füße 2 1/2 Zoll lang waren und die mit ausgebreiteten Füßen 6 Zoll betrugen, ob sie von China mit hieher gebracht worden, oder ob sie Japanischer Geburt seyn mögen, will ich nicht entscheiden [...]

Was mit dieser Chinesischen Junke neben unserm Schiffe werden soll, weis man nicht. Der Gesandte soll sie verlangt haben, anfänglich sagte man um die Geschenke und Ladung darin an Land bringen zu laßen, hierauf wiederum um darin zu wohnen, bis unser Schiff ausgebeßert werden könnte. — Ich kann mir überhaupt so manches nicht erklären — und was ich mir erklären kann, nicht gut heißen. Man belügt die Japoneser und prahlt ihnen Dinge vor, die sie nicht glauben können und nicht glauben werden, dafür belügen sie uns wieder und halten uns nicht Wort, sondern vertrösten uns von einer Zeit bis zur andern.

Sonnabends den 17. Novembr kamen die Dollmetscher wieder zu uns

fragten ob wir die Chinesische Junke besehen hätten und ob wir darauf wohnen wollten. Da ihnen diese Frage mit Nein ! beantwortet wurde ; so machten sie Anstalt den Anker zu heben und die Junke wieder hinauf nach der Stadt zu buxieren.

Die Tage werden nunmehro immer herbstlicher und die rauhe Witterung verkündet den ankommenden Winter, früh und Abends steht das Thermometer bereits auf 4.-3º. da es Nachmittags bisweilen auf 20. steht. Wahrscheinlich rühren die Leibschmerzen, worüber sich viele beklagen von dieser schnellen Abwechselung der Wärme und Kälte her.

Vom 18 bis 23. Novembr ist nichts wichtiges vorgefallen und ich beschäftigte mich deshalb in diesen Tagen mit einer genaueren Beschreibung und Abbildung der Spinnen (*Aranea saliens minima thorace pyramidali obliqus, Tab I. und Aranea navalis Tab. II ex vacuis tenebricosis navis sinicae.*

Sonnabends den 24 Novembr 1804. kamen die Dollmetscher und sagten es sey ein Curier von *Jedo* angekommen, habe aber unsertwegen noch keine Resolution gebracht, weil unser Curier bey seinem Abgange noch nicht in Jedo angekommen war. Nebst dieser fingierten Vertröstung boten sie dem Gesandten ein Haus zur Wohnung am Lande an in welchem 20 Officirs und die Geschenke seyn könnten, wahrscheinlich wird dieses Haus wieder eingezäunt werden wie ein Gefängniß für Diebe.

**72. Japan im Haven von Nangasaki auf dem dritten** //

Sonntags den 25 Novembr 1804 den ganzen Tag sonnigt kalt und windig früh 3 1/2 º Nachmittags 8º *Reaumur Thermom*.

Heute kamen die Dollmetscher wieder und brachten einen Plan, auf welchem das Haus und der eingerichtete Hof, in welchem wir eingekerkert werden sollten, abgebildet waren. Der Gesandte hatte sich diese Zeichnung zu genauerer Durchsicht bis morgen ausgebeten, welches ihm aber abgeschlagen wurde — ein kurzsichtiges Mißtrauen, sie dachten nicht daran, daß wir den Plazz, so bald wir ihn nur selbst sehen, weit beßer abbilden können, als sie. Ihre Zeichnungen sind accurat wie die an Kaempfer gelieferten und es scheint mir nur zu gewiß, daß alle Kupfer dieses Werks nach Jap. Nationalzeichnungen gestochen worden sind.

Montags den 26. Novembr 1804.

Dienstags den 27. Nov. 1804.

Wurde ein seltener und wie es scheint ganz neuer Fisch mit nakten gespaltenen Kieferbeinen (statt der Zähne) der knarrende Vierzahn *Tetraodon strepitans* mit der Angel gefangen S. *Tab*. XI.

er hat auf dem Rücken eine Zeichnung wie das Perlhuhn und macht bey der geringsten Berührung ein

knirschendes [...] knarrendes Geräusch mit seinen Kinnbacken [...]

**73. Ankerplazze zwischen den beyden Kayserlichen Wachen** ***Beroe***
Donnerstags den 29 Novembr 1804. warm sonnigt und windstill
Es zeigten sich heute nebst unzähligen Zügen kleiner Heeringe und Makrelen, die Abends scharenweise von den Raubfischen verfolgt aus dem Waßer heraussprinngen und immer dem Strohm entgegen schwimmen, zahlreiche Beroen oder Melonenförmige Seegallerten von 1 bis 4 Zoll in der Länge [...]
[...]

**74.** ***Beroe Japonica Medusa Saccata Japon. Geryonia Peron***.
[weiter zu den Quallen]

**75.** ***Phasianus Japon. das Casuarhuhn ein delikater Praten***
Donnerstag den 6 Decembr 1804 sonnigt und warmes Wetter 13º *R*.
Es wurden heute unter den Lebensmitteln aus der Stadt zwei große Makrelen (welche die Japoner *Saba* nennen) gebracht *Tab. pisc. Jap*. XII) Der gröste war 40 Zoll lang und 26 Pf. schwer. [...] Auch wurde ein eigenes sonderbares Truthuhn gebracht (*Tab III. av. Jap*.) [...]

Sonnabends den 8 Dec. 1804 wurden unter den Nahrungsmitteln gebracht : 2 neue Fische 1. der gehörnte Klippfisch [...] Tab pisc. Jap. XIV.
Der andere Fisch war der grasgeschupte Amberfisch mit dem langgestreckten Kopfe *Sciaena habrostrata. Tab. XIII*.
[lange lat. Anmerkung zum Fasan]

**76.**
Montags den 10 Decembr 1804. sonnigt und warm (16º *Therm*. Mittags 5. Abends)
Wir fuhren heute nach Kibatsch an Land und nahmen auch daselbst unsere Mittagsmalzeit. Die Ebbe war früh [für] unsere Absichten günstig, wir fanden mehrere Tangarten, die wir vorher hier nicht gesehen hatten [...]
Als wir zurück kamen, machten die Japan. Dollmetscher einen Besuch am Schiffe und vertrösteten noch auf einige Tage, weil das Haus am Lande nicht ganz zu einer warmen Winterwohnung eingerichtet wäre. Am Lande in *Kibatsch* spülte heute früh die Fluth einen ziegelrothen Schleim ans Ufer, bey genauerer Untersuchung fand ich, daß es Krebslaich war.
[...]
Dienstags. Mittwochs und die folgenden Tage bis zum Freytage 14 Decembr war es gut Wetter und sehr warm (15. 16.º Mittags Abends 8º *Reaum*., der Krebslaich oder rothe Schleim vermehrte sich und leuchtete des Nachts wie blaues Schwefelfeuer, heute den 14. Dec. regnete es beständig ich war noch immer mit Zeichnung und Bestimmung der Pflanzenthiere und Tangarten beschäftiget.
Heute waren unter dem aus der Stadt erhaltenen Proviant wieder Fische, jedoch nichts neues, es waren Barsche und Amberfische wie wir sie schon gehabt hatten obgleich die heutigen dreimal größer waren, als die vorigen [...]

**77.** ***Ulva reticulata*** **der Gesandte verläßt das Schiff um am Lande zu wohnen.** ein Sak mit gegitterten Henkel steckt im Treibetange **Fürstenbot Fisen**

Sonntags den 15 Decembr 1804. sonnigt und windig 15º R. Abends 8º. *R*.

Heute vormittags kamen die Dollmetscher und meldeten, daß wir künftigen Montag Erlaubniß erhalten würden an Land zu kommen nämlich an den neuen für uns eingerichteten (wohlvergitterten und auf alle Weise incarcerierten) Plazz nahe bey der Stadt. Sonntags meldeten sie daßelbe noch einmal.
Montags den 16 Decembr 1804. Heute früh um 7 waren die Dollmetscher schon am Schiffe, um 8 Uhr kamen die *Banjos* und nach einer Stunde fuhren einige Abgeordnete des Gesandten nebst einigen Dollmetschern ans Land um das Haus zu besehen und vorläuffig Einrichtungen zur Stellung der *Meubles* zu machen. Als sie zurückgekommen und dem Gesandten Bericht abgestattet hatten, so wurde Mittags gegeßen und gleich nach Tische, fuhr der Gesandte nebst seinem Gefolge und sämtlichen Gepäcke ans Land. Das für seinen *Transport* bestimmte Schiff war ganz mit seidenen Tüchern von allen Farben behangen. Das auf dem ersten Verdeck befindliche Gehänge war von lillafarbener Seide mit dem Wappen des Fürsten *Fisen* geziert, es war ein sehr großes Fahrzeug von 70 Rudern, das dem Landesfürsten gehört. Es wurde von 20 kleinen Böten herunter buxirt. Der Gesandte ließ das Militair nebst der Rußischen Fahne zuerst auf das Japanische Schiff und folgte sodann selbst unter Trommelschlag und dreimaligen Hurrah, der neue Anblick dieses *Transports* und die Neugier hatte eine Menge Leute aus der Stadt herbeygelockt, deren Böte noch die ansehnliche Menge der Wacht und Polizeyböte vermehrte. An beyden Ufern waren die sämtlichen Flaggen und Fahnen der kayserlichen Wachen ausgesteckt und das Militair stand unter dem Gewehr. Uiberdies fuhren aber noch eine Menge Soldatenböte um unser Schiff herum, deren Anführer den Buxierböten mit ihren Papierbüscheln den Weg zeigte. Der Hauptanführer war ein Officier mit einer sehr reich gestickten Uniform. Die mehresten neugierigen Zuschauer auf den Böten, die aus der Stadt gekommen waren, bestanden aus Weibern und Kindern. Ich glaubte nach den öftern Unwahrheiten und Vertröstungen und nach dem so deutlich geäuserten Mißtrauen gegen uns kaum, daß die Japoneser diesen Tag so feyerlich machen würden.

**78.**

Dienstags den 18 Decembr 1804 schön Wetter, sonnigt und warm, 18º *R*.
Heute früh kamen die *Banjo*s, und Dollmetscher nebst einem sehr zahlreichen Gefolge von *Ottonas*, Schreibern, Aufpaßern, Bedienten der Polyzei und Botsknechten ans Schiff, um beym Ausladen und Transportieren der Geschenke und des Gesandtschafts-Gepäcks gegenwärtig zu seyn und jedes Stück aufzuzeichnen. Ob ich gleich durch diesen so zahlreichen Besuch Gelegenheit hatte, manches Neue und Intereßante zu bemerken; so hinderte mich doch die neugierige Zudringlichkeit dieser gemeinen Leute, die in alle Cajüten hereinkommen und alles besehen und betasten, dergleichen Bemerkungen anzuzeigen und zu skizzieren: denn sie blieben den ganzen Tag bis Abends in der Dämmerung bey uns. Unter dem Proviant der heute aus der Stadt gebracht wurde befanden sich zwei neue Fische die ich hier noch nicht gesehen hatte, der erste war ein Barsch mit einem ungleichen getheilten Schwanze (*perca inaequicanda/sesquicandata/Coryphaenoidea* und einem Stuzzkopfe (*Tab. XV. pisc. Jap.*), der andere ein Klipfisch mit einem Rückenmaule gelben runden Flecken in den Floßen und einem Stachel am mittelsten Kiemendekel (vorzüglich aber zeichnet sich dieser Fisch durch sein großes bluthrothes Auge (*Chlomosis*) und durch einen längern Hundszahn auf jeder Seite aus *Chaetadon Acámebar* (*Tab XVI.pisc. Jap*)
Mittewochs den 19 Decembr 1804 sehr warm 21º. *Reaum Therm*.
Heute früh erschienen, wie gestern die *Banjos* und Dolmetscher nebst den Schreibern und Aufpaßern und sezzten die Ausladung der Spiegel und Waaren der Gesandtschaft fort bis an den Abend ; wobey wieder jedes Stück aufgeschrieben wurde. Heute waren nicht so viele Menschen wie gestern und ich konnte doch einiges, ob gleich weniges niederschreiben. Die beyden Böte, auf welchen die Spiegel, der künstliche Elephant und andere Geschenke transportiert wurden, waren zusammengebunden mit breiten Bohlen belegt und mit Strohmatten und rothen Filztüchern bedeckt. — NB.) ich habe eine Skizze davon entworfen.
Donnerstag d. 20 Decembr 1804

［kein Eintrag］
Freytags d. 21. Dec. sehr kalt
Sonnabends den 22. – waren die *Banjos* am Schiffe und besorgten *Transport*
23. _____
kühl 13º *Reaumur*, Portraits und Costume gezeichnet. Abends wurde gemeldet, es sey ein Curier von *Jedo* gekommen, der die Nachricht der Erlaubniß der Reise und für uns näher bey Nangasaki zu ankern gebracht hat.

**79. kurz vor Nangasaki auf dem vierten Ankerplazze**.
Sonntags den 23 Decembr 1804. Kalt 10º Den ganzen Tag Regen
Früh kamen die *Banjos* und ließen unser Schiff bis gegen die Wohnung des Gesandten herauf buxiren. Als der Anker gelichtet wurde, fand ich an denselben mehrere Büschel lebender Sertularien und Seerinden und hatte das Vergnügen die Polypen derselben zum erstenmale recht deutlich zu beobachten. [...]
Wir konnten heute die Schirme Regenhüte und Regenmäntel der Japoneser in der Nähe besehen. Die Regenschirme und Mäntel sind von Papier welches mit Oehl getränkt ist, gemacht und nicht sonderlich dauerhaft, das Gestäbe soll durch die Menge ersezzen was ihm an Festigkeit abgeht, es ist sehr nett und sauber gearbeitet, aber auch eben so schwach, und besteht aus zerschnittenem Bambusrohr welches mit einem Nezze oder Gewebe von Fadenseide zusammengehalten wird. Die Stäbchen sind oberwärts, wie sie in das Scharnier eingreiffen, gespalten. Das Papier ist mit Ringen bemalt und der Schirm sieht von fern schöner und künstlicher aus, als in der Nähe. Die Japoneser halten nicht Wort. Einige *Banjos* und Dollmetscher plagten mich täglich, ihnen Rußische Weiber zu malen, und versprachen mir Farben und Pinsel auch Goldfische und dergl. zu schicken, da sie aber die Bilder hatten ; so schikten sie nichts.

Montags den 24 Decembr. 1804
waren die *Banjos* und Dollmetscher wieder am Schiffe und schrieben alles auf, was ausgeladen wurde, eine andere Parthie *Banjos* und Dollmetscher waren am Lande, nahmen alles in Empfang was in die Magazine gebracht wurde und dabey wurde wieder eben so viel geschrieben. Die Vorsicht, das unbegrenzte Mißtrauen und die Schwürigkeiten, die sie jedem unserer Wünsche entgegensezzen, die Vertröstungen und Lügen die sie uns aufheften und daß sie uns förmlich als Diebe einsperren und uns den Zutritt am Lande, körperliche Bewegung und alle naturrechtliche Freyheiten versagen, ist in der That empörend. Bey dem allen sind sie freundlich und höfflich, ja sogar zudringlich in ihrem Betragen ihre Sitten aber sind roh. sie rülpsen beständig. Die gemeinen Ruderknechte sind noch immer (bey 5° *Reaumur* nakkend auf den Böten ohne zu frieren. Ich sezzte heute die Beobachtung der Polypen von der *Cellularia neritina* und *halecina* fort.

**80.**
Dienstags den 25 Decembr 1804.
Die *Banjos* und Dollmetscher wieder am Schiffe beym Ausladen

Mittewochs d. 26.
es waren 2 Chinesische Schiffe von der Größe, wie das unsrige angekommen, diese wurden heute ausgeladen, die Ladung bestand in Elephantenzähnen, Färberholz, Zinn und Blei Platten Syrupp in Töpfen und in Bast geflochtene Ballen
Alles wurde von den Japonesern ausgeladen und auf Japanischen Böten nach dem Chinesischen Magazine transportirt. Die Böte musten dicht an unserm Schiffe vorbeyrudern und waren mit 2 Ottonas einem Chin Dollmetscher und einem Chinesischen Kaufmann oder Matrosen besezzt. Heute waren die *Banjos* und Doll-

metscher wieder am Schiffe, es wurde zum letzten male Ladung ans Magazin am Lande transportirt.
Donnerstag den 27. Decembr. 1804. sonnigt und kühl.
Heute wurde der Vordertheil oder Schnabel des Schiffes aufgehoben und der Ballast in den Hintertheil geladen, damit der Schnabel, wo man den Leck vermuthete, ausgebeßert und calfatert werden konnte. Ich fuhr mit dem Bote dahin und lösete mir einige Büschel von der *Cellularia neritina*, die am Kiele saßen ab ; es fanden sich auch einige kleine leere Kegelgehäuse *Lepas balanoides* darunter. Es zeigte sich heute wieder der rothe Schleim, welcher aus Krebseyern besteht, um unser Schiff herum und Abends war alles dies leuchtend wie ein kleines Schwefelfeuer, da aber der Wind sich etwas erhob so schlug dieser Schleim gleichsam feurige Wellen. Sobald etwas Waßer vom Schiffe herabgegoßen wird so scheint die Flamme in die Höhe zu schlagen und blaue Schwefelfuncken zu sprühen.

**81.** ~~**Sonnabends**~~ Freytags
den 29 [!] Decembr. 1804. sonnigt und warm. 18º *R*. Abends 10°. Leuchten des Meerwaßers.
Es wurde der Vordertheil oder Schnabel unseres Schiffes heute zur Ausbeßerung noch mehr gehoben, und man löste heute am Kiele einige große Büschel von der *Cellularia neritina* ab, deren lebendige Polypen ich heute noch deutlicher beobachten konnte, wie sie sich schnell zusammenzogen, dann wieder ihre 20 Arme in glokenförmiger Stellung ausdehneten und einen und den andern, deßen Köpfchen ein Nahrungsatom erhascht hatte umkrümmte und ihn nach dem Maule zuführte.
[...]
Sonnabends den 29 Decembr 1804 heftiger Sturm und Regen den ganzen Tag. Es kamen heute Abend wieder 2 Chinesische Schiffe hier an. ich entwarf die Beschreibung der kleinen leuchtenden Krebschen.
Sonntags den 30. Decembr. 1804 trübe und kalt.
Es wurde heute Nachmittags Provision gebracht, darunter waren 2 neue Fische, die *Exocadill* Kroppe und die plattgedrückte Kroppe +.
Montags den 31 Decembr. 1804 sonnigt und kühl 5º R.*Th*.
Heute hatten die Holländer Neujahr, Tuff (*Doeff*) giebt den Dollmetschern einen Schmaus und machte Abends auf Desima eine Illumination.

+*Cottus Crocodilus Tab. XVII. p.J.*
*Cottus depressus Tab. XVIII p.J.*

Seit einigen Tagen sind am Raume auf 200 Ratten todgeschlagen worden und es finden sich noch täglich mehrere.

**82.** ***Japan* im Haven von *Nangasakki* auf dem vierten** //

Dienstags den 1 Januar 1805. kalt und sonnich 2º *R. Thermom*.
Den ganzen Tag Feuer im Camin unterhalten. Abends bemerkte man wieder Illumination auf *Desima* bey den Holländern.

Mittewochs den 2 Jenner 1805. Wind und Regenschauer. Abends wieder Illumination auf *Desima*. Nachts Sturm
Donnerstags den 3 Jenner. Sturm und Regen
Freytags den 4 Jenner beständigen Regen
Sonnabends den 5 Jenner 1805. sonnigt. Nachts auch bey dem schönsten hellsten Wetter ist das ganze Verdeck des Schiffes und alles glatte Holzwerk mit Thautropfen bedeckt.
Sonntags den 6. Jenner. kalt, windig, sonnigt. 5º *R. Th*.

Heute war der erste Weyhnachtsfeyertag der Rußen. Die Gesellschaften gieng an Land zum Gesandten und blieb dort zu Tische, ich zeichnete noch an einer Gegend fort (*Desima*) und als die Freuden überhand nahmen; so endigte ich mein Geschäft und gieng aufs Verdeck : denn die zurückgebliebenen Herrn hatten auch Wein und Punsch getruncken.

Montags den 7 Jenner 1805. sonnigt und windig 8º *R*.
Heute war der 2te Tag des Weyhnachtsfestes der Rußen. Der Gesandte speisete heute am Schiffe und wurde bey seiner Ankunft durch das Hurrah der Matrosen begrüßet. Dieses Fest wurde auch heute durch tapferes Zechen und muntere Gesänge gefeiert und in Ermangelung eines Pfaffen und zeremoniösen Gottesdienstes wie gewöhnlich fortgesezzt. Der Gesandte wolte mit mir sprechen, ich suchte aber auszuweichen, weil die Triebfeder hierzu nur Eigennuzz ist. Abends beym Abschiede ließ er mich expreß zu sich ruffen und bat mich unter dem leidigen und bey den Rußen gewöhnlichen Vorschlage, alles alte Unrecht zu vergeßen um – neues begehen zu können) auf Morgen zu Tische : ich dankte höflichst für die Ehre und meynte, wenn es meine Arbeit und mein Befinden erlauben wollten ; so könne es vielleicht geschehen leider aber habe ich hier so viel traurige Erfahrungen gemacht daß dieses nicht mehr geschehen kann, es wäre unklug und erniedrigend.

**83. Ankerplazze.** ***Mugil.***
Dienstags den 8 Jenner 1805. Sonnigt und warm 10º *R. Th*.
Die Schiffsgesellschaft war heute wieder zum Gesandten an Land gebeten, da ich aber noch von gestern, wo die Provision gebracht wurde 2 Fische zur nähern Untersuchung aufbewahrt hatte ; so blieb ich am Schiffe und vollendete dieses Geschäft, es war ein großer *Sparus dentes*. (*Thai Jap*.) ganz schwarz oder stahlgrau von Farbe und mit mehreren breiten Stacheln in der Rücken und Afterfloße. [...]
[...]

**84. *Iapan* im Haven von *Nangasaki* auf dem //**
[weiter zu den Cellularia etc.]

Mittewochs den 9 Jenner 1805. warm und periodischer Regen
Früh machte ich eine Excursion an das Plätzzchen welches die Japoneser zur Ausbeßerung unserer Barcasse eingezäunt haben, um das Ufer einmal zu betrachten und was sich noch etwa von Tang oder Pflanzenthieren noch an der Barcasse finden sollte, mitzunehmen; ich fand aber wieder nichts als die gewöhnliche grüne Conferve, welche sich dicht über der *Cellularia neritina*, die den ganzen Kiel des Botes und einen großen Theil des Bauches von demselben gleich einem dichten Walde überzog, angesezzt hatte. [...]

**85. vierten Ankerplazze.**
[zu den Cellularia]

Der Vorsteher der hiesigen holländischen Factorey Herr *Toff* hatte dem Gesandten ein Geschenk mit einer jap. *Commode* oder *Bureau* (von 500 Rthlr. an Werth gemacht und ihm Kohl allerley *victualiis* und Zeitungen zugeschickt die uns heute ans Schiff geschickt wurden. Sie waren aber so alt daß ich sie nicht lesen möchte, (vom Sept. Oct. etc. vom vorigen Jahre)

Donnerstag den 10 Jenner 1805 bis zum Freytag, Regen den 11 nichts neues
Sonnabends den 12 Jenner zeichnete und conservirte ich die kleinen mikroscop. Thiere, die ich in diesen Ta-

gen untersucht hatte [...]
Sonntags den 13. Jenner. Ruß. neues Jahr. sonnigt und windig, kalt. Hagel.
Die Schiffsgesellschaft war am Lande und gratulierte dem Gesandten man kam Abends schon ziemlich munter zurück und dann wurde fortgezecht ich hatte heute mit der SchiffsProvision einen neuen rothen Seehahn mit sehr langen [...] Brustfloßen erhalten den ich *Trigula Argus* nannte, den ich heute untersuchte und *Tab. XX.*
Montags den 14 Jenner zeichnete, durch die ganz verschiedene StraalenFloßenzahl [...]

**86. *Larus cruentus ? atricilla ? var. ß) der Blutschnabel.***

Dienstags den 15 Jenner
wurde wieder Provision aus der Stadt gebracht und ich fand unter den Fischen wieder zwei neue nämlich den rothen grosgeschuppten Papageyfisch (*Scarus imbricatus Tab. XXI.*) welcher sich durch seine in dachziegelförmig ZähnBogen abgetheilte nakken Kieferbeine wie die Stächelbauche (*Tetraodon*) auszeichnete und einen violettbraunen bandierten Klippfisch mit doppelten aufgeworfenen Hängelippen (*Chaetodon labrus Tab. XXII*)
[Notiz am Rand zum Papageifisch:] Siehe Cuvier z.d. h.nat. 1.

Donnerstags den 17 Jenner 1805
wurde der Capitaine und der Doctor zu dem Gesandten an Land gerufen der eine mit uns hierher gereisete Japoneser *Madsura* hatte sich mit seinen Cameraden gezankt und sich mit einem Scheermeßer in den Hals gestoßen, die Wunde war aber nicht gefährlich und wurde bald wieder geheilt. Es ist freylich nicht recht, daß die Japoneser ihre Landsleute, die blos aus Liebe zu den Ihrigen wieder in ihr Vaterland zurückkommen, hinter dem Bambus, wie uns einsperren und nicht zu ihrer Familie heim reisen laßen. Dieser Mensch hat den Vorsatz gefaßt, sich zu Tode zu hungern.
Freytags den 18 Jenner 1805 sonnig und kühle
Unter den Lebensmitteln war eine glatte braune Scholle, die mit schwarzen Flecken oder Augen und in der Mitte mit einem Monde oder was geziert war, gebracht worden [...]
Gegen Abend ließ man einen Luftballon steigen, aber der Versuch mißlang, kaum war der Ballon 10 bis 12 Ellen Hoch gestiegen so sank er wieder und legte sich in‘s Waßer.
Sonnabends den 19 Jenner 1805 sonnig und lau. Abends Regen
untersuchte ich die blaue und die breite Makrele (*Scomber glaucus et Cordyla Tab. XXIV.*) und am folgenden Tage
Sonntags den 20 Jenner 1805 die Borstenfloße (*Clupea Thrissa*) vollendet und eine graue Möve *Larus atricillae variet ? cruentes* (*Tab. IV*) angefangen zu zeichnen die die Angel nebst der Lockspeise die für Fische ausgeworffen war, verschlungen hatte, ob sie der Jäger, dem ich sie zuschikte ausgestopft hat oder nicht, ist mir unbekannt, weil er nicht hier, sondern als Bedienter des Gesandten beständig mit Allotrien beschäftiget war.
Regen und warm :
den folgenden Montag den 21 Jenner. *Den Larus variegatus Tab.* gezeichnet und beschrieben sonnigt und warm. Es wurden Tazetten gebracht *Narcissus Tazetta, spatha multiflora, nectario campanulato truncato breviore petalis, foliis planis. Jap. Sisen Thunberg flor. Jap. 131* giftig ist die Wurzel nicht, wie die Japoneser glauben.

**87. Japan im Haven *Nangasaki* vierter Ankerplazz. *Aurellia maxima Japonica***

Dienstags den 22 Januar sonnigt und windig. Abends Sturm.
[es folgt eine Anmerkung zu einem erst am folgenden Tag beschriebenen Tang]

Mittewochs den 23 Jenner 1805 wurde eine große Menge vorbeytreibender Tang aufgefangen, unter dem durch die Fürsorge unseres Astronomen einige unversehrte Yllen [?], wie ich sie noch nicht gesehen hatte, mit heraufgezogen wurden [...]
Der beständige Regen, welcher 2 Tage dauerte hinderte die Observation.
Freytags den 25. Januar 1805. sonnigt und warm. Heute wurde die *Medusa aurita* (*O F Muller Zoll Dan. Vol. II. Tab. LXXVI. LXXVII.*) gefangen und zwar in einer solchen Größe und Vollständigkeit wie ich sie noch nicht gesehen hatte, 10 Zoll im Durchmeßer und 4 Zoll dick in der Mitte der Scheibe. die Schweere mochte ungefähr 3 bis 4 ℔. betragen. [...]

**88. NB. die merkwürdige Fischlaus *Oniscus suffocator***
[...]
Sonnabends den 26. Januar 1805, den ganzen Tag Regen
Sonntags den 27 Januar 1805, den ganzen Tag Regen
Heute wurden bey der Schiffsprovision wieder Fische gebracht es waren keine neue Arten darunter und gewiß sämtliche schon mehrere Tage alt, in den Rachen der Barsche und großen Amberfische aber hatte sich eine große Fischaßel oder Seewanze *Oniscus peora* angesezzt, welche eine Beschreibung verdient, weil sie von der bekannten sehr abweicht
[...]

**89. im Haven *Nangasaki* vierter Ankerplatz *Larus cenentus***
An einer solchen Fischaßel, welche sich wie ein Grind (*phora*) an die Kiemen und andere Theile der Fische ansezzen und ihnen die Nahrung entziehen, und welche mit gekocht worden war, befand sich ein Sack, welcher das Thier um die Hälfte dicker und plumper machte, als ich ihn aufschnitt war er voller junger Thiere, die nicht größer waren wie eine Laus aber doch schon vollkommen ausgebildet waren, als sie sich frey fühlten liefen sie auseinander. Es scheint also daß dieses fruchtbare Thier welches einige hundert lebendige Junge in einem Sacke unter dem Bauche zwischen den Füßen trägt, diese von den Saften der Fische zu ernähren sucht.
Montags den 28 Januar 1805. früh noch Regen Mittags heftiger Wind und Kälte 15º *Reaumur Therm*.
Heute wurde wieder eine andere Mövenart gefangen, welche sich an der Angel gespießt hatte.
[...]
Es waren vorgestern lakirte Dobaksdosen und Fächer und Nähkästchen zur Probe aufs Schiff geschickt worden, damit sich jeder erklären sollte, was und wie viel er, von diesen Waren mit nach Europa nehmen wollte, ohne vorher die Preise zu bestimmen. Der Doctor hatte 20 Dosen bestellt und ich 10 ohne zu wißen, daß eine solche Dose 7 Piaster kostet. Als der Gesandte das Verzeichniß zu Gesicht bekommt; stößt er Schimpfworte gegen mich aus (: als *Coquin* Lumpenhund) und fragt wo ich das Geld dazu hernehmen wollte ? Dieser feine Hoffmann hat also vergeßen, daß er mir noch 50 Piaster von Copenhagen aus schuldig ist f. dieser gewaltig ehrliche Mann hat also nicht Lust, weder der Wißenschaft noch mir, den verdienten Lohn zu zahlen ?

**90.**
Der bisherige häuffige Regen hat mir abermals eine Menge Tangarten und Zoophyten, wie auch Präparate verdorben, an denen ich Zeit und Mühe verlohren habe.
Dienstags den 29 Januar 1805. sehr kalt. 15º *R. Therm*.

Mittewochs den 30. Januar 1805. 13º *R. Therm*.
Heute war der Neujahrstag der Japoneser, welche ihre Böte sämtlich mit grünen Zweigen und mit Orangen

geziert haben und mit Feyerkleidern angethan sind. Früh kam ein Officier auf Befehl des *Gouverneurs* an unser Schiff um zum Neuen Jahre zu gratulieren, über das gewöhnliche Unterkleid trug er ein zweiflügeligtes Gewand in der Gestalt eines Chorhemdes, welches mit der Japanischen Militairtracht einige Aehnlichkeit hat; die beyden Flügel, welche den Kragen bilden, sind in plattgelegte Falten geschlagen und erheben sich bogenförmig über den Schultern, um die Hüften werden eine gespaltene Art weiter Beinkleider, welche hinten auf dem Rücken mit einem Steiffbret versehen sind festgebunden durch die Spalten an den Schenkeln derselben sieht man das Unterkleid, welches wie gewöhnlich ist. Das Oberkleid ist bey allen an dem heutigen Tage aus aschgrauer Seide.
Die symbolische oder emblematische Liebhaberey der Japoneser zeigt sich auch an den Neujahrsgeschenken, der *Gouverneur* hat dem Gesandten eine große Reispastete, welche eine Schildkröte die auf einem Steine sizzt, vorstellen soll, zugeschickt, auf derselben ist eine Düte mit Reis und eine andere mit Salz, künstlich zusammengelegt und mit rothen Rändern geziert nahe der Mitte liegt ein Krebs und eine Orange der Kopf ist von Stroh und Holz und der Schwanz von eßbarem Seetang (*Fucus sacharinus*) geformt. Alle diese Dinge haben ihre bestimmte Bedeutung welche den Glückwunsch in allen einzeln Ideen ausdrücken Auf dem Vorhofe der Gesandten Wohnung ist ebenfals ein Bambugeflecht mit einer Strohdecke aufgerichtet worden, auf welcher die Orange der Krebs und die übrigen Sinnbilder angebracht sind. Die Feyerlichkeiten des Japanischen Neujahres sollen mehrere Tage dauern.

**91. *Japan* Haven *Nangasaki* vierter Ankerplatz**.
Donnerstags den 31 Jenner 1805. sonnigt und kühl 10.-9º *R. Therm*.
Heute ließen die Japoneser fliegende Drachen von Papier steigen und einige Herren am Lande und auf dem Schiffe hatten, an statt der Drachen (aus gespannter 4eckiger Papierflächen) Luftballons von Japanischem Papier zusammen geklebt und ließen sie als Montgolfieren steigen. Der Japoneser *Matsura*, welcher mit uns hieher gekommen und sich wegen Unzufriedenheit mit seinen Cameraden ermorden wollte, wie ich Seite 86 erzählte, hat seinen Vorsazz nicht aufgegeben, da er mit dem Scheermeßer, welches er sich in den Hals stieß seinen Endzweck nicht erreichen konnte ; so hat er seit dieser Zeit weder gesprochen noch gegeßen und scheint den Vorsazz zu haben sich zu Tode hungern zu wollen. Jezzo soll er schon so weit von Kräften seyn, daß er sich weder aufrichten noch die Brühe die man ihm durch Bamburohr in den verschwollenen Hals flößet, hinunterschlucken kann. Die Japoneser sind ganz gleichgültig dabey und versichern, daß dergleichen Beyspiele von Selbstmord gar nichts seltenes unter ihnen wären. Wenn sich Verheyrathete Personen in einander verlieben und ihre Gatten wollen sie nicht frey geben ; so faßen beyde den Entschluß sich zu Tode zu hungern um im künftigen Leben mit einander vereinigt zu werden. Das Mitleid mit ihrem Elende bringt mehrentheils, die nicht begünstigten Ehegatten so weit, sie frey zu geben und dadurch kommen dergleichen disparate Entschlüße nicht immer zur Ausführung —.

Es wurde mir heute eine Pflanze mit Früchten vom Lande zugeschickt, welche zum gelb Färben gebraucht wird es war die *Gardenia florida L.* (Tab. 4) daran sechseckige ovale Beren [...]
Freytags und Sonnabends den 1. u 2 Februar 1805 Regen und Kälte 14º *R*
Sonntags den 3t. Februar 1805. sonnigt und kalt. *Ulva reticulata*
Montags den 4 Februar 1805. sonnigt und kühl, windstill
es zeigten sich heute eine Menge Medusen, die im Waßer wie ein violblauer Ring aussahen [...]

**92. *Medusa aequoreae Ulva reticulata* abgeb.**
[...]

**93.** ***Japan Hafen Nangasaki* 4ter Ankerplatz. eine neue *Ulve* mit dem Triebetange. Sie ist zerrißen wird nachgebildet**

Dienstag den 5 Februar 1805. *Ulva reticulata saccata* die Korb *Ulve*

Man brachte uns einige von den grünen Büschen mit stacheligen Blättern, mit der Stein Eiche der Europäer zu vergleichen *Ilex aquinfolium* auf welche ein Makrelenkopf gesteckt ward, mit welchem die Japoneser sinnbildlich anzeigen den Anfang des Frühlings und den Fortgang und Reichthum der Fischerey ; sowohl diese, als auch die Neujahrssträuße und Symbole mit Krebse Orange Farnkräuter etc. müßen einen ganzen Monat stecken bleiben, damit das dankbare Andenken an Gottes Gaben erhalten werde

Mittewoch den 6 Februar 1805 kühle u sonnig.

Heute wurde mir von *Koschleff* die *Camellia Japonica Tab. V*. mit purpurrothen rosenartigen Blättern und dikken glänzenden orangenartigen Blättern zugeschickt. Die wohlgerathene Abbildung hat mir in der Folge der Jahre der kleine *Fischer in Gorenki* für den *Grafen Alexé Razoumofsk*i abgejagt.

Donnerstag den 7. Febr. warm und sonnig, windig.

Heute fuhren wir an den Plazz, wo die Barkasse ausgebeßert und das neue Bot gebaut wird, weil dieser Plazz um 20 Schritt weiter ausgebreitet wird : ich fand einen hohlen röhrigen und wurmförmigen Tang mit Aestchen [...]

[dann zum Bambus, der sehr gut zu Capseln für Carten und Zeichnungen zu gebrauchen ist]

Freytag den 8 Febr. 1805. sonnig und warm

Die *Camellia japonica Tab. V.* fortgesezt und zergliedert.

Sonnabends u Sontags den 10 Febr. 1805. vollendete ich die *Camellia Jap.* es war sonnigt und warm von 5 bis 10º *Reaumur Wärme*.

**94.**

Montags den 11 Febr. 1805. sonnigt und windig 5º 6 *R. W.*

brachte man unter der Provision eine Barschart (*perca fasciata* mit flachen Kopfe großen kupferfarbigen Augen runden weiten Naßenlöchern und einer knorpeligen Erhabenheit von demselben 3 Stacheln an den hintern Kiemendeckels und sägeförmige spizzigen Zähnen sogar an dem Gaumen. [...]

Dienstags den 12 Februar 1805. sonnigt und windig

Heute untersuchte ich die Tange und Conferven mikroscopisch und fand die *Conferv*: *bronchialis lamata* und *parasitica*, den *fucus tubularis* oder *fistulosus* den *crispus undulato plucatus et*

Abends waren an den Ufern überall große Scheiterhaufen von Bambus und andern dürrem Holz angesteckt.

Mittewochs den 13 Februar 1805 warm 11º R. *Therm. Wärme*

Übrigens trübe neblicht und regnicht. vormittags fuhr ich mit dem Bote an Land auf den Plazz, wo die Barcasse ausgebeßert wird. ich fand die grüne dünnhäutige Ulva [...]

**95.** ***fucus pumilus Esp. Tab CXVI*. Zwergtang, der kleinste Tang**

In der Mitte dieses Arbeitsplazzes für unsern Schloßer und Zimmermann erhebt sich ein Felsen nur wenige Schuhe hoch aus dem Waßer und ist zur Zeit der Ebbe ganz entblößt. Auch dieser ist aus Lavastücken und Vulkanfelsen Gewölle zusammengebacken. Auf diesem Felsen lag Muschelbrut, welche durch einen sehr kleinen filzartigen Tang *fucus pumilus Zoogr*. [?] *Esper Tab. CXVI* zußammengehalten wurde. [...]

*Donnerstags* den 14 Februar 1805. kalt ( 8º *R. Thermom. Wärme*) und Abends noch kälter 3º *R.Th*. den ganzen Tag Regen, Abends Wind, Barometer steigt. Heute erhielt ich vom Lande einen sehr großen todten Feldsperling *Fringilla montana gigantea L*. Wegen einiger Verschiedenheit von der Europäischen (s.d. Beschreib. in der *Fauna*) hielt es der Mühe wert ihn zu zeichnen und gruppirte ihn auf Tab. 1. *Fuguruh*, wo die Japanische Eule abgebildet ist. Wichtigere Gegenstände, als todte Fische und Vögel (die leztern selten) bekommt man in einem Lande, wo dem Naturforscher die Natur versagt und verschloßen ist, nicht zu sehen. Die Losung der Dollmetscher ist hier in jeder Rücksicht *Nix permittirt !* Daher lauffen auch manche minder wichtige Gegenstände mit unter.

Freytag den 15 Februar 1805. sonnigt und kalt. (früh 1. M. 3º *R. Wärme*)

Nachts. 2o kühle. Es wird jetzt beständig Feuer im Camin unterhalten.

Sonnabends den 16 Februar 1805. windig und kalt. den ganzen Tag Regenschauer *Reaum. Therm*. 4. 5.º Wärme und Schloßen [?] : Abends Sturm Nachts Schnee und Eis 2º Kälte *Reaum. Therm*.

Sonntags den 17 Febr. sonnigt und windig. 4º. Wärme *R. Therm*.

Montags den 18. Febr. sonnigt und warm. 8–10. Wärme *R. Th*.

Unter der heutigen Schiffsprovision befand sich ein neuer Fisch den wir wenigstens noch nicht bekommen hatten, es war der Japanische Sterseher, den *Huttuyn* in den *Verhandlingen der Hollandische Maatschapje der Weetenschappen XX Deel p : 314* bereits soll beschrieben haben unter dem Nahmen *Japanse Sterrekipper*. (*Vranoscopus maculatus Tab. XXVI. Japan.*)

Die Beschreibung steht in der *Fauna*. Ich habe heute durch die Provisions Dollmetscher zwei neue Fische ausbitten laßen. Es scheint, als wenn die Dollmetscher nichts von einer Hofreise wißen wollten : denn sie sagen es würde wol ein großer Herr von *Jedo* hiehr her kommen und dem Gesandten im Nahmen des Kaysers empfangen.

**96.**

Dienstags den 19. Febr. 1805. Regen

Mittewochs den 20. sonnigt und windig

Donnerstags den 21. sonnigt u. warm, windig **:** ich zeichnete heute den ganzen Abend (mit der Provision) erhaltenen giftigen Stäuselbauch (*Tetraodon fasciatus Tab*. und den neuen *Cricius cataphractus Tab* oder den gepanzerten spanischen Reuter, welchen *Valentin* als einen *Chaetodon* beschrieben zu haben scheint *Monocentris*

Freytags den 22. Febr. 1805. warm und sonnigt 12º Wärme aber windig. Heute wurden einige kleinere Fische für mich gebracht, welchen die Japanischen Nahmen beygeschrieben waren, es waren doch ein paar unter denselben, die weder *Thunberg* noch *Kaempfer* erwähnt haben. als ein *Tetraodon Ostracion* ein *Frigla* etc. die nähere Bestimmung konnte ich heute noch nicht vornehmen, weil ich sie zur künftigen Untersuchung und Zeichnung in Spiritus conserviren muste. auch sind noch einige unvollendete Zeichnungen rückständig. [...]

Sonnabends den 23. Febr. 1805. sonnigt und sehr warm 16º *R*. Wärme am Lande soll heute an 24º gewesen seyn. Ich erhielt heute durch d. H. *Maj. Friderici* das große Hehlohr/Meerohr mit dem lebendigen Thier *Haliotis Midas cum Limace vivente* Ein Thier welches besonders wegen seines Nuzzens merkwürdig ist, weil es eins der gewöhnlichsten und besonders unter den Armen allgemeines Nahrungsmittel ist. <S. *Kaempfer Tab XIV. fig. 3*. pag. 158> *Awabi* nennen es die Japoneser und laßen sie bey ihren Gastmälern nie fehlen um anzuzeigen daß auch sie noch ein Thier wovon sich ihre dürftigen Voreltern ernährten ganz vorzüglich zu schäzzen wißen, es ist daher allgemeiner Gebrauch geworden, jedem großen oder kleinen Geschenke eine solche Muschel oder ein Stückchen von dem getrokneten Thier beyzulegen. Es ist eins der häuffigsten Seeproducte,

welche genoßen werden. Ich untersuchte heute die noch lebende nakte Seeschnecke (*Doris verracosa obstipata L.*) n.sp. welche gestern war gebracht worden, ich hatte sie mit immer frischen erneuerten Seewaßer in einem Glaszylinder unterhalten, und bis heute beobachtet. Der Körper ist zwei Zoll lang 1 Zoll hoch u. breit oben erhaben bergicht, unten platt an den Seiten und auf dem

**97.**

Rücken mit Warzen besezzt, und mit gelben und braunen Flecken besprenkelt. Die untere Fläche auf welcher die Schnecke kriecht [...]

**98. *Japan* im Haven von *Nangasaki* auf dem //**

Sonntags den 24 Februar 1805. sonnigt und sehr warm 16º *R*.
Heute zergliederte ich den Bewohner des Meerohres und fand einen künstlichen Bau seines Körpers und eben so vollkommene Eingeweide, wie bey der *Sepia*, ich machte die Beschreibung und einige anatomische Zeichnungen. Heute wurden zwar Fische beym Proviant gebracht ; aber für mich kamen die bestellten nicht mit: wahrscheinlich hat man es durch die Schwäzzer vom Schiffe am Lande erfahren, daß sich der Capit. bemüht hatte, für mich dieselben Fische zu bestellen, die nach dem Lande nach *Megasaki* gebracht würden und der Neid hatte sein möglichstes gethan, diese unziemliche [?] Verwendung für die Wißenschaft zu hintertreiben, wie ich es seit einem Jahr auf dem Schiffe schon oft erfahren habe —.
Unter dem Proviante waren 2 Fische, welche die Gesellschaft nicht eßen wollte und welche sollten weggeworfen werden ich nahm sie in Ermangelung merkwürdigerer zur Beschreibung in die *Fauna*, es waren *Zeus faber* der Sonnenfisch *Bloch tab 41*. und *Raja gracilis* oder *Rhinobatas* Hayroche.
Montags den 25. Febr. trübe und regnicht warm 15º *R*.
die anatomische Zeichnungen von dem Seeohr bewohner fortgesezt.
Dienstags den 26. Febr. Sturm und Regen, kühl 12º *R*.
Heute wurde wieder Proviant gebracht aber das für mich bestellte war abermals nicht darunter.
Mittewochs den 27. Febr. sonnigt und kalt, Mittags trüb 8o *R*. Wärme
Donnerstags den 28. Febr. sonnigt und windig. kühl 10º *R*. Wärme
Heute wurden mir einige neue Fische gebracht, die vorzüglichsten waren 1. *Fiefki* eine *fistularia tabacaria* 2) *Sakinoiu* eine *Cepola rosea* rosenrother Band Fisch, 3) ein *Cottus Scorpius* mit 6 Stralen in der Bauch floße, eine Groppe jap. *Aracabù.* und 4.) ein regenbogenfarbiger Schleimfisch mit einem schwarzen Fleck in der Rückenfloße *Blennius Fris. s. Tab XXVIII*. und *Tab. XXXII. XXXIII*. sämmtlich neue Gattungen nach meiner Bestimmung und den Schnäpel *salmo lavaretus vel oxyrhynchus* aber mit weit vorstehender Bauchfloße und großen zahlreichen Zähnen im Rachen selbst der ganze Rücken der Zunge war mit Zähnen besezzt. XXVIII

**99. vierten Ankerplazze.**

Freytags den 1 Mart. 1805 sonnigt und warm, auch windstill *Reaum.Therm*. 16º Wärme [...]
Sonnabends den 2ten Mart. 1805. erhielt ich einen Hayrochen 2 Fuß lang mit 3 schwarzen Puncten auf der Brust.
Sonntags den 3- Mart. sonnigt und warm 16º. *R*. Wärme
heute erhielt ich durch Makar Iwanowitsch 2 Aplysien und einen Limax nebst den Bewohner eines Klipplebers [...] patella [...]
Montags den 4 Mart. 1805 sonnigt und warm windstill (17º R.) Wärme, aber der Barometer fält auf Wind.
Heute erhielt ich durch meinen Freund den Dollmetscher mehrere Dintenfische *Sepia officinalis L. Sepia loligo, media, hexapus*, (welche die Japoner *Sakfat Jka* nennen) und *sepiola*, ferner einen großen Meeraal *Murana*

*Conger* jap. *Hamóh Tab 3.6.* mit einer Reihe großer Zähne im Oberkiefer und 2 Reihen im Unterkiefer nebst Löchern in welche die Zähne einpaßen, wie bey den Caiman, den *Tetradon undulatus* (*Tab 34.*) jap. *Sasibuk* den *Astacus miliaris* (von *Nukahiwah*) jap Devikane und *Ostracion tuberculatus vel aculatus*.

Dienstags den 5ten Mart. 1805 windig und sonnigt 16º *R*. Wärme
Abends Regen Kälte und Sturm aus der See —— 8º ——
Heute erhielt ich eine *Scorpaena horrida*
einen *Tetradon maculatus* (*Camonbuk*) und einen Meeraal *hamó muraena conger*, alles lebendig, und ließ sie in der mit Seewaßer angefüllten Badewanne schwimmen, es wurde auch eine neue Seequalle gefangen, die sehr munter war und sich mit schnellem Springen wie ein Frosch fortbewegte, man könnte sie der Farbe nach *Medusa hyalina* (tab verm) nennen. Nachmittags brachte man mir eine neue Röhrenmuschel mit sehr kleinen unzulänglichen Deckschalen und Stachelbüscheln auf dem Rändern weshalb ich sie *Chilon echinatus tab. verm*) nenne. Diese Schnecke kroch schnell und hielt sich am Glase sehr feste.

**100.**
Mittewochs den 6 Mart, trat Kälte mit 5º *Reaum.Therm* Wärme
Donnerstags 7. Regen
Freytags - 8. —
Sonnabends 9. Kälte 3, 1/2 º Wärme *R.Th. Aca ango jap. Tab. XXXVII.*
*Lophius Faujas u Chimara*
*Koosù. Tab. XXXII.*
Sonntags 10 Kälte und sonniges Wetter heftiger Wind
Heute fand ich den schwarzen Papageyfisch *Scarus niger*
unter der Fisch Provision. (*Tab XXXVIII*)
Montags den 11 sonnigt und kalt

Dienstags den 12 sonnigt und kühl früh und nachts kalt [...]
[...]
Mittewochs den 13. Mart. Beobachtete ich einen *Daphnia Opus pisciformis* (Tab. 38.) in unserm Trinkwaßer, der sehr salzig schmeckt und Diarrhoen verursacht. Nach Tische fuhr ich aufs Land, weil es sehr schönes Wetter und warm (16º *R.Therm*) war

———

Freitags den 15. Mart. Erhielt ich einen Meerengel Tab. XXXIX. *Squalus squatina* der sehr schön gefleckt und von den Europäischen verschieden war, ferner erhielt ich einen rothgeflekten Barsch tab. 40, einige Tintenfische, die ich zergliederte und den Tintensaft zur Malerey aufhob, und eine Menge kleiner Krebse und Fische [...]
Sonnabends den 16 Mart. erhielt ich den chines. Schaufelkrebs *Sq. Mantis* und eine glatte längliche Scholle mit schwarzen weis geringelten Flecken in den Floßen, da es aber heute sehr stürmisch war und anhaltend regnete, so wurde die genauere Untersuchung und Beschr. verhindert.
Sonntags den 17. Mart. Sturm und anhaltenden Regen
Montags den 18 Mart. sonnig und warm den weisgeflekten Aal.
Dienstags den 19 Mart. erhielt ich den scheerenlosen Hummer *Cancer homarus L. Palinurus Fabr*. und einige Quitenwürmer, die ich zergliederte; da es aber sehr windig war und ich den ganzen Tag im Freyen auf dem Verdecke stehen muste ; so hatte ich mich erkältet und am

Mittewoch den 20 Mart und die folgenden Tage litt ich an *Rheumatismen* indeßen untersuchte ich doch eine eigene Art Braßen den man mit der Provision gebracht hatte, und nannte ihn wegen seinem langen Schweinskopfe *Sparus aper*, er hat sehr lange knochige Strahlen in der hintern After und Bauchfloße und einen schwarzen Fleck in dem hintern weichen Theil der Rückenfloße er ist nachher zum *Banjos* avancirt –

**101.**

Donnerstag den 21. Mart. 1805. erhielt ich eine *Raja aquila* vom Lande zur Untersuchung und Beschreibung, der erste Lieutenant fing eine neue Seerauche, *Amphinome dorso brancha spiraculata item Aphrodita Slava Pallassi Miscellan. Zool*

noch war es zwar sonnig aber sehr windig

Freytags den 22 Mart. sonnig und windig *Misago* oder *Bisago Kaempferi*

es war heute wieder ein Seeabicht *Falco Nisus marinus* an der Angel gefangen worden und ich hatte Gelegenheit ihn zum zweitenmale zu untersuchen und zu beschreiben, die neugierigen Matrosen hatten aber auch diesen, wie den vorigen, vor der Zeit fliegen gelaßen.

Sonnabends den 23 Märtz./ein Chinesisches Schiff wurde vom Anker getrieben und nach *Megasaki* in die Bambu geführt/Sturm und Regen mit heftigen Windstößen und Gewittern. Gestern hatte mir der Astronom das *Arum triphyllum* mit vom Lande gebracht welches ich heute zeichnete.

Sonntags den 24 Märtz sonnigt und warm. Nachts Windstöße mit Gewitter. Heute beobachtete ich die *Doris verrucosa*, welche man auch wol *obstipata* nennen könnte, ein sehr großes Exemplar, 6 Zoll lang 3 Zoll breit, eine Seeschnecke an welchem ich eine eigene Bemerkung machte : Sie ist eine längliche sehr muntere und behende Seeschecke und besonders ein guter Schwimmer. [...]

Montags den 25. Regen und Windstöße. Der eine Chineser wurde herausbuxirt

Dienstags den 26. heftigen Sturm mit Gewittern und beständigen Regen. Heute wurde das Schiff vom Anker getrieben und es hätte nicht viel gefehlt, so wären wir auf den Sand vor Desima sizzen geblieben, bey dem weichen Grunde wäre wol kein Scheitern aber wol ein Umfallen des Schiffes, das keinen so breiten Kiel und flachen Bauch hat, wie die Chinesischen, zu besorgen gewesen. Gegen Abend wo es wieder still wurde ließ man einen zweiten Anker zurückwerfen um uns daran von diesem gefährlichen Plazze hinweg und nach dem alten hinzuziehen. Theils von den Tonnen theils von dem Ankertau erhielt ich dieselben *Sertularien Cellularien Lepaden fuci* [...] Krebse und Nereiden wie ich sie schon ehemals aus diesem Grunde erhalten hatte, ein Beweiß daß auf den kleinen

**102.**

Bezirk den man uns erlaubt kennen zu lernen wahrscheinlich nichts weiter vorkommt als dieses. Gestern erhielt ich von dem Plazze, wo unsere Böte ausgebessert werden das *Aron triphyllum* welches jezzo blühet. Die *Doris* gab noch immer die polypenlosen Aestchen der *Cellularia neritina* von sich, die sie mit den erwähnten ungefiederten Arten welche den After umgeben herauszog. Gegen Abend war die *Doris* gestorben und hatte das Maul welches in einer kropfigen Scheibe bestand [kl. Skizze] heraus gestreckt.

Mittewochs den 27 Mart. 1805. Heute war /es/ warm sonnigt und windstill der beständige Regen der vorigen Tage hatte so viel Naße auf das Land verbreitet, daß die Sonne den ganzen Tag feuchte Dünste zog, es war den ganzen Tag undurchdringlich nebelig. 16º *R Th*.

Heute fand ich unter der Schiffs Provision einen fliegenden Drachenkopf *Scorpaena volitans Blochii Gasteropeus vel. Linn*. er war weis und sauber wie Elfenbein mit rosenroth geränderten Schuppen [...]

**103.**
Der Gesandte hatte mir heute Blumen geschickt und *Macar Iwan*. einen Wels ein *Argentina* eine olivenfarbene *Scolopeadia olivacea* mit 120 Paar Füßen und Koschleff den kleinen Aal *Unagi*.

Donnerstags den 28 Märtz 1805. den ganzen Tag Regen (kalt 8º Wärme *R*.)
es wurde den ganzen Tag eingeheizzt, ich erhielt vom Arbeitsplazze, wo die Böte ausgebeßert werden eine sehr schöne Seeschnecke mit prächtigen Farben [...]

Freytags den 29 Märtz 1805 kühl und windig 14º *R.Th*. Wärme
Heute erhielt ich eine andere nakte Seeschnecke vom Arbeitsplazze, welche die Fluth ebenfals ans Ufer geworfen hatte. sie war schwarz gestaltet wie eine *Aplysia* [...]

**104. Fürstenbot**
Heute war auch, wie die Dollmetscher berichteten, der große Herr (wie sie ihn nennten) ein Bevollmächtigter des Jap Kaysers, von Jedo hier angekommen und da es verboten sey morgen zu verkauffen, indem sich kein Japoneser auf der Straße sehen laßen dürfte ; (eine Ehrenbezeugung für die repräsentirende Person des Kaysers) so könne auch morgen keine Provision ans Schiff gebracht werden.
Sonnabends den 30 Märtz 1805 sehr warm sonnigt und windstill 18º Wärme *R.Th*. Heute erhielt ich eine sehr schön colorirte platte Dorisartige Seeschnecke, vom Arbeitsplazze, da sie keine Floßen am Schwanze und auch keine Stirnfloße hat auch nicht schwimmt ; so nannte ich sie auch Doris *acellata*, sie ist platt auf dem Rücken, mit Hügeln versehen und hat sehr schöne blaue Flecken und weit hinten auf dem Rücken einen mit gefranzten Blättchen umgebenen After (*Doris acellata plana Tab VII V. J.*)

Sonntags den 31. Märtz (Regen und Wind)
Heute konnte ich die Genitalien und den Eiyerstock der *Aplysia* sehr genau beobachten.
Montags den 1 Aprill 1805. warm 16º *R. Th*. Nachmittag Regen.
Heute fuhr der Abgeordnete des *Cubo* nebst dem *Gouverneur* nach den kayserlichen Wachen herunter es waren eine Menge größer Böte und *Banjos*. Auf dem Herrschaftlichen mit roth behangenen steckte ein sehr schön vergoldetes Ehrenzeichen und Wappen des Fürsten *Fisen*. Ich zergliederte heute einige Aplysien und machte anatomische Zeichnungen davon
Dienstags den 2 Aprill sonnigt und windstill, sehr warm 16–18º *R.Th*.
Heute gaben die Dollmetscher Nachricht daß morgen die Buden geschloßen wären und keine Provision gebracht würde,

Mittewochs den 3. Aprill. sonnigt und warm 16º *R.Th*. Nachmittags Regen
Heute berichteten die Dollmetscher dem Gesandten, daß er Morgen zur Audienz bey den *Gouverneur* abgeholt werden sollte und lehrten ihn die *Complimente* u. Verbeugung
Donnerstag den 4. Aprill, sehr heiß 21º *R.Therm*. Heute war des Gesandten erster Audienztag, man führte ihn mit seinem Gefolge von *Banjos* Böten zum *Gouverneur* und trug ihn sodann in einem *Norimon* durch die Straßen. Der Hauptvorwurf war daß man an den großen *Cubo* nicht schreiben dürfte.
Freytags den 5. Aprill Gewitter Regen und Windstöße. Heute wurde die zweite Audienz gegeben, wo ihm von dem *Gouverneur,* und dem Kayserl. Gesandten *Resolution* von wegen des Handels sollte gegeben werden.

**105. der kaiserliche Brief**
Die Resultate und Antworten waren folgende 1.) Die Gesandtschaft und Geschenke werden nicht angenom-

men. Ihr könnt uns nichts geben; hingegen wir können auch wol etwas geben; aber nicht für Bezahlung — Handel findet zwischen Japan und Rußland nicht statt +), die Waaren Kleidungstücke, Lebensmittel, welche wir euch auf Befehl des großen Kubo geben werden und gegeben haben, sind Euch geschenkt ! 2.) Es ist unrecht, daß der Rußische Kayser an den großen *Kubo* einen Brief geschrieben hat, Alle *Correspondenz* ist in Japan untersagt und an den größten Monarchen der Erde kann man ja ohnedies keine *Correspondenz* wagen —. Ferner ist es unrecht, daß ihr mit einem Kriegsschiffe hierher gekommen seyd.
3. Japan hoft fernerhin mit Rußland (obgleich ohne Handelsverkehr und nähere Verbindung) in Freundschaft zu leben und wird keinem Rußischen Schiffe, das durch den Sturm an die Japanischen Küsten getrieben werden sollte, die nöthige Hülfe und Unterstüzzung versagen. Da übrigens Japan an keinem Bedürfniße einen Mangel leidet und mit allem nöthigen und nüzzlichen bereits durch die Holländer Chineser, durch *Corea* und *Lykeo*, und am besten durch sein eigenes schönes Land so reichlich versorgt ist; so kann ihm der Handel mit Rußland von keinem Zweck und Nuzzen seyn.
+ Japan habe an Lackirten Sachen keinen solchen Uiberfluß, daß man ein großes Schiff damit laden könne. NB: diese übel verstandene Vorstellung, als wolle man das Schiff mit LackWaaren laden, soll sich von dem öftern Nachfragen nach dergl. Kleinigkeiten herschreiben) Um zu beweisen daß man alles Pelzwerk entbehren könne hat der *Kubo* auch wahrscheinlich befohlen, daß man uns einen Vorrath von seidener Watte zur Schiffsladung legen solle. Deshalb werden uns 2000 Bündel seidene Watte abgeliefert, welche mit 3 Stricken, wovon 2 die *Gouverneurs* von *Nangasaki* der dritte den Bevollmächtigten des *Kubo* andeuteten, gebunden und versiegelt waren. Zugleich wurde versichert, daß man außer dieser Ladung unser Schiff noch mit der nöthigen Provision auf 2 Monate (als Sakki, *Soja*, Reis, Salz Rettiche, Zwieback, Salzfleisch Fische, Taback, Senf, Eßig, Waßer, Holz etc. versorgen würde.
Heute am Sonnabend den 8 Aprill wurde es jählings kalt und windig -10º *R.Th*. Wärme. Die Dollmetscher meldeten sich heute wieder bey dem Gesandten um nachzufragen ob er noch etwas zu erinnern hätte, er soll aber blos an Lackwaaren, seidene Zeuge und andere Kleinigkeiten, wiewohl mit abschläglicher Antwort angesucht haben. Man sagt *Skiseuma* habe ihm erklärt, ein Mann, der in der Person des Kaysers Hier wäre, dürfte nichts annehmen und sey über alle Geschenke erhaben. *Skiseuma* soll ihm schon so manches erklärt haben.

**106. *Japan* im Haven von *Nangasacki* auf dem //**

*Fisens* Fürstenbot

Sonntags den 7 Aprill 1805 Regen und kühles Nebelwetter (8º *Reaum. Therm*. Wärme) Heute hatte der Gesandte die dritte Audienz bey dem *Gouverneur*, die Nachrichten von dem Erfolge derselben wurden aber schriftlich abgegeben und so geheim gehalten, daß ich nichts erfahren konnte, als man eile zur Abreise. Die Japoneser, welche nahe an unsrem Schiffe vorbey ruderten, zeigten auch mit spöttischen und komischen Geberden, daß wir bald absegeln müsten. 85 Kästen mit 2000 Bündel Seidenwatte zur Fütterung der Winterkleidungen sind uns auch bereits abgeliefert worden. Der Gesandte soll zu den Dollmetschern gesagt haben, daß sie doch die Geschenke blos für ihn bestimmen möchten, diese sollen aber erwiedert haben : es sey ausdrücklicher Befehl der *Gouverneurs*, diese Geschenke blos für die Diener i. est *Officire* abzuliefern — Wenn man auch annimmt, daß das, was hier auf dem Schiffe erzählt wird, sehr durch Uibertreibung verunstaltet sey ; so muß man doch bemerken, daß der Stolz der Rußen, der durch die Habsucht so leicht zu verdrängen ist— von den Japonesern sehr gedehmüthigt worden sey. Unter den Lehren die *Skiseuma* dem Gesandten gegeben zeichnet sich besonders ein Spruch aus : Ein Weiser Mann soll seyn wie Waßer, das sich nach jeder Form des Gefäßes schmiegt, in welches man es gießet.
Montags den 8 Aprill 1805 sonnigt und kühl, 10º *R.Th*. Wärme
Heute kam die bestimmte Nachricht, daß unser Aufenthalt im Haven von *Nangasaki* nicht über 1 Woche mehr

dauern kann. Aus einen niedergeschriebenen Gespräche des Hr.v. *Loewenstern* mit dem Gesandten ersieht man nur allzu deutlich, daß der Gesandte die für die Mannschaft des Schiffs von den *Gouverneurs* bestimmte Ladung Salz und Reis hat an sich bringen wollen, so wie die einem Gesandten so unanständige kleinliche Habsucht auch bey allen andern Fällen hervor geleuchtet hat.
Dienstags den 9 Aprill windig und kalt 6 – 8º *R.Th*. W.
Gleich früh kamen die *Banjos* und Dollmetscher an das Schiff und besorgten die Ladung des Proviants an Salzfleisch und dergl. der in Fäßer eingeschlagen war, ich zeichnete wieder Köpfe und ergänzte die Japanischen Nahmen von meinen Fischen und Seegewürmern.

**107. vierten Ankerplazze**.
Mittewochs den 10 Aprill 1805. kalt und windig beständigen Regen
Donnerstags d. 11. — etwas wärmer 12º aber regnicht. Es wurde heute zwar geladen aber die Dollmetscher und *Banjos* blieben in ihren Böten bey dem Schiffe.
Freytag den 12 Aprill warm und sonnigt 16º *R.Th*. aber windig. Es wurde heute 2000 Stroh Salz geladen, die Japaneser kamen aber nicht ans Schiff : ich vermuthe es muß ihnen wegen Argwohns, als könnte insgeheim etwa eine Kleinigkeit eingetauscht werden, verboten seyn, die *Banjos* und Dollmetscher bleiben in ihren Böten auf dem Waßer. Vom Lande brachte man einige Feldblumen, es war *Ranunculus Asiaticus* [...]

Sonnabends den 13 Aprill. warm sonnicht und windig. 16º *R.Th*. Heute wurden die Canonen und anderes Schiffsguth aus unsern eigenen Magazinen wieder an das Schiff gebracht, die *Banjos* und Dollmetscher aber kamen nicht an Bord sondern blieben wieder davor auf ihren Böten.

Sonntags den 14. sonnigt und warm 20º. *R. Th*. ich brachte heute den ganzen Tag am Lande zu, wo die Böte angestrichen wurden, und ergänzte meine Zeichnung von dem romantischen Dörfchen. Am Strande fand ich nur große *Ulva laciniata* und einen rothen beynahe fingersdicken *Fucus* der bald an der Sonne zusammenschrumpft und weiße spießige Salzkristallen ausstieß. Er bestand fast ganz aus Waßer und Gallerte und zitterte wie die *Medusen*, die *Aplysien* und ihre Eyer waren fast unter jedem Ufersteine, den ich aufhob, anzutreffen, auch fand ich unter mehrern Steinen, *Chitonen*, nebst ihren Eyern, [...]
Gleich hinter unserm Arbeitsplazz ist Busch bergan gewachsen hinter welchem ein Familien-

**108. Japan im Haven von *Nangasaki* auf dem 4 Ankerplatze**

begräbniß mit einem Leichenstein und Inschriften zu sehen ist, welches ich zeichnete. Heute kam auch ein vornehmer Japoneser zu Fuß an das Bambusgehege mit 20 Mann Gefolge, man trug ihm ein goldenes Gefäß mit Salz oder Asche nach, Er schien von der kayserlichen Wache herauf zu kommen und war seinem *Mong* oder Wappen nach zu urtheilen von *Jedo*, er sahe daß ich weibliche Costume zeichnete und bat mich, in dem er mir Papier übergab, daß ich ihm meinen Nahmen darauf schreiben sollte, ich schrieb und zeichnete ihm einen Rußen.

Montags den 15. Aprill 1805. Sonnigt und warm 21º *R.Th*.
Heute früh wurde die mit einem Verdeck versehene Chalouppe ans Schiff gebracht und die Arbeitsleute verließen den Arbeitsplazz mit allem Geräth und Werkzeuge. *Kosheleff* brachte mir eine kleinere Varietaet von der *Azalea Indica*, welche die Japoneser *Kirisimo Tsutsusi* nennen. Sie hat nur 5 Staubfäden [...].
Schon seit gestern sind mehrere Japanische Fahrzeuge hier angekommen und heute gegen Abend sahe man die ganze Flotte von *Tschikusing* hier um uns herum vor Anker gehen, Abends gingen noch mehrere Ober *Banjos*

böte mit starkem Gefolge und vielen Ehrenzeichen und Laternen unter beständigem Trommelschlag nach der Stadt und wieder zurück nach den kaiserlichen Wachen, das Geschrei der Ruderknechte hörte man die ganze Nacht hindurch.　Man hatte heute wieder den ganzen Tag geladen, und die Japoneser hatten den ganzen Tag Proviant für die Reise zugeführt, ich zählte 10 Schweine und 50 Hühner 10 Fäßer Sakki und 15 Fäßer Soja, mehre Fäßer eßbare Bambu wurzeln, Misu, Reiß, Weizenmehl　Toback, Senf Rettich und Waßer, Zwiebeln und Knoblauch

**109.　Fürstenbot Tchikusings**

Dienstags den 16.　Aprill 1805. windstill sonnigt und warm　22º *R.Th*.

Heute wurden die Geschenke der Japoneser an den Gesandten und sein Gefolge an das Schiff gebracht sie bestanden in seidner Watte et und zugleich in Kleinigkeiten die gegen andere Kleinigkeiten waren eingetauscht worden, als Fächer Zeuge, Bilder, Kämme Lackwaren Pfeiffen und dergl.　Die Dollmetscher hatten heute zugleich den Befehl von *Gouverneur* gebracht, daß wir morgen unsern Plazz verlaßen sollten.　Heute früh kamen einige Japaneser und zeichneten die Instrumente, nämlich das *Inclinatorium* den *Compas*, den *Barometer Thermometer* und *Hygrometer*.　Die *Cajüten* und andere Sachen wurden heute schon reisefertig und nagelfest gemacht.　Die Gesandtschafts Kisten　Kasten und Geschenke wurden heute an Bord gebracht.

Mittewochs den 17 Aprill. windstill, sonnigt und warm　22º *R.Th*. W.

Heute kam die Gesandtschaft an Bord.　*Tsikusings* großes Bot besorgte den Transport, die Vorhänge waren zinnober und weis, die Gehänge Orange und weis, die Begleitung bestand aus 4 *Banjos*, mehrere Ottonas und sämtlichen Dollmetschern, welche bis Nachmittags an Bord blieben und mir Gelegenheit gaben, zu guter Lezte noch einige National Portraits aufzunehmen.　Wir waren von 20 und mehrern Banjosböten aus *Tsikusins* Flotte umgeben und wurden von 100 Matrosenböten buxirt bis unter den Pfaffenberg wo wir vor Anker giengen. Man versorgte uns noch sehr reichlich mit Provision und wünschte uns glückliche Reise der *Gouverneur* soll einen Paßport an alle Japanische Küsten mit gegeben haben, den wir im Fall unglücklicher Ereigniße benuzzen können.　Aus allen dem ergiebt sich also, daß die Japoneser zwar nach ihren verkehrten National- und Regierungs Grundsäzzen, aber doch außerdem immer beßer und ehrlicher gegen uns als wir (mit unseren Handelsabsichten-) gegen sie, gehandelt haben.　Nirgends haben wir auch so frisch und so gut gespeiset als in Japan, wo wir alle Tage frische Lebensmittel und für Japan in ziemlicher Mannichfaltigkeit erhielten, welches um so mehr zu verwundern ist, da die Japoneser so äußerst spärlich leben und mit etwas wenig Reis und Thee ohne Zucker, ohne Brod etc. für einen und alle Tage vorlieb nehmen,

**110.　Abreise von Japan, Sondierung der Japanischen Küsten, Insel *Satsima, Oki***

<u>den 18. Aprill</u> 1805　früh wehte ein günstiger Wind, es wurden die Anker gelichtet und wir giengen unter Seegel.　Es war eine *Gorgonia Placomus* und eine der *muricata* oder *pilosa* ähnliche *Sertularia* mit dem Anker heraufgezogen, an welcher ich die lebendigen Polypen an ihren Mündungen　[...] beobachten konnte, auch zeigten sich einige kleine sehr schöne rosenrothe Seescheiden (*Ascidia*) mit ihren beyden Mündungen, ich war eben im Begriff eine Zeichnung zu machen, als mich ein kleiner Sturm überraschte und den Glas *Cylinder* über den Hauffen warf die Seekrankheit stellte sich auch ein und ein plözzliches Unvermögen zwang mich diese Körper dem H.D.　*Langsdorf* zur Verwahrung zu übergeben, welcher sie nachher verlohren hat.　Ich hatte heute den frühen Morgen benuzzt und eine gestern angefangene Zeichung des umliegenden Landes von unserem jezzigen Ankerplazze aus zu vollenden.

## D.　Gründe für das Scheitern der Veröffentlichung

Der Tagebuchtext ist in seiner Form unbalanciert, denn er enthält zuviel wissenschaftliche

Beschreibungen von Flora und Fauna, die von vornherein nicht für ein allgemeines Lesepublikum bestimmt waren und z.T. dann anderweitig veröffentlicht wurden.

Durch die beiden Publikationen seines Rivalen Langsdorff wurde Tilesius der Wind aus den Segeln genommen, denn die sog. naturhistorische Beschreibung der Weltumseglung war damit weitgehend abgedeckt und Tilesius' Bericht in gleicher Form wäre überflüssig oder hätte sich auf seine Stärken (d.h. die Bilder) konzentrieren müssen. Da Tilesius aber noch nicht einmal die Kommentare zu seinen Illustrationen für Krusensterns Reisebericht fertigstellen konnte, wäre eine ähnlich gelagerte eigene Publikation ein Affront gegen den Kapitän gewesen. Für eine Publikation der Erläuterungen hätten die ursprünglichen Illustrationen erneut gedruckt werden müssen. Das war Krusenstern einfach zu kostspielig. Auch daher blieb der Teil 4 (2. Abteilung) auf der Strecke. In Russland hatte Tilesius es sich inzwischen mit den Verantwortlichen und möglichen Sponsoren gründlich verdorben. Als Privatier in Deutschland war er mittellos und ziemlich isoliert.

Da Tilesius auch in Konkurrenz zu Kaempfer und Thunberg stand, hätte er sie als Nachfolger übertreffen müssen. Das konnte er aber weder fachlich noch finanziell. Er war kein universell ausgebildeter Naturalist, sondern eingestandenermaßen Spezialist für einige Seetierarten. Beide Vorgänger hatten bessere Arbeitsbedingungen in Japan vorgefunden : Aufenthalt an Land, längere Verweilzeit, bessere Sammelmöglichkeiten, etc.

Je länger Tilesius mit seiner Publikation zögerte, um so mehr veraltete sein Material : Thunberg hatte wie Tilesius kaum mehr als 50 Fische beschrieben, Siebold und sein Nachfol-ger Heinrich Bürger konnten mit 650 Fischen aus Japan aufwarten, die dann Eingang in die von Hermann Schlegel und Coenraad Jacob Temminck angefertigte Publikation fanden. Tilesius' Vorarbeiten blieben somit nur Stückwerk und deshalb aus gutem Grund weitgehend unberücksichtigt.

Seit der Kritik von Oken in der *Isis* 1817 war das wissenschaftliche Renommé von Tilesius angeknackst. Also verblieb ihm nur die Möglichkeit, seine Reiseaufzeichnungen für eine Vorlesung als Privatdozent einzusetzen, oder mit Nostalgie selber durchzublättern.

## E. Zwischensumme

Auch wenn diese Aufzeichnungen heute wissenschaftlich nur noch von beschränktem historischen Interesse (und dann vor allem für Taxonomen, die damals wie heute um eine Reform ihrer Grundlagen bemüht waren) sind, sollten diese Notizen eines querköpfigen "Fachidioten" doch nicht ganz dem Vergessen anheimfallen. Mit geschultem Blick beschreibt er den ziemlich

eintönigen Aufenthalt hinter einem “Bambusvorhang”. Zwar blieb die Interaktion auf einen kleinen Personenkreis beschränkt, doch suchten die Europäer das Typische (Nationalphysiognomie und -charakter) von Japanern zu erfassen.

Bringt man das Tagebuch in Verbindung mit Tilesius’ verstreuter Korrespondenz, kommen viele andere Details zum Vorschein und werfen ein aufschlussreiches Schlaglicht auf die nicht ganz reibungslose erste russische Weltumseglung. Selbst sonst nie erwähnte Bestechungsversuche der japanischen Beamten durch Tilesius tauchen in einem Brief an Thunberg vom 5. Sept. 1810 auf[38]:

> Vous verrez en lisant cette Volume, que nous n’avons pas eu la même liberte et locomotivité que les Hollandois cependent notre sejour dans le port de Nangasaki, mais quand à moi même je m’avois procure toujours la permission de faire quelques petites excursions au moyen des cadaux, que je faisais a mes amis Skiseuma, Sakesaburro, Sakousitiro, Namura Jennoski et autres interprêtes. J’ai eu la precaution de me procurer auparavant en Europe quelques doucaines des montres de Geneve, qui font les passez par tout et qui m‘ont fournis l’occasion de profiter de la nature defendue et de la liberté pour copier une quantité des objéts de l’histoire naturelle et des paysages.

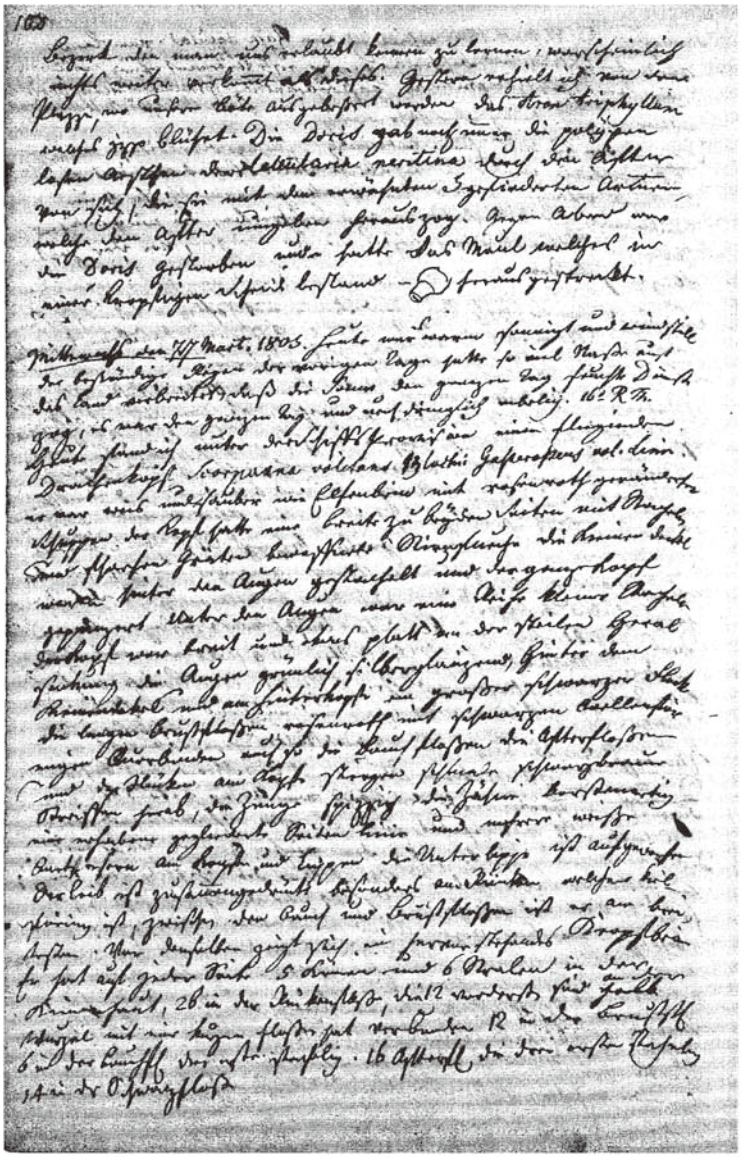
Der am Mikroskop geschulte Biologe hat oft über den Einzelheiten das große Ganze aus dem Auge verloren, es jedenfalls nicht im Tagebuch notiert. Dennoch war er fast selbstlos, was die Weitergabe von Material an andere, besser geschulte Forscher betrifft (etwa an die schwedischen, französischen, anglo-amerikanischen Kollegen).

Schon während der Reise hat man ihm das Sammeln und Sichten schwer gemacht - kein Wunder, da auf dem kleinen Schiff wenig Stauraum, beim russischen Gesandten eine sehr hinderliche Antipathie und bei den Mitreisenden auch nicht so viel Aufgeschlossenheit für die Bedürfnisse eines Naturforschers vorhanden war. Die wiederholten Entwendungen, aber auch die Nachlässigkeit im Umgang mit seinen eigenen Aufzeichnungen trugen das ihrige zum Scheitern eines abschließenden Berichtes bei.

---

[38] Universitetsbiblioteket Uppsala, Thunberg-Nachlass, G 300 ad. Das erwähnte Werk bezieht sich auf Band 1 der Krusensternschen Weltumseglung.

F. Abbildung der Seite 102 aus dem Tagebuch (Mühlhausen Stadtarchiv, Tilesius-Bibliothek, Signatur: Nr. 82/291)



# For a Walk :
# Experientially Learning a Lost Way of Life

Scott Watson

"*When you put your body in the mother nature, you sure feel the greatness of the god creation. It embrace you tenderly and wash your agony you picked up in yourself off by the grand view and the connoted wisdom*."

[The above passage appears on the back face of an inexpensive backpack Morie bought at *Daiei*, which is like a K-Mart in America.]

Athletes, models, those socially self-conscious of their appearance, and still others, for health reasons, are already body conscious, but their concerns are areas already mapped out by others inside our heads and have as their impetus always something in a world, something professional, financial, something social and cultural.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Walking is not mentioned on any tourist pamphlet I read. But for a few chopped phrases in small print informing a reader that someplace is a five-minute walk from a train station or a bus stop, there is no information for a person on foot. A journey by foot is pretty much a lost art, a lost way of life, a lost experience, a forgotten subject.

These days the few there are who live on foot a while are out to prove something, to make a journey for the record, as a feat. For example there was the fellow who walked from the northernmost tip of Hokkaido to the southernmost tip of Kyuushuu. There's nothing wrong with that person's need for demonstration, but there is more, much more, beyond.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

My mother, when I am seventeen and newly a licensed automobile driver, holds out her car keys when she asks me to go on an errand for her to a nearby convenience store. To buy milk. "Here ; take the car," she says. She means it in a congratulatory way, like now that I'm old enough I don't have to walk. The little store is only about ten minutes away on foot. It

makes me feel privileged, and it is as if I'd moved up in rank in our world's social hierarchy. Now I don't have to walk. Though I don't notice it walking is quietly being socially degraded to an undesirable activity.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Gone is a sense of things arrived at on foot, of things come across only by walking, and gone is a dimension of spirit-heart that can grow only around a people who transport themselves by their own legs. We can't tell how life is by walking unless we walk. Walking makes things new.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Rikuzen Takada. A grandma proprietress of an inn, which I walked some hours to get to, recommends a spot for me to visit that is only another twenty minutes up the road, she says. It is well before check-in time, so I follow her advice and continue on into the settling northeaster that had brought enough flooding along the coast to bring rail service to a halt. After twenty minutes the site is nowhere to be seen. Thirty minutes, still nothing. After an hour I stop at a farmhouse to ask : "it's still farther along this road." Two-and-a-half hours it takes to reach the mountain's peak. Michinoku's Hakone.

The city-run, folk-heritage site the inn's *obaa-san* [grandma] sent me off to see is closed today.

to see the earth through feet is
altogether
a different scene than pretty
ugly and
beautiful
get bodyful [*sic*]

raindrops on a road
everywhere is
everywhere.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Close to a sea, waves inhale, exhale. Close to a body.

Keeping myself company. I read somewhere that those who've lost an arm or a leg still sense its presence. A phantom limb. I go on as if there's still a someone in a world that's me.

Another, more vivid me, a walking me in a walking life emerges. From where ? It's a life that is filling and emptying with each step. A presence with an absence. Two for one.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

From a bus the postcard scenery calls, calls. On foot it is us ; the land holds us, we are nameless entities with no destinations, no purpose. We are there, here, it ; we are the territory.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

The town of Sanriku. The things kids find to do on a beach. For me this time it's an afternoon nap, repairing a house. It needs it. Red leaf clover growing next to evening primrose.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Where's a place to eat ? A stray cat come to a door unable to hunt on its own. What's it want but a meal, and to be left alone, and then be off.

Human society, like a menu opened: here again are the confrontations. Again it's a world of propositions we confront ourselves with. That's what happens when we stop. One big stop sign world. The tribes settled, come to a halt, things subsiding, a sediment, sedimentary, a world to work in, live in a past. Left with nothing to do but proposition ourselves. *buku-buku*, bubbling like something stewing.

Not that there is anything disgraceful or disdainful in sediment. These little farmhouses that have been with earth a while, faded, softly, soulfully, nestle into and are held near by the surrounding forested hills, bit by bit crumbling, inside weeping into soil──so much clay dried and cracking, wood pitted, rotting, changing, moving as stillness : who we are.

Wherever the land is not under cultivation things are being overrun by kudzu and many forms of mostly green out-of-the-ground renewal so it makes me wonder if there's such a thing as stoppage or if it's our wanting to bring things to a halt, a permanence, to make a recognizable surface, something to understand, that makes us see things as we do. Culturally predisposed.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

From Narugo head towards Yamagata.

Up into mountains towards another village.　A place to stay is so important ;　until moving on of course.　Seasons come, seasons go.　Receding scene, approaching scene.　A forested upheaval that makes me aware of skin.　Mountains breathe too, just as the sea does, only breathing here is so slow and deep it will not translate into something sensible to us, not unless we are attuned to such a slow, slow movement such as something going on ever so deeply within us, such a slow pulse.

Stripping into a stream's coolness, or even just sit naked alongside, eyeing the flow, feeling breeze on my skin .

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

He turns out, this man I ask directions from in Japanese, to have a disability in English, which, the English, he doesn't need with me──just to answer my question how far to somewhere──but which he mispronounces just the same, distorts in many ways, which makes him incomprehensible, and gradually he moves into mixing English with his local mountain Japanese.　A good man I guess, trying to be helpful.　Sent into a dither by a world of reasons.　Trying to play gracious host maybe and speak my language while it would be much simpler and more helpful to tell me in Japanese.　He ends up driving me there in his van, a couple hundred yards down the road.　"Japan is safe !" he calls out to me finally in Japanese as I'm leaving.　"Not like America !"　Is he afraid of me ?

Into the hills again.　*Abu*, horseflies, swarm around me, stirred by my presence as well.　As the trail descends towards a stream they are not there and as it goes up into the hills again there they are.　Into their territory and out. In and out.　They didn't bite me though.　Because of my movement ?　Along fields up in the hills, down to a ravine, along and crossing streams, then up again.　Lost my way by misreading a sign. How long did it take along a path into a mountain that became unintelligible as it went deeper into that mountain ?　Dangerous──earth underfoot unstable from the heavy rains, and a place to get footing narrowing into nowhere.　Well, this can't be the trail, so have to go back to find the last marker.　How can we figure out which way some of these signs are pointing ?　Walk.

Come to an opening, take a breather, sweat dripping onto a rock (it's August and, though comparatively cool this year and overcast often, humidity is still high).　Here newly again as

always with earth and sky. Is this love's ? Here there is no hierarchy. What's to compare but in and of the human made world left behind that is always in a past ? Here is beyond that, here is real. Is there a territory to it or even a possessive ? Or how could there even be a question in a mind, a quest, or a desire ?

Sweat, sweat, this forest air is putrid sweet.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

This part of the journey is along a highway. Now in the world it is the Obon holidays when Buddhists welcome the return of their ancestors from the land of the dead. This particular stretch of asphalt right now is only lightly traveled. It's late afternoon ; the sun is just on the mountains to the West. This is Yamagata land. Mountains and mountains. Green, green.

Along the road are dead worms, dead bees, dead dragonflies, dead cicada, dead grasses. Festive, it's *Obon* !

Tires on asphalt : how they howl. Engines roar. Can't hear myself listen. Grasshoppers don't seem to mind. They keep hopping. It's surprising what we learn to live with as we compliment ourselves about how wonderful is our quality of life. We can't hear. Which is why our pediatrician advised my parents to play a radio near where I slept : to get me used to unnatural noise. Did mom follow the doctor's advice ?

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Haguro. This particular mountain is sacred to a religion and there is a shamanist sect that still conducts rituals here. The religion owns the mountain ? Someone told me once that Shinto is the only religion through which you can speak to god directly in such a thing as a tree or a rock. Never do I wonder about such things as speaking to god, directly or indirectly. Not ever.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

This is an inn which lies within this Shinto shrine's compound. Returning from a hot bath to sprawl out on this floor, the way my skin wants to cling to the thick reed mat *tatami* flooring holds my attention for a while. Thoughts of "naked" festivals I've seen or heard of come to a joyfully tired mind. The place I live, Sendai, has one, but no one goes totally naked. There's one up in an Aomori village where the male participants are said to be fully in the buff. They walk or run in their nudity through a deeply snowed town's streets. In each case the partial or

total nakedness is legitimized by the fact that it is part of a religious observance.

Back in my William and Mary days one fine May evening many of us get in our heads to try “streaking” (running around naked in public) for the seemingly ungodly purpose of having been born. The mayor calls out the state police. The mayor had been telephoned by the university president who had been called by a campus security guard. We run all over the campus grounds, across its sunken gardens, into and out of the Christopher Wren building, stark naked board a campus shuttle bus, run through the halls of girls’ dormitories, circle the president’s house three times, whooping as we'd been taught Indians did (the university’s sports teams were formally called “The Indians” but are now “The Tribe”) and calling for the president and his wife to join us. They do not. We enter the college radio station and are interviewed in the flesh.

State police surround the campus to make sure our streaking doesn’t spill out onto the Duke of Gloucester Street and disturb the tourist-shoppers and diners being waited on by college kids wearing colonial period dress. Troopers in a phalanx await us, nightsticks braced across their bellies. We retreat, though a few among us are for trying to break through.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

The following morning the Haguro innkeeper surprises me. She has arranged for me to go along with two middle-aged women, also guests at the inn, by bus to a place where we would begin our ascent of the two remaining of the Three Sacred Mountains of Dewa. She no doubt is trying to be helpful, though I should be firm in saying I want to go it alone. It is my mistake, my weakness. Just say no. If I am truly firm, though, what is there in the world I would do for any long stretch ? Maybe nothing. Write when I feel like it, wander when I feel like. No “profession” to make of it. Well, anyway, try to be flexible, try to make the best of my disability, my inability to be firm.

*Gassan*, Moon Mountain. As it turns out these two women have a schedule to keep, a bus to board late that afternoon and train to catch that evening. Not that we press or hurry. We stop for necessary breaks. Have a leisurely hot lunch──it’s cold up there, still snow in places even in mid summer and people skiing on those patches. The two women talk throughout most of the climb──“look at this, look at that . . . let’s take a picture here . . . Mr. Watson, could you stand here please.” Comes with the territory. Towards the end talk winds down. Grace comes with exhaustion.

longed for that lullaby nap
soothed in crags high smoothly worn
valley below stretching green soft inhaling
a bone-warmed mountainous to lie in,
live, but no,
half-baked human I am too
a bus to catch
what it is I guess to *sleep*.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Yudono. This night's inn is in another shrine's compound. A family across the hall from my room has an infant that wails and wails. That crying won't bother me, won't keep me awake, I hope ; not after this day's trek.

The room attendant tells me we have to keep our windows closed to keep insects out, since there are no screens. Nor is there air-conditioning. There is only something that looks like an air-conditioner sitting on the floor, set into a wall, but it's only a fan, and more than anything cool it is heat from the machine's motor that blows into my room. Not even heat will keep me from sleep. That is the hope.

Overly tired, need to calm myself. Try various relaxation techniques. Deep breathing is one ; solar plexus massage another. It feels as if I am still moving. In my mind there is nothing going on but motion, empty, purposeless motion, as I imagine this earth's movement through space might be. It is like being on this planet, being here where we really are.

On my stomach upon this small, thin futon bedding, arms, legs stretching out over its sides onto a *tatami* floor trying to absorb some coolness, from what's under me try to suck coolness through my pores. Hugging the floor like this, it occurs to me——I don't know why——that this planet is taking me for a ride and it came to me too that there is a connection between our bodies moving around on this planet, a motion our bodies themselves create from no consciously worked up will of our own, and the planet's movement. To wander. It occurs to me how everything is moving, is flowing, even mountains. Flowing with an inevitable destruction. It's as if these feelings, these flowings, are running through my body instead of existing in my head. Hmm. If I hadn't walked, if I hadn't had that experience, if I hadn't lived even for a short period a life on foot, if I hadn't done what I did would any of this have come to me ? I'll never fully know what all I do. I don't know. Sleep on it.

# ジョナサン・ターナーによる社会学理論の社会学の実践における利用の提案（編集）

編集兼翻訳　久　慈　利　武

## はじめに

ジョナサン・ターナーは1942年生まれ，1965年にカリフォルニア大学サンタバーバラ校から芸術学士号（Bachelor of Art degree），1968年にコーネル大学から博士号を取得している。1969年よりカリフォルニア大学リバーサイド校教授，1999年論文記載の肩書きで同大学同校傑出教授となっている。31冊の著書を著している。処女作は『アメリカ社会』（1972年）でアメリカ社会の社会問題，人種問題（不平等，貧困，階層）に関心を持っていた。その一方で古典，現代の学者の社会学理論を自身の命題スキームにまとめることにも関心を持ち，『社会学理論の構造』（1974年）で現代の学者の理論，『社会学理論の発生』（1981年）で社会学古典理論を命題にまとめている。前者は機能主義，紛争理論，交換理論，象徴的相互行為理論から次々に新しい理論を追加して2002年に第7版の改訂，後者はコント，スペンサー，デュルケム，ウェーバー，ジンメル，ミードの理論に始まり，やはり2002年に第5版と改訂を重ねている。彼の手法は，学説研究というよりは，自己の表現形式に，各学者の学説を理論命題として整理するもので，それにより，学者間の比較，いくつかの学説の折衷をはかることも可能となる。彼は当初は理論のフォーマル化，メタ理論化と表現していたが，ある時期から知識の累積化，科学理論化と称するようになる。

1980年代後半になって，彼は長年の一般理論への関心を，知識の累積，実用的な知識の探求へと集約し，個人の感情，動機づけ，相互行為（ミクロ水準），組織（メゾ水準），制度（マクロ水準）に関する成果を発表するようになる。このことについては，Powersによる辞書の記述を参照されたい。

1990年にステファン・ターナーと共同で著した著書で，アメリカ社会学の発展と衰退の歴史をふり返り，80年代以降現在に至る衰退（社会学部の大幅な減少，再編，社会学学士，修士，博士号獲得者の大幅な減少，社会学開講数の大幅減少）をASAの新しい部会設立要件の緩和による部会の簇生，社会学内部の不統合に求めている。私は，60年代の社会学の隆盛は，スプートニク（人工衛星）科学でのアンバランスを是正するための社会科学研究への研究資金の投入（ジョンソンによる貧困との戦争，人種間の階層格差の是正政策に資する

社会科学研究への期待）が，失望に変わったこと，80年代のリーガンによる社会科学研究資金の大幅引き締め，という外部要因の方が大きく関わっていると思うが，ターナーは社会学の学問内部の要因を重視する。

1995年に，1992年から3年間期限付きでSociological Practice誌を刊行していたASAの社会学実践部会の刊行打ち切り，2000年にワシントンで応用社会学会と臨床社会学会（当時社会学実践学会の呼称）の5年後の統一を目指す集会が開かれていること（2005年にthe Association for Applied and Clinical Sociologyとして発足）が関係したのか，ターナーは，カリフォルニア社会学会の基調講演（1998年）で，社会調査研究の現状と社会学理論研究の現状の問題点を憂い，社会学理論と調査と（社会問題解決への）応用の連結を提唱する。社会調査者が計量分析による相関，因果分析に終始して，理論を志向しないこと，社会学理論家のたこつぼ化によるパラダイム割拠，イデオロギー批判による他学説への攻撃，英雄崇拝，社会学史研究への安住を批判し，その状況を打破するために，社会学理論の知識の累積，古典・現代理論家の学説の理論的原理への集約，理論的原理の親指ルールへの翻訳，親指ルールに翻訳された社会学の知見の臨床社会学者，応用社会学者を通じてのクライアントへの工学的応用の提供を提案する。社会学理論の知識の累積は，種々の古典・現代理論家の学説から抽出した理論的原理を彼固有のやりかたで集約する手法であるが『社会学理論の構造』で第4版（1986年）では，「理論の考え」を扱う序章，第5版（1991年）で「理論的総合」を扱う終章をおいている。

パワーズ執筆辞典の人名項目「ジョナサン・ターナー」では，ターナーによる社会学理論の社会学の実践における利用の提案はまったく触れられていない。この提案は応用社会学者，臨床社会学者などの社会学的実践者を除いては，特に理論社会学者には賛同者は少ないようである。

そこで，ジョナサン・ターナーによる提案を，ターナーの1998，2001，2008年の3本の論文から，編集者が適宜抜粋して，1本の論文に編集し直したものである。このようにすることによって，彼の主張が広く理解されるものと判断したからである。しかし論文の推敲に十分な時間をとれなかったので，重複があることも否めない。ターナーの1998年の論文との出会いはまったく偶然であった。私が本学に赴任して2年目から同志と開催している応用社会学研究会で読んで紹介する論文を探していて，図書館書庫で雑誌のバックナンバーのコーナーでチャレンジングな題が偶然目に留まったものである。それ以前に，ターナーの名は新睦人・三沢謙一編『現代アメリカの社会学理論』（恒星社厚生閣刊）で交換理論を執筆した際に，1974年の『社会学理論の構造』を参照し，記憶していた。この論文を応用社会学研究会の顧問で東北大学名誉教授の斉藤吉雄先生は，痛く感心され，翻訳を私に督励され

たことを付記します。

出典は下記の通りである。

**0.　ジョナサン・ターナーの研究関心**

Ritzer，G（ed.）2005 *Encyclopedia of Social Theory* 所収 Charles Powers 執筆項目 Jonathan H.Turner（pp. 850～851.）

**1.　社会学理論と社会学的実践はかくもかけはなれねばならないのか？**

Jonathan H.Turner 1998 *Sociological Perspectives* 41（2）所載（1996 年 11 月カリフォルニア社会学会基調講演）の抜粋（pp. 243～244, 246～250, 253～256.）

**2.　社会工学は聞こえるほど実際に好ましくないものか？**

Jonathan H.Turner 2001 *Sociological Practice: A Journal of Clinical and Applied Sociology* 3（2）所載の一部（pp. 99～101, 107～109, 117～119.）

**3.　工学原理をどうやって開発するかの例証**

Jonathan H. Turner 2001 *Sociological Practice : A Journal of Clinical and Applied Sociology* 3（2）の所載の一部（pp. 109～117, 119～120.）

**4.　社会学的実践における社会学理論の利用のために**（題は編集者が考案した）

Jonathan H.Turner 2008 *Sociological Focus* 41（4）（中央北部社会学会 2008 年全会員向け講演会）の抜粋（pp. 281～283, 291～299.）

## 0.　ジョナサン・ターナーの研究関心

35 年にわたって，Jonathan H. Turner は，社会学理論の実証主義的見地を提唱し，社会学の目標は，究極的にはいつの時代もどこの場所にも働く（彼のいうゲネリックな）基礎的社会的諸力を説明する抽象原理と分析モデルの産出であると述べている。多年にわたり，ターナーはメタ理論的分析に従事し, 古典的諸理論（パラダイム）と現代の諸理論（パラダイム）を諸命題とモデルに公式化してきた。これらの努力の目標は，古典的理論家が社会的宇宙の運行力学を説明することに科学的に貢献していること（Turner/Beeghley/Powers 2002）と今日の理論の一部は科学的理論としてベターであることに照射することにあった。この提唱とメタ理論化が産出されるにつれて，ターナーは科学的理論のための彼の戦略を実行に移し始めた。この戦略は，理論が所与のトピックに関して何を語らなければならなかったかを知るために，既存の理論を公式化することと，これらの理論から有用な要素を抽出することと，もっと堅固な理論を産出するために新しい要素を付加することからなっている。概略をいう

と，ターナーは，社会的宇宙のなかの諸力の（直接，間接，逆）因果性に照射しながら，社会的諸力の因果的フローを可視的な空間に示す抽象モデルを産出した。これらのモデルと並んで，ターナーはまた社会的宇宙のなかの諸力間の基本的関係を述べる抽象命題のリストを産出しようとした。これらの諸理論産出のねらいは，概念を明確に定義し，概念間のお互いの関係の性質を正確に特定し，各概念の価値を変える条件をリストすることにあった。

かくして，ターナーの仕事は，多様な思想の糸を一緒にまとめ，必要な修正や追加を施し，原則として検証されうるようにフォーマルな仕方で理論を提示する，総合的なものである。初期の仕事はエスニック関係の文脈での紛争過程をめぐって回転した（Turner 1973，Turner/Singleton 1978）。これらの仕事はいくつかの次元（権力，物質的富，威信の不均等な分布，同質的な下位人口集団の形成・ランクづけ，下位人口集団を横断しての移動）に沿って階層を概念化する社会階層の一般理論（1984）の一部になった。これらの諸次元の各々に関して，数理的に述べられた公式法則が定式化された。

1980年代末に，ターナーは既存理論を，動機づけ，相互行為，構造過程に関する一連の分析モデルに総合しようとした社会的相互行為の理論（Turner 1987）を産出した。動機づけ過程は，行為者に行為するエネルギーを注ぐ過程であり，相互行為過程は，対面的に接触する人々の相互の合図と解釈の過程であり，構造過程は時間空間で相互行為のフローを安定化する力学である。10年の後に，ターナーは相互行為の新しい理論を産出し，これは以前の理論のアイデアのいくつかを取り込み，彼が1990年代と21世紀にさしかかる間に開発した情動の力学に関するアイデア（Turner 2000a，2002）を付加したものである。この新しい理論は，もっとマクロな社会過程に関する仕事（Turner 1995）のなかで開発した概念図式を採用し，この単純な概念編纂はターナーの目下の理論化のすべてに影響を及ぼしている。このスキームは社会的宇宙はミクロ，メゾ，マクロの3水準で開花すると述べる。これらは分析的区別以上のものである。ターナーの見解では，それらは実在である。実在の各々の水準でその水準にある構造の形成と働きを駆動する諸力が存在する。ミクロ水準では，キイになる構造は出会いである。メゾ水準では，これに特有の構造は，（目標を達成するために組織された分業を持つ）コーポレート・ユニットと（人々を互いから区別する）範疇的ユニットである。マクロ水準では，ユニットは制度システムである。各ユニットは，人間の生物学の中に及び他のユニットに埋め込まれている。かくして，制度はコーポレート・ユニットと範疇的ユニットからなり，コーポレート・ユニットと範疇的ユニットは出会いからなり，出会いは人間の生物学的メークアップのおかげで可能である。しかし，ミクロとマクロをつなごうとする多くの理論と対照的に，ターナーは各水準の実在はそれ自身に固有の力によって駆動し，これらの力は理論的諸原理の主題である（Turner 2002）。つまり，社会学理論の目

標は，各水準の社会的実在を駆動する諸力を摘出し，各々の諸力に関して，理論家はそのダイナミックな特性に関する抽象的原理を述べることができるべきであり，もし望むなら，各諸力の価値とバレンス（valence）に影響する社会界の特性間の因果連関を描写する分析モデルを開発することである。

ミクロな社会過程に関する最近の著作（2000a，2002）でターナーは出会いを駆動する6つの力を特定している。情動，交渉のニーズ，シンボル，役割，地位，人口統計学的・生態学的特性。1990年代に早くも，ターナーは制度システムの形成を駆動する諸力を説明しようとするマクロ力学の理論を開発した（Turner 1995）。この著作で，彼はマクロ水準にある社会的宇宙を駆動する7つの力が存在すると想定した。人口，生産，分配，権力，空間，分化，不統合。ターナーはまだメゾ水準の力学についての理論を仕上げていない。

上記の一般理論のスキームは開発途上にあるが，ターナーは人間生物学と進化にも探求を進め，社会学者は社会的宇宙を完全に理解するために，生物学的プロセスを概念化しなければならないと述べる。この進化的理論化の大半は彼らが人間の原祖先に与える手かがりを見るために，類人猿の分析に取り組む。ターナーは人間性の再分析（Mayanski/Turner 1992）から人間の情動の進化に関する理論（Turner 2000）まで多数の著作を産している。同時に，ターナーは淘汰のプロセスの理論，制度システム発展のマクロ力学の原理を検討することによって，段階モデルを復活させ，修正しようとしている（Turner 2003）。こんな風に，ターナーは，社会の進化のこれまでの理論の明白な欠陥を克服しようとしている。

ジョナサン・ターナーは社会学の数少ないグランド理論家の一人である。

## 文　献


Maryanski, A./.H. Turner 1992 *The Social Cage : Human Nature and the Evolution of Society*. Stanford, CA : Stanford Univ. Press. 正岡寛司監訳『社会という檻：人間性と社会進化』明石書店（2009）

Turner, J.H. 1972 *American Society : Problems of Structure*. New York : Harper and Row.

――― 1977 *Social Problems in America*. New York : Harper and Row.

――― 1984 *Societal Stratification : A Theoretical Analysis*. New York : Columbia Univ. Press

――― 1987 "Toward a Sociological Theory of Motivation." *American Sociological Review* 52 : 15-25.

――― 1991 "Developing Cumulative and Practical Knowledge through Metatheorizing." *Sociological Perspectives*. 34 : 249-68.

――― 1995 *Macrodynamics : Toward a Theory on the Organization of Human Populations*. New Brunswick, NJ : Rutgers Univ. Press for Rose Monograph.

――― 1999 "Toward a General Sociological Theory of Emotion." *Journal for the Theory of Social Behavior* 29 : 133-162.

――― 2000 *On the Origins of Human Emotions*. Stanford, CA : Stanford Univ. Press. 正岡寛司訳『感情の起源：自律と連帯の緊張関係』明石書店（2007）
――― 2000a “A Theory of Embeded Encounters.” *Advances in Group Processes* 17 : 285-322.
――― 2002 *Face-to-Face : Toward a Sociological Theory of Interpersonal Behavior*. Stanford, CA : Stanford Univ. Press. 正岡寛司氏らによる訳書出版予定あり
――― 2003 *Human Institutions : A Theory of Societal Evolution*. Boulder, CO : Rawman & Littlefield.
――― 2009 *Human Evolution : A Sociological Theory*. London : Routledge.
Turner, J.H./C. Starnes 1976 *Inequality : Priviledge and Poverty in America*. Santa Monica, CA : Goodyear Publishing.
Turner, J.H./D. Musick 1985 *American Dilemmas. A Sociological Interpretation of Enduring Social Issues*. New York：Columbia Univ. Press.
Turner, J.H./J.E. Stets 2005 *The Sociology of Emotions*. Cambridge University Press. 正岡寛司氏による訳書出版予定あり

## 1. 社会学理論と社会学的実践はかくもかけはなれねばならないのか？

【梗概】社会学理論と実世界の問題へのその適用は，社会学のコアを構成すべきことが論じられる。だが，社会学的実践の発想は，社会学理論と調査のより厳格な適用に傾いて，工学的適用は放棄されている。社会学は，その実践を，抽象的な理論原理が親指ルールに煮詰められ，社会構造を建設ないし解体するために用いられる工学を作り出すように定義し直し，定位し直すべきである。工学への定位を採用することによって，社会学的理論と調査はもっと注目され，役立つことであろう。

### 1.0 序論

大半の社会学者は人々に関心があり，ヒューマニティに配慮したために社会学に入った。程度に違いがあれ，我々のほとんど全員は人々を助けたい，世界をもっと良くしたいと欲している。計量的方法論者になりたいとか，新しい方法論と最新の統計技法を開発し利用する調査者になりたいと望むものはごくわずかである。また我々は社会的宇宙の働きに関する抽象モデルと理論を結実する理論家になるために社会学に入ったのではない。平均的な社会学専攻者に彼らの抱負を尋ねると，彼らが社会学を継続するなら，我々が彼らに強いること，――つまり計量的方法論を習得し，古典理論を研究し，プログラムに応じて様々なジャンルの今日の理論を習得すること――をやりたいと述べる者はめったにいないだろう。もちろん，この強調の間違ったところは何もない。なぜなら，いかなる学問もその理論と方法論によって駆動され，形成されるべきだから。しかし，大学院課程ではそれ以上のことが起こっている。まず社会学に我々に興味を抱かせる衝動――世界の問題に役立つ何かを貢献したいという願望――が失われ，方法と理論のコース（講義）によってわれわれからたたき出されてい

る。その上，我々が社会問題への関心を保持するなら，主流社会学から自分を切り離し防衛するために，――マルキスト，フェミニスト，ポストモダニスト，その他のラデカルな見地――のイデオローグとならなければならない。かくして，今日では多くの通常社会学は学部生として当初社会学に惹かれたものと関係を持たず，これらの衝動が保持されている場合には，社会学のイデオロギー的フリンジに押しやられている。いずれのケースでも，社会学的実践は分離され，様々な宇宙の中を動き，白昼にお互いを通過させている。

本稿では，社会学の分裂，特に科学的理論と実践の断絶，を検討し，途方もない解決策に見えるもの（社会学に工学的翼の創出）を提案したいと思っている。工学という語を選んだのは，一部にはそのショック的価値のためでもあるが，それ以上に念頭にあったのは，理論的諸原理を実世界に適用することによって，社会学を公共の討論の場に連れ戻すためである。工学の性質は社会界の建築物を形成することを選ぶものも含まれる。

### 1.1　方法論と理論教示の儀礼化：大いなる退屈

略

確かに，私は事例を過度に述べすぎているが，私が述べたことの中には真理のかなりの部分が含まれている。結局，理論と方法のこの儀礼化された教示，データ収集するときや理論を定式化するときの理論と方法の分離は，わたしが社会学における精神的規律の欠如と呼ぶものを創り出している。我々の理論は，経験的調査，内部の論理，世界を良くする効用によって規律されていない。我々の方法論は，理論的真空の中で経験的世界のある側面を記述するために使用されている。我々の理論は哲学の雲の中に拡散し，ひとつのジャンルにますますなり，問題状況を変革するするために理論を使用したいと思っている者を離れさせている。我々の調査活動は，知見が雑誌に掲載されるようにコンピュータを経由したデータ収集の方向に進んでいる。

率直に言って，上記の理論化と調査への儀礼化し生産的でない従事の仕方が，社会学を（我々学界にいる同僚ではなく）実世界にいる一部の人々に非常につまらないものに見えさせている。社会学に対するこの偏見は多くの場合十分に値するように私は思うのだが，世界が人類が直面する多くの組織問題を解決するのを助ける人間組織についての科学を必要としているだけに，大きな悲劇でもある。

この最後の指摘をとりあげ，理論と調査をつなぐ努力の欠如と並んで，理論と調査の教示の儀礼化という本稿のテーマを照射するならば，社会学的実践を社会学の周縁に押しやることにする。それはいくつかの意味でそうしている。社会学的実践は少なくとも社会学という専門職の中では，威信が低い仕事である。従って，俸給が低い仕事である。社会学的実践は，

ほとんど必ずといって良いくらい，脱理論的でも理論の代わりに，調査者の政治的，個人的イデオロギーを代置し，理論には何も寄与しないし人間的状態をたいして改善しない（e.g. Lee　1976）。社会学的実践は，学界の外で遂行される傾向があり，社会学的実践に属する研究者をお互いからと，社会学全体から仕切ってしまっている。心理学が能力を認証するための重要なメカニズムの多くの部分を支配しているので，しばしば不法な（合法的でない）ものとみなされる。かくして，我々が応用社会学，臨床社会学，社会学的実践のいずれの名称を選ぼうと，実世界を取り扱い，他者を助ける学生や学者の初期の衝動を留めるものの業務に励む社会学の翼は，プログラム評価，社会的インパクトリサーチ，ニーズ査定，犯罪司法，保健，家族，コミュニティ・オーガニゼーションのような関連領域での仲介の折衷となる。社会学的実践は，次第にデータ収集方法の料理本に依拠し，そうなるにつれて学生の訓練においてあるタイプの計量的方法を過剰に重視することを制度化し，それはますます，実生活問題のリサーチを長らく哲学の雲の中に退却したり，自分たちの感情を慰めるイデオロギーの人形を抱く理論家から分離する。

### 1.2　社会学の工学を目指して：なぜこれが途方もないものに見えるか？

理論が哲学や道徳的非難の領域に退却することは大きな悲劇であり，この退却が社会学のリサーチを社会学の説明努力から分離するかぎり，二重の悲劇である。理論と調査の断絶はたくさんの非常に重要な帰結をもたらしている。

第一に，理論に精通した調査と我々の実践の試みの分離は社会学が尊敬と声を獲得するのを邪魔している。世界が直面するほとんどあらゆる主要問題は，社会組織をめぐって廻っている。社会学は社会組織の科学である（はず）なのに，組織の問題の研究に専念する学問自体が政策形成者のテーブルに招かれることはめったにない。この仕事はエレガントであるがシンプルな理論をもつ経済学者のところに行く。あるいは，いくつかの理論を持つが，もっと重要なことに資格証明認定化の芝生（the credentialing turf）の多くを支配することに由来する一日の長を持つ心理学者のところに行く。経済学も心理学も文化と社会組織を本当に把握していない。彼らが牛耳っているのは，社会学者がフォーマル理論を産出できず，これらの理論と調査を連結できず，社会学的実践を行うときに，イデオロギーによる非難を抑制できないからである。おそらくこの種のみんなを幸せにしたり，道徳的に純粋にするが，世界の問題について非常に多くのことをする我々の無力ぶりを約束するだけである。

第二に，理論と方法と実践の断絶は社会学を累積科学となることを妨げている。実は，大半の社会学者は社会学が，この信念によって支配されている世界で，我々を一層周縁に追いやり，我々を人文学に追いやる，科学であるべきだと信じてはいないだろう。しかしもっと

重要なことには，社会学が累積科学になり得ないなら，社会学は世界に本当の影響力を持ち得ない。意味を持つことができる学問はテストされ，現実生活の問題に利用される理論を持っている。一言で言えば，それは工学的応用を持っている。工学の実践家の多くは自らを工学技士と見なしている。その上，工学的応用を持つ学問は，これらの応用が理論の効用をテストし，しばしば理論に修正と順応を強いるから，一層累積的となりうる。理論と工学的応用を分離する社会学のような学問は，知識生産の最大の源泉のひとつを失う。その代わり，多くの社会学的実践は一部の現象を描写するだけで，このリサーチにもっと抽象的な声明が含まれている場合も，リサーチ知見によって変更し得ない自己確信的イデオロギーである。

第三に，理論と方法と実践の断絶は，社会学の中の経験的な仕事の多くを本質的に人口統計学的，国勢調査的，その他のもっと記述的任務を持ったサーベイ・リサーチに還元する。記述的統計学はあらゆる種類の根拠のために必要であるから，もちろん重要である。しかし，サーベイ・リサーチに力点を置くことは，社会学的実践を質的な方法から切り離す。それはまたすべての調査を理論から切り離す。実際，サーベイ・リサーチは実際の行動を把握せず，人々が行動についてどう考えているかしか把握しないので，また構造を分析できず，構造の近似物として利用される回答の集計の指標だけを分析するので，歴史とプロセスを分析できず，媒介する因果過程を隠す横断による分析しかできないので，理論が定式化される仕方と両立しうる仕方で現象に到達できないので，理論を検証するには最も役立たない方法であろう。再び，時には，数，態度，感情，社会経済的位置等を数えることは有用であるだけでなく，重要でもある。これらは，構造，過程，コンテキスト，相関係数に容易に転換され得ない他の動的な力を検討する調査と理論の代用物とはなり得ない。

この真の，幾分誇張された，論争的な批判を行う私の大きなポイントは，理論と方法の分裂は，社会学的実践に携わる人々が工学の精神を開発するのを妨げることである。社会学的実践に携わる人々がそのような精神を持たないなら，また工学の名称に憤るなら，社会学全体が自らを社会工学ができると思わないであろう。人が私が提唱していることを無視する前に，工学が実際にはどんなものかレビューすることにしたい。

そのコアにおいて，工学は理論的原理の利用であり，それは構造をどのように組み立てるか，構造の抱える問題をどのように判定するかに関する親指ルールにしばしば解体されるものである。暗い（わびしい），無感覚という評判にも拘わらず，工学士は実際にはものの組み立て者である。彼らはプランを練り，コストをはかり，どのように進めるかプランを立てるのを助ける。彼らは潜在的な問題点を指摘する。

ではなぜよりよい世界の構築を夢想することから出発した社会学者が「社会工学」のラベルに尻込みするのか。ひとつには，左翼右翼双方の私の知る大半のイデオロギー的社会学者

は，彼らの道徳的主義の名の下に我々にビッグブラザーズたらんとしているものの，社会工学はオーウェルのビッグブラザーズのイメージを内包しているからである。実際大半のイデオロギー的な社会学者は，たとえ彼らがその中で仕事をしている象牙の塔を実際に離れたがっているとしても，何かを建設するための知識と精神的規律（mental discipline）を欠いた机上の工学士である。第二の理由は，あなたが理論的原理を開発し，テストと経験に基づいてこれらの原理を有用な親指ルールに翻訳（変換）し，それらを何かを組み立てるのに利用することに従事しなければならないからである。このように表現すると，社会学者はすぐに当惑する。なぜなら，我々は自分のイデオロギーと両立しがたいプロジェクト，プランを示唆する親指ルールに翻訳される公認の原理を一切持っていないから*。第三の理由は，工学的応用の周りに組み立てられた学問は，社会学者が自分独自のことを行うことを邪魔するからである。それは彼らに原理，応用の観点から彼らの思考と行動を律することを強いる。またそれは彼らに，自身の個人的ないし政治的イデオロギーを彼らの仕事から分離するように鼓舞する。社会学者は，集団イデオロギーへの攻撃的非難にも拘わらず，事実，原理，親指ルールに制約されないで自分の流儀で物事を進めたがる粗野な個人主義者の一族であるから，上記のことを最も躊躇するのである。

*社会学の理論家は人間組織のたくさんの法則を発見してきているが，これらの原理の語彙，編纂に同意することができない。必要な知識を持っているが体系化できないことが社会学における理論化の大きな過失を代表している。

精神的規律（mental discipline）を自分に課すことに気が進まないのは，我々が「社会工学」の代わりに「社会学的実践」の名称を使う理由である。この名称は厳密さの気味がなく，我々が癒しに従事する臨床家かそれともそれほどソフトではないがまだうまく定義されていない何かかどうかというイシューを混同している。この名称は非常に曖昧で，包括的なので，誰もが属することができる。工学士（技師），医師，心理学者が持つような実践に対する資格証明（credentials）を誰一人持つ必要がない。この名称は，アメリカ社会学会にさもなければマージナルな社会学者をその多額な会費のテントに補充することを可能にしている。この名称は社会学者が自分を標準的な知識体系を獲得し，社会の働きを説明する一般的理論原理を学習し，それらが個別の問題に適用される仕方を学習し，それらが間違っている場合に倒壊するものを組み立てるのにこの原理を使用する義務を持つと見なすことを絶対に邪魔する。

しかし，社会学者が依然よりよい世界を建設したいと欲している限り，彼らは自分を社会工学士と見なし始めた方がよい。もし我々がアドバイスを与え，耳を傾けられたいと思うなら，我々は編纂された知識を持つことに由来する尊敬を獲得しなければならない。首尾一貫

した理論，検証されたリサーチ知見，倒壊しない何かを組み立てることにこれまでに成功したことがなければ，学問の助言は耳を貸されないであろう。経済学者の事例はこれを如実に物語っている。というのは，それは，すべての知的な活動を組織する（たとえ間違っていても）理論を持つ力を示しているから。アメリカの経済学は，ひとつの間違った理論，少なくとも非常に限定された理論を持っている。だが彼らは我々のものであるべき政策決定を牛耳っている。これがそうなりうるのはいかにしてか。理由の一部は，彼らの理論が資本主義社会のイデオロギーを擁護することにあるが，そのほかにもある。彼らは首尾一貫した，自信に満ちた，（たとえ間違ったものであっても）予測を行うのに理論と親指ルールを使用することができる，何かをするのにどのようにすべきかを述べることができるからである。同じことを社会学者はできるか？　回答は当惑しながらも明白である。我々は実際の権力を持つ，資源を持つだれひとりとしてそれに多くの注目を払うものがいないイデオロギーを非難する時を除いて，できないのである。

すべての有力な諸科学は工学的応用を持っている。その上，この応用はしばしば大きな試金石となる。それは学問のコア知識の有用性を証明する。もし社会学者が工学士のように思考することすら拒絶するなら，我々は権力を持たないし，現代の重要な問題に対して影響力を発揮できないし，我々がしばしば脆い土台の上にいる学界の外に何かとなることは決してできない。我々が応用の仕事で工学士と自称することを拒絶するなら，我々は自らを弱体化し，尊敬を失い，認証されない素人（uncredentialed amateur）として登場する。我々が大学院に進み，理論と調査の訓練のナンバーを振った儀式に耐える前のすべての年数である学部卒として我々の職業で食べてゆけない。我々は社会学の潜在能力を破壊し，自らを工学士と見なす気もなく，できもしない，credentials の公認の傘なしに働かねばならない我々の実践者を周辺化に甘んじさせる。

1984 年に，ASA の理事会はもう一度社会学者の資格認証を探求したが，1995 年にその努力は放棄された。それが放棄された理由は，私の考えるところでは，ASA（社会学的実践部会の正会員）は自らが望んだことであったからだ。しかし，もっと多くのことが絡んでいた。ASA が社会学者の資格認定を可能とするために一体何ができるのか。その土地は，プランニング，カウンセリング，組織経営活動を認証する心理学，その他によって既に耕されているのである。あまりに遅すぎた。だが二つのグループは引き続き社会学者を認証する努力を続けてきていた。現在では，SPA と SAS から代表を送る委員会を含む第 3 の努力が存在する。

これらの努力に伴う問題点に関する電子メールのやりとりの中で，Michael Fleiscer は，州レベルと郡レベルで内部認証に強い賛成の意向を語っている。「学部の閉鎖性，合併，教員の先細りに明らかな学界における我々の心許ない地位と実践の分野の我々の無力は，効用

と意味を持つ資格認定の周りに社会学的実践を再編するよう我々を心構えさせる。そのような努力なしに，行政管理者はその認定されたプログラムが院生を学界，政府，業界の職にうまくつけられる大学学部を支援しがちである」。だがそのような努力はあまりにおそすぎないか。William T.White からの電子メールに「カウンセリングを除いて，私（White）は社会学者によってのみ得られる，社会学に固有の訓練によってのみ得られる expertise に対するはっきりとしたニーズが全くないことに気づいている。カウンセリングさえ，大半の社会学者は心理療法の訓練を受けていないからばくちである。私はそのような資格認定がいずれどれだけ有意味に状況を改善するかいぶかしく思っている。社会学が資格認定を正当化する何を提供するのかね」。White の返信は次のことを明らかにしている。「何らの応用の基盤がなく，理論と調査をテストしたり，無感覚を刈り取る良い方法はない」。

それでは，応用の基盤を容易に破壊できないときに無感覚をどうしたら刈り取れるのか。私の答えは，我々が戦術を変え，臨床家や実践家となる代わりに，工学士となることである。ここには重要な違いがある。なぜなら，工学は大半の実践よりも理論的に情報量が多く，厳密であるから。資格認定の芝生をめぐる戦いは敗北したのだから，社会工学をプロデュースするための厳格なアカデミックな基準を開発しましょう。我々が学界の内外に尊敬を獲得したいなら，我々はもっと厳密で，もっと規律を持たねばならない。工学精神は我々を正しい方向に連れて行く。

### 1.3　それでは我々は何をすべきか*

*原題は「社会学的実践はなぜ周縁化しなければならなかったか」である。

略

かくして，アメリカ社会学の歴史は我々に工学的応用を持つ学問になるいかなる実際の契機も与えてこなかった。我々がそうしたいと望んでいると仮定するなら，我々は何をすべきなのか。

(1)　科学の認識論にコミットした抽象的な理論的言明を調査と社会学的実践に結び直す。

(2)　調査においてはるかに多様な方法を利用し，サーベイ・リサーチの役割を下げること。なぜなら，後者は調査と理論を断絶させる張本人だから。

(3)　次の観点から理論の効用を査定する。理論的アイデアが実世界の問題と何らかの関連を持つか。持つなら，経験的リサーチと工学的応用において検証されうるように，理論の抽象水準をどう下げることができるのか。

(4)　我々のイデオロギーコミットメントと，これらが良き社会の概念にいかに翻訳されるか明示し，これらの概念をあぶり出し器の上に置け。イデオロギーに受け入れ可能な

理論の種類と工学的応用を駆動させることは避けよ。

我々がこの種の精神的規律に従事することができなければ，次のようなネガティブな帰結が後続する。

(a) 我々は「政治的正しさ」の基準に影響されるようになり，そのような正しさに従わないデータ，理論から自分を切り離すようになる。

(b) 我々はほとんど常に我々の知識に進んで支払うクライアントに顔を向ける。我々はクライアントのイデオロギーにこびを売る必要はないが，その金が有用な知識を買い，社会学を正当化するのを助けるものを侮辱するのは出遅れものである。（ついでに，あなたがこびることを恐れるなら，私はあなたのイデオロギーコミットメントの強さを疑問視する）。

(c) 我々はその問題を資格認定された心理学者，首尾一貫して組織された経済学者に引き継がれる「空の中のパイ」思考家と定義されることになろう。

(d) ひとつのイデオロギーが別のイデオロギーを生み出し，戦う派閥間の平和が，我々の思想の真理ないし虚偽と有用性へのコミットメントの代わりに，相対主義の代償のもとに購入されるので，われわれは唯我論に堕する。

(5) 我々の科学からイデオロギーコミットメントを棚上げする際に，我々は，科学と道徳的言説は重要な仕方で互いを律することができるということに気づくであろう。

(a) 工学精神と結びついた科学は，我々の道徳心の目標と理想が実在的かそうでないかを我々に告げることができる。理論的知識は我々とクライアントの一部に，我々ないし彼らが欲しているものが不可能であることを教えることができる。我々の科学が我々の道徳心を律する際に，我々はますます実在的となる。我々が現象についての我々の知識を所与として，何をすることができるか尋ねることによって，工学士のような我々が思考を始める。それによって，我々は我々自身，我々の学問，我々のクライアント，世界に一層役立つようになる。

(b) 道徳心は多様な仕方で我々の科学を磨くことができる。

(1) 道徳へのコミットメントは理論と調査が取り組むべき問題に向かわせることができる。我々がこれらの問題に取り組む理論と調査方法を開発するにつれて，我々の科学はますます適切なものとなる。

(2) 道徳へのコミットメントは抽象性の雲や批判的けちつけに理論家が向かう傾向を阻止し，社会学の理論的翼が理論的アイデアが何らかの実用的な仕方で利用されうるかどうか尋ねることを強制できる。もし理論家が絶えず彼らのアイデアがいくつかの実世界の問題を解決するのにどうしたら利用されるか

尋ねるならば，彼らはもっと良い理論を生み出すであろう。

(3)　道徳へのコミットメントは何らたやすい回答が想起しない社会的出来事をめぐるパラドックス，ジレンマ，混乱をしばしば生み出すことがある。上記の種類の未決の問いは，理論家に道徳的問いをもっと処理しやすい問題に解体することによって，解明を提供するように触発する。最終的に，この種の活動は，利用されうるもっと良い科学に役立つ。

(6)　公の討論に入りなさい，ただしもう一人のイデオローグとしてではなく，社会問題に関わる工学を理解する者として。つまりある問題を駆動する力，我々の工学的知識が解決を組み立てるのにどのようにしたら利用されうるか理解する者として。社会学者は理論的アイデアの効用を民衆に証明すべきである。

もし我々が上記の諸ステップで提唱されたことに従おうとするなら，社会学はもっと良くなるだろう。我々の理論は　公の討論に入り，工学的応用において我々の知識の有用性を証明しなければならないことによって，規律ある学問となるであろう。同じことは，歴史的比較のデータ，民族誌，インタビュー，実験，サーベイにいたる広範囲な方法を用いる調査にも当てはまる。最も重要なことに，もし我々が上記の諸ステップをラフな指針とするならば，我々がクラフトと専門職を実践するときに，（私の同僚の社会学者と私が共有する）左翼イデオロギーを吐露する傾向が阻止される。もし我々が社会学自身のこの種の改革を試みないならば，恐ろしいことが社会学に降りかかるだろうと私は予想する。

(1)　もし我々が今の道を歩み続ければ，理論は相対主義，シニシズム，ペシミズム，唯我論の炎に囲まれたポストモダンの地獄にますます下降するであろう。理論はテキスト，イメージ，言葉遊び，他の正に不適切な言明に過ぎなくなろう。

(2)　私立学校の学生（少なくともその父兄）は何らの実用性を持つように見えない「希釈された」人文学に授業料を払うのを拒絶し，おそらく州立大学は，社会学部を閉鎖し始めたり，社会学部の残りを他にプログラムに統合したりし始めている。ASAが学部の閉鎖に対する反応のほとんどパラノイドな仕方は，ASAは根本の問題に到達することをほとんどしていないが，我々はどんなに傷つきやすいか強調し，誰かが真っ先に社会学部を閉鎖したがっているのはなぜだと尋ねることである。

(3)　我々は世界のある部分に気違いになる留学生のためのサービス学部となるであろう。つまり文化人類学部が文化的異国情緒を必要とした人々にしたのと同じサービスを提供することになろう。

(4)　我々は新しいコース（講義），ASAに新しい部会，あたらしい政治的に正しいイデオ

ロギー，一般的にいえば，学生を確保し，職業団体の成員を維持し，学長を喜ばせるために望まれるものは何でも提供する知的売春婦に変身することであろう。理論的コアを欠いた学問だけが自分を売る傾向がある。

多くの点で，上記の多くは既に起こっている。我々の雑誌の理論はおおむね，世界を説明すること以外のすべてに関するものである。

ASA の理論部会は多様なオリエンテーションの混合であるが，この数十年にわたって，ポストモダニストと政治的正しさの提唱者によって牛耳られてきている。我々は人文学のスパークを持つ学生を惹きつけ，教えるが，彼らはすぐに我々の曖昧な理論と方法のジャケットブーツ的教示によって離れていく。我々は説明科学であるふりを見せないで，メデア，犯罪，セックス，薬物使用，ギャング，逸脱者等の今日の異国情緒を教えるサービス学部となっている。我々は，無思慮で学問のない学生に訴えるために，ほとんどあらゆることを進んで教え，我々の重要講義を進んで希釈している。

おそらく，社会学はそうしようという努力にも拘わらず，人的サービスの資格認定への明確な道を提供していないので，心理学のようなビッグ科学になることは欲していないだろう。しかし，我々は公共部門，民間部門での工学的応用で利用されてきている首尾一貫した理論的原理とモデルの集合を持つ経済学のような，大いに尊敬される科学になることはできよう。尊敬される学問は学長，事務長によって閉鎖はされない。登録者が多くなくとも，それらは大事にされる。社会学は公立大学ではその生き残りを維持するために登録者数によって駆動してきた。社会学がサーヴィス・プログラムである私立大学ではその度合いは低い。この戦略は我々の登録者数が鰻登りの 1960 年代に登場した。アカデミック社会学への最初の唯一度の資金の流入は，1960 年代の学生の大群からやってきた。今日，我々は消えて久しいシネマを追求し続けている。その代わりに我々が追求すべきは，工学的応用を備えた理論に精通した調査である。この種の精神的規律が我々の目下の学生の多数派にアッピールしなければ，我々は多くを失わなくとも，そのような学生を欠くたくさんの学部を失うかも知れない。社会学者にアカデミックな芝生戦争を続けさせ，（学問的なメリットがあろうとなかろうと 200 人の要望があればすぐに設立される）ASA に新しい部会を設立させるのは，後者の脅威である。重要な学問はこのようには設立されない。それは我々が世界中に必要とする注目する学生を惹きつける累積的知識によって創出され，維持される。

## 2.　社会工学は聞こえるほど実際に好ましくないものか？

【梗概】　社会学的実践と臨床社会学は社会学の工学的翼によって補完される必要がある。

究極的には工学は，理論的原理の具体的問題への適用であり，社会学が工学的学問になり得ない理由は一切存在しない。この工学的志向が登場するのを妨げる社会学の主題に固有のものは何ら存在しない。むしろ，社会学における工学的アプローチの展望は，もっと正確な理論が開発されるかどうか，そのような理論がテストされるかどうか，クライアントの抱える問題に取り組む際に実践家が理論的アイデアを利用しようとするかどうかにかかっている。

## 2.0　序論

成功を収めている科学はすべて工学的応用を持っており，社会学がこの意味で成功を収められないという理由はない。むしろ，応用社会学，臨床社会学，社会学的実践のいずれであれ，社会学を利用しようとする試みは，社会学が自らを工学士と見なし始めないならば，潜在的なクライアントによって完全に受け入れられることは決してないであろう（Turner 1998）。大半の社会学者はこの指摘に好意的でなく，いやがるのである。社会工学がそのような不快な意味合いを持つのはどうしてなのか。

答えの一部は悪い目的のために社会学的知識を使うビッグ・ブラザーズによる過剰統制とコントロールのオーウェル的見解にある。社会工学について語る際に，人間の被験者に対する同意できない実験，新たな抑圧的社会的配列をつくる実験のナチスのイメージを想起することが容易であるが，これらの特徴づけはすべて払拭できるものである。工学についてのそのような肖像画は，社会学者，その他の社会科学者が社会工学の試みの成果を確定するための十分に洗練された人間行動と組織についての知識を持っていることを想定している。しかし，われわれがたとえ洗練された人間行動と組織についての知識を持っていたとしても，ネガティブな意味での社会工学の肖像画は実は正反対のことが正しいときには，その知識は悪の目的に使用されるであろうということを想定する。

社会学者が社会工学に不信感を抱く理由のもう一つは，それが社会学者にもっと厳密でもっと規律されることを強いることにある。第一に，社会学は非常にイデオロギー的分野であり，実際に不可能なものに直面して逃避しても，そのイデオロギーを放棄することをしばしば躊躇する。工学は何がなされうるかに関するものであり，工学的アプローチは社会学者によって抱かれている多くのイデオロギーの存続可能性と適用可能性に不可避的に疑問を投じるであろう。第二に，社会学者はしばしば反科学であり，すべての知識は相対的であり，科学の法則を通じて理解される頑固な世界というものは存在しないし存在し得ないと述べる。社会工学はこの心地よい批判に疑問を投じ，大半の社会学的理論化を構成する哲学的に論争のある社会の素朴な探求者となる。第三に，集合主義の美徳へのイデオロギー的共感にも拘わらず，社会学者は rugged individualists（荒削りな個人主義者）である。社会工学はあ

なた自身のことをする社会学の知的ナルシシズムを暴露する。

しかし，これまでのところ，実効的な社会工学への主要な暗礁は，理論と調査と実践との間に目下存在している分離にある。社会工学はオーウェル的に見えるために，社会学者のイデオロギー的慰みに水を差すので，あまりに科学的すぎるように見えるので，あなた自身のことをする社会学の知的ナルシシズムを暴露するので，拒絶される。しかしこれらの特徴づけがなくても，はるかに基本的な問題が存在する。社会学のあまりに多くの理論家が理論化を行っていない。あまりに多くの方法論者や調査者が質問紙をハンドアウトし，コンピュータのプリントアウト上の大きな相関をサークルしている。あまりに多くの実践家が一般理論を臨床分析，アドボカシー，記述的リサーチという自分たちの試みに無関係なものと見なしている。その最終産物が，それぞれが別々の道を進む結果になっている。工学的志向に向かう最大の障害を呈しているのが，社会学のうまく統合された下位分野となすべきものの内部と間のこの狭量さである。理論と調査と実践の間にこの分離が存在する限り，社会学はすべきで，できるほどに役立てないであろう。私が提唱するのは，我々が一度損じると元に戻らないものをもう一度元に戻すことである。社会学を工学的学問と見なすことは，社会学理論をレリバントにさせ，応用社会学を一層役立つものにし，ひとつの道を提供するであろう。

### 2.1　工学とは何か

社会工学とはどんなものかを尋ねる前に，工学とは何かを尋ねるべきである。工学は宇宙の属性に関する知識を何かを建設する，何かを台無しにする具体的な問題に適用することを伴う。道路，建物，港湾，運河，橋脚，熱工場，電子システム，その他組み立てられるもの何でも，エンジニアは何が組み立て可能であり，それをどのように組み立てるか述べようと努める。ポケットライナーを持った怠け者としてのその貧弱なプレスにも拘わらず，エンジニアは何か有用なことをしている。もちろん，大切な隣人を破壊する武器システムないしフリーウェーのいずれでも，他者にしばしば危害を加える。エンジニア自身は一般理論原理に曖昧な感覚しか持っていないかも知れないが，大半の工学は実践的問題に抽象的理論アイデアの適用を伴う。というのは，工学においては，理論は通常工学の一領域に適合する単純な親指ルール（rules of thumbs）に変換される。かくして，もし我々が社会工学を持とうと思えば，我々は経験界に照らして照合された，実践家に情報を伝えることができる親指ルールに変換された，何らかの理論的原理を持たねばならない。

今や，社会学者によって取り組まれる多くの実践的問題は工学の適用の外部に位置することを強調したい。クライアントはヘッドカウントや他のタイプの記述的情報だけを欲しているかも知れない。上記の事例で必要なすべてはデータを収集するための適切な方法論である。

また科学の強引な適用よりも直感や似たような問題に対する過去の経験に依拠する実践家が直面する問題も存在しよう。明らかなように，すべての臨床社会学，応用社会学，社会学的実践が工学的科学に作り替えられることを提唱しているのではない。私が主張しているのは，社会学が工学的翼を持つべきだということである。

工学の鍵は次のものを持つことである。

(1)　有力な理論的原理

(2)　これらの原理が系統的な経験的照合の結果正しいことが判明するという確信

(3)　これらの原理が実世界の問題に適用される経験

(4)　同僚のエンジニアに伝達可能な親指ルールに経験的知見や理論的原理をどうやって変換するかという知識

社会学を工学にする上記のステップのすべては他のステップに互いに依存する。

### 2.2　社会学的実践の展望（見込み）

理論と調査の再統合の最も有望なひとつは実践にあるという見解を持つようになった（Turner　1998）。実践家が調査に従事するか所与の方向に状況を変える相談に乗っている限り，理論はレリバントである。実際，理論はレリバント以上である。それは企画に批判的である。理論がなければ，何をするか，どのように進めるか，介入からどんな結果が生じるかを知ることは困難である。理論があれば，実践家は調査と介入に情報を伝えることができ，説明ツールを持つ。そこで実践家はレリバントかも知れない理論原理に注目する必要があり，抽象原理をある特定状況の個別性に変換することができなければならない。実際，理論家と調査者のコラボレーションや，状況の独特の側面に精通することは大いに望ましい。だがコラボレーションは制度化されてようやくうまく長期にわたって働くのである。かくして，我々は実世界への適用を持つ理論を開発する必要がある。理論がゲネリックな（generic）社会現象に向かう限り，それは常にレリバントであろう。鍵は変換であり，我々が理論家と実践家のつながりを制度化し始めることができるのはここである。

私がこれまで述べてきたことの中にいくつかのステップが含まれている。

1. 既存の理論は原理に転換される必要がある。大半の理論のメタ理論的，歴史的，仮定的覆いは引きはがされ，理論によってカバーされる現象を駆動するゲネリックな諸力の力学についての言明だけを残す。
2. 理論的原理の経験的な立証は原理の尤もらしさの感覚を手に入れられるように編纂要約される必要がある。尤もらしくみえる原理は社会工学のコア・アイデアとなるはずである。

3. これらの原理は，その効用が容易に気づかれるように，理論家でないものにも入手される必要がある。理論家は原理を親指ルールに変換する必要がある。特に数理的に述べられた理論に関しては。散文的に語られた理論に関しては，この変換は自明であるが，ここですら，目標は，理論をその中枢的要素に還元することであるべきである。
4. 実践家は彼らの訓練の中でこれらの原理を学ぶ必要がある。大学院プログラムにおける従来の理論コースは，実際に何かを説明する原理よりも学説史とメタ理論に焦点をおいているので不適切である。かくして，我々は学生のコア訓練の一部として，「理論と社会学的実践」に関するコース（講義）を必要とする。講義の他に，我々は主要な原理を要約したテキストブックを必要とする。『社会学的実践のための諸原理』を執筆することは，実際には社会学のテキストブックの通常の無感覚の代わりに，いくつかの原理を持つだろうから，ラデカルであるだけでなく，有用でもあるであろう。

メタファーを用いれば，わたしが社会学的実践のために念頭に置いているのは，その基本的な重要部分だけに裸にされた理論的原理のバッグである。諸原理は事情が命ずるままに引き出され利用され，バッグに戻される。我々はもはや，シンボリック・インタラクショニストの視点，コンフリクト理論の視点，合理的選択理論の視点等を取らない。むしろ，我々は裸にされた諸原理のバッグから事例にふさわしいと思われるものを取り出すであろう。

私は，このプロジェクトが幾分空想的に見えると確信しているが，我々はそれを今すぐ実行できると思っている。実際, この種の仕事は現在なされつつある。私が提唱しているのは，我々は既に存在するものを拡張し，制度化することとそれを社会学的実践，応用社会学，臨床社会学の重要部分とすることである。コントが実証主義に賛成の議論をしたときに，彼は非常に多くが誤認したような raw empiricism 素朴な経験主義を意味したのではなく，世界を作り替えるために用いられる理論の開発（ニュートンの引力の法則はその原型）を意味した。それは依然として社会学にとって最良の希望であるから，このビジョンを捨てるべきではない。ラデカルなイデオロギー，個人のバイアス，直感，ヒューマニストであること，その他の動機づける力は実際には人々を助けないであろう。社会科学の諸原理の適用が助けるのである。実際，我々を先導する科学がなければ，我々は自分をベターに感じさせる positive harm（ポジティブな危害）をすることができる。

理論は我々に，介入の中で何が働くかを知らせるだけでなく，何が働かないかも知らせる。イデオロギーないしヒューマニズムが我々を先導するとき，我々が知ることができるものに何ら制限はない。理論が我々を方向付けるとき，それは何が可能でないかを教える。それらは社会的宇宙の力に逆らうので, 何物かはなされ得ないのである。社会工学が善であるには，

実在するものと可能であることによって我々のイデオロギーとヒューマニズムを和らげなければならない。不可能な夢を夢想することは，気分を高揚する音楽をつくることだが，それは最終的に人々を傷つける。あまりに多くの社会学者がドンキホーテのようにふるまい，エンジニアのように振る舞わない。

### 2.3　工学原理をどうやって開発するかの例証

略（別記）

### 2.4　社会工学実現を遮る障害

上記の例証は工学原理ないし親指ルールの例証にすぎない。明らかに，私はそれらを系統的な仕方で仕上げていないし，時間と努力が与えられれば，多くの親指ルールはかなりの経験的な立証を受けた理論的なアイデアから開発されうると考えている。それゆえ，問題は工学原理を開発することではなく，適用することにある。まず，我々は状況内の初期条件が親指ルール内に特定されたそれと一致するかどうかを知る必要がある。次に，我々は何が達成されるか，その目標をどのように達成するかというビジョンをすでに持っているクライアントのニーズによって制約されている。上記の状況下で，クライアントのバイアスは親指ルールを使うのに可能なものに変更されねばならない。社会工学は典型的には実施する力よりも説得する力をもつだけである。

第三に，我々はいくつかの親指ルールが実践において不可欠である事実に留意しなければならず，どの親指ルールがレリバントであるか知らねばならない。関連してもっと重要なのは，社会界の諸力が交錯し，時には互いに中和し合い，時には互いに増幅し合う点である。かくして，状況は，実践において容易に管理し得ず，行方について予測を難しくする矛盾する諸力を提示することがある*。社会界の多くは，気象学や他の応用科学に顕著な実在界の特性をみせる。我々は働いている諸力を理解しているが，これらの諸力は複雑に交錯し予測することが難しい帰結を生み出す。社会工学は常に交錯する諸力と対面し，時には社会工学において諸力の操縦の堅い予測を行うことが難しいことがある。しかし，気象学者はこの事実の故，彼らの知識の利用をやめることはない。社会学者はどちらかであるべきでない。しかし我々は大半の社会工学は，予測不能というこの要素を持つことを自覚しなければならない。

*例えば，我々はネットワークが濃密でない，権威の行使が必要な組織の中で連帯を高めることにチャージすることがある。権力と権威の諸力が連帯を増進する諸力と衝突し，我々がたとえ連帯を生み出す条件と権威の行使を支配する条件を理解していたとしても，多くのことを行うことは困難である。

### 2.5　社会工学実践家に

私が提案していることは心のミーテングである。理論はもっと正確でフォーマルでなければならない。調査はもっと理論駆動的でなければならない。実践はもっと科学的で，社会的宇宙の基本特性の働きを説明する理論的原理に依拠しなければならない。上記のすべてを容易にこなしうる者は誰一人としていない。我々は分業を必要とする。理論家として私は自分の仕事を理論的原理をできるだけ明確で簡潔に述べ，これらの原理を使える工学原理ないし親指ルールに変換することであると見ている。私は実践家が直面する実世界の問題について考えねばならないときに，これだけは行うことができる。というのは，私が自分の理論化に磨きをかけ，利用に付すことができるのは，実世界での諸力の操縦と取り組まねばならない際であるから。

実践家は理論家がレリバントなこととして何をするかを知らねばならない。応用社会学者や臨床社会学者は彼らのバイアスから進んで離れるように努めねばならない。実践家はイデオローグであるべきでない。彼らはシンボリック・インタラクショニスト，コンフリクト理論，合理的選択理論，その他たくさんの仮定のバッゲージを運び，問題にしばしば無関係な理論的視点に過剰にコミットすべきでない。彼らは過去の経験の外挿が必ずしも現在未来の最良の指針でないので，経験に依拠することに慎重でなければならない。彼らは科学を彼らの使命に関係ないものと見なしてはならない，むしろ社会的介入に最も重要なツールと見なさなければならない。彼らは理論家と，少なくとも社会界がどのように動いているかを説明する原理を開発することに専心している理論家ともっと積極的な対話し始めなければならない。

実践家と理論家が一緒になるときにのみ，コントの実証主義の夢は実現される，もっと直接的にはほとんどの初期のアメリカの社会学者の目標が 21 世紀社会学の指針(灯台)となる。実際に，我々の大半は社会学にはその利用のために関心を持っている。社会学が他者をどのように助けることができるか，社会学がどのように違いを作り出すことができるか，どうしたら世界をもっと良くすることができるか。我々の中で理論家，方法論者になりたいと望んで社会学をスタートした者はほとんどいない。ある者は，多くの学期に社会学理論を構成するマインドを数える言説や質問紙調査の過度の偏重に対する反動として実践家として，またこの領域に移住してきた他者として始めたことであろう。しかし，今日学生，我々の大半に対して社会学が惹きつけるのは，より高い目的のために社会学を利用することであった。実践とは我々がこれをどのようにするかであるが，それは理論に精通した実践でなければならない。我々がイデオロギー，狭い経験，個人的バイアス，狭い理論的視点への知的コミット，ある方法論の過剰な利用に実践家としての我々の活動を席巻させると，我々は他者にポジ

ティブな危害を加え，我々すべてが最初に社会学者になることを欲せさせた夢そのものを破壊してしまう。社会工学は，これらの傾向を避け，我々の援助を必要とする世界に意味を持つひとつの方法である。社会工学は，権威主義の竜ではない。私の見るところでは，彼らはもっと人間らしい世界への最良の希望である。

社会工学は, 政策に関する大きな公の討論でよりもむしろトレンチの中で実践されている。社会学者がローカル，パブリック，プライベートな場所で彼らの知識の有用性を証明するまで，我々は公共政策に関する全国的な論争に加わるよう招かれないであろう。その上，これは工学が実践されうるイデオロギーとポリテックスで重装備したアリーナではない。むしろ，社会学がどのように役立ちうるかを証明しようとするのは，様々なコンテキストにいる多様なクライアントと一緒に仕事をする社会学者である。社会工学，別の名前でも良い，理論に駆動された活動をそのコアに持つものは，世界で意味を持つ最良のアプローチである。

社会学を学界の内外で重要にするのは実世界での社会工学の上首尾な実行である。人々が直面する問題の大半は，組織的な問題であり，社会工学によって解決可能である。それゆえ，工学に対する我々のバイアスを捨て去り，社会学を有用にする任務を背負うときである。

## 3.　工学原理をどうやって開発するかの例証

### 3.0　序論

私が当初この節を書き始めたときには，理論的に精通した工学アプローチを例証するために, フォーマル理論からいくつかの親指ルールを今から開陳することを読者に意図していた。戻って，少数の事例を示すことは比較的容易であろうと考えながら，この地点で論文を脇に置いてしまった。この事柄について考えれば考えるほど，私が当初構想していたよりはるかに多くの追加的な理論的仕事が必要であることに気づいた。

私が十分に開発された理論的アイデアを取り上げ，実世界状況にそれらを適用するために変換することを始めたとたん, いくつかのことに気づいた。まず, もし私が実際に私のサジェスチョンに従って行為する者にアドバイスするなら，わたしはもっとうまくいくだろう。仮説を開発する，リサーチ・プロポーザルを執筆する，グラントを獲得する，仮説を検証することはひとつのことである。もしあなたが間違えると，最悪のシナリオは，あなたのキャリアはチューブを下がるが，雑誌が論文としてドレスアップした何らかのデータを受け入れる意思があれば，この最悪のケースは開花しない見込みが強い。しかし，他の人々の生活に影響する状況を変更するためにお金が使われつつあるならば，人の責任は劇的に高まる。このようなペーパーの練習でさえ，私はこの責任の重さを感じ始めた。第二に，大半の理論的ア

イデアは同じ現象のやや異なった側面に力点を置くのでバリアントを持つ。もし私がひとつのバリアントだけを取り上げるなら，私はこれらのバリアントを比較的単純な親指ルールに総合する理論家として私の職務を遂行する意思はない。かくして，私はひとつの理論的アイデアを取り上げ，それをそのエッセンスに解体するのだけなく，関連する理論的諸アイデアをとりあげ，実世界に運ばねばならない。

多くの点で，これらの込み入りは理論家にとってはワクワクするものである。工学に非常に重要な精神的規律（mental discipline）はひとつの理論的アイデアの様々な定式化に切り込むという追加的仕事をしなければならない。それが数えられる場所つまり実在する人々の世界で間違うという幽霊によって掛け金がつり上げられるときにのみ，社会学のこの余分な方策の必要がキックインする。私はひとつの理論的アイデアを取り上げ，それの実践にとっての意義を引き出すだけでなく，いくつかの関連する洞察から新しい理論的原理を開発せねばならなかった。そこで私の次の事例は，私が当初構想したものより私にはるかに多くの努力を伴わせることが判明したが，最終産物は，社会学の工学翼についての私が念頭に置いていたものの例証である。

### 3.1　公正と公平

多くの実世界状況は，その中にいる人々が不公平に扱われていると感じ，その結果一生懸命働かなかったり，退職したり，集団，組織，全体社会の目標に不満を抱く対決に従事するので，問題を孕んでいる。クライアントは人々の不公正感から生じる問題を減らすことに関心があるように思えるであろう。確かにこの争点に関する文献は全く不在なわけではないが，その多くはかなり哲学的であり，私の定義では，工学の適用にはたいして啓発的ではない。しかし，この争点に関してかなり良く展開された社会学理論があるし，興味深い経験的な知見も存在する。それでは，これらを親指ルールとして役立つシンプルな原理にどうしたら変換できるだろうか。まず，様々な理論的アイデアを整列させる必要がある。

（1）　交換理論（e.g. Blau 1964）は，交換における人々の満足感は彼らの利得が費用に比例する時に高まることを述べる。この分枝（e.g.Homans 1961）は，利得が費用プラス投資に比例することを強調する。何が公平であるか計算するときに，人々が自分の費用と投資を他者のそれと比べて査定する，比較の要素を付加する分枝（e.g. Festinger 1954; Jasso 1980）もある。威信と権威の既存の地位システムが，その威信と権威が正当性が承認されている人物が高位の人々，低位の人々の双方によってもっと多くの報酬を受け取る資格があると見なされるような準拠構造を創出することによって，公平の計算に影響を与えることを付加する分枝（e.g. Berger et al. 1972）もある。

(2)　分配のルールが不在の場合，報酬が貢献に比例して分配されるべきことを述べるもっと規範的な理論も存在する。分配のルールが適所にある場合，諸個人はそのルールを受け入れる場合に，正しいと見なすであろう。

上記の理論にはすべて多くの分枝が存在するが，社会工学士としての私の目標は，それらを親指ルールに煮詰めることである。

様々なアプローチを眺めると，それらはすべて受け取る報酬が個人の知覚された費用と投資に比例すべきという見解に収斂しているが，我々はいくつかの複雑化の要因を考慮に入れる必要がある。費用，投資，報酬の知覚を歪める地位の不均等の影響。費用 / 投資に対する報酬の比の厳密な計算に力点を置く（もしくは変更する）ことができる規範，費用，投資，報酬が他者のそれと比較される過程。突然ながら，この親指ルールがたいして役立たない多数の指ルールとなってきている。だが，我々は比較的シンプルな原理をここで定式化できるものと思っている。

ある状況での人々の公正・公平感は，現在受け取った報酬のかわりに今及び過去に放棄した報酬の知覚の関数である。ただし，これらの知覚は次の3つのタイプの比較によって変更される。

(1)　似た位置の人々との比較

水平的分業，垂直的分業内のほぼ同じ地位の人々は，それをすることが可能な場合，彼らの費用，投資，報酬を互いと比較するであろう。これらが同じかほぼ同じとみなされる場合には，人々は自分たちが公平に扱われていると知覚するであろう。異なっていると見なされる場合，不公平と感じるであろう。

(2)　上位の人との比較

低位の人は，それをすることが可能な場合，彼らの費用，投資，報酬を上位のそれと比較するであろう。上位の人が彼らの地位を低位の人によってそれに値するものと知覚される（何らかの基準によって正当と認められる）場合には，彼らは自分たちの間の不均等な報酬分配を公平と見なすであろう。正当と認めない場合には，上位者の報酬も下位者の報酬も不公平と見なすであろう。

(3)　下位の人との比較

上位の人は，それをすることが可能な場合，彼らの費用，投資，報酬を下位のそれと比較するであろう。上位の人が自分の費用，投資，報酬を下位のそれに比例している（に比べて上位にある）と知覚し，報酬分配の信念や規範に比例していると知覚する場合，自分たちは公平に扱われていると知覚するであろう。そうでない場合，不公平に扱われていると

知覚するであろう。

この親指ルールを書くにはいくらかのスペースを要するが，それは実際にきわめてシンプルなものである。分業の異なる地点にいる人々は，常に（a）彼らの費用と投資，（b）同地位か上位か下位にいる者の知覚された費用と投資に比べて自分の報酬を査定する。規範は知覚を変更するが，基本的な力学は，費用と投資と関連しての報酬の査定と比較をめぐって回転する。人々が（a）と（b）が並んでいると知覚すれば，公平に扱われていると感じる。同じ地位，上位，下位の者が費用，投資に比して不当に多く得ていると見られる場合には，彼らは不公平と感じる。

おそらく上のすべてはくどいと見えるだろうが，これは我々の理論的原理のバッグから引き出した強力な親指ルールである。その上，それは検証されうるものであり，この場合には，ある組織のどの地点で人々が不公平と感じるかを知るために質問紙とインタビューが用いられる。この原理に要約される力学を知ることは，多く払いすぎている人々から他者がどれだけ手に入れているか隠されている者まで，不公平に解決策を提示している。

### 3.2　期待状態

期待状態に関する非常に膨大な文献があり，社会学の多くの理論と違って，これは社会学の実践で利用されてきている（Cohen et al.1988）。基本的議論は，タスク集団の成績が集団成員によって評価され，相対的な成績に基づいて，諸個人に地位（権威，威信）が与えられる。その地位が将来の成績の期待となる，というものである。中枢のアイデアは，期待状態が集団に創り出され，期待状態が外部から未分化な地位特性（e.g. gender，race，age）として持ち込まれ，期待状態が既存の権威 / 威信システムに組み込まれる，というものである。いったん定着すると人々は期待の観点から行為し，期待状態に従わない者にサンクションを課す傾向があるので，期待は自己成就する予言のように働くので，変更することが容易でない*。

*この理論の要約として Wagner/Turner 1998 を参照。

ここに，我々が親指ルールを開陳する際に役立つもっと一般的な理論が存在する。タスク集団に主たる注目をする期待状態理論自体と異なって，このもっと一般的な理論は，ほとんどすべての状況において，人々は自分たちがどのように扱われるべき，他者がどのように行為すべき，何が起こるべきかに関する期待を抱くようになることを強調する（Turner 1999, 2000, 2002）。これらの期待は多くの源泉――地位特性，規範と信念，自己像，過去・現在

の経験――からやってくることができるが，重要な点はそれらが登場することである。私自身の最近の著書（2002）で，私は期待状態と情動（感情）のアイデアで仕事をしてきている。総じて，諸個人の期待が儀礼化されるとき，諸個人は満足から幸福にわたるポジティブな感情を味わい，儀礼化されないと，怒り，恐怖，悲哀のネガティブな感情を味わう。

このシンプルな親指ルールは，期待が大半の状況の情動的雰囲気と風土に影響を与えるので，有益な含意をもつ。ポジティブなサイドでは，親指ルールは理解することがたやすい。

期待が充足されると，人々はグッドと感じ，様々な幸福感を体験し，表明する。

もっと興味深く，社会工学士をクライアントに運ぶ傾向があるのは，ネガティブなサイドである。期待が充足されないと，人々はネガティブな感情を体験する。

重要な質問は，どちらの感情か？どんな組み合わせか？どの水準の強さか？他者やより大きな社会的・文化的コンテキストにどんな影響を及ぼすか？

私の最も最近の理論はこれらの質問に答えようと努めている。我々の理論的諸原理のバッグのために，込み入った複雑な理論が親指ルールに要約できることを私に示させてくれる。

人々の期待が出会いで，特に繰り返された出会いで実現されないと，彼らはネガティブな感情を味わう。彼らの期待が高いほど，期待が実現されずに時間が経過するほど，引き起こされる感情はますます強くなり，それらが他者やもっと包括的なシステムに向けての行為に影響を与える傾向が強い。

(1)　人々が期待を実現できなかったことで自分を責める時，彼らは悲哀を感じる。
人々がこの失敗の結果に恐れを抱き，自分に怒る（腹を立てる）ならば，失敗が評価的な価値や信念まで判定される場合には，悲哀，怒り，恐怖のこの複合は恥と罪の感情を引き起こすであろう。

(2)　人々が期待を実現できなかったことで，他者を責め，この他者に怒りを味わうときに，そしてその他者の方が自分よりも力があるとき，彼らは恐怖心も味わうであろう。

(a)　（他者の方が自分よりも力があるので）もし彼らが他者に怒りの感情を表明できないならば，しばしば彼らは自分より力の弱い者に，これらの他者が所属する社会的カテゴリーに怒りを転移するであろう。

(b)　（それがネガティブなサンクションを招くという理由で）彼らが怒りを転移しないならば，怒りを抑圧するかも知れない。それが今度は彼らの感情エネルギーと役割コミットメントのモーダルな水準を下げるだけでなく，強い怒りの散発的爆発の確率を高める。

私は，今執筆中の理論から親指ルールをもっと追加することもできる。

従業員が自分が働いている企業に敵意を表明するのはなぜか。

教師，経営者，その他権威ある地位にいる人々に対する偏見がなぜ生まれるのか。

人々が役割への同調が緩慢なのはなぜか。

上記の親指ルールはこれらの質問に単独では答えないが，我々の理論的原理のバッグから引き出すことができるもののひとつであり得る。

### 3.3　サイズと分化

私におそらく社会学の最も初期の原理（コントによって最初に発見され，スペンサーによって展開され，デュルケムによって拡張された）に当たるものを取り上げさせて頂きたい。基本法則は，組織される諸個人の数が増大するにつれて，分業，ないし社会的分化も増えるだろう，というものである。

スペンサーはいくつかの重要な洗練を付け加えた。人口が増大するにつれて，統合の基軸が（a）権力と権限を行使する独自の規制（管理）センターの分化，（b）人々，資源，情報を動かすための独自の分配インフラの分化，（c）人々，資源，情報を動かすための新たな市場メカニズムの分化に移行する。

デュルケムは別な洗練を付け加えた。分化が増大するにつれて，文化システムは分業の様々な場所にいる行為者にレリバントであるために一般化しなければならないが同時に，分業の結節点内の関係と結節点間の関係を特定する限定的なものにならなければならない。

私はすでにスペンサーとデュルケムの理論の抽象水準をシフトしていることを認めるが，これは彼らが論じたことである。彼らの理論はマクロ水準の説明として意図されていたが，それらは管理の強さに関する多くの研究に最もインパクトを持った。そこでは理論家は知らないうちにスペンサー，デュルケムをメゾ水準におろしている（e.g. Abrahamson 1969；Blau 1970；Noell　1974）。しかし，学説史の泥沼にはまりこまずに，我々が実践家のためにどんな種類の親指ルールを開発できるかを見ることにする。

組織される諸個人の数が大きければ大きいほど，分業はそれだけ複雑になる。

（1）　権威システムの垂直分化は，当初の成長期に急速にS字関数の発展を遂げ，平準化し，時によって管理の諸経費を減らそうとする努力の中で低下する。かくしてそれは曲線型関数となる。

（2）　水平分化は組織される諸個人の数の増加のゆっくりしたS字関数であろう。

（3）　分化したユニット間の統合は次のものを通じて達成されるであろう。

　（a）　人々，資源，情報を分配するための新たなインフラ

コーディネートされる人々の数が多くなり，その空間的分布が大きくなるほど，これらのインフラは複雑になる。

(b)　交換のための新たなシステム

容積, 規模, 分布範囲が大きくなるほど, 市場ないし市場に似たメカニズムが人々，資源，情報を分配するために用いられる傾向が強くなる。

(c)　いくつかの水準で活躍する新たなシンボルシステム

それは，高度に一般的な評価的シンボル（イデオロギー）から分業の結節点内と結節点間の関係を定めるルールにわたっている。

この親指ルールは，集団，組織，コミュニティ，全体社会の如何を問わず，活動のスケールが大きくなるときに，いつもどんなことが起こるかを我々に教える。それはまた何が阻止できないかを教える。多くの人々がお互いに見ず知らずのものになり，彼らはお互いをつなぐシンボルをほとんど持たないであろう。彼らはますます権威に従うことになる。彼らは市場に入らねばならなくなり，お互いとの取引の多くは市場に似たものになるだろう（彼らのアウトプットを他の部署に売ったり，内部から購入する）。彼らは次第に市場勢力によってだけでなく，分配的なインフラによっても組織されるようになる。かくして，成長する組織出身のクライアントは「私は私の組織をどうしたらもっとパーソナルなものにできるのか」と尋ねるだろう。社会工学士としての我々のアドバイスは次第にこの親指ルールに盛られた現実と衝突するであろう。我々はこれらの力学を緩和することはできても除去することはできない。

### 3.4　パワーと依存

社会学におけるパワーについての最も有用な法則のひとつはEmerson（1962）によって定式化された。行為者Aの行為者Bに対するパワーは，ひとつの価値ある資源をBがAに依存する関数である。BがAによって提供される資源に価値を置くほど，Bが利用できるその資源の代替源泉が少ないほど，BのAに対する依存は大きくなり，したがってAのBに対するパワーは大きくなる。この理論の最も興味深い部分は，Emersonが提案するバランスとりの原理である。他者に依存状態にある行為者（上の説明ではB）は自分の依存を減じるように行為し，より好ましい交換取引に突き当たる。以下の親指ルールでは，わたしは1はBlau（1964）より，2〜5はEmersonのbalancing principlesから引いている。

BがAによって提供される資源に価値を置くほど，AによってBに提供される資源の代替源泉が少ないほど，BによってAに提供される資源の代替源泉が多いほど，AがBに

対して行使するパワーは多くなる。

A が B に対して行使するパワーは多くなるほど，B による A のパワー優位を減じる努力を稼働させる。それには次のものがある。

1. B は A に強制したり，強制の脅しをかけることができる。
2. B は A によって提供される資源の価値を下げることができる。
3. B は A によって提供される資源の代替源泉を探すことができる。
4. B は，自分が A に提供する資源の魅力を高めようと努めることができる。
5. B は，自分が提供する資源の A にとっての代替源泉を減らそうと努めることができる。

ある状況が Emerson 理論に定められている条件に合致することに気づく社会工学士は，秤を常に釣り合わせようとする依存的行為者の利用可能なオプションとこれが起こるのを抑えようとする支配的行為者の利用可能なオプションを知るであろう。非常にわずかながら，この働きを緩和する外部の力によって，釣り合わせようとする働きが働くことがある。

もしパワーホルダーの A がクライアントである場合，我々に恥だが，我々はどんなアドバイスを与えるべきかを知っている。

できることなら，B の強制力の動員努力を削ぐ。

B のバァイアビリティにとって資源を重要なままに保つことによって，B に資源を価値の骨抜きをさせない。

B にあなたの資源の代替肢を見つけさせない。

もし B があなたのクライアントなら，我々は潜在的なつり合い取りの操作をスキャンし，どれが最も成功しそうかを探すことができる。

### 3.5　連帯

多くのプラクティカルな問題は様々な社会的セッテングで連帯を生成する問題をめぐって展開している。かくして，連帯を生成する条件に関する原理は社会工学に関しても肝要である。合理的選択理論から，ネットワーク分析，コンフリクト理論によって多くの連帯生成論が生成されている。それらの明白な違いにも拘わらず，これらの理論は連帯を生成する比較的少数の条件に収斂する。これらをシンプルな親指ルールに変換させて頂く。

あるセッテングにおける諸個人の連帯感は次の時に増大する。

(1)　諸個人が高率の対面的相互行為に従事しているとき。

(2)　諸個人が権威システムで比較的対等であるとき。

(3)　諸個人が濃いネットワーク紐帯を見せ，構造的に均衡したポジション内にいるとき。

(4)　諸個人が彼らの利害を脅かすことが知られている他集団と対立状態にあるとき。

(5)　諸個人が彼らの関係を体現する評価的シンボル(信念とイデオロギー)を開発するとき。

(6)　諸個人がお互いに対して，集団に対して日常的な対人儀礼に従事するとき。

(7)　諸個人が連帯，連帯を支える儀礼と共に到来するポジティブ感情のために，集団に依存するようになるとき。

またも上記の条件は，我々に可能でないことを教える。例えば，一組の諸個人が他者にアクティブな権威を行使している非常に不平等な状況では，高い連帯は一層難しい。しかしながら，(1)(2)が強調するように，濃いネットワークで高率の相互行為を見せているときには，対等でない者の間でもある程度の連帯を持つことが可能である。実践家が目標が連帯を高めることにある状況にはいるとき，状況の個別性を所与として，上記の条件（一部でも）実現されうるかどうかを知ることがタスクとなる。

## References


Abrahamson, M. 1969　"Correlates of Political Complexity."　*American Sociological Review* 34 : 690-701.

Berger, J./M. Zelditch, Jr./B. Anderson/B.P. Cohen 1972　"Structural Aspects of Distributive Justice : A Status-Value Formulation." Pp.119-246 in : J. Berger/M. Zelditch/B. Anderson (eds.) *Sociological Theories in Progress,* Vol. 2 Boston : Houghton Miffin.

Blau, P.M. 1964　*Exchange and Power in Social Life.*　New York : Wiley.

――― 1970　"A Formal Theory of Differentiation in Organizations."　*American Sociological Review* 35 : 201-218.

Cohen, E.G./R. Lotan /L. Catanzarite 1988　"Can Expectations for Competence Be Altered in the Classroom." Pp. 27-54. in : Murry Webster, Jr./Martha Foschi (eds.) *Status Generalization : New Theory and Research.*　Stanford, CA : Stanford University Press.

Emerson, R. 1962　"Power-Dependence Relations."　*American Sociological Review* 17 : 31-41.

Festinger, L. 1954　"A Theory of Social Comparison Processes."　*Human Relations* 7 : 117-140.

Hechter, M. 1987　*Principles of Group Solidarity.*　Berkley, CA : University of California Press.

Homans, G. 1961　*Social Behavior : Its Elementary Forms.*　New York : Harcourt Brace Jovanovitch.

Jasso, G. 1980　"A New Theory of Distributive Justice."　*American Sociological Review* 45 : 3-32.

Noell, J.J. 1974　"On the Administrative Sector of Social Systems : An Analysis of the Size and Complexity of Government Bureaucracies in American States."　*Social Forces* 52 : 549-558.

Wagner, D./ J.H. Turner 1998　"Expectation States Theory."　Pp. 452-465 in : J.H. Turner *The Structure of Sociological Theory.* 6th ed. Belmont, CA : Wadsworth.

## 4. 社会学的実践における社会学理論の利用のために*

*原題は「社会学における科学的理論化の実践と社会学的実践における科学的理論の使用」

【梗概】 社会学的実践が社会学の周縁に位置づけられる理由の一端は，調査者が理論の検証にかからない方法論に重く依拠する一方で，理論家が検証可能な理論を開陳しないことにある。社会学の理論化はイデオロギー批判，メタ理論化，思想史（学説史），古典理論家の英雄崇拝，認識論的否定主義のような，ゲネリックな社会過程についての一般理論を開発することから注意をそらす活動に従事している。調査が過度に理論乖離的なのは，理論家の過失の結果だけでなく，サーベイメソッドに過度に依拠し変量解析と統計技法に過度に関心を払っていることの帰結でもある。その上，理論家が調査者でもあるべき，調査者が理論家でもあるべきという期待は，他の成功を収めている科学において顕著な分業を曖昧にする。上記の趨勢の帰結は，実践家は引き出すべき理論的原理群をもてないことである。社会学は，a broad array of methodologies を用いる理論に志向した調査者によって系統的に検証されてきている理論的原理を用いる工学翼を開発する必要がある。このようにしてのみ，社会学的実践は社会学の中心に移ることができる。この転換が起こるまでは，社会学の中での実践の位置は周縁にとどまり，社会学は社会科学のエキスパートを必要としている政策形成者とクライアントに無関係なものと見なされ続けることであろう。

### 4.1 序論：社会学に何が起こっているか

20 世紀半ばには，社会学は社会的宇宙の運行力学に科学的説明を提供することによって，科学のテーブルについたかのように思えた。これらの説明を与えることによって，社会学理論は人々の生活を形作る決定を行う政策形成者に情報を与えることができ，社会学的実践に携わる者に指針を与えることができるはずであった。今日では，社会学が数多くの誤った線に沿って分裂しているので，この潜在能力は枯渇したように思われる。

(1) 第一の線は，検証可能な理論を開発することに失敗した社会学理論を貫いている。実に多くの社会学の理論化が哲学の雲の中に浮遊するか，古典学者の英雄崇拝者となるか，ある好ましくない社会状態のイデオロギーを積載した批判者になっている。社会学理論は社会界がどのように作動しているかを説明すること以外のあらゆることをしているように見える。

(2) 第二の線は，理論を検証する見込みがあるとはほとんど思えない方法論が跋扈し，理論が記述的調査知見をごまかす形ばかりの陳列棚になっている，調査の非理論的性質である。

(3) 第三の線は，社会運動の動きが広範な社会から大学のシステム，専門的学問，ファカ

ルティ政治に向かい，それはしばしばイデオロギー的にチャージされるバイアスにあえて疑問を呈する学者を詰問する警察官による恐怖支配を創り出している。その結果，社会学は今や説明ツールとして一般理論を持たない，現行のイデオロギー正統派を疑問視するいかなる思想にも疑惑のまなざしを向け，その教員，院生に政治，イデオロギーのリトマス試験を課す，高度に政争の具化した学問 a highly politicized discipline となっている。

(4)　第四の線は，社会学の断片化の他の点を強調する。つまり，社会学は決して自然科学になり得ないと主張する認識論的否定主義である。この帰結は，科学のツールで何かを説明する義務を持たず，理論と調査は必要不可欠な精神的規律を欠くことである。その代わり，状態は道徳的退廃の奨励を通じての悪魔と定義されうる。変数は中身の有意と反対の統計的有意への関心を以て相関づけられる。理論は社会界がどのように作動しているかを説明することを避け続けている。

私にとって驚きなのは，大半の社会学者がこれらの誤った線を社会学にとって問題と見なしていないことである。社会学は私が職業的社会学者になって 40 年間我々社会学の使命と感じているもの――人々を助け社会内の問題状態を改善するために社会学を使う――を無視しながら，科学のテーブルからはじき出されているように見える。社会的宇宙は性質上社会学的な問題で満ちている。問題を解決するパワーを備えた者の目から見ると，社会学は，社会科学に最もレリバントでない社会組織の研究に邁進している。

オーギュスト・コントは嘲笑はされなくとも無視されている人物であるが，社会学にとって最良の路を敷いた人物である。つまり，基本的な社会過程に関する理論を開発し，様々な方法を通じてこれらの理論を査定し，最も重要なことには，社会を再建するためにこの理論を使用した。社会学の多くの者にとっては，コントのこれは科学主義の最悪のものであった。つまり社会界の基本特性，ゲネリックな（時空を超えて普遍的な）特性が何ら存在しないから，誤った認識論，間違った存在論に素朴に泣きついているものだと。上記の冷淡のすべては，社会学がいかに両極化し，政争の具化しているかの証拠である。また我々がすべての科学が追求するもの（宇宙がどのように作動しているかについての知識）の追求を放棄するときに知識人としていかに落胆するかの証拠である。

本稿では，社会学の理論化，調査の基本的問題点を洗い出し，これらの問題を克服することによって，初めて，社会学的実践において利用できる累積的知識群というコントの夢を実現できる。理論家が社会学的実践に従事する者に指針となる，尤もらしい理論原理の知識基礎を建設するように，理論を行い，調査者がその理論を検証するときに初めて，社会学的実践の周辺的位置は克服されうる。

### 4.2　累積的科学が社会学的実践に何をもたらすことができるか

社会学的実践がどのように起こるかに関していくつかのモデルが存在する（Fein 2001）。

(1)　道徳的 / 規範的モデル（奨励と制裁）

(2)　臨床的 / 教育的モデル（無知を知らせて教育する）

(3)　文化的 / 構造的モデル（プレイヤーを外部の力によって押し出されているものと見る）

(4)　コンサルタントモデル（専門化した才能が要求され，懇請される）

私はこれに五番目の工学モデルを追加する。

それは一般理論が基礎的社会過程に関する親指ルールに変換され，実践家によってクライアントのニーズに合うように適用される。このモデルでは，道徳的 / 規範的モデルを拒絶する。他の 3 つのモデルは工学的メンタリティを持つ社会学的実践を包摂する。かくして，私が提案している工学モデルは一般理論に工学的解決を要求する問題をもたらす形で実践家の直感と経験を水路づける一方で，他のモデルに理論的歯を植え付けるものである。

まず，工学，特に社会工学は好ましくないという考えから脱却しよう。工学は帰納的かつ演繹的なものであるが，そのゴールは具体的問題に一般原理を適用することであり，途中のプロセスで，何かを組み立て，何かを据え，何かを引きはがし，何かを組み立て直す。工学は典型的には人間のニーズに応えるように行われる。社会工学は同じ目標を持ち，次の 4 つのものをめぐって回転する。

(1)　高度に抽象的な理論的原理群

(2)　これらの原理が正しいことを示唆するテスト

(3)　理論的原理を具体的に適用する経験の累積

(4)　理論的原理を実践家が引き出すことができる親指ルールに変換すること

上記の 4 つの活動が制度化され統合されるときに，社会工学はもっと効果的となりうる。

私の目標は一般理論的原理からひきだされる一連の親指ルールを開陳することである。親指ルールを精密化することで，道徳家は直接の実践の奨励の他に何かを持つであろう。教育者は教えるものを持つであろう。文化的 / 構造的アプローチは行為者にどんな力がかけられており，何がなしえ何がなしえないかを照射することによって，何か説明力をもつであろう。コンサルタントは具体的な問題に関わりを持つより広範な才能のレパートリーを持つであろう。

「原理」「親指ルール」によって何を意味するのか。理論的原理は人間が振るまい, 交流し, 組織するときに働くゲネリックな社会的諸力と過程に関するものであるべきである。これらの諸原理はもっと単純な親指ルールに煮詰められ，社会学的実践家によって参照されるために索引化されうると信じている。理想ではこれらの諸原理が学習され，理論的原理のマニュアルの中で参照されうる，社会学的実践の大学院プログラムに可視化するであろう。私は長

生きできたら，『社会学的実践の諸原理』をいつの日か書きたいと思っている。

目標は，社会組織の問題を孕んだパタンに直面するクライアントにカウンセルと助言を与えることである。実践家の経験と直感は実践家が経験事例を当該の親指ルールと結びつけることを可能にする。これは親指ルールの知識と工学の才能を要求する社会状況の個別性についての知識を伴う一種の民間演繹 folk deduction* である。直感は社会工学問題の解決を定式化する最良のやり方ではないが，経験的問題と工学的親指ルールを結びつける最良のやり方である。一部の理論サークルでは，抽象的法則から経験的事例への演繹に関するあまりに多すぎる強調が見られる。実際には，我々はほとんど常に経験的事例を見定め，この事例を理解するのにどの理論が適切かを直感的に識別する民間演繹 folk deduction を行っている。かくして，臨床家と教育者の役割は私のアプローチでは喪失されず，状況に精通しているものだけがどの理論的原理がレリバントであるかを呼び出すことができるので，むしろ中心的なものである。

* ある理論的原理が直感的にある経験的データ群の解釈に適切であるように見えること（1994：43）

社会学的実践家が道徳的アジェンダを持つならば，この社会工学はクライアントに道徳的奨励に従わせるのでなく，価値あるクライアントに才能 expertise を与えることを許す。最悪の状況は，イデオローグが道徳的には好ましいが役に立たずひょっとしたら有害な解決を示唆する情熱に動かされることである。例えば，私のかつての同僚に，企業が労働者が不平を持ち組合を結成しようとした場合，低賃金と仕事を外注するぞという脅しとどのように組み合わせるか（大半の移民労働者は低賃金を受け入れることを余儀なくされた）非常に興味深い仕事をしているものがいた。このリサーチは重要であるが，結局この基本的な結論は，資本主義は打倒される必要があるというものであった。基底にあるイデオロギーが一編のリサーチの結論に現れると，クレディビリティが侵される。アカデミックなマルキストの間を除いてそれはきっと共鳴する指摘ではないだろう。

工学精神はイデオロギーを規制し，問題を実際に解決するための実際の提案でなく社会工学が誰を助けるであろうかを選抜する過程にそれを限定する。イデオロギーは人々を盲目にし，複雑な問題に非現実的な解答を提案させる。実際，たいていの場合解答は決して完全なものではない。なぜなら社会的実在は諸力の交錯プラス意図せざる結果をみせるので。だが工学アプローチはクライアントにオプションの範囲に関して情報を与える。これらのオプションが問題を解決するのはまれであろう。たいていの場合，期待できる最良のものはクライアントが直面する問題を緩和することである。

たくさんのリサーチと理論化にかけられてきている社会的世界の一特性（連帯）に焦点を

当てることによって，私が念頭に置いていることを例証させてもらう。社会工学士が直面するかなり多くの問題は，低い士気，欠勤，労働者の疎外，その他の連帯の欠如を指す他の名称に関心を持つクライアントによって表明されている連帯の問題をめぐるものである。最初の段階では，社会工学士はこれらの名称が何を意味するか知るために状況を査定する。状況を現場で把握するには直感が重要である。次のステップは，クライアントの問題をレリバントな理論的原理に合致させることである。実践家は連帯についての親指ルールに接近する。私は例証として，これらの一部だけリストした（表 1 参照*）。次のステップは，連帯についてのレリバントな親指ルールの中の力を指す概念の経験的な価値を確定するために，経験的状況を査定することである。ある意味で，このステップは状況の直感的な把握しか存在しない場合，尺度が存在するために仮説を定式化し検証するのと非常に良く似ている。これらのデータは，現在の状況に導いた親指ルールにおける概念の価値を確定する。次に，原理は原理の中の価値を高めたり減じることによって，状況をどのように変化させるかを示唆するはずである。この接点では，実践家は効果的な社会工学の中心的な障害に出会う見込みが高い。状況の構造と文化を所与として，親指ルールを変革の実施に利用することは可能でないであろう。それゆえ，社会工学は，理論的原理と現場の条件が何がなされうるかに実際の制約を課すことを認識しなければならない。それはイデオローグや道徳の説教師は見たり信じたがらないものである。ひとつの考案された事例を用いて，上の議論にいくつかの架空の肉付けを施させてもらう。

*訳注　表 1 の内容は 3.5 連帯の「あるセッテングにある諸個人の連帯感は次の時に増大する」の 7 項目と同じため，記載を省略する。

ある問題を孕んだ状況の組織構造と文化が権威の不均等を減じることができず，仕事の性質上濃密なネットワークを増やすことができないとしよう。上記の二つの条件が変更できないならば，できることには明白な限界がある。あるイデオローグは人間の尊厳に背くものだから不平等は除去されねばならないと主張するかも知れない。しかしこれが状況のオプションでないならば，そのようなイデオロギーの勧告は何になるのか。たとえ不平等が除去できないとしても，原理は何がなされうるかに関していくつかの指針を与える。相互行為の率を高めるために，労働者を共通のシンボルに向けさせる儀式の機会を創り出すために，共通のシンボルを開発し，定期的に集会を開く。またもイデオローグは，そのような政策は労働者に虚偽意識を持たせるだけだと難癖をつけるだろうが，またしてもこの種の勧告が我々をどこにどこに運ぶというのか。それは資本主義システムを突っついていることを知ることがイデオローグの中に快適な感覚を生成するかも知れないが，他に何の効果も持たないであろう。

工学的精神はこの種のイデオロギーを背景に押しやり，厄介ではあるが真の問題に取り組むオプションを求める。上記の限られたオプションを実行することは連帯の少しばかりの増大を引き起こす見込みがある。社会工学はまた権威の不均等の減少，構造的に等価な労働者間のネットワーク濃度の増大，連帯を生成する相互行為の率の増大のような，構造のラデカルな変更を示唆することができる。これらの示唆は，それらを実行に移すことが可能な場合には，おそらくはるかに連帯を高めるであろう。かくして，ここでの鍵は，クライアントにオプションを提示するまで単純化された親指ルールに煮詰められた理論的原理を使用することである。

ネガティブな感情の喚起に関するもっと複雑な原理を引き合いに出したもう一つの事例を取り上げることにしよう。これは，私がこの10年仕事をしてきている領域で，自分自身や他者の感情の理論化から引き出した親指ルールだけを提供できる（表2参照）。またも表2の親指ルールはほんの例証であって，リストを完全なものにするためにあと数十のものを追加することができる*。今，一人の社会工学士が，諸個人が立腹し，不満を持ち，疎外され，一生懸命働きたいと思わない職場に入ることを想像したまえ。表1，2の親指ルールがレリバントで，ここでは状況の力学への社会工学士の直感と洞察が，連帯と感情に関する二組の原理のどの要素がレリバントであるかを決めるのに重要となる。親指ルール自体はここでは決定的なものとはなり得ない。これらの原理か他の原理が状況にレリバントであるかどうかコールをしなければならないのは社会工学士である。

*感情についてのより完全な理論は拙著（2007）参照。

社会工学士は職場，メゾレベルの組織単位の風土と構造を査定することによってのみ，確定をすることができる。例えば，職場が厳格な権威のハイラーキー，仕事のフローの密な監督，労働者のモチベーションに関する不信の風土を見せるならば，労働者がネガティブなサンクションを味わい，彼らの期待や彼らの監督者の期待に応えない見込みが高い。上記の条件下では，彼らは恥を味わい，多くの場合，監督者，経営者，風土，メゾ構造などの外部に責任をなすりつける。もし彼らが上記の条件下で長期にわたって，働くことを余儀なくされるならば，彼らは彼らのネガティブな感情の的をマクロな水準の経済に向けるであろう。もし彼らの自我（self）が高度に傑出しているなら，彼らは強い恥の感情を味わうであろう。彼らはまたこの恥を抑圧し，外部の責任に転嫁し，職場のすべての側面に怒りと疎外を表明する傾向がある。もし構造的に彼らが等価な労働者と相互行為することができるなら，彼らはメゾ水準の組織単位の構造と風土に対する団体の敵意とそれからの疎外をポジティブなサンクションで強化する職場の風土を育むであろう。

表２　ネガティブな感情喚起の条件

1. 感情は次の二つの基本的条件下で引き起こされる。
   (a)　ポジティブないしネガティブな裁可
   (b)　ある状況で期待が適うないし適わない
2. 諸個人がポジティブな裁可を体験する（ないし期待が適う）時，彼らはポジティブな感情を体験する。その状況で，アイデンティティと自画像が傑出しているほど，ポジティブな感情はますます強くなる。
3. 諸個人が，ネガティブな裁可を体験する（ないし期待が適わない）時，彼らはネガティブな感情を体験する。その状況で，アイデンティティと自画像が傑出しているほど，ネガティブな感情はますます強くなる。諸個人が恥を感じる傾向が強くなる。その状況を道徳的タームで定義すると，罪の意識が強くなる。
4. 諸個人が彼らのネガティブな感情に対する帰属次第で，ネガティブな感情は様々に分かれる。帰属のターゲットとなる可能性のあるのは次の５つ。自己，他者，ローカルな状況，メゾ構造，マクロ構造。
   (a)　もし彼らがネガティブな裁可の受容（ないし期待が適わないこと）で自分を責めるなら，彼らは恥を感じるであろう。その状況を道徳的タームで定義すると，罪の意識を感じるであろう。
   (b)　もし彼らがネガティブな裁可の受容（ないし期待が適わないこと）で他者を責めるなら，彼らは他者に対する怒りを感じ，表明するであろう。
   (c)　もし彼らがネガティブな裁可の受容（ないし期待が適わないこと）でメゾ水準の他者範疇を責めるなら，彼らはこれらの範疇の他者に怒りを表明し，偏見を抱くであろう。
   (d)　もし彼らがネガティブな裁可の受容（ないし期待が適わないこと）でメゾ水準の団体を責めるなら，彼らはこの団体の構造と風土に怒りを感じ表明するだろう。この怒りが慢性的ならば，彼らはこの団体の構造と風土から疎外されるであろう。彼らが構造的に対等な地位にいるものと交流する他者もこの感情を味わい，この団体の構造と風土に対する彼らの連帯を通じて，ポジティブな感情の喚起を獲得するであろう。
   (e)　もし彼らがこのメゾ構造が埋め込まれているマクロ構造を責めるなら，彼らはマクロな構造（経済，宗教，政治等）に怒りを感じ，表明するだろう。彼らはこのマクロ構造の正当性を撤回するだろう。
5. 個人がネガティブな裁可を体験する（ないし期待が適わない）状況で，自己が傑出するなら，彼らは恥を感じるであろうし，道徳的に定義するなら罪の意識を感じるであろう。彼らが恥を感じるほど，彼らはこれを抑圧し，他者，状況，他者の範疇，メゾ構造，マクロ構造にその怒り転嫁する傾向がある。
6. ネガティブな裁可と期待が適わないことが慢性的で個人がその状況を離れることができないなら，彼らは役割から距離を置いたり，疎外を通じて，また他者や構造に怒りの責任を転嫁することで，自己の傑出性を下げようとする。

社会工学士はこの種の問題を容易に解決することはできない。なぜなら，それは慢性的なもので怒りや疎外の中に抑圧されたり変質される恥のような有力な感情の周りを回転するから。しかし，表１と２は，成績にポジティブサンクションを行使したり，労働者と監督者の交流と相談の比率を高めたり，反経営者的下位文化のリーダーを解雇したり，逆に彼らを監督責任者に選抜するなどを含むオプションの輪郭を描く指針を与えることができる。鍵は，ハイラーキカルで懲罰的な監督によって諸個人の恥の感情を減じ，物質的，シンボル的に報酬が与えられる成績とアイデンティティを結びつけることである。これらのオプションが採用される保証はないし，しかし少なくとも示唆された解決策はイデオロギーと反対の理論にいくらかの基盤を持つ。

上記の簡単な例証は，理論を社会学的実践に運ぶ戦略の確定的なものでなく，単なる例示に過ぎない。親指ルールは実践家に容易に参照できるようにもっと網羅的でクロス索引化されねばならないだろう。しかし，この戦略は次の二つの理由で実施に移すことができる。第一に，社会学における理論化の幾分憂鬱な状態にもかかわらず，ゲネリックな社会過程の法則は理論文献，調査文献に見いだされる。実際，社会学者はわたしが PhD を受け，専門の社会学者として経歴を開始した 40 年前よりは社会的宇宙のなかのゲネリックな諸力に関して，社会学がどれだけ多く知っているか認識していない。これらの理論は実践家のために，要約され，統合され，親指ルールに変換されうる。第二に，社会学的実践の既存のアプローチはイデオロギー的モデル，道徳的非難モデルを除いて，この工学的アプローチに適用されうる。というのは，実践に従事する者の持つスキルそのものが状況と親指ルールとを関連づけるのに重要なものであるから。私のアプローチの最も厄介な部分は, 親指ルールを収集し, これらの原理が彼らの努力に役立つことを実践家に納得させることである。私が以下で探求する他の障害も存在する。

### 4.3　前に立ちはだかる障害

最大の障害は，社会学は人間行動，相互行為，組織についての何の法則も持っていないと社会学者の多くが抱いている信念であるが，我々は一般に認識されているよりもはるかに科学として成熟している。社会学者が社会学の発展の十全な承認を妨げている障害は，理論的リサーチプログラムの人為的区割りと理論家が様々な系譜と概念命題がどの程度重複するか認識しようとしないことである。関連する障害は，社会学が科学たり得ないという自虐的シニシズムと社会学の営みは何らかの道徳原理の名の下に甲高い道徳布教とアクションの喚起であるべきというものである。皮肉にもこのシニシズムは社会理論家の間に最も大きく，それが科学的に理論化する努力の欠如を正当化している。イデオロギーのバリケードを呼びかけたり，科学的社会学を認識論的幻想と糾弾したり，聖典化された古典的聖人のテキスト分析に従事することの方がかなり容易である。

科学的社会学を抱くのを躊躇したり，科学理論に基づいた社会工学に何も言わないことのほかに，社会工学を成功させるのにさらなる障害がある。ひとつは，クライアントが何がなされるべきかにめったに見解を持っていないこと，ないしは執拗な問題を除去するために状況の構造と風土を変えることを躊躇することである。必要な変革の費用は社会学の工学士をクライアントを説得する役割に付かせるが，それは必ずしもたやすいものではない。かくして，問題の正しい診断と問題を緩和できる当該の理論的原理の理解が存在しても，クライアントを進ませることはしばしば困難である。クライアントの説得は工学的解決の実施よりも

困難であろう。

もう一つの障害は，社会的実在の複雑さである。社会的諸力はしばしば交錯し時としてお互いの効果を加速させたり，逆に相殺したり，また軌跡を変更したり，たくさんの親指ルールを用いるのを必要としたりする。いずれにせよ，工学的介入の帰結がどんなものになるか正確に予測することは困難であろう。自生システムの中で仕事をしている社会学者は天気を予報する気象学者に非常に似ている。関与する諸力は知られているが，その完全な強さと交互効果はしばしば正確な予測を困難にする。例えば，権力と権威の不均等な分布を生成する諸力はしばしば予測しがたい仕方で連帯を生成する諸力と交錯する。そこで社会工学士はこれらの交錯を抽出するために直感を用いねばならないが，同時にこれはクライアントにあまりおおくのものを約束しないことになる。コントロールされた条件よりも自生システムの中で仕事をするときすべての科学は，諸力の交錯と交互効果に直面するが，宇宙のこの事実を克服できない障害を提示する者と見なすのが一般的な社会学者である。理論的知識を複雑な経験的事例に適用する多くの学者のようにモデル化とシミュレーションは他の工学系科学におけるように，重要なツールとなるはずである。

### 4.4　結論

科学理論の工学的適用を提唱する私の目標は，社会学を象牙の塔の外で役立てることにある。公共社会学の近年の呼びかけは，私が輪郭を語ってきた社会学の抱える問題を解決するものではない。むしろ 4 つの社会学の幸せな和解は，社会学を分断する現実の違いを隠蔽する疑わしい類型である。4 つの社会学，いやもっと多くの社会学が存在するだろうが，それらはお互いの極端をほとんど正すことはない。社会学者が大きな公共問題にコメントすることを求められることがめったにない理由は，我々が科学としてたいして尊敬されていないからである。もし科学的社会学がクライアントが問題に取り組むのを助ける長い歴史を持ってきたならば，それはもっと尊敬されてきたことだろう。その結果，社会学者は信頼を集めて公けの討議の舞台に参入しているだろう。イデオロギーの極のひとつから公の討議の舞台に参入する社会学者は尊敬を集めるどころか不信を買うであろう。社会学者は公的言説の争点を診断し，科学者として関心を寄せ，この診断に基づき理論的原理を用いながら改良の有益な提案をすべきである。社会学者は talking heads のランクに加わる必要はなく，その代わり，公の討儀のテーブルに社会学のユニークな視点をもたらすべきである。社会学の実践に利する社会学内の社会工学翼というものがもしあるならば，社会学者は有用な知識を保有するとみなされるので，社会学者は公的な人物として知られるようになろう。

社会的宇宙の法則を開発しその再建にそれを利用しようとしたオーギュスト・コントのビ

ジョンは依然として正しいものであると私は思っている。法則と法則がそれから組み立てられるハード科学が存在しなければ，社会学は科学たり得ないだろうし，科学をイデオロギーに置き換えてしまいたがるであろう。実践に理論を使用することはもっと学問らしくなるひとつの術を社会学に与える。ある意味で，理論によって示唆されたアクションコースを実行することは理論の実世界でのテストである。社会学の実践が問題条件に介入するツールを手に入れる一方で，理論はその工学的応用から大いに恩恵を受けるであろう。

多くの社会学者は世界を何とか変えたいと望んで社会学に入ってきた。私の考えでは，社会工学は我々の大半を学部生として社会学に引き込んだ理想主義的目標を実現する最良の方法である。今日の世界が直面するほとんどすべての問題が性質上社会学的である。だが，これらの問題に何をするかに関する公共言説を支配しているのは経済学者，他の社会科学者，歴史家である。社会学は実世界の問題に決して不適切でなく，理論に精通した社会工学士は社会学を社会的宇宙のリメークに害を与えるのでなく善をなすようにする。学生や我々自身にイデオロギーを叫ぶのは，何かをポジティブにする我々の無能と無力をさらけ出すだけである。イデオロギー的糾弾と道徳の感化に比較して，理論とそれを裏付けるデータを収集することははるかに厄介であり，それらを統合し，フィールドで実践家によって利用されうる親指ルールに変換することはもっと厄介である。しかしながら，この種の厄介な知的な労働は，メデアでもうひとつの talking head を生み出すよりも，もっと大きなペイオフをもたらすであろう。

しかしながら，ある面で社会学者がこの地点で公共領域に飛び込むべきかどうか確信が持てない。我々の集合的レジュメ上に工学の成果を記録することの方が賢明かも知れない。これらの成果はいつか一人のクライアントの手元に届き，次第に社会学に対する信頼と評判が高まることであろう。その上，私の提案は社会学的実践の様々な形態（応用社会学，臨床社会学）が社会学の目下いる周縁ではなく中心に位置づけるものである。科学的社会学の開発の理由は，純粋に学問的なものでなく，科学はものを建設するために利用されるべきことにある。理論家が理論をつくり，調査者が完全な方法論のパレットを使って理論をテストすることに彼らの努力をもっと費やすならば，理論家が社会学的実践の有用なルールのハンドブックを開発するために実践家，工学士と協力するならば，そして実践家がクライアントに助言するためにこれらのルールを使用するならば，社会学はこの努力のためにもっと良好になるだろうし社会も良好になるだろう。おそらく我々が社会学的実践を社会工学と呼称することを望まなければ，これらの活動はイデオロギーの情熱ではなく，工学士の社会学を呼称しなければならない。

## 文献一覧

### 社会学の一般理論，グランド理論，知識の累積化関係


Maryanski，A./J.H. Turner 1992　*The Social Cage:Human Nature and the Evolution of Society*．Stanford，CA：Stanford Univ. Press.

Turner，J.H. 1972　*Patterns of Social Organizations*．*A Survey of Social Institutions.*　New York：McGraw-Hill.

――― 1983　"Theoretical Strategies of Linking Micro and Macro Processes.　An Evaluation of Seven Approach."　*Western Sociological Review* 14（1）：4-16.

――― 1984　*Societal Stratification: A Theoretical Analysis*．New York：Columbia Univ. Press

――― 1987　"Toward a Sociological Theory of Motivation."　*American Sociological Review* 52：15-25.

――― 1987　"Analytical Theorizing."in：Anthony Giddens/ J.H. Turner（eds.）*Social Theory Today. Polity Press*. pp. 156-194.

――― 1988　*A Theory of Social Interaction*．Stanford Univ. Press.

――― 1989　"Can Sociology Be a Cumulative Science ?" in：J.H. Turner（ed.）*Theory Building in Sociology*：*Asessing Theoretical Cumulation*．Newbury Park：Sage Pub. pp. 8-18.

――― 1991　"Developing Cumulative and Practical Knowledge through Metatheorizing."　*Sociological Perspectives*. 34：249-68.

――― 1995　*Macrodynamics:Toward a Theory on the Organization of Human Populations*．New Brunswick，NJ：Rutgers Univ. Press for Rose Monograph.

――― 1997　*The Institutional Order*．London：Longman.

――― 1999　"Toward a General Sociological Theory of Emotion."　*Journal for the Theory of Social Behavior* 29：133-162.

――― 2000　*On the Origins of Human Emotions.*　Stanford，CA：Stanford Univ. Press.

――― 2000a　"A Theory of Embeded Encounters."　*Advances in Group Processes* 17：285-322.

――― 2002　*Face-to-Face: Toward a Sociological Theory of Interpersonal Behavior*．Stanford，CA：Stanford Univ. Press.

――― 2003　*Human Institutions*：*A Theory of Societal Evolution*．Boulder，CO：Rawman & Littlefield.

――― 2009　*Human Evolution*：*A Sociological Theory*．London：Routledge.

Turner，J.H./ D.E. Boyns 2001　"The Return of Grand Theory."in：J.H. Turner（ed.）*Handbook of Sociological Theory*．Kluwer Academic/Plenum Publishers. pp. 353-378.

Turner, J.H./J.E. Stets 2005 *The Sociology of Emotions*．Cambridge University Press.


### アメリカ社会の社会問題関係


Aguirre，A.Jr./J.H. Turner 1995　*American Ethnicity：The Dynamics and Consequences of Discrimination.*　McGraw-Hill.

Turner，J.H. 1972　*American Society:Problems of Structure*．New York：Harper and Row.

――― 1977　*Social Problems in America*．New York：Harper and Row.

Turner，J.H./C. Starnes 1976　*Inequality:Priviledge and Poverty in America*．Santa Monica，CA：Goodyear Publishing.

Turner, J.H./D. Musick 1985　*American Dilemmas. A Sociological Interpretation of Enduring Social Issues.*　New York：Columbia Univ. Press.

学説，理論パラダイム関係

Turner，J.H. 1973 “From Utopia to Where？ A Strategy for Reformulating the Dahrendorf Conflict Model.” *Social Forces* 52：236-44.

――― 1974 *The Structure of Sociological Theory.* Homeswood，Ill：The Dorsey Press.

――― 1991 *The Structure of Sociological Theory*. 5th.ed. Homeswood，Ill：The Dorsey Press.

――― 2002 *The Structure of Sociological Theory*. 7th.ed. Belmont，CA：Wadsworth.

Turner，J.H./ L.Beeghley 1974 “Current Folklore in the Criticisms of Parsonian Action Theory.” *Sociological Inquiry* 44：47-55.

Turner，J.H./ A.Maryanski 1979 *Functionalism*. Menlo Park：Benjamin Cummings.

Turner，J.H./L.Beeghley.1981 *The Emergence of Sociological Theory*. Homeswood，Ill：The Dorsey Press.

Turner，J.H./L. Beeghley/C.H.Powers. 2002 *The Emergence of Sociological Theory*. 5th.ed. Belmont，CA：Wadsworth.

アメリカ社会学の歴史関係

Turner，S.P./ J.H. Turner 1990 *The Impossible Science:An Institutional Analysis of American Sociology*. Newburry Park，CA：Sage Publications.

Turner，J.H. 1989 “The Disintegration of American Sociology.” *Sociological Perspectives*. 32：419-433.

―――1994 “The Failure of Sociology to Institutionalize Cumulative Theorizing.” in J. Hage（eds.）*Formal Theory in Sociology：Opportunity or Pitfall*. Anbany, NY：Sunny Press. pp. 41-51.

――― 2006 “American Sociology in Chaos：Differentiation without Integration.” *The American Sociologist* 39（2）：15-29.

Turner，J.H./ K-M. Kim 1999 “The Disintegration of Tribal Solidarity among American Sociologists:Implications for Knowledge Accumulation.” *The American Sociologist* 30（2）：5-20.

理論と調査と実践（工学的応用）関係

Turner，J.H. 1998 “Must Sociological Theory and Practice Be So Far Apart？” *Sociological Perspectives*. 41：244-258.

――― 2001 “Social Engineering：Is This Really As Bad As It Sounds？” *Sociological Practice: A Journal of Clinical and Applied Sociology.* 3（2）：99-120.

――― 2006 “Is Public Sociology Such a Good Idea？” *The American Sociologist* 36：27-45.

――― 2008 “The Practice of Scientific Theorizing in Sociology and the Use of Scientific Theory in Sociological Practice.” *Sociological Focus* 41（4）：281-299.

[美濃 2004] 美濃 正「心的因果と物理主義」信原 2004b 第一章、二五－八四頁。
[美濃 2008] ――「決定論と自由――世界にゆとりはあるのか？――」『岩波講座哲学 02 形而上学の現在』Ⅱ－3、岩波書店、二〇〇八年、一六一－一八六頁。
[信原 1999] 信原幸弘『心の現代哲学』勁草書房、一九九九年。
[信原 2004a] ――「心の哲学のおもな流れ」信原 2004b 序論、一－二三頁。
[信原 2004b] 信原幸弘編『シリーズ心の哲学Ⅰ 人間篇』勁草書房、二〇〇四年。
[柴田 2006] 柴田正良「機能的性質と心的因果――キム的還元主義を超えて――」『思想』二〇〇六年二月、五三－七六頁。

（32）前掲（注30）Richard Taylor がヒュームの意図を体して呼んだ言葉。但し Taylor は原因と結果との必然的結合をそう描写したのであって、とくに因果的な力や因果的効力をそう呼んでいるわけではないが。

（33）最近では「トロープ（trope）」と呼ばれる。因果関係にとってトロープ概念がもつ重要性については柏端 2007 をみよ。

（34）因果的排除の問題については Kim1989、Kim1998 の第二章、特に pp.37-38 と、第三章、特に pp. 64-67 を参照。Kim は Kim 1993a では「排除問題は心的因果にとって一般的な問題であってわれわれ大部分が取り組まなければならないものだ」（p. 26）と言っていた。排除の問題が心的性質に限定されないことについては美濃 2004（五三頁）をみよ。

（35）素朴な日常的因果概念は、一方では、物―物間の因果関係（身―身因果）だけではなく、心―身因果も心―心因果も認めている。しかしまた一方では、物質間の因果性の場合、因果関係は物質領域内部で完結しているとみている。つまり物理的領域における因果的閉包を認めているようにみえる。このように、日常的な因果概念は――といって因果性はそもそも日常的な概念なのであるが――一見したところ心―身因果の点で矛盾しているようにも見える。心―身因果をめぐる最近の困難は、すべて、この矛盾に発していると言ってよい。この矛盾を、物理主義はこころを物質化することによって解消する。これにたいして、自律的に存在する因果関係とそれを実現するなんらかの物質的システムの物理的作用とを二元論的に区別することによってその矛盾を解消しようというのが小論のスタンスである。

（36）この物理主義は、美濃 2004 において Kim 1998 の還元主義的物理主義として紹介され擁護されている立場であるが、必ずしもそれに忠実なわけではない、特に消去主義の点で。またそれを批判しようというのでもない。

## 文　献


[Heil & Mele 1993]　Heil, John, and Mele, Alfred, eds. *Mental Causation*, Oxford : Clarendon Press, 1993.

[Heil 2004]　Heil, John, ed. *Philosophy of Mind : A Guide and Anthology*, New York : Oxford University Press, 2004.

[Kim 1989]　Kim, Jaegwon, "Mechanism, purpose, and explanatory exclusion." reprinted in Kim 1993b, 237-264.

[Kim 1993a]　――, "Can Supervenience and 'Non-Strict Laws' Save Anomalous Monism ?." In Heile and Mele 1993, 19-26.

[Kim 1993b]　――, *Supervenience and Mind : Selected Philosophical Essays*, Cambridge University Press, 1993.

[Kim 1996]　――, *Philosophy of Mind*, Westview Press, 1996.

[Kim 1998]　――, *Mind in a Physical World : An Essay on the Mind-Body Problem and Mental Causation*, Cambridge Mass. : The MIT Press, 1998 ; 2000.

[Levine 2003]　Levine, Joseph, "Experience and Representation." In Smith & Jokic 2003, 57-76.

[Smith & Jokic 2003]　Smith, Quentin, and Jokic, Aleksandar, eds. *Consciousness : New Philosophical Perspectives*, Oxford : Clarendon Press, 2003.

[Sosa & Tooley 1993a]　Sosa, Ernest, and Tooley, Michael, "Introduction" to Sosa & Tooley 1993b, 1-32.

[Sosa & Tooley 1993b]　――, eds. *Causation*, Oxford U.P., 1993.

[柏端 2006]　柏端達也「選言化する心と二元論的世界」『思想』二〇〇六年二月、一六－三四頁。

[柏端 2007]　――「心的な因果性と古くて新しい存在論――トロープはどのような場で活躍できるか」『意識と感情をもつ認知システムについての哲学的研究』平成16－18年度科学研究費補助金（基盤（B））研究成果報告書（研究代表者柴田正良）、二〇〇七年、一〇六－一一七頁。

いる。「かくて人間の理性のあらゆる力を超越する学としての全合理的心理学は崩壊し、われわれに残されるところは、経験の手引きによってわれわれの魂を研究すること、そして可能な内的経験によって、その内容を与えられることのできる以上には出ない問題の枠内に、とどまること以外にはないのである」（*op. cit.*, A382,『純粋理性批判』高峯一愚訳、『世界の大思想10』河出書房、一九六五年、二九四頁）。

（24）デカルトはホッブズへの答弁のなかで、知・情・意は思惟とか知覚とか意識という共通点によってひとつにみなされるのだという主旨のことを言っている。「……われわれが《思惟的 cogitativos》と呼ぶ、他の働きがあり、たとえば、理解する intelligere、意志する velle、想像する imaginari、感覚する sentire 等々が、すなわちそれであって、これらはすべて、思惟 cogitatio、ないしは知覚 perceptio、ないしは意識 conscientia という共通の視点のもとに、〔相互に〕合致しております」（Descartes, *op. cit.*, A.T. 176,『省察』所訳、二一三頁）。

（25）ロックは『人間悟性試論』で、mind と spirit と soul を殆んど同じ意味で使っている場合もすくなくない。しかし、なんといっても圧倒的に多いのは mind である。この点からも、ロックが「心の哲学（philosophy of mind）」の祖だというのは頷ける。こころの働きという意味ですでにロックは operation of mind という表現を用いている。ロックの場合、簡単にいえば、経験的なものが mind であって、形而上学的なものが spirit である。ロックは、精神 spirit と言う実体については明晰判明な観念をもたないと言っている（John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, 1689（1975）, Book2, Chap. 23, Sec. 5）。

（26）その時の、機能が実現されているありさまを、アリストテレスであればその物理的システムのエンテレケイアとかエネルゲイアと呼ぶだろう。

（27）この間の事情は次のように述べることもできる。非還元主義的物理主義は、実現をなんらかのリアルな過程と考える。物理的システムのある種の物質状態が原因となって、自律的に存在する機能状態を結果として生成するとまでは主張しないにしてもである。キムは、John Searle のようにスーパーヴィーニエンスや実現を因果関係とみなすのは上手くない（not happy）といっている（Kim 1998, p. 44）。しかし、非還元主義とはいえ物理主義的一元論なのだから、機能が自律的に存在するのであればそれは因果的にとは言わないまでも、なんらかのかたちでリアルに生成される以外に考えようがないだろう。その行き着く先は随伴現象説（ephiphenomenalism）である。これに対して、二元論は、機能（の実現）のために別の世界を用意する。一方、還元主義的物理主義から見れば、在るのは個々の物理的システムの活動状態だけであって、実現など存在しない。せいぜい言えて、実現はその活動状態がもつ二階の性質にすぎない。個々のリンゴやミカンやバナナが「果物」という二階の性質を持つように。唯物論者に言わせれば、果物性なる属性が自律的に存在しないように、水汲みであれ心的性質であれ機能が自律的に存在するわけではない。

（28）選言的性質が問題になるのは、物理主義がスーパーヴィーニエンスとか実現とかを真剣に受けとめなければならない場合、すなわち、物理主義が非還元主義を採った場合である。選言的性質が孕む問題性については、柏端 2006、柴田 2006 を見よ。

（29）ヒュームの『人間本性論』第一巻第三部（David Hume, *A Treatise of Human Nature*, 1739（2007）, Book 1, Part 3）はもっぱら因果関係の解明にあてられており（特に第一節から第九節）、原因と結果の間の必然的関連（neccessary connection）は、過去の経験にもとづいた推論（inference）によって形成されることを論じている。『人間悟性研究』では第七章（David Hume, *An Enquiry concerning Human Understanding*, 1748（1999）, Sec. 7）がこの問題を扱っている。

（30）これは Thomas Reid の指摘だそうだ。*The Encyclopedia of Philosophy*（Paul Edwards ed., 1967）における項目 “Causation” の著者 Richard Taylor による。

（31）このエイジェンシー説は、何かのエイジェント――具体？的には神あるいは精神――によって原因そのものが生み出されるという考えではない。そのような「古典的な」エイジェンシー説（agent-causation theory 行為者因果説）に対しては、Ernest Sosa と Michael Tooley が彼らの編集になる論文集 Sosa & Tooley 1993b の序論で von Wright のそれとして批判的に言及している。また美濃 2008 ではチザムのそれについて批判的に紹介されている。

（13）「したがって、わたしたちの精神と神との認識 mentis nostrae et dei cognitio に導く根拠こそ、人間精神によって知られうるすべてのもののうち最も確実で最も明証的である、ということになるのであって、ただこの一事を証明することが、この六つの省察において私の意図したところであった」（*op. cit.*, A.T. 16, 井上・森訳、二三七頁）。

（14）驚くのは、こころが何か自分は知らないことをデカルトは知っていたからである。ソクラテスさえ知らなかったのに。「次に浮かんできたものは、私が栄養をとり、歩行し、感覚し、考えるということであった。私はこれらの活動の源は精神 anima にあると考えていた。しかし、その精神 anima とはなんであるかについては、私は注意を払わなかったか、あるいはそれを、風とか火とかエーテルとかに似た、何か微妙なものであると想像し、それが身体の粗大な部分にゆきわたっているのだと考えていた」（*op. cit.*, A.T. 26,『第二省察』井上・森訳、二四六頁）。

（15）Gilbert Ryle, *The Concept of Mind*, London : Hutchinson, 1949, p. 91. ライルはまた、‘occult inner states or processes’というような言い方もしている（*ibid.*, p. 115）。‘the ghost in the machine’という表現に至っては枚挙にいとまがない。

（16）ライルの衣鉢を継ぐことにおのれの使命を見ているケニーは、こころは行動の能力（capacity, ability）として定義できると主張している。その場合の行動とは、複雑で記号操作的な行動である（Anthony Kenny, *The Metaphysics of Mind*, Oxford, 1989, p. 7 ; 20.）。典型的には、言語獲得のための技術を所有する能力（capacity）である。要するに、こころとは、オームのようにたんにことばを話すのではなく、ことばでもって考え意志的に行動できることなのである。それゆえケニーは、こころは二階の能力（second-order capacity）だとも言っている（p. 20）。わかりやすくいえば、ことばでもって考え行動するための様々な能力を身に付ける能力である。

（17）Paul Edwards の編集になる *The Encyclopedia of Philosophy*（Macmillan, 1967）にも、もっと新しい Edward Craig が編集主幹をつとめる *Routledge Encyclopedia of Philosophy*（Routledge, 1998）にも、あるいは *The Oxford Companion to the Mind*（Richard L.Gregory ed., Oxford, 1987）にも *A Companion to the Philosophy of Mind*（Samuel Guttenplan ed, Blackwell, 1994）にも、Alan E. Kazdin が編集主幹である *Encyclopedia of Psychology*（Oxford, 2000）にも、mind という項目はない。哲学事典や心理学事典でまともなものは「こころ（mind）」などという項目をもたない。当然だろう。いったい何を記載するというのか。

（18）いわゆる「無知の知」である。例えば『ラケス――勇気について――』の末尾近くでソクラテスは次のように言う。「そうしますと、ニキアス、われわれは、〈勇気〉が何であるか、ということを、見つけなかったのです」（Plato, *Laches*, 199e11,『ラケス』『プラトン全集7』所収、生島幹三訳、岩波書店、一九七五年、一六三頁）。皮肉を言うつもりはないが、「魂について」の副題をもつ『パイドン』には、そのような文言、すなわち、「われわれは、〈魂〉が何であるか知らないのだ」というような文言は見られない。これについて、『パイドン』では、知を求める者にとって死はよきことである理由を説明するのが目的であって、魂の不死を主題としているからだとの弁明は可能である。いずれによ、残念なことだ。

（19）原文はもちろん「ではいったい時間とは何でしょうか。誰も私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです」（Augustinus, *Confessiones*, Liber Undecimus, XIV, § 17, アウグスティヌス『告白』第十一巻第十四章、山田晶訳、『世界の名著14 アウグスティヌス』、中央公論社、一九六八年、四一四頁）である。

（20）Gilbert Ryle, *op. cit.*, p. 64 ; 102.

（21）G.W. Leibniz, *Discours de métaphysique*, § 20. ライプニッツ『形而上学叙説』20節、『世界の名著25 スピノザ、ライプニッツ』所収、中央公論社、清水富雄・飯塚勝久訳、一九六九年、四〇五－四〇七頁。

（22）Plato, *Phaedo*, 97b8-99d2, プラトン『パイドン――魂について――』『プラトン全集1』所収、松永雄二訳、岩波書店、一九七五年、二八三－二九〇頁。

（23）カントの『純粋理性批判』第一版（一七八一年版、A版）でのパラロギスムス（誤謬推理）の章を参照（Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, 1781, A341-405）。カントは、合理的心理学（psychologia rationalis, die rationale Psychologie）の可能性を断ったことで、ロック、ヒュームと並んで、実証主義によるこころの制度化に大きく寄与して

原 1999 ; 2004a。

（4）キムは、Kim1996 の序章の末尾（p. 23）で、クオリアと志向性とがともにメンタリティーの指標であるのはなぜなのかという問いにはこれまで答えられていないことを認めている。そして、この問題に対する満足な解答を欠いているその分だけ、われわれはメンタリティーの根拠がどこにあるのか統一的な理解を与えられずにいる旨発言している。

（5）「したがって必然的に、魂とは可能的に生命をもつ自然的物体の、形相としての実体である。ところで、このような形相としての実体は現実態（エンテレケイア）である」（*Aristoteles, De Anima,* 412a19-21, アリストテレス『魂について』第二巻第一章、中畑正志訳、京都大学学術出版会、西洋古典叢書 G 19、二〇〇一年、六一－六二頁）、「それゆえ魂とは、可能的に生命をもつ自然的物体の、第一次の現実態（エンテレケイア）と規定される」（*ibid.,* 412a27-28, 同、六二頁）。アリストテレスが考えるこころとは、むしろ、生命の〈活動状態にある原理〉とか、〈個々の生命体において実現されている原理〉とすべきかもしれない。桑子敏雄はこれを「心とは身体がある一定の能力をもった状態である」と解説している（桑子前掲書、二〇三頁）。小論では、命を持つものの〈生命活動の原理〉としておく。なお、ここでのアリストテレスからの引用に限らず以下で様々な翻訳を使用させて頂くが、その際、文脈にあわせて訳語を変える場合がある。ご寛恕願いたい。

（6）*ibid.,* 405b 11-12, 同書、第一巻第二章、中畑訳、二四頁。

（7）*ibid.,* 414a 12-14, 同書、第二巻第二章、中畑訳、七〇－七一頁。

（8）Descartes, *Meditationes de prima philosophia,* 1641（1973）, Meditatio Secunda, A.T. 27,『第二省察』井上庄七・森啓訳、『世界の名著 22　デカルト』、中央公論社、一九六七年、二四七頁。

（9）「しかし、すべての哲学者は主体をそれの能力および働きから、すなわちそれの固有性および本質から区別しております。というのは、《存在》とそれの《本質》とは別のものだからです。そうならば、思惟するもの res cogitans（思惟実体）は、精神の、理性の、ないしは知性の主体 subjectum mentis, rationis, intellectus であるということも、またそれゆえ物体的な或るもの corporeum であるということも、ありうるわけです。［ところが］、それと反対のことが容認されていて、証明されていない non probatur のです。しかしそれにもかかわらず、このような推断にこそ、デカルト氏の導びこうとされるかに見える結論の基礎があるのです」（〔「イギリスの或る著名な哲学者によって唱えられた〕第三の反論」における「二「第二省察　人間的精神の本性について」に対する反論二」、*op. cit.,* A.T. 172-3, デカルト『省察および反論と答弁』所雄章訳、『デカルト著作集 2』、白水社、一九七三年、二〇九－二一〇頁）。

（10）*op. cit.,* A.T. 174-176,『省察および反論と答弁』所訳、二一一－二一四頁。

（11）『第六省察』の該当箇所では次のように語られる。「そして、まず第一に私は、私が明晰判明に理解するものはすべて、私の理解するとおりに神によってつくられうるということを知っているのであるから、一つのものをもう一つのものなしに明晰判明に理解することができさえすれば、それだけで、この二つのものが異なったものであることを確信しうるのである。なぜなら、それらは、少なくとも神によって、別々に定立されうるはずであるから。また、どのような力によってそういうふうに定立されうるかということは、それら二つが異なったものとみなされるためには、どうでもよいことである。したがって、私が私は存在するということを知っていること、そして、その間私が、私の本性あるいは本質に属するとはっきり認めうることはただ、私が思惟するものであるということだけであること、このことからして私は思惟するものであるということに存するのだ、と結論して正しいのである。そしておそらくは〔あるいはむしろ、すぐあとで述べるように、まちがいなく〕私は身体をもっており、これが私ときわめて密接に結びついているにしても、しかし私は、一方で、私がただ思惟するものであって延長をもつものでないかぎりにおいて、私自身の明晰で判明な観念をもっているし、他方では、身体がただ延長をもつものであって思惟するものでないかぎりにおいて、身体の判明な観念をもっているのであるから、私が私の身体から実際に分かたれたものであり、身体なしに存在しうることはたしかである」（*op. cit.,* A.T.78,『第六省察』井上・森訳、二九六頁）。これが証明になっているのか大いに疑問だが、いまは問わない。

（12）*op.cit.,* A.T. 27,『第二省察』井上・森訳、二四七頁。

にはその両方から、生じたものである。上で述べたように、この後者の誤解によって生じるのが因果的排除の問題である。

最後に、二元論とは対極にある物理主義的一元論[36]について一言しておこう。そこでは、心的性質は自律的な存在としては認められない。存在するのは心的述語だけである。心的性質に関してはある種のノミナリズムを採ろうというのである。「怒っている」という述語は、そのつどさまざまな物理的システムの様々な物理的状態について述語づけられる。しかし共通の心的性質がそこに実現しているとは考えない。それらの様々な物理的状態や物理的性質を「怒っている」と記述するだけである。「怒っている」のような心的性質は、それゆえ、物理的性質についての性質、つまり高階（二階）の性質である。「痛みを感じている」は、人間の場合は、たとえばC線維が興奮している状態に述語づけられる。

では、なにを手がかりに、様々な物理的状態や性質を「怒っている」とか「痛みを感じている」と描写するのか。それは、その物理的状態や性質が世界の中で果たしている機能によってである。さまざまな物理的システムの様々な状態が同じ機能を演じているならば、それらは、例えば「怒っている」とかあるいは「痛みを感じている」と記述される。そしてその機能は、入力–出力関係によって定義される。要するに、人間や動物を含む様々な物理的システムの様々な状態や性質を、入力–出力関係を手がかりに類別していき、それぞれのグループに、「怒っている」とか「痛みを感じている」というレッテルを貼り付けていく（還元主義）のである。そして、レッテルだけあって、それを貼るグループが見当たらない場合には、そのレッテルを廃棄してしまおう（消去主義）という。還元主義と消去主義で武装した最強の物理主義である。

ここまで来ると、こころはもはや言葉としてさえ存在しない風情だ。なぜなら、物理的状態や物理的性質のグループで「こころ」というレッテルを貼れるようなものなど存在しないだろう。そうであれば、レッテル「こころ」はゴミ箱に行くしかない。結局、こころは存在しないのだ。唯物論の面目躍如である。しかしながら、幸いにして消去をまぬがれたレッテルが値引き表示でないという保証はあるのだろうか。

## 注

（1）Jaegwon Kim は、現代的な心の哲学に関する入門書 Kim1996 の序章で、'have a mind' という表現より誤解が少ないという理由で、もっぱら 'mental' という表現を用いると宣言している（p.5）。このように言いたくなる気持ちはおそらく誰もがもっているだろう。

（2）桑子敏雄はアリストテレスの *De Anima* を翻訳する際、その書名を『心とは何か』（講談社学術文庫、一九九九年）としている。本文でも「プシューケー」を一貫して「心」と訳している。プラトンの翻訳を見ると、存外「心」という訳語に出くわす。

（3）目についただけでも、たとえば、Kim1996, Levine 2003, Heil 2004, 信

とする者には認められない。そのような異種因果をなんらかの物理的システムによって実現する可能性は物理主義者には原理的に排除されている。その理由は、心的実体と物理的実体とは相互に作用しあえないからである。思惟実体と延長実体とは作用しあえないというのが物理主義者の考えである。もちろん、相互にまったく独立な思惟実体と延長実体とが作用しあうことも、いわんやそれらが因果関係をむすぶことであればなおのこと、論理的には可能である。つまりどこかの可能世界では成立する。いずれにせよ、二元論が如上のような二重実在論（実体二元論 substance dualism）であるとすれば、物理主義を奉じる者には、心-身因果は認めがたいと言わざるをえない。

しかしながら、こころの存在を認めるとは、ある種の二元論を認めることではあるが、必ずしも二重実在論をせまるわけではない。二重実在論を認める積極的な根拠は、これまで論じてきたこころの概念の中には存在しない。それゆえ、すでに述べたように心的性質の自律存在を認めたとしても自立存在まで認める必要はない。つまり、心的性質は自律的に存在しているにしても、それは様々な物理的システムによって実現されてしか存立できないのである。そうであれば、心-身因果の基盤は存在するといってよい。心的性質の自律性を認めたとしても、自立性を認めないかぎり、心-身因果は可能である。

心的性質が身体的状態の原因である場合、その心的性質を実現している脳状態と件の身体的状態の間に因果関係を措定することも当然可能である。しかし、この場合も、過剰決定が起きるわけではない。その心的性質と、それを実現している脳状態の両者が、同時に、同じ因果関係において、同じひとつの結果をもたらすわけではない。そこに成立するのは二種類の因果関係である。ひとつは心的性質と身体的状態とのあいだの因果関係であり、もうひとつはその心的性質を実現している脳状態と身体的状態とのあいだの因果関係である。たとえば、痛みを感じたので顔をしかめたという因果関係と、C線維が興奮したので顔をしかめたという因果関係である。因果関係は、心的性質と物的性質の間にも、心的性質相互の間にも成立する。物質過程によって裏打ちされている限り、因果性は、身-身の間であれ、心-身の間であれ、心-心の間であれ、どこにでも認められる。心的性質は因果的効力をもちうるのである。因果性はなんらかの物理的システムにおいて実現されていなければならないという物理主義の要請を、因果性は物質の相互作用の内部で完結していなければならないという物理的領域の因果的閉包性の要請と混同してはならない。[35]

結局、心的性質は物理的性質に対して因果的効力を持ち得ないという議論は、心的性質が自立的に存在すると考えるか、あるいは因果的効力を物理的作用と同一視するか、いずれかの誤解から、実際

ない。そうであれば、それは倒壊の原因を詳しく調べ直して答えればよいのであって、因果的排除とか過剰決定とかの小むずかしい議論に立ち入る必要はない。その質問が、因果的排除とか過剰決定を問題にする存在論の議論であるならば、それにたいしては、「二種類の因果関係を混同すべきではない」と答えればすむだろう。このように対応が分かれるのは実現関係のあるなしによってである。この傷あのヒビがそのコンクリートの劣化を実現しているのであれば、件の質問は擬似問題となる。これにたいして、この傷あのヒビがコンクリートの劣化を実現しているわけではなく、この傷あのヒビも、またコンクリートの劣化も、同様にビル倒壊の原因として嫌疑がかけられているのであれば、件の質問は真正な問である。

物理主義者が、因果性は物質過程のなかに存在すると考えるならば、因果関係は、質量や電荷やスピンのような物質に固有の性質ということになるだろう。あるいはある種の物理法則とおなじたぐいのものとなるだろう。しかし、以上の考察からも、むしろ、因果関係それ自体は自律的な性質であるがそのつど物理的システムにおける物質過程によって実現されて可能になると考えるべきだろう。物理的な因果関係も、まさに物質的作用によって実現されて可能になる。重要なのは、これを当然視しないことだ。これを当然視すると、因果関係は物理的領域内部で完結していると考えてしまう。物理的な因果性も、それが因果関係である以上は、物質過程に対して自律的であって、物質的作用の多様のなかからある項目が原因として措定されることによってはじめて成立するのである。だから、物質的な作用それ自体が因果性だというのは、一段階を端折ってしまっている。

因果性一般がそのようなものであるならば、こころとこころ、あるいはこころと身体ないし物質とのあいだの因果関係、いわゆる心―身因果（心的因果）についても同じことが言えるはずだ。「敵を認めて回避行動をとる」というように描写される状況は、個人にも、師団にも、蜂にも、ロボットにも認められよう。そのとき、敵を認知するという心的状態と、回避行動をとるという身体的あるいは物質的活動のあいだに成立する因果関係は、さまざまな物理的システムによって実現されている。しかし、そのように記述したとき、個々の物理的システムにおいて物理的に生起しているのは、様々な種類の多様な状態の多様な変化だけである。

二元論の最大の難点はこころと物とのあいだの因果関係にあると一般に考えられている。この点については以下のように考えたい。

二元論が二重実在論であって、心的実体と、それとは完全に異質な物理的実体とが、おのおのそれ自体で独立に存在するという思想であるとしよう。つまり心的実体は自律的かつ自立的に存在するのである。そのとき、その二種類のまったく異質な実体のあいだに因果関係が成立すると考えることは、若干なりと物理主義に近づこう

それら具体的な物質的出来事とは次元を異にする一種の抽象的・普遍的な存在[33]である。この場合の因果性は、この、抽象的な存在としてのコンクリートの劣化と建物の倒壊との間に成立しているのであって、この傷あのヒビの発生と倒壊との間にあるわけではない。それゆえ、因果的効力はコンクリートの劣化と呼ばれる一種抽象的な性質にそなわっていて、この傷あのヒビがもっているわけではない。繰り返すことになるが、この傷あのヒビは、この場合、原因である劣化を実現する構成要素ではあっても、因果関係そのものの構成要素ではない。この事情を見誤ると、因果的排除（causal exclusion）の問題が生じてしまう[34]。すなわち、建物の倒壊の原因はこの傷あのヒビにあるのであってコンクリートの劣化は因果的には無力（causally inert）だという議論である。

コンクリートの劣化が原因でビルが倒壊したとき、因果関係は、あくまでコンクリートの劣化という性質とビルの倒壊という出来事との間に成立しているが、そのコンクリートの劣化を実現しているこの傷やあのヒビもまた、その倒壊の原因でありうる。しかしこう言ったからといって、因果性における過剰決定（overdetermination）を認めようというのではない。つまり、コンクリートの劣化と、この傷あのヒビの発生とが、同時に、ビルの倒壊の原因だと言いたいのではない。それらがともに原因でありうるのは、ビルの倒壊という同じ出来事について、二種類の因果関係を問題にできるという意味である。すなわち、コンクリートの劣化が引き起こす因果関係と、この傷あのヒビが原因となる因果関係であって、このふたつの因果関係は別物である。それらの因果性を実現している物質過程は同一であっても、そのおなじ物質過程によって実現される因果関係は別物なのである。なぜ別物かといえば、原因が「コンクリートの劣化」と「この傷あのヒビ」というように別の概念で記述された別の事態だからである。因果性というのは、このように、どのような事態であるかに依存するのだ。これは、因果的説明の内包性（非外延性）と呼ばれるが、単に因果的言明のみならず因果関係そのものが内包主義的なのである。因果性がなんらかの物質過程における物理的作用によって実現されていなければならないにしても、その物質過程と因果関係は次元が違う。換言すれば、因果的効力とそれを実現している物理的諸力とは別物であって、次元が違うということである。それゆえ、結局、因果的排除の問題が生じるのは、この次元の違いを無視してしまっているからである。

しかし、その建物が倒壊した原因はコンクリートの劣化にあるのかそれともこの傷あのヒビにあるのか。このように質問されたら、結局は、因果的排除の問題か、あるいは過剰決定の問題にさらされるのではないか。――この疑念に対しては、次のように答えよう。その質問は、建物の倒壊の原因が何種類か考えられるなかで、どの原因が本当の原因なのかを問題にする世俗的な質問であるかもしれ

の成立要件とみなされている件の因果法則ではない。因果法則は、むしろ結果を予測するのに必要なのだ。

二元論的にみれば因果性は自律的な関係である。それゆえ、この場合も多重実現が成立する。石がぶつかってガラスが割れるというような、物理現象としての因果関係は、様々な石ころと様々なガラスの間の関係として実現される。しかし、この場合に、物質レベルで成立しているのは状態の変化だけであって、そこに法則性はあるものの因果性など存在しない。因果性は自律的に存在する非物質的な性質である。この性質はほとんど機能といってよい。因果性を、原因として特定されている事象が果たす機能とみなす点で、これは一種のエイジェンシー説[31]である。あるいはここでもまたアニミズムである。ひとによってはanthropomorphism（擬人説）と呼ぶだろう。種明かしをすれば、ここでの戦略は、因果的な力（power）とか効力（efficacy）という「秘教的で形而上学的なもの（esotelic and metaphysical ones）[32]」を確保するために、物質的な性質や作用とは別の世界を用意しようというのである。この場合も、因果性という非物質的な性質は、物質の状態変化から独立にそれだけで存在する、すなわち自立している、と考える必要はない。物理主義に近づきたいのであれば、因果性も心的性質と同様に自律的ではあるが自立的ではない、と言うべきだろう。

因果関係は物質に支えられていなければならないとはいえ、特定の日付と場所をもった出来事同士の関係に限定されないだろう。たとえば、ある建物が倒壊したとする。その原因は、旅客機が衝突したり、大風が吹いたり、地震による強い揺れが加わったことであったりする。これらはたしかに出来事だろう。しかし原因にはまた、屋上に許容以上の重量物を置いていたこともあるだろう。コンクリートや鉄骨の劣化もあるだろう。施工の際の手抜き工事や設計ミスや耐震偽装によって、構造体がもともと脆弱だったこともあるだろう。これらをすべてを出来事とみなすことはむずかしいのではないか。原因という概念には柔軟性がある。さらには、手抜き工事が原因だ、設計ミスが原因だ、耐震偽装が原因だという言い方も普通である。設計業者のあくどい商魂が原因だと言うにいたっては、もはや物質的基盤さえあやしい。これらは単に表現にすぎず、原因の実質はあくまで物理的な出来事にあると言うべきだろうか。

コンクリートの劣化が倒壊の原因だという場合に、原因はコンクリートの劣化という性質であって、コンクリートに生じたこの傷、あのヒビが原因なわけではない。より正確に表現すれば、コンクリートにこの傷が生じたこと、あのヒビが走ったこと、であるが。勿論、この傷やあのヒビが生じなければコンクリートの劣化はないが、しかし、この場合には、この傷やあのヒビが建物の倒壊を引き起こしたわけではない。この傷やあのヒビは、コンクリートの劣化を実現しているものの、劣化そのものではない。コンクリートの劣化は、

しまうからである。機能は必ずなんらかの物質過程によって実現されていなければならない。この意味でならば機能という性質は選言的であると言えないことはない。しかし、機能は自律的に存在しているのであるから、いかなる物質状態からも、それゆえ、物質的な性質の選言状態からも自由である。しかし、このように言うと、「そうだとすれば、機能としての心的性質は因果的効力を持ちえなくなるだろう」と批判されそうだ。そこで次に、その問題をとりあげよう。

## 16　二元論と心-身因果

ヒュームによれば、因果関係は目に見える物理的な性質ではない。[29] 原因である事象と結果である事象とは経験できる。そしてそれらが近接して生じることも経験できる。しかし、それらが原因-結果の必然的な関係にあることは経験できない。その近接した二つの事象が継続して生じ、しかもそのことが繰り返されると、人間はそこに必然的な関係の存在を予測するようになる。因果関係はこのように人間のこころが「慣習から（from custom）」生み出した虚構的なものなのだ。因果性にかんするヒュームのこの独創的な考えは、カントをして独断のまどろみから目覚めさせるに十分なほど革命的だ。必然性は観察できないという懐疑論がここに働いているが、因果性が成立するには自然の斉一性（the uniformity of nature）と呼ばれるような、なんらかの規則性が必要になる。

では、その規則性は何によって与えられるのか。それを保証するのが法則の存在だと考えられている。それゆえ、因果性が成立するためには法則がなければならないと。しかし、どのような法則でもよいわけではない。昼に続いて夜が来る。だからといって、夜が来る原因は昼であるとはいえないだろう。[30] 近代科学の教えるところによれば、夜が来る原因は地球の自転にある。昼が夜の到来の原因たりえないのは、昼であることは物質的状態の変化を引き起こすだけの効力をもたないからである。昼であることは地球という物理的システムのひとつの性質ではあるが、その物理的システムによって実現されているわけではない。つまりその物理的システムの機能ではない。昼に続いて夜が来るという法則は、地球の状態に関する法則ではあるが、たんに現象レベルでの規則性にすぎない。そういうわけで、法則が因果関係のもつ必然性を保証できるためには、法則は、原因である事象と結果である事象とを実現する物理的システムにおける物質的な相互作用に、なんらかのかたちで、還元できるものでなければならない。

けれども、そうであるならば、因果性の成立にとって法則はそれとして必要ないだろう。因果性が様々な物理的システムによって実現されれば、それが因果法則の成立である。もちろん、そのためには、各々のシステムにおいて物質が様々な物理法則に従って作用しあっていなければならない。しかし、このレベルの法則は、因果性

ポリアは解消できたとしても、しかし、心的性質が自律的に存在することには、それ自体問題があるだろう。

物理主義者にとっては、心的性質が自律的に存在しては困るだろう。物質から独立に存在してはならない。しかし、二元論者であれば、心的性質は自律的に存在すると主張しなければならない。二元論をとりながらも物理主義にすり寄ろうとするならば、心的性質は、自律的に存在しなければならないが、しかし自律的に存在してはならない。これは虫のいい要求だろうか。矛盾したことを要求しているのだろうか。計算という機能は自律的な性質である。しかしまた、電卓や人脳なしに成立するわけでもない。自律的な性質ではあるけれども、それらの物理的システムから独立にそれだけで存立するわけではない。前者の自律、すなわち計算が物理的過程に還元できないことを「自律的（autonomous）」とよび、後者の自律、すなわち、物理的過程なしに実行できることを「自立的（independent）」と呼ぶことにしよう。水汲みや計算のような機能は、自律的に存在しているが自立的に存在しているわけではない。ある能力が発揮されているとき、その発揮されている能力は、そのように自律的ではあるが自立的ではないという状態にあるだろう。水を汲むという機能はどれかのポンプに特有の性質ではない。この意味で、その機能は物理的な性質ではなく、自律的な性質である。しかし、いっさいポンプが存在しないときでも発揮される性質ではない。この意味で、機能は、物理的装置に依存している。

水汲みや計算が卓越した作業として顕彰されていれば、それらはこころの働きとみなされて、心的性質の仲間入りをはたすことができるだろう。簡単な装置で出来るありふれた作業だとすれば、水汲みに精神性などない。水汲みを誰もこころの働きと考えないのは、それが牛にさえできる単純な労働だからである。実際、計算はかつてこころの働きと考えられていたにちがいない。しかし、今日、計算に精神性をみるひとはまれだろう。それは、計算が電卓のような手軽な機械でできることが周知の事実となったからである。そもそも計算とは記号の単純な操作の組み合わせに過ぎないと認識された時点で、計算から精神性や霊性が剥奪されることは宿命づけられたのである。

選言的性質は、多重実現の本質を見誤った結果として生じたまさにキメラにすぎない。水汲みという機能は、場合によってロータリー・ポンプによって、場合によってはレシプロ・ポンプによって、場合によっては、圧搾空気によって、場合によっては、つるべと桶と人力によって実現される。これらの様々な物理的状態を選言で結んだものが選言的性質（disjunctive property）である。物理主義は、水汲みという機能をこの選言的性質に還元しようとする。[28] 選言的性質というキマイラが生じるのは、水汲みのような機能の自律的存在と、この機能を実現する個々の物質状態との二元性を一元的にみて

実現が物質過程であって、心-身因果は成立しないとなると、アポリアを避けるには心的性質の自律存在を否定して物質一元論を採らざるをえなくなる。つまり、二元論は採れないということだ。それゆえ、二元論を擁護するために心的性質の自律存在を認めようというのであれば、アポリアを避けるには、実現の物質性を否定するか、心-身因果の可能性を認めなければならない。

まず、実現の問題から考えよう。さまざまな物理的システムによって水を汲むことができる。これは、水汲みという機能をさまざまな装置が実現しているのである。このとき、水汲みという機能は、それぞれの装置に言及することなく、たとえば、「下にある水を上の貯水槽に移動させること」というように入力-出力関係だけで定義できる。けれども、水汲みという機能は、さまざまな装置の物理的性質ではない。その装置がしかるべき状況の下で動いたときに発揮される能力である。個々の具体的なポンプは水があろうとなかろうと同じように作動する。ポンプは、水があろうとなかろうと、あるいは水であろうと空気であろうと、そんなことはいっさい関知しない。ポンプの物理的性質は、水があろうとなかろうと同様に発揮されるような性質のことである。しかし、水がしかるべき状態で存在していない限り、ポンプは水を汲まない。つまり、水汲みという性質はポンプの物理的性質とは独立なのである。電卓はしかるべき状況の下でしかるべく使用したときに計算するのであって、電卓の物理的性質が計算なのではない。キーをランダムに打ってもたしかに電卓は作動する。そしてなにか数字を表示する。しかし、それを誰も計算の結果とはみなさないだろう。計算するという性質(機能)は、電卓の物理的性質ではないし、物理的性質に還元できるわけでもない。さまざまな物理的システムは計算を実現(実行)しているのだ。水汲みや計算のような機能が実現される時、それを実現している様々な物理的システム各々のメカニズムと当の機能との関係は、一種の目的論的関係なのである。[26]

このように、水汲みのような性質の場合でも、実現は物理的過程をこえる。しかるべき状況の下で物理的システムが或る種の活動状態にあるとき、なんらかの機能が実現されている、つまり水汲みという機能が機能しているのだ。機能は、物理的な入力-出力関係をもちいて定義できるものの、物理主義を超え出ているのである。どれかの物理的システムがその機能を実現していることはたしかであるにしても、その物理的システムの活動状態そのものが機能の実現なのではない。つまり、実現という過程は物質過程ではないのである。実現というリアルな過程があるわけではない。リアルに存在しているのは個々の物理的システムの活動状態だけである。[27]

実現という過程が物質過程でないならば、心的性質が自律的に存在することと、その自律した心的性質がさまざまな物理的システムによって多重実現されることとはなんら矛盾しない。これで件のア

虚妄以外のなにものでもないこと。何であれこころの内実について当然のように語れるのは伝統だということ。そして、あくまでこころの存在を認めるのであれば、まじめに二元論を考えるべきだということ。これらがそれである。

そこで次に、心的性質を二元論的に考える可能性について若干観ておこう。しかし、二元論を避けるのが今日の心の哲学の基本動機ではなかったか。二元論を認めてしまってはフォーク・サイコロジーへの逆戻りではないか。それは敗北主義であり、堕落ではないか。けれども、哲学の仕事が概念の分析と調整であれば、近代物理学の成功を手本に物理主義的一元論をまず採って、心的性質をこの一元論に取り込もうとするのと、日常的な言語使用を手がかりに二元論的枠組みを出発点としながら可能な限り物理主義に近づこうとするのと、戦略としていったいどちらが有効なのか、にわかには判断しかねる。おそらく、二元論は間違っているという暗黙の了解をこそまずは検討すべきだろう。物理主義的一元論を採るべきだと叫んでも、クオリアのように、一元論を徹底することが難しい事例はすでにあるわけだから。一元論を採ることに果たしてどれだけの根拠があるだろうか。むしろ問うべきは、では、どのような二元論であれば物理主義者にも呑む事ができるのか、これであろう。

「こころ」の主たる働きが、対象を指示したり、表示したりすることにではなく、二元論的な枠組みを操作するところにあるならば、「こころ」は、どのような対象にも適用できることになる。山岳や家屋にさえこころを帰属させることが可能だろう。すでに指摘したように、アニミズムはむしろこころの概念に忠実なのだ。さまざまな物理的システムについて、心的述語がもちいられるのである。人間にも、ワニにも、蜂にも、蒸気機関にも、たとえば「知っている」という心的性質が帰属される。「知っている」という心的述語を対象にあてはめることができたとき、対象は、知るという心的性質をもっているとか、実現していると考える。これが一般的な理解であろう。一種の性質実在論である。そして様々な物理的システムが同一の心的性質を実現する。多重実現（multiple realization）である。

しかし、心的性質が自律的に存在するならば、どうやって、それを物理的システムの上に実現（realize）できるのか。物理的システムによって心的性質が実現される過程を物理的な過程とみなせば、これは、心的なものと物理的なものとのあいだに物理的関係が成立していることになるだろう。悪名高い心―身因果（mind-body causation, mental causation 心的因果）である。このように、実現という過程が物質的な過程であれば、これは困ったことになる。アポリアである。このアポリアを解消するには、心的性質は自律的には存在しないと考えるか、実現は物質過程ではないとするか、あるいは、心―身因果をみとめるか、つまり物理的領域の因果的閉包性（causal closure）を放棄するか、なにかしなければならないようにみえる。

をもはやこころの本性についての探究とは呼ばずに人間の本性についての探究として位置づけたからである。こころの本性は人間には知りえないという強い懐疑論が、この横すべりを促したことは容易にみてとれる。「人間の本性」という言葉には、「こころ」がもっていたやっかいなコノテーションが一切無い。

そうであれば、わたしたちは、こころなど存在しないと言い放つべきではないか。心理学によるこころの制度化は、こころなど存在せず、在るのは心理学だけという体制をつくるのである。

今日の心理学においては、知・情・意がその主たる研究対象であるとしても、それはそれらが人間の卓越性を顕わしているからであるとは考えられていない。せいぜい考えられているのは、それらが人間の本性であるからということぐらいのものだろう。あるいは、それさえも念頭にないかもしれない。心理学とはそれらを研究することであると素朴に受けとられているかもしれない。心理学は人間の行動を研究することなのだ。だから動物行動学の一種なのだと。ではなんのために動物の行動を研究するのか。この問に対しては、最左翼として、次のように答えるひともいるだろう。そこに動物がいてなにやらおもしろそうな行動をしめすからだ。そこに山があるから登るように、そこに現象があるから探究するのだ、と。この解答は、動物行動学なり、その一分野としての心理学なりが、現象性だけを唯一の根拠に探究していることを如実に示している。つまり実証性だけは手放さずにいるわけだ。しかし、その解答はウソだろう。ウソでないとすれば自己欺瞞である。というのも、心理学が動物行動学の一分野であるとしても、あくびやいびきは扱おうとしないだろう。あくびやいびきは行動ではないとみなされているだろう。それは、これらが、呼吸器科や耳鼻咽喉科が扱う症状ではあっても、環境からの刺戟にたいする反応であるとか、目的や目標をもった反応とはいえないからである。つまり、行動という卓越した身体反応の域に達していないからだ。結局、動物行動学といっても、動物に関する現象ならなんでも探究するわけではなく、なんらかの卓越性をてがかりにしているである。このように、動物行動学でさえも、こころの大きな影から逃れられない。だからむしろ、動物行動学は動物のこころを研究していると言ったほうが、はるかに実情に近い。それゆえ、当然のことながら、心理学はこころについての科学なのだと。

## 15　心的性質と多重実現

「こころ」という言葉は二元論的枠組みを操作するためのオペレーターである。ここから、こころについて何がいえるだろうか。こころは、それ自体としては実体を持たないということ。それゆえ、アリストテレスが考える魂とデカルトが考える魂は同一なのかあるいは別物なのかというような問いは無意味であること。精神は魂という実体のひとつの機能だというような一見すると気の利いた台詞は

一本化された。知・情・意の担い手としてのこころ(mind)という描像である。

デカルトの場合、意識の明証性という卓越性がこころをこころたらしめていた。今日のような実証主義の時代には、実証的であることがこころをこころたらしめる。実証可能、すなわち実験可能であることがなににもまして卓越性なのである。これが、実証主義的な心理学の隆盛の原因である。それは、生理学的心理学であり、脳心理学であり、脳神経心理学である。その手法が最新の神経科学にもとづいているのであれば、ミミズやホヤのこころさえ研究対象となる。もっとも卓越した実証科学の対象たることが、こころの研究をこころの研究たらしめているのである。それゆえ、林学や文献学はこころの科学にはなりえない。これは、林学や文献学の対象がこころをもっていないからであるよりはむしろ、林学や文献学という学問が、最先端の実証科学とはみなされていないからである。

そうなると、知覚を手引きに脳のある種の働きを解明することがこころの解明となる。また、記憶を手引きに脳のまた別の働きを解明することがこころを解明することになる。あるいはまた、感情を手引きに脳のさらに別の働きを解明することがこころの解明につながることになる。もはや意識性すら必要ではない。しかし、それは、脳のある種の働きを解明しているにすぎないではないか。あるいは、せいぜい言えても、知覚や記憶や感情を解明しているにすぎないではないか。それらが、こころの解明であるとなぜわざわざ言う必要があるのか。どこにもこころなど解明してはいないのに。これは、今日の心理学が、なぜこころの科学と謳われるのかというのとおなじ趣旨の疑問である。それに対する答えはひとつしかない。そういう制度が確立されているから、と。つまり、こころなどどこにもなく、こころの科学とよぶ必要などまったくないにもかかわらず、なにか「こころの科学」とよばれるような制度が確立しているということである。しかも、心理学は「こころの科学」という大看板ゆえに社会的地位を得ている。もしもそれが、単なる知覚の科学や単なる感情の科学であれば、オタクでもない限りさして関心をしめさないだろう。つまり、学科の人気ランキングという点では、林学や文献学とさして違わない。

ヒュームはこころを、印象と観念のところに、すなわち知覚のところに一本化したが、しかしここまでくれば、もはやこころという概念さえ不要である。近代的な心理学は、まさしく「心なき心理学(psychology without soul, Psychologie ohne Seele)」なのだ。問題にすべきは、ウイリアム・ジェームズの場合は「意識の流れ(the stream of thought 思惟の流れ)」であったが、結局は意識ですらなく、人間の本性である。ヒュームは、人間のこころ(human mind)についての探究を、人間の本性(human nature)についての探究へと横滑りさせた。横滑りとは、意識を手がかりに探究していながら、それ

し、こころがもっている隠喩的水準を突破してさらにより厳密に規定しようと踏み込むと、こころに関する仮説を立てたことにはならず、むしろ論点先取に陥ってしまう。それゆえ、こころについてその何であるかを立ち入って規定しようとすることは、理論的構成であるよりはむしろ信仰告白にちかい。何かを担保しないかぎり、一般には受け入れられないだろう。心理学が実証性を担保することによってかろうじて成立するのは、ここにその理由がある。[23]

意識にはそれなりに実証性がある。こころを意識として定義するのがこころの実証化の第一歩である。記憶や知覚は意識されるからこころの探究において実証的な研究対象になる。知覚のなかでも実証的に扱えるところが科学的な探究の対象となっていく。しかしこれは、前にも述べたように、知覚の研究ではあってもこころの研究ではない。にもかかわらず、ここにこころが仮構されていく。知覚はこころの働きであるとか、知覚の担い手はこころであるというようにである。これは先に論じたように論点先取であるが、意識という実証性を担保しているがゆえに、単なる論点先取には終わらないのである。このようにして、今日の、こころを巡る知的状況が形成されている。実証性を担保に、こころは脳であるとか、こころは機能であるとかの知見があらためて提示されてくる。

本来こころは隠喩的に漠然としか規定できないのだから、こころを具体的に規定して、例えば、こころは意識であるとか、こころは知・情・意の原理であるかのように語るのは伝統だということになるだろう。命ある動物にしかこころを認めないとすれば、これはあきらかにアリストテレスの伝統であろう。知・情・意はこころの働きだという理解は、アリストテレスからデカルトへと流れる伝統を前提せずに果たして言えるだろうか。今日のこころの概念は、デカルトから発しており、それを、ロック、ヒュームにおいて懐疑論のフィルターを通過させた結果生じたものである。すなわち、こころとは、意識性というタンジブルな側面に切り詰められたコギトの担い手のことである。[24]

デカルトはコギトの明証性を梃子（てこ）に、こころの存在を確立する。この場合にこころとは、広義における思惟の担い手である。ロックはこの伝統を引き継ぎ、思惟の対象としての観念（idea）を中心にすえる。観念を形成し操作するのがこころの働きである。デカルトの懐疑が多分に方法的・戦術的であったのにたいして、ロックは強い懐疑主義者だったから、こころの本質は知りえないという立場をとった。知りうるのは、観念だけだというわけである。[25] このロックの強い懐疑主義をさらに一層強化し、洗練し、首尾一貫させたのがヒュームである。ヒュームは、ロックの観念をその強度と鮮度から、印象と観念に分ける。ここにいたって mind の独裁が完成する。こころがもっていた様々な含意はすべて除去されて、印象と観念という把握可能な対象を構成する知覚（perception）へとこころの関門は

ここでの二元論は、狭い意味での存在論上の二元論に限定されない。見えるものと見えないものとか、下賤なものと高貴なもの、暗いものと明るいものの二元論であってもかまわない。「こころ」は、そのつど、あるいは身体との二元論を、あるいは自然との二元論を、あるいは物質との二元論を、あるいは客観的なものとの二元論を、あるいは意識のないものとの二元論を、あるいは外面的なものとの二元論を、あるいは機械的なものとの二元論を発動させるのである。その結果として、こころは、そのつど、あるいは身体にあらざる何かとして、自然にあらざる何かとして、客観的にあらざる何かとして、おのれを位置づけることになる。それゆえ、ある人はこころを、高貴で澄明で超越的な精神としてイメージするだろうし、またある人は、内面的で私秘的で非物質的な魂としてイメージするだろう。またある人は、有機的で目的論的な生命の原理としてイメージするだろう。「こころ」という言葉の基本的な機能が二元論的な枠組みの操作にあるならば、それが隠喩的な性格をもつのも、ごく自然に理解できる。

こころの存在を認めることは二元論的な見方を採択することであるとすると、こころの存在を認めながら二元論を避けようとするのは矛盾しているだろうか。こころの存在を認めながら二元論を一切認めないとすれば、これは矛盾だろう。そもそも、一切の二元論を拒否するならば、当然こころの存在も認めないだろう。とはいえ、魂一元論や精神一元論はありうるから、そうも言いきれないかもしれないが。魂一元論、精神一元論は措くとして、たとえば存在論上は物理主義的一元論を採っていても、何らかのかたちで二元論をみとめるならば、「こころ」という言葉を使うことができるだろう。こころを傾向性とか能力として考えるのは、物質的世界のなかに、たんなる物質状態と、それとは異質な傾向性なり能力なりとの二元性を認めることである。そうであれば、物理主義的一元論を採っていながら「こころは存在する」と言ってかまわないわけである。いずれにせよ、「こころなど存在しない」と言い切ることをためらわせているのは、結局、ある種の二元論への未練なのだろう。

心-身の二元論は素朴な世界観であって、どの文化にも認められる未開性のあらわれだと見なされる場合が少なくない。しかし心-身二元論は、素朴で未開ではあるかもしれないが、決して皮相でも浅薄でもない。それはこころにとって本質的なことである。あるいは次のように言うべきかもしれない。心-身二元論が皮相で浅薄だとするならば、それはこころが皮相で浅薄なものだからだと。

## 14　実証主義によるこころの制度化

先に、二項対立について論じた際に、こころは大抵の場合消極的（ネガティブ）にしか規定されないといった。これを積極的に規定しようとするのがまさにポジティヴィズム（実証主義）である。しか

二項対立である。そしてこの二項対立において、その片方は、すでに述べたように、具体的で分明で目に見え手で触れることができるのにたいして、もう一方は、漠然としており具体性もとぼしく、見たり触れたりできるとはかぎらない。しかし価値の点ではこちらが主となっている。それゆえ、「こころ」という言葉によって操作される二元論は、対等な権利と効力をもった二種類の存在者のあいだの二元論であるよりは、明確な性質と効力をもったものと、茫洋として輪郭のさだまらないものとの間の二元論である。

そして、このような二元論からなる枠組みを操作するねらいは、具体的で分明な世界におさまらない世界があることを指摘するのである。この、眼に見えて手で触れることのできる世界だけではなく、それよりも価値のある卓越した世界が存在することを指摘するのである。これが、ここでの二元論的枠組みの操作である。

「こころ」という言葉の使用を通じてわたしたちは二元論的な態度を身に付けていくだろう。ある種の内面性の存在を自明なものとして考えるようになるだろう。その内面的なものは、時にこころと呼ばれ、時に魂とよばれ、時に精神と呼ばれ、時に自我とよばれ、時に主観性とよばれ、時に実存とよばれる。所によっては、胸と呼び、腹と呼び、気と呼ぶこともある。

この内的なものは、根拠とか本質とか実体とか原理というように論理的・存在論的に理解される場合もあれば、傾向性とか能力というように行為論的に理解される場合もある。生命として自然学的に理解される場合もあれば、また脳というように唯物論的に理解される場合もある。自己とか主観性というように自我論的に理解されるときもあれば、善性というように道徳的に理解されることもあるし、理想というように審美的に理解されることも、また理念とか内なる神というように超越的・神学的に理解される場合もある。

ここでいう二元論的態度とは、ライプニッツが「プラトンの作品の中で、あまりにも唯物論的な哲学者に反対するソクラテスの注目すべきことば」として称揚している[21]ソクラテスの態度である。ソクラテスは、万物の原因は知性（ヌース）だとアナクサゴラスが主張していると聞いて、これこそ真理だと確信する。ところがアナクサゴラスは結局、人間を動かしているのは腱だとか筋肉だというようなことしか語らない。それを知ってソクラテスはいたく失望する。そんなものは原因ではないだろう。なにかが人間を動かすのはそれが最善だからのはずだとソクラテスはあくまで考える、という『パイドン』に出てくる有名な話[22]である。ここでソクラテスが採っている態度が、こころの存在を認める二元論者の態度である。

では、こころとはなにか。こころとは、「こころ」という言葉の使用において措定される何かである。それは様々な二項対立の項として多く消極的に規定されながら価値の点では主となる何かである。そしてそれ以上には語れない何かである。

もてに現われないものであり、客観的でないもの等々である。このように、こころは、意識性とか志向性のように積極的に規定できる場合もあるが、大半が消極的にしか規定できない。こころは、価値の点では主項でありながら、認識の点では多分に消極項なのである。あるいは、むしろ逆にいうべきかもしれない。こころは、消極項であるにもかかわらず主項であるような、そのようなものである、と。

## 13　こころと二元論

「こころ」にはアナフォリックな側面があった。またメタフォリックな側面もあった。ここから、こころの自己隠喩という性質がみちびかれた。しかしながら、これは、「こころ」という言葉の機能を、対象を指示したり属性を記述する面から見た場合である。「こころ」の場合に言葉の働きは、このような伝統的な機能には収まりきらない。その言葉のもっとも重要な機能は、何らかの存在者を指示ないし表示するところにあるのではない。こころについては、その存在も非存在も、さして重要でないのは、ここにその理由がある。それゆえ、こころの存在を認めるというのは、なんらかの存在者を措定することであるには違いないが、しかし、その存在者をさらに具体的に規定可能な何かとして措定することであるよりは、むしろ世界を見るときにある種の二元論的な枠組みを採ることなのである。要するに、二元論的な存在論を措定することである。先に論じたように、こころは様々な二項対立を形成している。それゆえ、こころの存在をみとめるとは、例えば、物質という眼に見え手で触われる存在者と、こころという目にも見えず手で触れることもできない存在者との二元論をみとめることなのである。あるいは、公共的な世界と私秘的な世界との二元論をみとめることなのである。結局、「こころ」の機能はある種の二元論的な枠組みを操作するところにある。

「こころ」は、それゆえ、二元論的枠組みを操作するオペレーターとみなすべきだろう。言葉の機能は指示や記述にだけあるわけではない。言葉の使用には、数を数えるような、指示や記述からかけ離れたものもある。概念枠の操作もそのひとつであろう。それゆえ、「こころ」という言葉は、「花子」だの「犬」や「動物」だのよりも、「一（いち）」とか「真」とか「存在」に近い。

二元論的な枠組みを操作するとはどうすることか。目の前に見えて触われる世界とは別の世界が問題になっていることを指摘するのである。「太郎は花子のこころを傷つけた」といえば、太郎が傷つけたのは、目に見え手で触れることのできる花子の身体ではないなにものかであることを示唆している。そして、その傷つけかたも、外傷が残って誰もの目につくようにではないことを示唆している。重要なのは、このとき、常になんらかの二項対立のもとで発想されているという点である。つまり、外から見えるものと外からは見えないもの、身体と身体でないもの、外傷と外傷ではない傷、等々の

こころにあらざるものというように、どこかでこころを密輸入しないと必要な二項図式は得られないのではないか。結局、小論も論点先取を犯しているのではないか。

たぶんそうはならないだろう。野放図にどのような二項対立でもかまわないというわけにいかないのは、「こころ」の使用には卓越性というライトモティーフがあるからである。それゆえ、卓越性が認められるならばどのような二項対立でもこころはそれと呼応するだろう。軽いものが卓越している日本の美意識のような世界では、軽いものに精神性を認め、重厚なものには認めないだろうし、重厚なものが卓越しているドイツ的美意識の世界では重いものに魂を認め、軽いものには認めないだろう。

また、卓越性をこころを帰属する際の指標とみなすことは論点先取ではないかという点についても、たぶんそうはならないだろう。卓越性に反するものにもこころを認めることが一般にみられるならば、卓越性がこころのライトモティーフだという主張は、小論が槍玉にあげている意味での論点先取になるだろう。しかし、卓越性に反するもの、すなわち、凡庸なものとか目立たないものとかくだらないものとかどうでもよいものに、こころは呼応するだろうか。たとえば、凡庸なものに精神性をみとめたとすれば、それは凡庸さのうちになんらかの卓越性をみてとったからであろう。このように、卓越性と言う指標はそれ自身十分に卓越的なのではないだろうか。

二項対立を構成する二つの項は、全く対等の価値と権利のもとに対抗しているわけではない。大抵の場合、どちらかが主であり、もう一方は従として主を引き立てる役わりを負わされている。主従という二項対立がまさにそうであるが、上下といえば、上が主であり、下が従である。このように二項対立において主となる項を「主項」、従となる項を「従項」と呼ぶことにしよう。以上が、二項対立の価値の軸である。

二項対立を構成している対立の軸にはもうひとつあって、二項の対立の決定根拠をどちらにみるかという軸である。例えば、東京と地方という二項対立は、東京という明確な対象によって決定されている。地方は東京との対立の下でのみ規定されており、東京ならざるもの一般という漠然とした規定しかそれ自身のうちにはない。この場合の東京のように、対立の根拠となって主導権を握っている項を「積極項」とよび、「地方」のように、それ以外のものという消極的な規定しかあたえられない項を「消極項」とよぶことにしよう。これが、二項対立の認識の軸である。

この二本の軸からみると、こころを構成する二項対立には顕著な特徴がみてとれる。この二項対立において、こころは価値の軸では主題でありながら認識の軸では多くが消極的である。こころは、場合によって、身体にあらざるものである。また場合によっては、物質にあらざるものである。同様に、機械にあらざるものであり、お

のこころ」は「彼女の本心」であり「本当の彼女」である。「こころ」という言葉は、「本当」とか「真」という言葉に似て、形而上学的な効力をうみだす演算子、存在論的演算子なのである。

神はそれ自体の内に強い実在論を要請するような存在である。わたしたちの認識から独立にそれ自体で存在するというのが神の本質規定の一部を構成しているわけだから、神は、存在するとすれば、実在論的に存在するものの典型であるだろう。神に対して反実在論的な立場を採るのは、神の存在を否定するに等しい。神ほどではないにしても、こころにも似たところがある。こころの存在はそれを認識する能力に依存しているとすれば、それは、こころに関する一般的通念に反しているだろう。それゆえ、こころは、存在するとすれば、それ自体で存在するはずである。こころが実在するならば、それはその当の個体の本質ということになるだろう。

## 12　「こころ」と二項対立

こころはさまざまな二項対立のもとで発想されている。それは例えば、こころと身体であり、精神と自然であり、魂と物質であり、主観性と客観性であり、私秘性と公共性であり、意識と無意識であり、内面性と外面性であり、能力と状態であり、理想と現実であり、自発的なものと機械的なもの等々である。二項対立は、世界の事象を二つにわけて世界観を形成する要素として機能するが、こころをめぐる二項対立も例外ではない。それどころか、こころをめぐる二項対立こそが世界観の中枢を形成しているといっても過言ではない。

こころという概念には世界観を構成する機能が含まれている。世界を大きく二つに区分するための枠組みという機能である。上と下、内と外、表と裏、天と地、明と暗、真と偽、善と悪、貴と賤、利と鈍、生と死、同と異。これらと同様に、こころには世界に構造を持ち込む機能がある。そして、こころは、この様々な二項対立の前項、すなわち、上や内や表や天や明や真や善や貴や利や生や同と様々に呼応しあっており、下や外や裏等々と対峙しながら、世界を構造化している。このような構造化を導いているのが、件の卓越性である。卓越性に導かれて、こころは、ある場合には生と呼応し、ある場合には自由と呼応し、ある場合には真や善と呼応することになる。また、状況によって、表と呼応する場合もあれば、裏と呼応する場合もあるし、また文脈よって、私秘性と呼応する場合もあれば、公共性と呼応する場合もある。これは、人間存在の何を、どういう根拠で卓越性とみなすか、状況や文脈によって変わってくるからである。

ではその二項対立はどのような二項対立でもよいのか。たとえば、熱いものと冷たいもの、美味しいものとまずいもの、甘いものと苦いもの、硬いものと柔らかいもの等々。野放図にどのような二項対立でもかまわないというわけではないのであれば、結局、こころと

詞である人称代名詞や固有名詞が指示している対象をそのまま受ける単一の機能（意味）しかもっていない。つまり、「自分」の指示対象は、その先行詞が指示している人物（person）である。「こころ」が一種の照応表現であるならば、「わたしのこころ」や「花子のこころ」における「こころ」は、その先行詞、すなわち「わたし」や「花子」が指示している対象の何かを指示ないし描写しているはずである。それはなにか。先行詞が指示している人物の何を表示するのか。もちろんこころである。では、先行詞によって指示されている人物のこころとはなにか。さきにのべたようにそれは、「こころ」がメタフォリックである以上、文脈に応じて様々だろう。

様々であるにしても、こころが実在するならば、あるいはこころが実体であるならば、こころはその当の人間の本質であるだろう。それがなんであれ、それはその人がその人として生きていくにつき不可欠のものだろう。こころは盲腸のようなものにすぎず、あってもなくてもさして痛痒を感じないというのではないだろう。わたしのこころという実体が存在するならば、それはわたしの本性であるだろう。なぜそのようなことがいえるのか。

「わたしのこころ」という言葉をつかった言語ゲームは、「こころ」がもつアナフォリックな性質のおかげで、すべて「わたし」という言葉で演じることができる。つまり、こころという言葉を使わずに果たすことができる。これは、「こころ」という言葉が空回りしているということだろうか。それはむしろ、こころはそれ自体で存在するとしても、ことあらたに言挙げする必要がないような何かだということであろう。つまり、こころの存在は「わたし」という言葉で十分に示すことができるということだ。これは、「わたし」という言葉で指示されている対象、すなわちわたし、が存在する限り当然存在するものとしてわたしのこころが存在しているということにほかならない。つまり、わたしのこころはわたしの本質以外のなにものでもないということである。空回りが生じたのは、わたしのこころはわたしだからである。わたしのこころはわたしの真実、あるいは本当のわたし、つまり、わたしの本質だからである。わたしのこころがそれ自体で存在するということは、わたしの本質が、あるいは実体が、あるいは原理が存在するということにほかならない。「わたしのこころ」という言葉をつかった言語ゲームは、このように、こころをわたしという人間の本質として提示することを可能にしているのだ。

以上の議論は、「わたし」という一人称の場合に限定して論じたが、それは、この場合がわかりやすいからであって、一人称に限定する必要はない。「あなたのこころ」でも、「彼女のこころ」でも同様である。「あなたはあなたのこころに忠実に生きなさい」とか「彼女のこころのなかで疑念がめざめはじめた」といったとき、「あなたのこころ」は「本当のあなた」であり「あなたの本心」である。「彼女

ことである。ただ後者にはいささかリダンダントな気味があるにしても。しかしこれを、説得するとはもともとこころを説得することだから、「こころを説得する」といってしまうと冗長になるのだ、と理解してはならない。そうではなくて、もともとあるのは「花子を説得する」だけである。そして、「花子自身を説得する」が冗長だから、「花子のこころを説得する」もリダンダントなのである。ようするに、「花子のこころ」と「花子自身」とは表現として同値だということ、つまり、この場合に「こころ」は「自身」と同様、照応表現だということ、これが重要なのである。

「叫んだ」「笑った」と言えば、実際に大声を出すことを、顔面筋を活発に動かすことを意味する。そこで、声に出さない叫びや顔面筋を動かさない笑いを表すために「こころのなかで叫んだ」「こころのなかで笑った」とするのである。「太郎は花子のこころを動かした」というかわりに、「太郎は花子を感動させた」「太郎は花子を説得した」と言えばすむ。このように、語彙がゆたかであれば、「こころ」という言葉は要らないことになる。だから逆に、語彙が貧弱であれば「こころ」を頻発することになる。再度くりかえすが、「感動させる」や「説得する」はこころに働きかけることだから、こころという言葉はいらなくなるのだと理解してはならない。むしろ逆であって、「動かす」というと物理的に移動させることだと理解されてしまうから、物理的な移動を伴わない移動を表現するために「こころを動かす」というのである。

「こころ」という言葉は、「花子のこころ」「あなたのこころ」「自分のこころ」のように先行詞をとる。「こころ」にこのようにアナフォリックな性格があることは、「こころ」という言葉には積極的な意味内容がないことを示しているだろう。そして、こころ自体から、具体的な内実を奪い去ってしまう結果になるだろう。

## 11　こころと本質

「こころ」という言葉は、メタフォリックであり、またアナフォリックでもある。メタフォリックであるとは、あるひとつの意味なり図式なりイメージなりを共有しながらそのつど異なった対象を指示し、異なった属性を記述するからである。アナフォリックであるとは、その指示ないし表示については、先行詞のそれに準じるからだ。「わたし」という人称代名詞は隠喩ではない。「たわし」は隠喩になりうるが、「わたし」は、それが人称代名詞であるかぎり、隠喩になりえない。また「わたし」は照応表現でもない。「自分」は照応表現であるが、「わたし」は指示代名詞である。そうであれば、「こころ」とは、「自分」が隠喩的文脈で使われている状態だとみなすこともできる。「自分のこころ」という表現は、「こころ」という言葉の典型的使用のひとつであるが、これなどは照応表現が隠喩的に使われている具体例だろう。「自分」は、照応表現である以上、その先行

ミズムはこころという概念の普通の在り方なのだ。

こころなど迷信だとする考えは、あながち間違いではない。こころの存在を信じるとは卓越性の存在を信じることなのだから。

徹底した筋金入りの唯物論者は、卓越した存在を一切みとめない。かれらにしてみれば、チェロの演奏とノコギリの目立ての間にはなんの違いもない。遺骸を荼毘に伏すのと粗大ゴミを焼却するのは同じことだ。かれらは当然ながらこころの存在を認めないし、認める必要もないだろう。言語使用の経済原則からみて「こころ」という言葉があった方が便利だという判断は下すかもしれないが。

「こころ」という言葉を含んだ慣用句を、わたしたちは日常ほとんど無自覚にしかも頻繁につかっている。しかし、「こころ」をことさらに使用するとなると、哲学や心理学の議論を除けばそれほど多くはない。多くはないが、決して無いわけではない。それは改まった場面であり、改まった話においてである。気の置けない仲間との気楽な談笑の場には、「こころ」など、慣用句をのぞけばほとんど顔をださない。

こころを問題にするとはどういう活動なのか。ある種の祝祭空間のようなものがあって、それは式場と呼んでもよいし、法廷と呼んでも、教室と呼んでも、場合によってはジャーナリズムと呼んでもよいのだが、そこでのパフォーマンスなのではないか。つまり、誰もが感心するような、誰もが喜ぶような、そういう話を誰もが求めていて、それにこたえることが、こころを問題にすることなのではないか。それは、理想を論じる場合かもしれないし、誰かを賞賛したり糾弾したりする場合かもしれないが、いずれにせよ、ある種の格調の高さを必要とする状況である。それは例えば、「身体の健康と魂の健康」とか「健全な精神は健全な肉体に宿る」とか「オリンピックでメダルをとるには心・技・体のすべてにわたって充実していなければならない」のような話になるだろう。いずれにせよ、教育者や宗教家や政治家がよくやるたぐいの退屈で形式的な、建前に終始するお話である。

## 10　「こころ」のアナフォリックな性格

「こころ」という言葉のもうひとつの性格は、それが一種の照応表現（anaphora）のように機能している点である。「太郎は花子のこころを傷つけた」と「太郎は花子自身を傷つけた」とは意味の上でも機能の上でもなにも違わない。「傷つけた」「奪った」「切り刻んだ」といえば、普通は身体的に傷つけた、奪った、切り刻んだ、と理解されるので、「こころを傷つけた」「こころを奪った」「こころを切り刻んだ」としているだけなのだ。この点を見やすくするには、つぎのような例を挙げてみればよい。「太郎は花子を説得した」「太郎は花子のこころを説得した」「太郎は花子自身を説得した」はまったく同じ意味である。「説得する」と「こころを説得する」とは同じ

の類似性のような、隠喩を導く原理を、ライトモティーフ（Leitmotiv）と呼ぶことにしよう。では、こころは隠喩であるとして、そのライトモティーフはなにか。こころは自己隠喩（自同隠喩）であって、対象と手段が同一なのだから、対象と手段の類似性というものは意味をなさない。

では、なにが「こころ」を隠喩として成立させるのか。ようするに、なにが、こころを存立させているのか。それは、人間を卓越した（superior）存在として見る一種の形而上学的矜持であろうとおもわれる。人間がおのれを卓越した存在であると考えることがないとすれば、人間はこころなどというものを問題にすることはないだろう。ヤフーの辞書には「こころ」という項目は記載されていないはずだ。それゆえ、「こころ」という自己隠喩のライオモティーフは、矜持という人間の構えにある。

人間が卓越した存在としてあるとき、それはこころの働きだと、あるいはこころのおかげだとみなすのである。その人の内奥においてこころが働いていると考えるのである。これがこころの故郷である。卓越性（superiority）は価値判断であり多分に審美的概念であるから、こころには価値判断の側面と審美的な色彩がつきまとう。vita contemplativa（観想的生活）が人間にとって最も卓越した在り方であるならば、そのとき人間は完璧にこころと化しているはずだ。

神の存在を認めるならばこころの存在を認めることができる。こころの存在を認めることのできない者は、当然ながら神の存在を認めることはできない。神は、最も卓越した存在であるからだ。卓越性という点で、こころは神の分身なのである。今日、神の存在は信じないが、こころの存在は信じるひとはいるだろう。そのひとは、卓越したものに遭遇したとき、そこに神の存在を認めることはないものの、こころの存在は認めうるのである。こころの存在は人間だけに限らない。なんであれ卓越したもののうちに、こころや精神や魂の存在を認めるのは、こころの存在を認める者の常態なのである。オーロラの美しさに打たれた人はそこに霊的なものを感じるだろう。それはこころという概念にとってすこしも異常なことではない。

言葉を話すことにおいて、あるいは命題的態度を採りうる点においてヒトがイヌやイルカより卓越しているならば、言葉を話したり命題的態度を採ることはこころの働きとみなされる。感情や学習の点で、イヌやイルカが蚊トンボより卓越しているならば、感情や学習はこころの働きとみなされる。生命という点で蚊トンボが石ころや木端より卓越しているならば、生命はこころの働きとみなされる。形をもつ点で石ころや木端が水や空気より卓越しているならば、形をもつことはこころの働きとみなされる。逆に、流れる点で水や空気が石ころや木端よりも卓越しているならば、流れることはこころの働きである。このように、卓越性で世界が一色に塗りつぶされていれば、万物万象がこころの顕現となる。アニミズムである。アニ

通な意味や図式やイメージを保存しながら、そのつど文脈に依存して、対象の性質を曖昧に描写するのである。これはすでにしてメタファーの世界だ。「こころ」という言葉は、その本性からしてメタファーなのである。しかし、「こころ」は隠喩であるという言い方は注意を要する。普通「狼」が隠喩であるといえば、誰かをあるいは何かを狼に喩えることである。では、「こころ」が隠喩であるとしたときに、いったい何をこころに喩えるのか。それもまたこころである。つまり、こころをこころに喩えているのだ。それゆえ、こころは自己隠喩（auto-metaphor 自同隠喩）なのである。

「人生は旅である」といった隠喩的表現の場合、「人生」は主題（tenor 主意）とよばれ、「旅」は手段（vehicle 媒体）とよばれる。人生という得体の知れないものを旅という身近なものによって説明するわけである。人生を旅に喩えるとはこういうことであろう。こころの場合、こころは、説明されるべき対象であるとともに説明する手段でもある。こころはつねに tenor であり同時に vehicle なのだ。

しかし、自己隠喩などというものは可能なのか。こころをこころで喩えることが可能なのか。こころが見たり触れたりできるものであれば、いうまでもなく、自己隠喩などありえない。しかしこころは誰も見たことも触ったこともない。だから、こころに関してはノミナリズムさえ可能だろう。「こころなど存在しない、「こころ」という言葉があるだけだ」と。そのような徹底したノミナリズムを採るものは少数であろうし、いまここでノミナリズムを採ろうとは考えていないが、こころにはノミナリズムを可能にするような面があることは否めない。自己隠喩が可能なのも、それゆえである。

「こころ」という言葉は対象が持つ性質を記述しているにしても、見たり触れたりできる対象の性質を記述するように記述しているわけではない。それは、なにか内面的であるようなものを、なにか主観的であるようなものを、メタフォリカルに表示するのである。これは、こころという概念が、一面では、フォーク・サイコロジー的概念であって、厳密に定義されて用いられるような学問的概念ではないということである。こころがフォーク・サイコロジー的概念であるのは、このように、こころにとって本質的なことである。「こころ」が自己隠喩であるとは、「こころ」と呼ばれる対象、すなわちこころ自体が一種の隠喩のような存在だということでもある。つまり、その内実をあえて規定すればそのつど様々に規定されるにしても、それ自体は漠然としたものなのである。

## 9　こころと卓越性

一般に隠喩は、対象（tenor）と手段（vehicle）とのあいだのなんらかの類似性によって成り立つと考えられている。「人生は旅である」といえば、対象である人生と手段である旅とにどこか似ているところがあるから、そのような隠喩的表現が可能になる。この場合

ていることとしては「こころ」という言葉以外にはないということだろう。つまり、こころとは何かまったくわかっていないにもかかわらず、こころとは何かを問いうるのは、「こころ」という言葉が、すでにこころそのもののように振舞っているからにほかならない。逆に言ったほうがよいかもしれない。こころについてたしかなのは、「こころ」という言葉の存在だけだと。こころとはなにか分かったような気になっているが、それは「こころ」という言葉をそれなりに使いこなせているからである。「こころ」という言葉をつかいこなせているかぎり、「こころってなに?」という問はすでに解答済みなのだ。それはあたかも、「こころ」という言葉が、その当のこころであるかのようにみなされているのである。まさに〈言霊(ことだま)〉だ。正確に表記すれば〈霊言(たまごと)〉か。

言葉を使いこなせれば、いつでも〈言霊〉が生じるわけではない。「お父さん」という言葉をつかえる時、子供でも「お父さん」という言葉がお父さんそのひとだとは考えない。「時間」という言葉を使いこなせるようになると、「時間」という言葉が時間そのものとみなされるようになるわけではない。

ではなぜ、こころの場合には言葉とその指示対象との同一化が起こるのか。その鍵をにぎっているのは、「こころ」という言葉のメタフォリックな性質である。

「こころ」は様々な動詞句のなかで慣用的かつ無意識的に用いられている。「こころする」「こころざす」「こころゆく」とか、いくらでもこのリストは増やすことができよう。しかし、「こころ」の日常的な使用は、そのような慣用的・無意識的用法に限られるわけではない。対象をなんらかのかたちで描写するためにも用いられている。「日本のこころ」だの「繊細なこころ」だの「こころにしみる」だの、これもその気になればいくらでも枚挙できよう。このような対象記述的に用いられた「こころ」は、対象がもっているなんらかの特性や状態を描写しているとみなしてよい。では、対象がもつどのような性質を記述しているのか。ある場合にそれは、対象が持つ内面性であろうし、ある場合には私秘性であろうし、ある場合には独自性であろうし、ある場合には真実性であろうし、ある場合には倫理性であろう。それ以外にもさまざまな特性や状態や能力や傾向性が「こころ」という言葉によって描写されている。もちろんこう言ったからといって、どのような属性でも「こころ」として描写されるというものではない。そこにはある種の制約があるだろう。それを家族的類縁性と呼ぶひともいるが、しかしそのように呼んでも事態はすこしも進展しない。

「こころ」という言葉は、このように、その場その場で実に多様な性質をそのつど描写している。ひとつの言葉が、文脈次第でさまざまな性質を記述するわけである。しかもその記述された性質は決して分明なものではない。「こころ」という言葉は、なんらかの共

は地平線だ。近づけばその分遠ざかる。時間をめぐるアウグスティヌスの言葉は、そっくりそのままこころについてもあてはまる。「ではいったいこころとは何でしょうか。誰も私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです」[19]と。どうも、「こころとは何か」と問うことを難しくしている何かがあるようだ。それはいったい何なのか。

おそらく、こころとは、「こころってなに?」と尋ねない限り、それなりに有効な概念なのだろう。そのように尋ねると、せっかくの経済性が失われてしまうような、そういう概念なのだろう。こころとは何であるか問題にせずに、解っているような顔をして使うかぎり、それなりに使える概念だということである。自明性と経済性のあやうい均衡のうえにかろうじて成立しているのだ。

フォーク・サイコロジーとはそのような概念からなる「体系」なのだろう。すなわち、フォーク・サイコロジーを構成している概念や公理は、そこそこの論理性、体系性、真理性、実証性、説得性、有効性をもっている。しかし、それらはそこそこのものでしかないから、こころって何、意識ってこころの何なの、と絞め木にかけるようにぎしぎし問題にしていくと、たちまち破綻する。近代自然科学を見慣れた眼で見ると、こころは少なからず非科学的だし迷信くさい。つまり、「こころ」のようなフォーク・サイコロジー的概念は、厳密で正確で実証的な近代科学を産み出した批判精神の吟味に耐えるような内実を欠いているのである。ギルバート・ライルは、こころがなんであるか一番よく知っているのは、小説家や劇作家だと繰り返し主張している[20]が、まさにそういうことだろう。

こころとは何か具体的に知ることができない。こころとは何かを具体的に尋ねることができない。これは、こころという概念が、具体的に何であるか尋ねる以前のところで機能しているからである。

そこで、こころという概念が機能しているところ、具体的に「こころとは何であるか」と尋ねる以前のところ、すなわち「こころ」という言葉が機能しているところで、こころを考えてみよう。それは「こころ」という言葉の働きについて考えることである。ライルやヴィトゲンシュタインが洞察していたように、言葉から接近するのがこころを知る唯一可能な道なのかもしれない。

## 8　「こころ」の隠喩的性格

こころが何なのか誰も知らない。そうであれば「こころとは何か」という問は何について問うているのか誰にもわからない。だから、「こころとは何か」という問自体がすでに謎なのだ。しかし、そのようには見えないのも事実だろう。子供でもないかぎり「こころってなに?」と尋ねないだろう。こころが何のことなのか誰もが知っている。しかし、なにを知っているのか。誰もが共通に知っていることは何か。それが何なのか誰も知らないのだから、結局誰もが知っ

ころ」の場合には、このどれひとつとしてなしえない。

定義という面から見れば、こころの特殊性は、さらに一段とあきらかになる。正義や真理を定義することは、容易ではないにしても原理的に不可能というわけではない。正義を「法の前での平等」と定義したとき、この定義は十全ではないかもしれないが、論点先取とみなされることはないだろう。つまり、その定義ではおおえない正義の事例はあっても、その定義に反するものが正義とみなされることはないだろう。これにたいして、こころの場合には、その定義に反する事例はいくらでもある。たとえば、「こころは意識である」と定義したとしても、無意識的なこころのはたらきを認めることは、今日ではことのほか容易である。

こころは定義できず、こころが何であるか誰も知らないとすると、こころについての専門家はいないことになる。しかしこれにたいしては、こころについてだって専門家がいるではないか。心理学者はこころの専門家なのだから、こころが何であるか心理学者にきけばよい。――このような意見が聞こえてきそうだ。このようなことを言われて、いちばん迷惑なのは、当の心理学者達だろう。彼らは知覚や感情についての専門家ではあるだろうが、しかし、こころを専門に研究している者などいない。物質の場合であれば、光を研究しているひとは物質を研究しているといってよいし、そういわれてもその物理学者はさほど気を悪くしないだろう。ところが、知覚を研究している心理学者に、あなたはこころを研究しているといえば、言われた当人は嫌な顔をするだろう。この違いはなんだろうか。いうまでもなく、物質の究極の構造を知ろうとするとき、光の研究は有力な手段になるからである。これにたいして、こころの場合には、その究極の構造を知ろうとするならば知覚を研究するにしくはないと胸を張って言えるような状況にはないからだ。こころについての専門家などいない。心理学者がこころについて語るとすれば、かれは心理学者として語っているのではなく、人間として、生活人として語っているのだ。こころとはそういうものである。

そうであるならば、「こころ」という言葉は、抽象名詞でさえないと言わねばならない。「こころ」は、単なる慣用表現にすぎず、「こころみる」とか「こころがける」とか「こころえる」というような語句の一部にすぎないとみたほうがよいのかもしれないのである。

## 7　こころと明視の距離

こころを立ち入って規定しようとすると論点先取におちいる。こころには明視の距離があって、ある程度以上に近づくと、こころはその本質を見えなくしてしまうようだ。こころについては、ある漠然としたこと以上は知ることができないようだ。

詩人の言葉をもじって言えば、「こころとは遠きにありて想うもの、そして哀しく詠うもの」であるようだ。あるいはまた、こころ

明確に答えていない。結局、こころとは元来傾向性や能力のことだからであろう。ライルの議論も論点先取である。

こころが何であるかを積極的にしめそうとすると、このように、かならずといってよいほど循環におちいる。論点先取という点では、アリストテレスの、こころは身体を持つものの生命活動の原理だという説も、デカルトの、こころは思惟実体だという説も、ライルの、こころは傾向性だという説も、玄人好みの、こころは志向性だという説も、素朴な、こころはある種のエイジェントだという説も、迷信とみなされてけなされがちな、こころは死ねば肉体から離れる永遠不滅のものだという説も、それどころか、ごく自然な、こころは意識だという説でさえも、同断なのである。

おそらく誰もがこころとは何か知っているのだろう。そして、おそらく誰もこころとは何か知らないのだろう。しかしそれにもかかわらず、こころの存在をまったく疑っていない。だから、誰も、こころとは何なのか尋ねないし、「こころってなに?」と訊かないのだ。それ故、こころとは何であるか立ち入って規定しようとすると論点先取に陥ってしまうのである。

## 6　こころが何か誰も知らない

こころとは何であるか具体的に規定しようとすると論点先取に陥ってしまうならば、こころは具体的に何であるか知ることができないということであろう。これは、こころを具体的に定義できないということである。そうであれば、結局、こころがなんであるか誰も知らないということになるだろう。[17]

しかしこういうと、つぎのように反論されるだろう。それは特にこころに限ったことではない。正義だって善悪だって政治だって真理だって存在だって物質だってなんだって、抽象名詞によってあらわされるものは、それがなんであるか誰も知らない。――なるほどソクラテスはそれに近いことをいっているし、そのことを証明してもいる。[18] しかし、こころとそれ以外のものとの違いを曖昧にすべきではない。

たとえば、「正義」という抽象名詞によって表示されている対象が何であるか、誰もこたえられないとしても、ある行為が正義にかなっていると主張する時には、あるいは、正義に悖っていると非難する時には、それがなぜ正義にかなっているのか悖っているのか、その根拠をしめすことができなければならない。「善悪」も同様だろう。「政治」という抽象名詞の場合であれば、選挙とか議会とか立法という様々な制度が現実に存在している。「真実」であれば、ある文言が真実であるか否か、ある作品が本物であるか否かを、問題にできる。「存在」であれば、何が存在し何が存在しないか、存在者の一覧表をつくることができる。「物質」であれば、具体的な物質をまえにして、これが物質だと示すことができる。しかし、「こ

にそのつどアドホックに考案される仮説ないしは論理的構築物（logical construct）であるよりは、むしろ、わたしたちのものの見方全体を統括している世界観とみなすべきだろう。

## 5　諸説の身分と論点先取

こころが生命活動の原理であるのはなぜなのか、アリストテレスは説明しなかった。こころが思惟実体であるのはなぜなのか、デカルトは説明しなかった。こころは機能であるとか、こころは脳であるとかの諸説についても同様である。これらの諸説は、なぜこころが機能や脳であるのかその根拠を示さない。根拠を示すことなく、こころは生命活動の原理であるとアリストテレスは主張する。しかもこれは仮説ではない。なんらかの現象を説明するために便宜的に措定されているわけではない。そこには、こころを措定するだけの深い理由、すなわち根拠があると考えられているからである。根拠をしめすことなくデカルトは、こころは思惟実体であると主張する。しかもこれは仮説ではない。この場合も、これには根拠があると考えられているからである。アリストテレスもデカルトも、おそらく自覚することなしに論点先取をおかしている（beg the question）のである。なぜ論点先取かといえば、かれらは、単なる仮説などではなく、明確な根拠にしたがっておのおの自らの説を主張しているつもりだろうからである。つまり、単なる出まかせで言っているわけではないからだ。しかしその根拠は、言挙げ（ことあ）すれば、結局は、その説そのものでしかないからである。

ライルが『心の概念』一冊を通じて示さんとしたのは、心的なものとは内面的な出来事（internal event）[15]ではないという主張である。すなわち、各人の内面にこころとよばれるエイジェントが棲まっていて、このエイジェントが活動することによって認知や意志や感情や感覚やイメージが生じるのだという描像は、根本的にまちがっているという主張である。そして、その間違いは、ライルによれば、心的状態を記述するために用いられている言語表現の機能を誤解するところから生じたカテゴリー・ミステイクなのである。要するに、ライルは、一種のホムンクルス説を否定しようとしている。しかしながら、言葉の働きを誤解することと、何らかのエイジェント説を採ることの間に論理的な必然性はない。そうであれば、わたしたちが言語表現の機能をいかに誤解しているか証明されたからといって、だからエイジェント説は間違っているという結論は導けない。言えるのはせいぜい、言葉の機能をてがかりにエイジェント説を導くことには根拠がないということだけである。ライルは、エイジェント説が間違っていることを証明してはいない。ライルは、こころとはむしろ傾向性とか能力[16]のことだと主張する。ライルにいわせれば、こころをめぐる言葉の論理が、こころは傾向性や能力であることを示しているのである。しかし、なぜそういえるのか。ライルは

にこころは存在しないとはならないだろう。現実問題として、思惟実体の存在を認めないひとはいくらもいるが、だからといってかれらはこころの存在も否定しているとはかぎらない。

そもそも、こころが仮説だとして、では、それはどういう仮説なのか。つまり、なにが存在すると仮設しているのか。たとえば、フロギストンが仮設だといったときに、それは、物質が燃焼するとき、ある特殊な燃焼するためだけの物質があって、それが燃えるのだ。そしてこの、可燃性の物質原素がフロギストンなのだ、というように説明されるだろう。インペトゥスは仮説だといったときには、弓を離れた矢が飛び続けるのは、インペトゥスという力が矢を押し続けるからだというように。また、ヴァルカンは仮説だといったときには、水星の近日点が理論的な予測値からずれることを説明するために、水星の内側をまわる未知の惑星として仮設されたのだと説明されよう。では、こころは仮説だといったときそれはどのように仮設されるのか。

それは例えば、意識が成立しているとき、それはこころという非身体的な器官がはたらいているのだというように仮設される。一見これでよさそうにみえる。しかし、ここには決定的な問題がある。フロギストンやインペトゥスやヴァルカンの場合には、上述の説明で言うべきことはすべて言い尽くされている。つまり、フロギストンを仮設しようと考えているひとたちは、基本的に同じことを考えているのである。結局フロギストンについての仮説は一種類しか存在しない。それゆえ、フロギストンが何であるかはその仮説によって明確に規定されているのである。インペトゥスやヴァルカンの場合も同様である。しかし、こころについて考えているひとは、誰もが、意識を可能にする器官としてこころを仮設するとは限らない。ひとによっては、こころとは意志を生じさせる発動機として仮設しているかもしれない。またひとによっては、人格のよさや悪さを決定する人間性の芯として仮設したがるかもしれない。また場合によっては、狂気や異常行動を説明するためのメカニズムとして仮設するかもしれない。このとき、いったいどの仮説がこころにとっては正しいのか。それとも、そのすべての仮説が仮説として同等の権利を有しているのか。そうであるとすれば、こころは、仮説の数だけさまざまな側面をもっている何かということになって、仮説という言い方ではとらえきれないだろう。あるいは、ここで共通なのは、単に「こころ」という言葉だけであり、実際には、様々なこころが措定されるのだ、ということだろうか。しかし、そうであれば、いったい、それらが同じく「こころ」と呼ばれるのはなぜなのか。なぜその同じ言葉で呼ぶ必要があるのか。議論は出発点にもどってしまう。要するに、「こころなんて仮説だよ」と気軽に言って済ますわけにはいかないのである。

こころは、さしせまってなんらかの具体的な事象を説明するため

しさはそれがいかに現象を説明できるかにあるのであって、仮説として設定する際にどういう根拠に基づいているかは重要ではない。夢にみただけでもそれが有効であれば仮説はそれでよいのだ。――では、仮説だとして、アリストテレスやデカルトは、何を説明するためにそのような仮説を導入したのか。人間の具体的な行動や行為を説明するためではないだろう。であるならば、むしろ、こころを説明するためだろう。そうであれば、こころとは生命活動の原理であると仮設することによって、こころの本質を説明していることになる。こころとは思惟実体であると仮設することによって、こころの存在論的身分を説明していることになる。しかしそうであるならば、こころは内面の空間であるという説だって、りっぱに仮説として通るだろう。それはこころのトポロジカルな構造を説明していることになる。しかし、それらは、はたして説明しているのだろうか。アリストテレスやデカルトは、仮説を使ってこころを説明しているのだろうか。こころなど誰も見たことも触ったこともない。その、こころとよばれる、誰も見たことも触ったこともないもの、ようするに、まったく得体の知れないものは、仮説を立ててまで説明しなければならないような具体的内容をもっているのだろうか。それらの、こころに関する諸説は、仮説とよばれるに値するだけの具体的な使用を期待してうちだされたものなのだろうか。

ここからもわかるように、アリストテレスは、こころを説明するためにそれを生命活動の原理として規定したにはちがいないが、その規定を仮説として使って何か具体的な現象を説明したわけではない。ここで仮説の条件としての反証可能性を云々するつもりはないが、こころには、アリストテレス説を仮説として使いこなすだけの内実が確保されてはいないのである。むしろ、アリストテレスの説は、その内実をあたえようとしたものであったと見たほうがふさわしいだろう。デカルトも同様である。

では、アリストテレスやデカルトの説は、こころを説明するための仮説であったというよりは、こころなるものを仮説として設定するためのものであったと見ることができるだろうか。これは要するに、こころなるものは仮説にすぎないという主張である。

しかし、こころは仮説だろうか。今日、こころは仮説だと考える論者はすくなくないだろう。こころは、人間を典型とする高等動物の行動や行為、その他さまざまな精神現象を説明するために要請された仮説だと。ひとによれば、こころは、インペトゥス（impetus）やフロギストン（phlogiston）、バルカン（Vulcan）などと並ぶたんなる仮説であって、早晩、棄て去られる運命にある。

こころは仮説だとしよう。しかもデカルト説をとって、それは思惟実体であるとしよう。こころが単なる仮説であるならば、思惟実体は存在しないとなったら、こころは存在しないということで万事休する。しかし、実際には、思惟実体など存在しなくても、ただち

である。三つ目は、思惟の主体を「精神」と呼ぶのは、一般の言語慣習に従ったまでのことだという点である。要するにデカルトは、ホッブズに対して、思惟実体が物質でないことは十分に証明されていると答えているのである。では、小論の問題関心に即してデカルトの答弁を解釈するならばどうなるか。デカルトは、「こころ（精神）は思惟実体である」などと自分は言っていないと主張しているのである。

このような解釈は面妖にうつるかもしれないが、しかしそれほどおかしな話ではない。上で挙げたデカルトからの引用の最後の文は、実は、次のような意味深長な文言によって限定されて一つの文を構成しているからである。「これらはいずれも、いままでその意味が私には知られていなかった言葉である。」[12] この限定をそのまま受け取れば、デカルトは、「精神」や「心」や「知性」や「理性」という言葉の意味を知らなかったことになる。つまり、デカルトは、こころとは何か、知らなかったのである。わたし（伊藤春樹）と同じだ。それゆえ、そのようなデカルトが「こころは思惟実体である」などと言うはずがない。そうであるならば、デカルトは、これまでその意味を知らなかった言葉を、思惟実体でもって定義したということである。たとえば、「精神とは思惟実体である」とか「知性とは思惟実体である」とか「こころとは思惟実体である」というように。

しかし、「わたしはそれらの言葉の意味をそれまで知らなかった」との発言は、ウソといっては失礼にあたるかもしれないが、そのまま受け取ることはできない。もしもデカルトは、それまで「精神」という言葉の意味を理解していなかったとすれば、「精神は、なにもまして確実に知られるものである」とのキャッチ・コピーは、なんだったのか。デカルトは『省察』の本論に入る直前に全体の概要を述べているが、そこの最後で、『省察』の目的は、神と精神に関する認識ほど人知の及ぶ限りで確実なものはないことを示すところにある旨を明言している。[13]

結局、デカルトは最初から、思惟の主体としてのこころ（精神）の存在を確信していたのである。そして驚くべきことに、[14] デカルトはこころ（精神）が何であるか知らないのである。いずれにしても、デカルトは、思惟実体が物質にあらざることの証明には腐心したにしても、こころ（精神）が思惟実体、すなわち思惟の主体である根拠を示してはいない。

## 4　こころは仮説か

以上の議論を目にして、次のような疑念が持ちあがるかもしれない。アリストテレスやデカルトが、こころは生命活動の原理であるとか、こころは思惟実体であると主張したときに、彼らがやっているのは仮説の提示なのだ。仮説にたいしてその根拠を尋ねるのは、場合によって可能かもしれないが、たいして意味はない。仮説の正

ろは内なる劇場であるというイメージは信じるにあたいしないが、こころは生命活動の原理だという説ならば信じる価値があるのだろうか。では、そのように信頼できる根拠は何か。アリストテレスは次のように言っている。「さて魂とは、……それによってわれわれが生き、感覚し、思考するところのものである。したがってそれは、一種の説明規定であり形相であって、質料でも基体でもないということになるだろう。」[7]ここでアリストテレスが言っているのは、こころとは生命活動の原理なのだから、それによってわれわれが生きるものだ。加うるに、こころは生命活動の原理なのだから、それは形相であって、質料でも基体でもない。――こういうことであって、こころが生命活動の原理である理由については何も語っていない。

もうひとつとり挙げよう。デカルト説である。デカルトといえば、こころは思惟実体（res cogitans）である。では、デカルトは、どのような根拠でこころは思惟実体であると主張するのか。彼の主著である『省察』のなかでも特に重要な『第二省察』の中枢的な部分で、「私はある、私は存在する」という命題が必然的に真であることを確認したのちに、ではその、必然的に存在するところの私とは何であるかを問題にしながら、「私にとって必然的に真なのは思惟することだ」という結論にいたるのであるが、そこでデカルトは次のように述べる。「いま私が承認するのは、必然的に真であることがらだけである。それゆえ、厳密にいえば、私とはただ、思惟するもの res cogitans（思惟実体）以外の何物でもないことになる。いいかえれば、精神 mens、すなわち心 animus、すなわち知性 intellectus、すなわち理性 ratio、にほかならないことになる。」[8]これを見る限り、デカルトは、論証無しに、「思惟する主体である私は精神だ」と断定しているようにみえる。つまり、デカルトは、独断的に、「こころは思惟実体である」と主張しているのだと。

ホッブズは、デカルトの『第二省察』に対する彼の反論において、コギトの明証性から、思惟する私の存在の確実性を導くのはよいが、しかし、私が思惟するということから私が思惟実体すなわち精神であるとは言えないだろう。そのことについてデカルトは明確に証明していない。私が物質である可能性だってあるだろうと批判している。[9]ホッブズはまず、デカルトが「私は思惟する」と「私は思惟である」を同一視していると批判する。「私は思惟する故に私は思惟である」と言えるとすれば、「私は歩く故に私は歩行である」と言えることになるだろうとの有名な批判である。デカルトはそこからさらに「私は精神である」を証明なしに導いているというのがホッブズの批判である。これに対するデカルトの答弁[10]は、いまひとつ明確ではないが、三つの点で反駁しているとみてよいだろう。ひとつは、自分（デカルト）は、「私は思惟する」と「私は思惟である」とが同じだとは言っていないという点である。もう一つは、私が物質ではなく思惟実体であることは『第六省察』で証明されている[11]という点

分のどこかに存在するとは必ずしも信じていない。あるいは、自分の内面の舞台でこころなる演者（エイジェント）が何かを演じており、その結果としてさまざまな心理現象が生じるとは考えていない。これもまた事実だろう。では、そのようなものとしてこころを考えない人々は、結局は、こころなど存在しないと達観しているのかといえば、これもまたそうではないだろう。

こころなど存在しないと言ってしまうと、在るのは棒杭や石ころだけだと言っているようにきこえる。また、自分にはこころなどないと主張すれば、「お前は蚊トンボか」と半畳をいれられそうだ。こころなど存在しないと言い切ることをためらわせているのはこの種の困惑であるだろう。こころなど存在しないとも言えないし、イメージにあるような内面のエイジェントとしてのこころが実際に存在するとも考えられない。ジレンマである。

しかし、なぜこのようなジレンマに陥ってしまうのか。こころについてのイメージが素朴すぎるのか。こころについてのイメージがもっと洗練されて豊かなものになれば、こころの存在を十分に受け入れることができるはずだということなのだろうか。では、偉大な哲学者が提案している考えに触れれば、こころの存在を信じることができるようになるだろうか。

アリストテレスはこころを、生きとし生けるものの生命活動の原理のように考えている。[5] 植物から下等な動物をへてヒトのような高等な動物へと生命を持つものには階層が認められるのに即応して、その生命活動にも下等なものから高等なものまで階層がある。それは、生殖・栄養活動であり、移動であり、感覚であり、思惟である。それゆえ、こころにも階層があって、生殖・栄養摂取の原理としてのこころ、感覚活動の原理としてのこころ、思惟活動の原理としてのこころ、というようにわかれることになる。

さて、では、こころとは何かと訊かれたときに、このアリストレスの説を示すことで責をふさぐことができるだろうか。この説ならば、件のジレンマに陥らずにすむだろうか。こころとはアリストテレスが言うようなものであるならば、その存在を認めるのになんの困難もないだろうか。むずかしいだろう。

アリストテレスは、当時こころについていだかれていた通念から、こころの本質を生命活動の原理というかたちに彫琢していった。アリストテレスは、当時あった一般通念としてのこころのイメージを次のように総括したうえでみずからの説を展開している。「こうしてすべての論者が、魂をいわば次の三つの特質によって定義しているのである。すなわち、動、感覚、非物体性である。[6]」アリストテレスは、生命活動の原理を「こころ」と呼んだのではなく、一般にこころと考えられているものの本質を生命活動の原理として規定したわけである。

しかし、こころは生命活動の原理であるとなぜいえるのか。ここ

わたしたちはこころについて何を知っているのだろうか。このように尋ねると、心理学の膨大な業績があるではないか、それをひもといてみたらよいではないか。――このような答えが返ってくるかもしれない。しかし、例えば、知覚だの錯覚だのその他様々な心理現象にかんしては、それこそ汗牛充棟に有り余るほどのデータが蓄積されているだろう。しかし、問題はこころである。こころにかんする知見がはたして心理学に蓄積されているだろうか。これには必ず次のような反論が寄せられる。だから、こころなどというものは無内容なのだ。重要なのはさまざまな心理現象や心理的体験だ。この実証的に把握可能な心理現象を措いてこころなどありはしない。データがとれないこころなどという空虚なものについて、それは何かとたずねるのは無意味なことだ。在るのは心理学だけであって、こころなど存在しない。――この反論には重要にして決定的なものがあるが、それはいずれこころの制度化として論じることにして、ここでは一点だけ指摘しておきたい。こころなど存在せず、あるのは様々な心理現象だけだとしたとき、その様々な心理現象をおなじく心理現象としてくくるのは何を根拠にしてなのかという問題である。これは、先ほど、クオリア体験と志向性とをともにメンタルなものたらしめるのは何かという問題として触れた論点である。結局、こころなど存在せず、あるのはメンタルな現象の多様だけだとしても、それらをメンタルなものと呼ぶ根拠は何かと尋ねられれば、結局、こころとは何かという問題にひきもどされてしまうだろう。だから、「こころ」という言葉はやめにして、これからはもっぱら「メンタル」で済まそうとしても、事態はいささかも改善されない。こころなどどうでもよいというわけにはいかないのだ。

## 3　様々な描像

わたしたちはこころに関してさまざまなイメージをもっている。そのうちでもっとも一般的なのは次のようなものだろう。

誰もが自分の内面に、こころとよばれる独特の空間をもっていて、そこで何かが働くと、例えば悲しみが生じたり喜びが生じる。あるいはまた意志が発動するようになる。そしてその場所は、他人には窺がえない秘密の場所であって、自分だけが近づけるのだ。あるいは、その秘密の場所は、一種の舞台であって、そこで霊的存在がさまざまな劇を演じるのだ。それはときには、思考であり、ときには空想であり、感情である。そしてわたしだけがその内面の舞台で演じられるこころの儀式を、内なる眼でながめることができるのだ。それが意識というものだ。――たとえばこのようなイメージである。こころのイメージを語ってみろといわれれば、おそらく多くの人がこれに類したイメージを語るであろうが、しかし、そう語る当人たちが、そのようなものとしてこころが実際に存在すると信じているわけではないだろう。こころと呼ばれるような内面の空間が自

われる。しかし、問題は、では誰もが知っているのはどういう内容なのかである。これについて例えば、「こころとは、知覚や思考のような知的活動や、感情や情念のような情動活動、それから意志の働きなどを生じさせるもののことだ」という解答が与えられたとしよう。こころとは、いわゆる知・情・意の担い手のことだという思想である。あるいはもうすこし具体的に、知・情・意の様々な活動がこころの働きなのだと。これが、今日、心理学と心の哲学を通じて、こころについて一般的に理解されているイメージそのものとまでは言わないにしても、これに近いものが一般に考えられているであろう。これが今日のこころの一般通念である。

では、誰もが、こころについて、知・情・意の担い手というイメージを自然にいだいている、だから、こころとは何かなど尋ねないのだ、と言えるだろうか。言えないだろう。ここには難点が二つある。ひとつは、心理学や心の哲学ではそれが通念かもしれないが、心理学とも心の哲学とも無関係な門外漢にとってもそれが通念であるとなぜ言えるのか。もうひとつは、これはいまの難点と結局は同じことなのであるが、こころについては、別のイメージをいだいている人も少なくないだろうということである。こころとは内面的なものであるとか、こころとは意識的なものであるというイメージである。

昨今の心の哲学では、意識ないしクオリアと志向性とをメンタル（心的）なものの典型と見る傾向がある。[3] しかし、そのとき、クオリアと志向性とをともにメンタルなものたらしめているのはなにか。それが見つからないことを今日のメンタル概念の不十分さとみなす几帳面なひとも[4]いる。しかしそれならばなおのこと、なぜ「こころってなに？」と問題にしないのだろうか。それはいずれ心理学が発達すれば見つけ出されるとでも考えているのだろうか。そうであるとすれば、これはとんでもない誤解だ。心理学がニューロ・サイコロジーというかたちに変貌をとげ、脳をおもなフィールドに心理現象を探究するようになることはいくらも予測可能だし、実際、その方向で大きく発展しつつあるわけだから、いずれ心理学はクオリア体験を解明し尽くすことができるかもしれない。また、脳の言語野や記憶野の解明がすすんで、志向性が脳状態として解明されるようになるかもしれない。しかしそのように解明がすすんでも、クオリア体験と志向性とを心理現象の典型とみなす理由がわかるようになるわけではない。

結局、誰も「こころってなに？」と尋ねないのは誰もがこころとは何か知っているからであるにしても、誰もがこころは知・情・意の担い手だと考えているわけではないし、こころとは意識のことだと考えているわけでもない。では、誰もがもっているこころのイメージとは何か。しかし、本当に誰もがこころとは何か知っているのだろうか。いったいこころは何であると知っているのだろうか。それは本当に知っているといえるようなものだろうか。

していくわけである。また「こころにさわる」ことは「気にさわる」だろう。死者の「魂をなぐさめる」ことは死者の「霊をなぐさめる」ことと区別できない。こころは魂や精神と重なりあうだけではなく、胸や腹とも、また気とも霊とも重なっている。これもまた日本語にかぎらない。「心臓」は、英語でも（heart）フランス語でも（cœur）ドイツ語でも（Herz）時にこころの同義語として使われる。また「内蔵」が使われる場合もある（guts）。しかし、話はこれで終わらない。これも以下で示すことになるが、こころは、さらに、自我や主観や、それどころか超越論的主観性だの実存だのとよばれるものとも重なってくる。

ここから、いくつかの憶測とひとつの教訓を引き出すことができるだろう。まず、こころという概念がおそろしいゴッタ煮であること、しかもそうとう煮詰まってしまっていて、もとの材料がなんであったか原型をとどめなくなっている。次にこころすべきは、mindという便利な言葉が英語にあったおかげで今日の心理学の隆盛があるのだろうということ。それゆえ、その言葉がなかったとしたら、あるいは、心理学が英語圏以外のたとえばドイツやフランスで隆盛をみたとすれば、それは今日心理学があるのとはよほど違った内容のものになっていたであろうということ、これである。そしてこれと関連するが、最後に忘れるべきでないのは、こころについての考察は、それがどの言語でなされるかに制約されざるをえないことである。それゆえ、小論での考察には、日本語の「こころ」に引きずられている面がすくなからずあるはずだ。

そういうわけで、以下の論述においては、こころと精神と魂とがまったく異なった概念であるとは考えていない。再度繰り返すが、魂は迷信であって存在しないが、こころは実際に存在する、などという能天気な主張は通用しないのである。魂が迷信であって存在しないならば、こころだって精神だって迷信であって存在するはずがない。こころは科学的探究に耐えうる実証的なものだというならば、精神だって魂だって同様に科学的探究に耐えうるはずである。以下では、主として「こころ」を用いるが、場合によってそれは「魂」や「精神」の同義語である。

## 2　なぜ「こころってなに？」と尋ねないのか

脳がこころをつくったのだといわれる。あるいは、脳を調べれば、こころのなかで何が起きているかわかるはずだといわれる。このとき、「その、こころっていったい何なの」とは誰も尋ねない。なぜだろう。こころなんて誰もみたことも触ったこともないのに、なぜ、誰も「こころってなに？」と尋ねないのか。

誰だってこころが何か知っているだろう。だから、誰も「こころってなに？」などと尋ねないのだ――。このように答えることは可能だろうか。可能どころか、これだけが正しい解答であるようにおも

soul の、アメリカ黒人文化に固有のニュアンスは、「魂」などに負えるわけがない。キリスト教の伝統に特有の精霊思想は spirit という概念の専売であるが、「精神」にそれを窺がおうとしても無理である。当然だろう。

「こころ」と「魂」と「精神」が、英語の mind soul spirit にほぼ対応するのは奇跡だと言ったが、このことは、英語にとっての隣国であるドイツ語やフランス語とくらべてみるとよくわかる。これはすなわち、心理学や心の哲学で「こころ」といったときに、英語であればほぼ mind と考えてよいのに、これが英語以外だとそう簡単にはいかなくなるということだ。要するに、ドイツ語やフランス語には、soul や spirit に対応する言葉は容易にしかも安定的にみつかるが、mind にそのままぴったり対応する言葉がないのである。それゆえ、こころ（mind）は、ドイツ語では、場合によっては Seele と訳され、場合によっては Geist と訳される。まれにではあるが、Gemüt あるいは Psychisches と訳される場合もある。フランス語であれば、場合によっては âme と訳され、場合によっては esprit と訳される。cœur と訳されることもあるようだ。普通 Seele や âme は魂と訳され、Geist や esprit は精神と訳されるから、こころをドイツ語で言おうとすれば、魂とか精神という以外にないということである。フランス語の場合も同様である。あるいはこれは逆かもしれない。つまり Seele や âme は場合によっては魂であり、場合によってはこころなのであり、Geist や esprit は場合によっては精神であり場合によってはこころなのだ、と。

このような錯綜は、いうまでなく日本語との翻訳だけの問題ではない。それぞれの言語にとっても同様である。そもそもラテン語の場合からして、すくなくともデカルトをみるかぎり、anima と animus と mens とについて言えば、anima がより実体的であるのに対して animus と mens はより機能的であるというように、それなりに異なったニュアンスをもたされているにしても、しかし厳密に定義して使われているとは思えない。どのように翻訳されているかをみるかぎり、anima と mens とは交換可能であるようにみえる。そもそも、ギリシア語の psyche（プシューケー）は何と訳すべきなのか。一般には「魂」と訳されるが、「こころ」と訳していけない理由はないだろう。そして実際、そのように訳されている場合だってあるわけだし。[2] プラトン‐アリストテレスの時代の psyche に近代的な心の意味はないと言うのであれば、ではその、近代的な心とは何か、まずそれを示してもらわねばなるまい。

以上述べたように、こころと魂と精神とを厳密に区別できないということは、問題はこの三者にとどまりそうにないことを予感させる。日本語の場合でいえば、「こころにおさめる」ことができれば「むねにおさめる」こともできるだろうし「はらにおさめる」こともできるだろう。こころ（心臓）から、むね（胸）、はら（腹）へと移動

からである。「こころ」は普通の言葉なのに、こころそのものは誰も見たことも触ったこともない。誰も見たことも触ったことのないものはいくらもあるだろう。しかしそれらは、それを名指す言葉が一般に知られていないか、あるいは、その名が人口に膾炙している場合には誰でも納得できるつかみ所のあるものなのである。ところがこころときては、その名は知らぬ者とてないほど有名であるにもかかわらず、その正体となると、さっぱりわからない。

## 1　こころ・精神・魂

以下の考察では、もっぱらこころが主題であるが、魂や精神についても同様の議論があてはまる。これは、消極的には、こころと魂と精神とを厳密に区別し続けることが不可能だからである。しかし、そこにはもっと深い理由がある。こころも魂も精神も、それらはおなじひとつの問題だからである。それゆえ、「魂などは迷信であって取り上げるにあたらないが、こころは実証的な検討にたえうる真正なものである」というような考えは、まったく根拠がない。そしてまた、「心」という名詞は形而上学的な予断を持ち込むおそれがあるから避けるべきで、「心的」とか「精神的」という形容詞を用いるべきだ、という主張[1]も根拠薄弱である。ことはそのようにお手軽なはなしではない。

このことは、「こころ」「精神」「魂」という概念ないし言葉が相互に交換可能であって、厳密に使い分けることができないところにあらわれている。これはまた、今日こころと魂と精神とを区別して使うその区別にさしたる根拠がないということである。例えば、「精神分析」とか「精神療法」というが、これはpsychoanalysis、psychotherapy の訳語であるから、「心理分析」とか「心理療法」でもよいわけだ。また逆に言えば、心理学は精神学でも霊魂学でもよかったわけだ。

「こころ」と「魂」と「精神」はそれぞれ、英語のmind soul spiritにほぼ対応している。これはむしろ奇跡といえる。日本語と英語という対極にある二つの言語で三つの概念がきれいに対応するというのは驚きだろう。むしろ、日本語の「こころ」という言葉を今日ではmindに対応づけて使っているのが実情であるだろう。英語のmindに対応するように使うといっても、そもそも語源もなにも違うのだから、そこには限界がある。mindがもともと認知的な事象を表現する傾向の強い言葉であるのにたいして、「こころ」は元来、内面性とか秘匿性にかたむいている。そのため、「こころ」はmindがもつ多様な認知的側面を表現できないし、また逆に、mindは「こころ」がもっている内面の正しさというようなニュアンスをまったく表現できない。これに対して、魂や精神は、かなりよくsoulやspiritに重なる印象である。そうはいっても、それらがもつさまざまなコノテーションとなると、とうてい望みえない。たとえば、

「こころとは何か」という問に対する解答なのだと。しかし、こころは謎なのだから軽々に「こころとは何か」などと尋ねてはならないにしても、その場合のこころって何なの？　何が謎だというの？

そもそも、「こころは謎だ」といえるためにも、「こころ」という言葉が何を指示（refer）ないし表示（denote）しているのか、前もってわかっていなければなるまい。

「こころとは何か」という問は、「こころ」という言葉によって指示ないし表示されている対象の本質は何であるかを尋ねている。一般に「〜とは何か」と尋ねるとき、その問は、「〜」によって指示ないし表示されている対象の本質を尋ねているのであって、「〜」という言語表現の意味や指示対象を尋ねているのではない。それゆえ、「〜とは何か」という問に答えることができるためには、まず「〜」の指示対象ないし表示対象がわかっていなければならない。〜といわれているのは何のことであるかが答えられなければならない。まさに、「こころってなに？」に答えられるのでなければならない。では、こころってなに？　「こころ」という言葉によって指示ないし表示されている対象は何なのか。

今日の心の哲学では、このような問をたてないが、そこには二つの理由があるようにおもわれる。ひとつは、今日の心の哲学が心理学の哲学だからである。こころがなんであるかの解明は実証的な心理学の仕事であって、哲学の仕事は、心理学に関する存在論的なあるいは科学論的な解明にあると理解されているようだ。物理学に対して科学哲学があるように、心理学に対して心の哲学があると。物質の本質を解明することが物理学の仕事であって、科学哲学の仕事ではないように、こころの本質を解明するのは心理学の仕事であって心の哲学の仕事ではない。科学哲学の課題が、物理学の論理的構造を定式化したり、物理学が採っている存在論を闡明したり、物理学のイデオロギー的前提を解明することであるように、心の哲学は、心理学の概念構成や存在論やイデオロギーを解明するのが仕事である。それゆえ、「こころ」の意味が何であるかは、心理学において「こころ」という言葉がどのように使われているかによって決まるのだ、ということである。

以下で、こころの制度化を問題にする際に論じることになるが、心理学はこころなど問題にしない。心理学が問題にするのは、たとえば、認知（cognition）であり、感情（emotion）であり、行動（behavior）である。であれば、当然のことながら、心の哲学が問題にするのも認知の存在論的身分であり、感情の認識論的機能であり、行動の論理構造等々であることになって、こころなど、どこかに蒸発してしまっている。

「こころってなに？」という問がたてられないもうひとつの理由は、これが決定的に重要なのであるが、「こころ」は普通に使われる日常的な言葉でありながら、こころはつかみどころのないものだ

# こころとは何か

## ―二元論と心-身因果―

伊藤春樹

### 序

今日、心の哲学の課題は、こころを物理主義的な世界像のなかにいかに組み込むかにあると言われる。あるいは、こころの自然化が心の哲学の課題だと。では、そう言われているとき、こころってなに？　なにを物理主義的な枠組みのなかに収めようとしているの？　なにを自然化しようというの？

こころは脳だと主張される。心脳同一説である。あるいは、こころは機能だと主張される。機能主義である。あるいはまた、心的性質は物理的性質に還元できないと主張される。二元論である。このように主張されるとき、なにが脳と同一だといわれているのか。なにが物質の機能状態だといわれているのか。なにの性質が物質的ではないといわれるのか。もちろん、こころである。しかし、こころってなに？

今日の心の哲学では、ほとんど誰もこのように問を立てない。こころが何であるかは誰もがわかっているとしたうえで、「それは脳状態である」とか「それは物質の機能状態である」とか「それは脳に還元できない」とかがもっぱら議論されているようにみうけられる。しかし、誰もがわかっているのは、自分たちが「こころ」という言葉を使っていることだけであって、それ以上はなにもわかっていないのではないか。

あるいは、こころが何であるかは最大の謎であるから、気安く「こころってなに？」などと訊けるものではない、とみんなが思い込んでいるのかもしれない。そうであれば、「こころは脳状態である」とか「こころは機能である」という主張は、まさにその謎を解明すべく慎重に提出された解答だということになる。つまり、それらは、

いきれないこと、それはブレツィンカがつくった網の欠陥ではなく、教育という事象そのものの性質なのだ。ブレツィンカ自身の教育学的な努力――教育という曖昧な事象を科学的な手続きというまな板のうえにのせて、それを科学的に腑分けし、厳密で明確な分析と検証の対象にしようとする努力がこうした不満をのこす結果になっているということ、そのことがいわば裏返しに教育の本質的な曖昧さをはっきりと証し立てていると言うことができるように思われる。だがこうした曖昧さが明らかになったのは、あくまでも、留保なしに教育という事象に明確さをもたらそうとしてブレツィンカが教育の経験科学を構想し提起したその結果なのである。教育という事象に厳密な科学性という基準を当てはめ、それを明確化しようとした結果なのである。（本質としての「曖昧さ」は、断固たる明確化の努力の果てにしか見えてこない。）したがってわれわれに残るこの不満は、必ずしもかれが主張する教育科学自体の不備を示すものではない。境界の不明瞭さ、曖昧さは、境界をはっきりと線引きしようとする努力の果てにしか浮き彫りにならないのである。まさにこうした意味でブレツィンカによる教育学の基礎づけ＝「教育学のメタ理論」という知的奮闘は、教育学の学問としての性格についてわれわれに再考をうながすのみならず、教育という事象の根本的な性格についても、いやそもそも教育とは何なのかについても、あらためてわれわれに多くのことを教えてくれるように思われる。

象の全体にくらべれば僅かな部分の解明にしか貢献できないという負の面をも招くことになる。総じて教育科学が限定的な成果しか挙げられないことは、なによりブレツィンカ自身が明確に意識している。（原因と結果をごく少数の因子としてかんぜんに明確に特定できるようなケースは、当然ながら現実の教育の場面ではきわめて稀である。）その意味ではやはり教育科学の有効性・有用さは限られたものだろう。技術知としての確実さをたとえそれが持ちうるとしても、現実にはそうした厳密な知が獲得できる機会はさほど多くないからだ。この点で教育科学に過大な期待をかけることはできない。いずれ、それは教育にかんする従来の知見を一挙に塗り替え、それにとって代わるような革新的な性質のものにはなり得ない。手間のかかる手続きによって確実で、科学的に確証された知見をようやく少しずつ増やして行くことができるだけである。その意味でブレツィンカは言う、「いわゆる《厳密に科学的な》教育学の知識は、一方でとりとめがなく、不確かで、原理的に不完全であり、他方でそれを実践に適用する可能性はひじょうに限られており、圧倒的に無益である。私にはこうした事態が変わるとは思われない」（EPK. 155）と。

そしてブレツィンカによれば、厳密な科学性を標榜する教育科学のこうした欠点を埋め合わせるものは既存の教育学と基本的に同質の「実践的教育学」である。それは最初から実践的な有用性を指向する理論であり、認識の科学的な厳密さを多少は犠牲にしても、教育する者に実践的な知見を提供することを優先するからである。教育は日々おこなわれている。教育科学の認識の蓄積が遅々として進まないとしても、教育はその遅い進展を待ってはいられない。とすればこの実践的教育学は、たしかに基本的には経験科学的に確証された法則知にできるかぎり立脚するべきだが、たとえそうした厳密な認識が利用できない場合でも、実践的な有用性という要請にこたえるために「科学的には未だ十分に検証されていない、たんに推測されるだけの法則性や推定されるだけの作用連関にもとづくような提案や勧告をも不可避的に提供せざるをえない」（ME. 257）のである。ブレツィンカは言う、「実践的教育学とは、いまある社会的・文化的な状況のなかで正しく教育的に行為するための準備として構築される理論のことである。この学は、そのために役立つ科学的な認識にできるだけ立脚するべきだが、無用の科学的な重荷のすべてからは自由でなければならない」（EPK. 183）と。ただし実践的教育学は、他方でそうした知見が厳密な科学性を主張し得ないこと、暫定的な有効性をもつにすぎないことを謙虚に認めなくてはならない。

教育の概念の狭さを完全な誤りとすることのできない第二の理由は、根本において、そして本質的に教育という事象から曖昧さを拭い去ることはできないからである。明確な概念の網に完全にはすく

ブレツィンカ自身がまったく正当にもこう語っているように、それはもはや「行為」という網ではすくいとれない性質のものである。なるほど（くり返し述べてきたように）教育を、意図をともなう手段的・技術的な行為だけに限定することを即、誤りだと決めつけることはできない。教育という事実そのものは存在せず、思考のうえで抽象することでしか教育は可視化できないからだ。さらに、こうした行為への限定は実践に役立つ科学的な知見を手に入れるためには不可避の手続きだ、というブレツィンカの戦略的な主張にも正当性を認めることができる。実践に有益に作用するために「目的―手段という図式」を明らかにするには、せまく行為に限定して注目することが必要だからである。しかし他方で同時に、行為への限定によって切り落とされてしまう要因、ブレツィンカ自身が「間接的な教育」と呼ぶ要因は、教育から除外してしまうにはその教育的な重要さがあまりにも大きいと言わざるを得ないだろう。

ここでわれわれは奇妙な事実に気づく。すなわち、ブレツィンカが狭く限定するのは「教育の概念」だけであって、かれはそれによって同時に「教育という事象そのもの」を切り詰めてしまうわけではないのだ。その意味で、教育の概念を狭く意図的な行為だけにかぎることには明らかに戦略的な意図が認められるが[8]、しかし教育の概念と教育という事象とのあいだが大きく乖離してしまっているという事実には変わりがない。少なくとも、この点の不自然さにわれわれは不満を表明することができるだろう。[9]

## 五、批判と総括

本稿ではブレツィンカが提唱する教育科学の概要をみてきた。その提案には（「教育の技術科学」という言葉があたえる先入観とは裏腹に）教育を適切にとらえる眼ざしをせばめ、曇らせるようなものは見出せなかったが、しかし教育の概念の不自然な狭さという点ではかれの教育科学に不十分さを認め、一定の不満を表明することができるように思われる。もちろん、即座にそれを完全な誤りとして責め立てることはできない。第一に、厳密で経験科学的な分析の対象とするには教育という事象そのものはあまりに複雑で錯綜したものだからである。教育の概念を狭く限定しなければ、教育という事象を可視的なものにし、それを因果分析的に解明してゆく努力自体がそもそも成り立ってゆかない。

しかしそのことによって同時に教育の経験科学は、教育という事

8　この点を考えればブレツィンカの教育学を「実証主義的」(positivistisch)なものと断ずることがいかに一面的で適切さを欠いた理解であるかは明白だろう。ブレツィンカは、厳密な科学性という要請に固執するあまり、教育という事象がもつ豊かさ、多様さに対して目をふさいでしまうという愚を犯してはないからである。

9　こうしたブレツィンカの教育概念の不自然さについては『教育学的人間学の諸相―その多様性と統一性』（風間書房　平成九年）４８９頁以下に詳細を論じている。

ら影響をあたえることで、教育の目標である人格の理想を教育される者のうちに実現しようとする。だから直接の教え込みや注入よりも、間接に学習をうながし、刺激する環境を整えることがより有効になるのである。根底において人間を育むのは教育ではなく、共同体の生活でありその「生の秩序」であるというブレツィンカの基本主張は、ここにその根拠をもっている。またブレツィンカが「教育される者の環境のもっとも重要な要素には教育する者自身が含まれる。…教育する者は自分自身を手段にすることができる…」（EEE. 248）と語る理由もここにある。

だがブレツィンカが「間接的な教育」という言葉で表そうとするもの、またかれが言う《教育する者の存在そのもの》といったものは、そもそも「行為」と呼ぶことのできるようなものだろうか。そしてまた「目的―手段という図式」の網にひっかかるようなものだろうか。M・ブーバーの教育論を引証しながら、ブレツィンカ自身が「教育される者にとっては、教育する者との計画されぬ交わりの経験のほうが、教育の意図に規定された、教育する者がおこなう行為よりも総じて影響が大きい」（ME. 229f.）と語るように、それはもはや「行為」ではない。行為によって環境を変えることはある程度は可能だろう。だが、ここでほんとうに問題なのは、かんぜんには意識化し対象化することのできない、その手前にある「生」であり《在ることそれ自体》なのである。教育する者は自分の存在を随意に制御できる手段となしうるだろうか。自分の存在そのものをかんぜんに行為の対象となしうるだろうか。それは教育する者の存在からじかに発する感化であり、教育する者と教育される者とが《ともに在ること》から生じる人間的な関与であり、交わりなのであって、行為と呼びうるものの域を大きく越え出る性質のものであるように思われる。

「教育される者の人格は教育によっては作られない。せいぜい教育によってはおのれから生じるものを補うことができるだけだ。人格の成育は、人間が置かれたそのつど特殊な環境との対決のなかで、かれの自発的な活動をとおして内側から生じる。自発的な学習、自発的な観察、思考、模倣、訓練の活動によって人間は認識や態度、姿勢や能力を持つようになる。こうした学習の過程は、自分と感情的に近い、関わりのある人間たちとの交わりのなかで行なわれる。何を学ぶかは、こうした関わりのある人間たちの行動に何を認めるか、かれらが何に従事するか、かれらが何を肯定的・否定的に評価するかに大きく左右される。かれらの実例は学習へのもっとも効果的な刺激になる。かれらは自分たちが教育するかどうか、いかに教育するのかとはまったく独立に、すでにかれらが教育される者がならう手本としてただ存在し、振る舞うことによって作用する。」（EEE. 288）

ブレツィンカが教育の概念をつぎのように定義するのも、このような理由からである。

「教育という言葉が意味するのは、ひとが他の人間の心的な性向の構造を何らかの点で持続的に改善したり、あるいは価値があると判断されるその人間の構成部分を保持したり、悪いと見なされる性向が生じるのを妨げたりしようとするような行為である。」（EEE. 161, 18. cf. ME. 45, 53. AE. 12. EwG. 68, 99. GE. 70ff. u.a.）

教育のこうした概念はある意味で恣意的なものだが、教育の事実は具体的なものとして目に見えるものではなく、錯綜し連関する事態の中から思考の操作によって抽象することでしか存在し得ないのだから、ある程度の恣意性はやむを得ない。しかし他方でブレツィンカは、すでに示したように教育が手段として目ざす目的、すなわち、教育目標である心的な性向の構造（＝パーソナリティ）の成育が共同体の生活とその「生の秩序」に多くを依存することを正当にも主張している。教育を意図的な行為に限定することで、教育にとって決定的な重要性をもつそうした要因が教育の圏外にこぼれ落ち、大きく視野から抜け落ちてしまうことにはならないのだろうか。

「われわれが教育と呼ぶ行為の総体が、パーソナリティが成育するための外的な条件のうちでもっとも重要なものだと見なすことは、あらゆる経験に矛盾する。重要なのは学習の過程だが、それはひろく自発的におこなわれる。それを開始させるのに教育の行為は一般にまったく、あるいはほとんど必要ない。少なくとも単純な社会では、そして早期の年齢段階では、子どもを取り巻く人間たちの行為から、どんな能力や知識があり、相互に期待されるかがわかることで、たいていは十分である。こう簡略に言うことができる。人間はかれが所属する社会集団からの影響によって形成される――その構成員たちが共同生活をする際の秩序によって、その文化が強調する内容によって、その社会集団を他のすべてから際立たせる価値づけや行為のあり方によって、形成されるのである。教育の行為は、こうした影響の全体集合のうちのわずかな部分集合にすぎない。教育の行為が集団に特殊な行動の性向を学ぶのに（あるいは社会化に）どれほど貢献するかは、一般的に査定することはできない。せいぜい場合ごとに査定できるに過ぎないのである。」（EEE. 106）

なるほどブレツィンカは、「間接的な教育」（EEE. 286, ME. 53）あるいは「間接的な教育の行為」（EEE. 248）という言葉によって、教育がもつこのような側面にも言及し、その重要さをはっきりと指摘している。それは「望ましい姿として、理想や教育の目標として設定された心的な性向が生じるのをうながすと想定されるような変化、そうした変化を教育される者の環境内にもたらすよう試みる行為のことである。」（EEE. 286）教育される者の人格の成育は、かれ自身の学習をとおしておこなわれる。教育はそうした学習に外側か

り出すことのできるような条件だけに注目する。現実のうちにある関係を大きく単純化して再現するような、関係のイメージやモデルに固執するのである。さまざまの状況下でそのつど存在する因果関係が完全に知られることはけっしてないのだから、手段であると見なされるある条件については多少とも蓋然的にこう言われるにすぎない。そうした条件は特定の状況のもとで、目ざされる作用結果を生み出すのに適していると。」（EEE. 229）

このように教育という「事実」そのものは思考の操作によって「つくられた」ものであり、現実を単純化したものである。教育科学が解明する法則はそうした「事実」にもとづいている。それは現実そのものを無傷な形ですくいとったものではないのだ。（さらに言えば、教育目標もまた事実ではなく、思考の操作によって仮構されたものである。[7]）教育科学の法則知が蓋然的・統計的な確実さしか持ち得ないとしてもそれは当然なのであり、それで十分なのだ。

いずれブレツィンカは、教育を意図的な行為だけに限定する。そしてそれは、教育科学は役に立つ、有用な知見を教育の実践に対して提供するべきだとする立場を優先するためである。「目的―手段という図式」にしたがう意図的な行為、つまり手段的・技術的な行為だけに教育を限定することは、その結果を人間が制御できるような要因だけにしぼって考察の対象にすることであり、つまりは実践を導くことのできる知見を教育科学は提供しなければならないという戦略的な決定にもとづいていると言える。そうしなければ教育科学が扱うべき対象が際限なく拡散してしまい、法則を明らかにすることもおぼつかなくなる。法則性をとり出すためには少数の要因だけに限定して着目し、それらのあいだの因果関係を探っていくことが不可欠である。つまりは「目的―手段という図式」によって初めて、教育という複雑な事象は整理され、因果的な思考による解明の手が届くものになるのである。こうして教育という事実はおろか「目的―手段という図式」さえも思考上の操作による抽象にすぎない。それは教育という、無数の要因が錯綜する事態を単純化するものであって、それゆえにそこから得られる法則知が蓋然性しか要求し得ないのも当然である。

7　ブレツィンカによれば、教育目標とは人格理想＝心的な性向の構造のことだが、「この場合《人格》という言葉で何が言われているのか。それは現れたり、また消えたりするような現実の心的な体験や行動のあり方ではなく、ある人間の体験や行動の基礎にあると見なされるような、相対的に持続する心的な構えの構造である。知覚できる行動から推論される、特定の体験や行動のあり方を起こすそうした構えは《心的な性向》と呼ばれる。…それらは観察できる現象ではなく、手短かにいえば、心的なできごとを起こす仮説的な因果要因であり、理論的な構成物であって、それは特定の体験や行動のあり方が似たような状況でくり返し現れるのが見られる場合に、われわれが案出するものである。」（GE. 80）ようするに「人格というものは観察できる事態ではなく、人間のもとで観察される心的な現象を解釈できるようにするためにつくられた理論的な構成物なのである。…全体としての人格と同じようにその部分や属性もまた理論的な構成物であって、それら自体は観察されるものではなく、体験や行動という観察された事態から推測されたものである。人格理想や教育目標を言い表す《性向の概念》もまたすべてこれにふくまれる」（T. 48f.）のである。

化である。しかし他方で、教育目標を実現させる条件や要因をすべて、完全に解明することは、教育という事象の複雑さを考えれば、明らかに不可能である。それにそうした条件や要因がわかったからといって、それらすべてを人間が制御できるわけではない。ブレッィンカが意図的な行為に教育を限定した理由は、それだけが人間が結果をコントロールできる唯一のものだからである。

「教育の行為とは、それによって人格が成育するための多くの条件に介入し、目的として設定された人格状態が生じるために必要な条件の構造を作り出そうとする、そういう行為のことである。…教育を、めざす結果を生じさせる唯一の原因だと見なすことは、けっしてできない。せいぜいそれは他の多くの原因とならぶ一つの部分原因にすぎない。だが教育は、他の人間に影響をあたえようとする者が完全に左右できるような、そしてそうした者が他の考えられる部分原因に影響をあたえようと試みることのできるような、考えうる唯一の部分原因なのである。」(EEE. 268)

「教育目標を達成するために重要な現実を、それがもつ複雑さのままで完全にとらえ、説明しようとすることは見込みのないことである。問題設定を、社会文化的な現実のあの部分――計画的に作り出したり、あるいは少なくとも影響をあたえたりすることができるという理由で、教育目標を達成するのに活用できるような部分――に限定しなくてはならないのだ。」(EEE. 195)

このようにブレッィンカは教育の概念を、意図をもった行為、手段的・技術的な行為だけに狭く限定する。もちろん、そのこと自体は即、不当とは言えない。教育的な事象は複雑な構造をもった社会的な相互関係のうちに埋もれている。そこから教育の事実を「そのものとして」とり出す作業は、思考によってそれを抽象するというやり方しかない。ともかく何らかの定義をあたえて、どこかで教育の領域に線引きをしなければ、そもそも教育という事実自体が見えて来ないのである。そしてブレッィンカによれば「目的―手段という図式」もまた、事実そのものとしては存在しない「教育」という事象を可視化するためのひとつの方便であり方略なのだ。

「教育の領域はきわめて複雑な領域である。それはつねにより大きな社会的・文化的な領域に包み込まれており、それから明確に区分されない。…教育する者や教育される者のもとで、そしてかれらの生活空間内で観察できるような無数の現象を前にして、《目的―手段という図式》は教育の領域を選り分けるための拠り所として役立つ。この図式は、教育の行為が成功するための条件についてのわれわれの暫定的な知識にもとづいて重要であると思われるような現象を優先的に記述し、同じく重要であると思われるような関係、個々の事実のあいだの関係をさがすよう教える。」(EEE. 27)

「《目的―手段という図式》に沿って考えるさい、われわれはできるだけこうした複雑な条件構造を度外視して、われわれ自身でつく

てはならない。その多くは有効性が空間的・時間的にかぎられているが、そうして限定されていてもそれは世界についてのわれわれの知識を増大させる。さしあたり多くはきちんと裏づけられたものではないが、不十分にしか確証されていない知識でも、それがまったく無いよりはよいのである。」（ME. 142）

しかしブレツィンカによれば、教育という事象の性質上そうした制約は不可避のものである。いや、そもそも教育というもの自体が具体的な事実ではないのだ。「観察可能な特徴によって他の部類の行為からはっきりと区別できるような具体的な行為としては、《教育》というものはまったく存在しない」（EEE. 196. cf. GE. 96f.）のである。人格の成育をうながす要因は多数あり、またそれらが錯綜した連関をなしているのであって、したがって教育科学が対象とすべき「事実としての教育」というもの自体が存在するわけではない。それは思考による抽象の産物にすぎないのである。「教育そのものは抽象の結果としてしか存在しないのであって、現実のなかにそれはない」（EEE. 264）のだ。

たとえば、結果として人格の成育を生じさせるに至ったものすべてを教育に含めるならば（＝教育の生起概念）、教育の領域は際限なく広がる。さきに述べたようにパーソナリティの変化を直接に生じさせるものはその人間の自発的な学習であり、それはしかるべき環境が整っていれば、意図的な行為という狭い意味での教育（＝教育の行為概念）が介在しなくとも成立し得るからである。しかし、ここでブレツィンカは恣意的な規定を（あえて）おこなう[6]。教育というものを、目的を実現しようとする意図をもった行為、つまりは「手段としての行為」だけに限定するのである。結果としてパーソナリティの成育に寄与するものは、すでに示したようにまずもって共同体の生活であり、その「生の秩序」であって、意図的な行為はそれを前提にして初めて成立する。このことを考え合わせれば、意図的な行為だけを教育とすることは明らかに事態の限定であり矮小

6　ブレツィンカは一方で「パーソナリティが何ら促進の意図をもたない、見渡しえないほど多くの社会的な過程によって、そしてまた文化対象や自然の状態から発する影響によって変化させられることは一般に認められた事実であ」り、「さらに、現実に即した教育の理論は教育目標の達成にかかわるすべての要因を組み入れるべきことは疑いをいれない」（GE. 68）として、結果としてパーソナリティの変化を起こしたものすべてを教育にふくめる「教育の生起概念」が正当性をもつことを認めるが、しかし教育の定義としてこれを採用することはしない。意図的な行為だけにせまく教育を限定する「教育の行為概念」では、行為とその結果の因果関係を特定することができるが、「教育の生起概念ではこの概念がいう対象は知られていない。教育について語ることができるためにはその前に、いかなる原因のせいで結果が生じたのかを因果的に究明できなくてはならない」（GE. 69）からだという。すなわち、結果を生じさせた原因を特定できなければ、「起きたことを説明でき、また場合によっては特定の状況下で何が起こるかを予測できるような法則性」（EEE. 72）を究明することができない。因果的な法則性を知って結果を意図的にコントロールすることができないのであり、実践にとって有用な知見を提供することができないからである。だから教育科学の「理論形成にとって教育の生起概念は有用ではない」（GE. 69）のである。こうした理由でブレツィンカは、狭く不十分なものであっても「教育の行為概念」に固執するのだ。

決定論である。）たとえ自由で自律的な人間をめざす教育であっても、いずれ教育の行為は特定の結果を生じさせようと意図しておこなわれる。つまりは多少とも必ず因果関係を前提している（＝行動を起こせば何か特定の結果が生じることを当てにしている）のであって、これを否定すればそもそも教育というもの自体が成り立ち得ない。

さらにブレッィンカによれば、教育科学があたえるこうした因果的な法則知を状況に即して具体化させる実践的教育学でさえ、一義的・確定的に実践に対する指示をあたえるものではないという。それは（教育を）実践する者の背景的な理解のうちにとり入れられることで、かれの判断力を強化するという間接的な貢献を果たすにすぎないのである。

「教育技術的な知識がもっとも役に立つのは、それが《背景的な構え》になる場合である。その構えは、教育目標を達成するのに重要なできごとを解釈したり、それに自分が反応したりすることを決定することにあずかるのである。」（AE. 186. cf. 331）。

「実践的教育学は、それが提供する解釈や提案という方向で、自分の教育行為についてより多く思案する心構えが増すことに貢献する。最善の場合それは、自己をさらに形成するためのきっかけをあたえる。つまり、ごくごく間接的にだが、教育する者の自己形成をとおして、教育の努力が成功するための個人的な前提条件と見なされるような行為の構えをかれのうちに促すことができるのだ。」（ME. 260）

この点でもまた教育がたんなる一義的・確定的な操作ではあり得ないことが示されよう。

## 四、教育の概念

このようにブレッィンカがその必要性を訴える教育科学の「科学的な法則性」は、自然科学的な意味での法則とはちがって蓋然的で統計的な性質のものにすぎない。それは厳密な意味での法則ではなく、たんに経験を一般化したものであり、そうした一般化から得られる推測であって、教育という事象の不完全な解明に過ぎない。法則性や法則知という言葉が連想させるものからは程遠い、不確定なものである。[5]（ましてや一元的な決定論などではまったくない。）

「なるほど普遍的、あるいは決定論的な自然法則のような性質の規則性を期待することはできず、統計的な法則的言明で満足しなく

5　ちなみに、そうした法則知の典型的な一例としてブレッィンカはつぎのようなものを挙げている。
「全体として親の教育行動がおびる全般的な感情的色調（そしてとりわけ愛情―拒絶の次元にかんしての感情的色調）、あるいは親たちの結婚生活上の結びつきのほうが、子どもを教育するための何らかの特殊な技術（好きなようにさせること、制限すること、罰すること、褒めること）よりも子どもの発達に多く影響する。」（ME. 152）

ている（「つねにPが実現されるならば、Qもまたそうである」）。《それに対して統計的な法則は、あるできごとが実現される時にもう一つのできごとが生じる…蓋然性を主張するにすぎない。》人格の成育について、そして人間どうしの因果関係については、決定論的な法則は知られていないが、そうした法則が存在することはけっして、目的―手段という図式が用いられるための必然的な前提ではない。教育理論のなかで目的―手段という図式を用いることは、限定的な数の事例からの経験的な一般化しか存在しない場合でもすでに意味があるし、可能でもある。あらゆる時代の教育実践と教育理論はともにつぎのことを証明している。すなわち、目的―手段という図式を用い、技術科学的な観念を構想するのには、因果関係についての多少とも漠然とした仮説的な想定があればそれで十分だということである。」（EEE. 252f.）

「技術」という言葉の場合とおなじく、この場合もまたブレッィンカの語法は一般的な通念とは異なっている。技術、技術科学という語がいわばソフトな意味で用いられているように、「法則性」「法則知」という言葉で意味されているものは、普遍的で決定論的な性質をもつ自然法則のようなものではなく、たんに「経験の一般化」にすぎない。それが意味しているものは、「特定の状況下で存在するような典型的な条件構造、そして一定の蓋然性をもって有用であり得るような、典型的な、状況に特有の介入可能性を洞察すること」であり、「限定的な範囲で適用できる、多少とも十分に根拠づけられた推測」（AE. 27）なのであって、それは科学的に確証された法則性という言葉がいかにも大げさに聞こえるような、ごく控え目な主張に過ぎない。この点を考えれば、ブレッィンカの主張に対する誤解の原因の一端は、法則性という言葉を不用意に用いたブレッィンカ自身にもあると言えるだろう。かれの真意は「そうした推測を吟味し、比較的じゅうぶんな根拠をもつ推測という財産をふやすことが教育科学の使命だ」（EEE. 291）ということなのだ。

だが社会科学における法則知とは総じてこうした性質のものであり、社会科学のひとつである教育科学――というのも教育は社会的な過程だからだ。――についてもそれが当てはまるとブレッィンカは言う。いずれ、このような法則知が教育という事象を「機械的な因果関係」（AE. 179）に解消してしまうものではないことは明らかである。

またブレッィンカによれば、「事実的な連関を洞察することで、特定の条件下でひとがいかに影響されるかという可能性を導き出そうとしても、それはけっして人間の謎に対する畏敬に反しはしない」（AE. 121）のである。因果関係を明らかにすることは、教育が尊重すべき人間の自律性や自由と相容れないものではない。（相容れないのは、機械的な因果関係によって一元的に人格の成育が、そして教育という社会的な相互関係が完全に説明し尽くせるとする素朴な

て科学の有効性と信頼性はまさしくこの点にその根拠をもっている。ブレツィンカは教育学にそうした科学性の要素が必要だと主張しているのである。）しかしそれは自由で自律的な人間を育む教育ほんらいのあり方とはまったく相容れないものである。――技術という語にかかわって浮上したのと同じ疑念がここでも、しかもより決定的な仕方で生じる。①で示したように、教育のみによって人間が形成されるわけではないという事実を持ち出せば、そもそも法則性うんぬんについては語り得ないことになる。科学的な法則性と、そして「成長しつつある人間の未来の心的な姿は予測できない。この点で人間の自由が裏づけられ、そしてまた教育する者の責任が示される」（EKM. 98）と語られる教育という事象とは、根本から相容れないものだからである。つまり教育という事象は、そもそも法則性といったものとはなじまないのだ。だとすれば法則知をもとめる教育科学など、はなから無用だということになる。

しかしブレツィンカによれば、そうではない。教育という事象はきわめて複雑なものであって、そこには多くの、多元的な要因が同時にかかわっており、単純な「行為―結果の図式」によってそれを説明し尽くすことはできないし、また多数の要因をくまなく把握しきることもできない。したがって教育の目的が実現されるための条件を完全に明示することも事実上不可能である。それは多数の要因が連関しあう、錯綜したシステム的な全体なのである。

ブレツィンカ自身が認めるように、教育は人間を形成することにあずかる（けっして完全には知られることのない）多数の要因のうちのひとつにすぎない。だとすればそこから原因―結果についての厳密な因果法則をとり出してくることなど、見込みのない企てである。しかし、そうではないとブレツィンカは言う。教育科学は成立しうる。ただし教育科学が明らかにできる法則は、自然科学のそれのような厳密な法則性ではなく、共通する経験から一般的な教訓として引き出されたものであって、蓋然的で統計的な法則性であるにすぎない。

「《法則性》という言葉でひとは、特定のグループの現象の間になりたつ、一定の程度に普遍的な妥当性をもった（つまり、つねに、あるいはたいてい成り立つような）関係を意味する。教育科学の対象領域においては、空間的・時間的に限定されることなく当てはまるような、厳密に普遍的な法則性（普遍的な、あるいは決定論的な法則）に出くわすことはほとんど、あるいはけっしてない。特定のできごとや特徴や現象が相対的な頻度で、あるいは数学的な蓋然性をもって生じることについて何ごとかを言明するような、統計的な（あるいは蓋然的な）法則性に出くわすだけである。その認識は、個々の事例において得られた所見を一般化することにもとづいている。」（EEE. 29）

「決定論的な法則とは、いかなる例外も許さない規則性を表現し

の反応によって逆に影響される。それはひとつの社会的で相互的な過程なのである。教育する者が自分の意図を一方的に、そして一義的・確定的に押しつけるだけのものであり得るはずがない。

なるほど「技術」という言葉は、モノを製作するように人間をつくる、外側から人間を一義的・確定的に押印する…かのような誤解を生じやすいことは疑いがない。「教育の技術」という言い方は人間を外側からじかに操作するような印象をあたえる。おなじく「手段としての教育」や「目的―手段という図式」といった、人間的な要素を排除して人間をモノと同列にあつかうかのような言い方も、心情的な反発からくる誤解を免れることがむずかしいだろう。[4] しかし、それはこうした言葉の日常的な用法がもつ語感からの印象にすぎず、それをそのままブレッィンカ自身の主張に重ね合わせることはできない。いやブレッィンカは、そうした誤解を十分に意識したうえで、自分の言葉遣いの適切さを擁護してこう語る。「日常語でも科学的な語法でも《技術》という言葉は、生命をもたない対象に向けられるたんなる手仕事や機械仕事を意味することはけっしてない。…《技術科学》という言葉はまったく一般的に《もっとも目的に適った手段を検討すること》を意味するのであり、《実践としての技術とは、すでに設定された目的のためにふさわしい手段を用いることである》」(EEE. 250f.) と。むしろブレッィンカによれば、機械的な製作や操作を連想させる一般的な「技術」のとらえ方こそが逆に狭すぎるのである (cf. AE. 183)。

「目的―手段という図式」についても、それを「教育に用いることは、人間に対する人間の支配を実行するという帝国主義的な傾向のあらわれだ」(AE. 331) と断ずることは不当である。教育が何らかの意図をもっておこなわれる行為であるかぎり、教育はそれが意図し、めざすもののための手段になる。そのこと自体には何の不当さもない。

②教育の因果関係を科学的な手続きによって法則知として明らかにし、それを目的―手段の関係に組み替えることで、教育の行為を有効で確実なものにすること。ブレッィンカのいう教育科学がこうした使命をもつとすれば、そうした教育によってすべては一義的・確定的に決定づけられてしまうように思われる。すなわち、経験的な教育科学は「決定論的な教育の理解を前提にしており、教育される者を技術的な操作の対象にする」(AE. 331) のだと。科学的な法則性とは、逸脱を許さない絶対性をもつものだからである。(そし

4 ブレッィンカ自身そうした誤解が生じやすいことをはっきりと認めて、つぎのように述べている。
「通暁していない人たちは《技術》や《テクノロジー》という言葉にその狭い意味しか思い浮かべず、それゆえ機械、力学、物質的な産物を製作する条件についての確実な因果的知識といったものしか考えないが、そうした人たちであれば私が用いている表現を《機械論的に》誤解してしまう危険におちいることもあり得ることを私は認めよう。」(AE. 184)

ないのである。教育という行為が向けられる対象である人間は（たとえそれが子どもであっても）、自在に彫琢し加工できるような、ただのモノではない。それは客体ではなく自律的な主体である。そうした主体を一義的・確定的に押印し、外部からの作用によって一方的に、そして随意に「つくる」ことが教育ではない。完全な自律化にむけて支え、うながし、助力することこそが教育である。つまり教育は技術ではあり得ない。――こうした異論が出てくるのは当然だろう。

しかし、教育というものがそうした即物的で機械的な作用に還元されるものではないことを、もとよりブレッィンカ自身は明瞭に意識している。いや「教育理論において、教育の対象である人間が固有の意志、欲求、意図、目的をもたない《ただのモノ》と見なされてきたことなど一度もない」（EEE. 251）とさえかれは言う。なにより教育は教育される者に対する直接の決定作用ではない。ブレッィンカは教育とは目的のための手段だと言うが、その目的自体は、つまり教育がめざす「人格の理想」や「望ましい姿」（EEE. 287）は、教育される者自身がおこなう学習の過程に外側から何がしかの影響をおよぼすことによって、いわば《間接に》目指されるにすぎない。教育はそうした学習の過程に（しかもあくまでも《二次的に》）影響をあたえるひとつの、部分的な要因にすぎない。ブレッィンカは初めからそれを一義的・確定的な決定づけの過程であるなどと短絡化させてはいないのだ。

「子ども、青少年は生まれた最初の月から自律した人格であり、自発的に学習する。だから教育する者はかれらをまったく自分の思い通りに形成することなどできない。かれらには教育する者が発する刺激を受け入れることも拒むこともできるのだ。」（EKM. 93 cf.ibid., 98f.）

「望まれる人格の構えが生じるための身近な原因は、当の人間のうちに起こる学習の過程である…。この学習こそがそれが生じるための必要条件なのだが、このことはけっして、いつでも教育がこの学習の過程の必要条件になるとか、ましてや十分条件になるとか言うものではない。…教育は《目的―手段という図式》にしたがって考え、計画し、実行する以外にはなし得ないが、そのことによって、教育される者にとってはかれを教育する者の目的だけが存在するのであり、また教育する者は教育される者を自分の望むとおりにつくることができるのだ、という幻想に誤って導かれてはならない。教育される者の人格は教育によってはつくられない。せいぜい教育によって、おのれから生じるものを補うことができるだけだ。人格の成育は、人間が置かれたそのつど特殊な環境との対決のなかで、かれの自発的な活動をとおして内側から生じる。」（EEE. 287f. cf. GE. 86）

教育とは他の人間（教育される者）が自らおこなう学習の過程に外側から間接に影響をあたえることであり、したがって相手の人間

土俵そのものを異にしているからである。いわば共通の土俵が必要なのだが、そうした共通の土俵となりうるものは唯一「科学性」という基準だけである。ブレツィンカが教育科学を標榜する根本の理由がここにある。だからこそ「原則として実践的教育学は、科学的な方法の一般規則の精神で構想されなくてはならない」(ME. 253)のである。じっさいにはこうしたブレツィンカの批判は、従来の教育学に対するあくまでも部分的な異議と批判にすぎないが、しかしそれは従来の教育学の側からの大きな反発と逆の批判を呼んだ。[3] こんにちの教育学の多くは伝統的な教育学の末裔であるために、ブレツィンカの提案に大きく反発したという事情が根本にはあるだろうが、おそらくそれだけではない。そこにはある根本的な誤解が介在しているように思われる。

以下では誰かれによる個別の批判ではなく、一般的に想定される異論と反論という形でそうしたブレツィンカへの反発と異議について(そしてその根底にある誤解について)述べてみよう。そうした一般的な批判や反論を検討することで、逆にブレツィンカの提案の真意がはっきりと浮き彫りになるように思われるからである。

## 三、教育科学への疑念

そうした反論とは、つまるところ教育を手段的・技術的な行為であると、そして教育学を教育の技術科学(テクノロジー)であると規定することへの異論と反発という一点に帰着するように思われる。教育科学とは、教育の行為とその結果との因果関係を法則知という形で明らかにし、目的―手段の関係に適用する技術科学であるとする主張こそが問題なのだ。

①まずもって「技術」という言葉が、そして教育の行為に科学的に認識され確証された因果法則を「技術科学的に」適用するという基本的な考え方そのものが、そうした行為が向けられる対象(事物)を一義的・確定的に決定づけてしまうもののように思われる。それはほんらいモノに対して向けられるべき態度であって、人間という対象にはなじまない。自由で自律的な人間という存在には相応しく

3 ブレツィンカによれば、当時のかれ自身は教育の効果をより確実で実効性のあるものにするために教育とその結果との因果関係を批判的・科学的に吟味することを問題にしたにすぎないが、それは後に「ドイツ教育学における実証主義論争」と呼ばれるものにまで発展した。「私は依然として方法論的な対決に巻き込まれることは望んでいず、事象に即した問いを扱いたかった。しかしすべての経験科学で自明のものとして認められている質的な基準を教育科学にも適用すべきことをたんに要求しただけで、残念ながらメタ理論の雪崩の渦中に落ち込むことになった」のだという。ブレツィンカ自身が「私の関心は有用で現実に即した教育科学にあった。それゆえ理論を構築することに関心があったので、メタ理論的な反省をおこなうことにあったわけではない」(W. Brezinka, Rückblick auf fünfzig Jahre erlebte Pädagogik. In: Sigfried Uhl (hrsg.), Wolfgang Brezinka. Fünfzig Jahre erlebte Pädagogik. Reinhardt.1997. S.20,18.)と語るように、教育学のメタ理論にかんするかれの主張は、あくまでも実践的に有用で有効な教育学理論を構築するための予備作業にすぎなかったと言えるだろう。

果的な手段をえらぶという点では、科学的に確証された認識を頼りにすることができるのである。

このように実践的教育学は一面で基礎科学の成果を活用する応用科学という性格をもつが、他面では、教育する者が身をおく特定の価値的・世界観的な立場を「教条的に」受け入れる。いずれにしろそれは、事実と当為という性質の異なった二つのものを結びつけ、同時にあつかわざるを得ない。教育とはまさにそうしたものであり、実践的教育学はその教育に有益な知見を提供しなければならないからだ。その意味で、事実と当為を同時に対象にした伝統的な教育学には正当性があった。ただしそれは、最初からこの両面を無差別に内に取り込んだために科学的な厳密さを手に入れることができず、方法の面でながく不毛で、進歩に乏しいものにとどまったのである。ようするに、伝統的な教育学がめざしたもの自体は必ずしも誤りではない。問題なのはそのやり方であり、方法上の不備なのである。「こんにちに至るまで実践的教育学にかんする多くの寄与の大きな弱点は、その方法的・組織論的な構成部分が、関連する個別科学と十分に結びつけられることなく構想されてきたという点にある」（ME. 257）のだ。

だからこそブレツィンカ自身が具体的に、そして詳細に論じているかれの実践的教育学への寄与は、内容のうえでは基本的に伝統的な教育学に多くを負っており、その主張と軌を一にするものなのである。（実践的教育学を内容とするかれの議論は、従来の教育学の膨大な文献を参照し、その成果を踏まえて展開されている。）いや、ブレツィンカがその科学性の不足を槍玉に挙げる、伝統的な教育学の代表である「精神科学的教育学」は、まさしく実践的教育学に他ならないとブレツィンカ自身がはっきりと認めているのである（cf. ME. 248, 252）。一見して既存の教育学に対するブレツィンカの全面的な批判と攻撃に思われたものが、じつはそうではないことがここで明らかになる。むしろ従来の教育学に対するブレツィンカの立場は、根本においてより親和的なものである。（くり返すが、かれの著作のなかで量的にもっとも多い実践的教育学にかんする論稿は、膨大な文献の参照にもとづいて伝統的な教育学の成果をひろく踏まえ、内にとり込んだものであって、この点でもブレツィンカの主張は伝統的な教育学の単純な否定ではあり得ない。）

では、伝統的な教育学の存在意義を最終的に否定しないのであれば、なぜブレツィンカは当初それを否定し、その不毛さを糾弾したのか。すでにくり返し述べているように、それは伝統的な教育学には科学性が不足していたからである。ブレツィンカによれば、種々の教育学学派の主張と見解の対立を解消し、その争いを決着させるには、いわば共通の土俵が必要である。それぞれが異なった価値的・世界観的な土俵をひきずる伝統的な教育学の諸学派には、その教育学的な見解の対立と争いを調停し、解消する見込みがない。議論の

を二つながらに併せ持った考察が必要になるのである。（すでに述べたように、伝統的な教育学が不毛だった理由もここにある。ブレツィンカによれば、それは価値や規範の問題に多く拘泥するあまり科学性を脇に置いてしまったのだ。）そしてそれをあたえる教育理論を、ブレツィンカは「教育の実践理論」（実践的教育学）と呼ぶ。それは教育科学が明らかにした法則を、教育にかんする特定の価値的・世界観的な立場や観点からより具体化し、それを特殊な状況にあてはめるものである。それは「行為の役に立ち、行為へと導く、教育の規範的な理論のことを言い表している」（ME. 246）のだ。

「教育の哲学、そして教育科学において、教育実践のうえで有用な、目的と手段にかんする知識として得られたものは、実践的教育学においては特定の社会・文化的な条件のもとでの特定の教育行為の領域に関係づけられて評価され、行為や適用をめざす命題体系へと加工される。」（ME. 244）

より具体的に言えばこうである。

「科学においてはせいぜい一般的な法則性が、つまり何らかの現実の状況に厳密には対応することのない抽象物があたえられるにすぎない。それを実践に適用するには、まずそれを具体的な行為の指示へと移すよう努めなくてはならない。理想として要求されるのは、最終的に教育する者各自がかれ自身の完全に具体的な状況に向けて、こうした置き換えの過程にみずからとり組むことである。しかしそれがまったく非現実的で過大な要求だとすれば、実践的教育学が教育技術学的な知見を状況にあわせて加工する作業を何段階か、教育する者に対して省いてやらなくてはならない。この学は科学と、そして状況と実践に向けられた、教育する者の思考とのあいだを仲介しなくてはならない。それはつぎのことを意味する。すなわち、そのつどの具体的な状況をとらえて、すでにある多くの科学的な資料の中から、この状況で教育の行為をおこなうさいに重要な認識を選び出さなくてはならないのである。」（ME. 258）

こうした使命を果たすために実践的教育学は、一方では（つまり教育の目的にかんしては）「教条的に」（ME. 256）特定の価値的・世界観的な立場に拠って立つが、他方では（つまり教育の手段、方法の面では）教育科学が明らかにした科学的な法則知を活用する。科学的に確証された法則性こそが、手段・方法に有効性と確実性とを約束するからである。「教育の行為をおこない、教育制度を構築するための指摘や規則は、それが教育科学が仕上げた教育技術学の知識に立脚するほど、実践で効果的にはたらくことを約束する。方法について語るさい、実践的教育学の質は科学の研究結果にもっとも大きく左右される。」（ME. 257）すなわち、教育は特定の価値的・世界観的な立場からおこなわれるのであり、その態度決定は科学的に正誤を判定できるようなものではない。しかし同時に教育は手段的な行為であり、特定の目的を実現するのにふさわしい、有用で効

に法則知（Gesetzwissen）が頼りになる…。実践的に有用な教育理論をうち立てようとする者は、正しい問いかけによって自分の眼前にある現象の足どりからその法則性を究明し」（EEE. 24）なければならない。

「…教育科学の主たる問題圏は教育目標を達成するための条件を究明することにある。教育科学は事実を記述する科学ではなく、目的論的・因果分析的な科学である。

それが意味するのはつぎのことである。技術的、経済的、政治的あるいは医学的な行為の場合と同じく、教育をおこなうさいには特定の目的が存在している。その目的が実現されるための条件が求められる。ひとは他の人間が特定の人格状態を獲得するように影響をあたえようとする。この状態はいまだ存在していない。その実現が目的として設定される。この目的を達成することに教育する者が貢献できるのは、かれが望んだ状態が生じるための条件ないしは原因を知り、それを生じさせるのにある状況ではどんな行為がふさわしいかを知る場合だけである。

教育する者が解決するべきこうした実践的な問題が、教育の行為に総じて初めてその意味をあたえ…る。それゆえに教育科学の対象を教育の目的―手段の関係のうちに見ることが…ふさわしい。これによって教育科学は上述した二つの特徴によって特質づけられる。それは目的論的…な構造をもつ。人間たちや集団の意志によってあらかじめ設定された目標ないし目的からひとは出発しなくてはならないからだ。そこでの作業は因果分析的な方向をとる。教育の行為によって影響をあたえたり、介入したりする可能性を見つけるために、因果関係を究明しなくてはならないからだ。教育科学を技術科学（technologische Wissenschaft）と呼ぶ場合も、同じことを意味している。」（ME. 61）

このように教育科学は教育の目的―手段の関係を明らかにすること、それを科学的に確証し、法則知としてとり出すことをめざす。他方で、すでに述べたように教育の目的そのものは、（受け入れたり拒んだりすることで）ひとがそれに態度決定をおこなう価値であり規範であって、教育の経験科学としての教育科学があつかい得るものの範囲を越え出ている。それを対象としてあつかうのは「教育の哲学」のしごとである。

ただし、ブレッィンカによればこの教育科学自体は、効果的な手段と役に立つ実践的な知見を《じかに》教えるものではない。教育科学の実践へのかかわりはあくまでも間接的なものにとどまるのである。教育は「目的―手段という図式」のなかでのみ意味をもつのだから、それは（目的にかんして）特定の価値的・世界観的な態度決定をすでにおこない、その立場から行為がおこなわれる。実践的に有用な手段が何かは特定の目的との関連のなかで初めて具体的に明らかになる。つまりここでは、事実的な法則知と価値的な態度と

（安定した一元的な「生の秩序」は、それにふさわしい生き方へ向けて子どもの自発的な学びを導くことができるからである。いやさらにこの「ふさわしい生き方」、つまり人間の理想や規範そのものも、そうした「生の秩序」がつくり出すものであって、したがって子どもは労せずしておのずとそれに馴化され、それを習得することができたのだ。）

しかし生そのものがもつ自発的な学びの機能をもはや当てにできなくなって、意図的・計画的な導きとしての教育が必要になった。一元的で安定した価値的・世界観的な「生の秩序」があれば、子どもはたんにそれに馴化され、それに刷り込まれるだけでいい。しかし多元化した社会では、そのための一元的で安定した基盤がもはや存在しない。それゆえに意図的な教育の行為によって所期の結果をもたらさなくてはならない。「多様な世界に明確な導きなしに順応する者は、身を処することがむずかしい。だからこんにちの複雑化した社会では、かつて以上に計画的な教育を頼りにする」（EKM. 156）のである。そうした状況では（自発的な学びに多くを頼り、委ねることができたそれ以前とはちがって）効果的な導きのための方策を、役に立つ実践的な知見を教育に提供することが、教育学には新たに求められることになる。ある結果が生じるためにはどんな原因と条件が必要なのか。その点について、もはや以前のように無頓着ではいられないのだ。教育とともに教育学もまた根本からその役割を変えたのである。

このようにブレツィンカは、教育科学が必要であるという主張にはいわば歴史的な必然性があることを指摘する。それは近代が産み落とした赤子なのだ。しかし、ではどのようにすれば教育学は、効果的な教育のための有用で確かな知見をあたえることができるのだろうか。ブレツィンカによれば、教育科学は事実をあつかう。ただしそれはたんに教育の事実を記述するだけでなく、教育の目的、手段、結果のあいだの因果関係を明らかにし、これらのあいだに成り立つ法則性を解明しなければならない。すでに述べたように教育とは、目的を実現するための手段的な行為である。当然のこと手段の存在意義は、それが目的を達成させられるかどうかで決まる。それができなければ手段の意味はない。目的（教育目標）の達成に寄与できなければ手段（教育の行為）は無用になる。必要なのは、目的を確実に達成するための有効な手段であるような教育の行為である。教育科学に要求されるのはそうした行為にかかわる知である。そしてそれを教えるものは厳密に確証された教育の原因―結果の関係であり、その因果的な法則性である。それを知ることによって確実な予測が可能になる。予測ができれば、ある結果（目的）を生じさせるためにはどんな原因（手段）が必要になるかが確実にわかるからだ。「目的にかなった教育の行為をおこなうためには、必然的

にすぎないように思われたからである。疑いの余地なく正しい倫理規範と無謬の宗教的な核心をもつ統一的な生の秩序が、こうした閉じた文化体系と一致するような学習の可能性を…子どもたちにあたえていたのである。」（EKM. 89）

ところが近代以降、一元的で安定した「生の秩序」をもつこうした「閉じた」社会は、「開かれた」社会に変わった。価値や世界観のうえで一元的で安定した「小さな共同体」に、さまざまの対立する目的や価値、規範が混在する多元的で流動的な「大きな社会」がとって代わったのである。ようするに人間の生き方が自明さと安定性を失い、不確実で不確定なものになったのだ。[2] その結果、もはや子どもの自発的で自然な学びに多くを委ねておくことはできなくなった。教育が明確な意図をもってそうした学びに介入し、それを導くことが必要になったのである。

「こうした状況ではもはや、社会の一人前のメンバーに必要なことを若者がおのずと学ぶのを当てにすることはできない。従来の教育のやり方で総じてなおそれが達成できるのか、いわゆる教育制度がじっさいに教育的な結果を出せるのか、教育に敵対する、制御不能な力の影響のほうが、伝統的なしかたで教育者が若者のうちに持ち込もうと努めるものよりもはるかに効果があるのではないか、ということを批判的に吟味することが必要になった。…若者に対する配慮や社会の未来を目の前にして、われわれはもはや現実の教育のできごとを、そして教育的に重要な現実のすべてを究明することを断念することはできない。現に在るものを厳密に知ることは、ことがらに即して教育を立案するためには不可欠の前提なのである。」（EKM. 91f.）

教育が生そのものの自発的な学びの機能に多くを頼っていたあいだは、当然ながら教育学も必要性が薄かった。「教育学者は総じて哲学的な熟慮と道徳的な要請で満足していた。二十世紀の後半まで、旧い常套句と中身にとぼしい原則とが幾世代にもわたってくり返されたが、教育現実を自己批判的に究明することはなされなかった」（EKM. 90）のである。教育学がながく不毛だったのも当然であり、しかもそれでまったく支障がなかったのだ。自発的な学びに頼って半ば自動的に教育が進行していたあいだは、その教育が目標とするものをある程度明確に意識化するだけで十分だった。（教育学が主として教育の理念や人間の理想、規範などの哲学的な考察だけに終始した理由がここにある。）よい意図があれば十分であり、効果的な方策を思案する必要はなかったといえる。効果は一元的な生の秩序によってあらかじめ、そして半ば自動的に保証されていたからだ。

2　実践的教育学にかんするブレッィンカのさまざまの論稿は、このような価値の多元化とそれにともなう人間の生き方の不確実化、そしてそれが教育に及ぼす影響とそれへの対処法を中心的な主題として論じている。この点については拙稿『教育と生の意味―W・ブレッィンカの実践的教育学―』（東北学院大学教養学部論集　第一二四号所収）に詳細を論じている。

法論上の規則を対象に即して細かに決めること」（ME.37）が肝腎なのだ。

## 二、教育科学の役割

このようにブレツィンカの提案が、たんに科学性を欠いた従来の教育学を教育科学に《とって代える》ことではなく、教育理論のうちに適切な役割区分を設けることだとしても、かれの提案の中心がやはり教育科学の必要性をつよく訴える点にあることは疑いがない。では、ブレツィンカが要求する教育科学とはどのようなものなのか、かれが主張する教育科学の性格と内実をより詳しく見てみよう。そのことによって同時に、ブレツィンカが教育理論のうちに設けようとする役割区分についても明らかになってくるはずである。

すでに述べたように、ブレツィンカは教育を明確な意図をもった手段的な行為であると規定する。一見そのことに矛盾するように思われる（この点については後述する。）が、ブレツィンカによれば根本的に人間を育むものは共同体でありその「生の秩序」（Lebensordnungen）であって、教育のはたらきはそうした生そのものの機能に支えられ、それに追随し、たんにそれを補うものにすぎない。そもそも教育とは、教育される者自身がおこなう「学び」に間接的に影響をおよぼすことであって、この学びを前提にしている。しかもこの学び、学習そのものは、一定の環境が整っていれば教育の介在なしでも自ずとおこなわれる。つまり特定の社会集団の中に生まれ育つことで人間は、その集団の一員としての生活に必要な知識や能力、振る舞いや態度、ようするに人間としての生き方を大部分いわば自然に、意識せずに学ぶことができるのである。

近代以前の伝統的な「閉じた」社会においては、教育は生がもつそうした自然な学びのはたらきに全面的に頼っていた。固定した一元的な「生の秩序」が自明なものとして存在していたために、子どもはそれに同化し順応することで、教育の手助けなしでもそれをいわば自然に学び、内にとり込むことができたのである。子どもの半ば無自覚の、自発的な学びに教育は大きく頼っていたのであり、したがって「大きな範囲で教育を計画することが必要だとはまったく思われなかった」（EKM. 90）のだ。

「伝統に制約された産業以前の社会においては、その集団の成熟したメンバーとして何を知り、為し、信じるべきかを子どもが学ぶことは難しくはなかった。社会秩序が見通しの利く、安定したものであったかぎりでは、社会制度がたがいに補い合い、裏づけ合っていたかぎりでは、青少年の人生は伝統によって予示されていた。学校にはわずかな意味しかなかった。家庭、教区、職業身分こそが若者の人格を形成するものだった。教育は目立たず、問題なくおこなわれた。未来は未知の、新しいものではなく、近い過去のくり返し

定の理想にくみすることは経験科学的には証明不可能とみなされ、それゆえに除外される。規範的な問題を扱うことは教育の哲学に委ねられるのであり、それは教育科学を補う不可欠のものと見なされる。こうした分業にきっかけをあたえるのは、規範的な問題は経験科学の枠内では解決できない…という学問論的な確信である。」(ME. 8)

「教育の経験科学は相対的に限定された対象領域に、そしてその中の、経験的・合理的な方法で処理できるような問題だけにかぎられる。個別の経験科学としてそれは、教育という相のもとで世界と生を哲学的に考察することも、規範の妥当性を証明することもできない。それは教育とのつながりで人間が立てる問いすべてに答えることはできない。だから経験的な教育科学と並んで、教育目標の根拠づけ、教師のための倫理、教育への実践的な導きに役立つような哲学的な命題体系もまた〔べつに〕存在することが…不可欠なのだ。」(ME. 26)

（最後の引用の末文にあるように）規範的な問いが向けられるのは必ずしも教育の目的だけにかぎられないが、いずれにしても事実の客観的な認識にかかわる教育科学にはその問いを論じることができない。伝統的な教育学の根本的な欠陥は、さきに示したようにそれが科学性を欠いていたことだが、言い換えればそれは、教育という複合的な事象をその性質にしたがってそれぞれ別個に、（事実と当為とに）分けて論じることなく、いわばごっちゃにして扱っていた点にある。それは事実と価値（規範）をはっきりと分けず、いっしょくたにして扱いながら自らを科学であると詐称していたのである。

このように、ブレッィンカが従来の教育学を根本から批判するのは、その存在意義を全面的に否定するためではない。かれの提案は旧来の教育学を教育の経験科学に完全に《とって代えよう》とするものではなく、あつかう対象の性質に応じて教育の理論に適正な役割分担を行なわせようとするものである。肝腎なのは「教育科学がその経験科学的な課題を果たせるように、それを世界観的・規範的な課題や要素から解放し、しかし他方で、教育する者を世界観的・道徳的に導くのに役立つような、世界観や道徳論に立脚する教育学の命題体系（Satzsystemen）を承認したり助成したりすることも排除しない」（ME. 226）ことなのである。

以上のようにブレッィンカは、従来の単一の教育学にかえて、複数の教育学を要求する。教育理論の内部に適正な役割分担をあたえることを提案するのである。かれが提起するのは「教育の科学理論」「教育の哲学理論」「教育の実践理論」という三つの区分であり役割分担である。（ただしブレッィンカは、これらをそれぞれ簡便に「教育科学」「教育の哲学」「実践的教育学」と言い換えてより多く用いている。）より正確に言えば「教育理論のプログラムを達成が可能なものと一致させ、これまで怠ってきた区別を導入し、大まかな方

なのである。

「教育目標とは、教育される者の人格にかかわる理想のことである。それが表しているのは、意欲されたもの、つまり教育される者が獲得し、教育する者が教育によってその獲得に貢献すべき心的な性向（能力、特性）である。人格理想はつくられ、設定される。それは課せられる要求である。…社会のすべてのメンバーに対して拘束力をもつ、基礎的な人格理想は、その文化のなかで教育者にあらかじめあたえられる。それを最初から新たにつくる必要はなく、それを明確にし、解釈し、具体化し、補い、場合によっては受け継ぐだけでいい。」（ME. 220）

「理想として設定された心的な性向は任意のものではなく、教育される者の生活空間内でそのつど通用している規範に呼応している…。教育目標は社会に左右される…。教育の目標とは社会的な目標なのである。」（EEE. 170f.）

「教育の目標それ自体は教育する者やその教育の行為からは独立に設定され、通用するような人格理想である…。教育する者はそうした理想をつくり出すのでもないし、また理論的に可能な理想、あるいは事実としてすでに世界に提起されたような理想の中から任意に選ぶことが自由にできるわけでもない。…人格理想は教育する者や教育される者に対して、かれらが生活する共同体によってあらかじめあたえられており、教育されるべき後継の世代だけでなく、すべてのメンバーに通用する…。集合的な教育目標とは共同体の人格理想に他ならない。」（EEE. 171）

教育の目的である教育目標、それは社会的に価値あるとされ、通用する規範であり理想であって、そもそも経験科学的な検証という手続きの網にはかからないものである。経験科学は「現に在るもの」を、つまり事実を説明するが、それは在るべきものを指示することはしない。何をなすべきかについては語らないのだ。しかし教育の目的とはまさにそうした「在るべきもの」、規範や理想にかかわることがらである。したがってこれを扱うためには教育科学とは別種の議論と検討が必要になる。それをブレッィンカは「教育の科学理論」（教育科学）とは区別して「教育の哲学理論」（教育の哲学）と呼ぶ。

「経験的な教育科学は、それが現実、あるいは存在するものにかかわる問題だけに限定されることで、それ以外の形の教育学からは区別される。それが問うのは、何があるか、なぜ現にそうであるのか、特定の状況下で何が可能か、何を人間は望み、何をなし、特定の目標を実現するために何ができるか、である。それに対して何が在るべきであり、なされるべきか、は確定されない。なすべしという要求を立てたり、根拠づけたりすること、目的や理想、その他の規範を設定することは方法上の理由で断念される。追究されるのは経験科学の認識だけ、つまり経験的にできるかぎり十分に根拠づけられた仮説的な知だけである。特定の世界観に身を決すること、特

は科学性が欠けていたのであり、この点にこれまでの教育学が批判されるべき根本の理由がある。ブレツィンカは言う、「《教育学》と呼ばれるものすべてが《科学》であるという幻想は捨てなくてはならない」（ME. v）と。つまり教育学は有用な（経験）科学へと脱皮しなければならないのである。

「伝統的な教育学は、その教育現実にかかわる部分では問題意識にとぼしく、それゆえにまた特殊な問題と特殊な仮説にとぼしかった…。多くの、検証されていないたんなる主観的な確信が、無批判にも認識であると主張されてきた。ほとんど認められていないが、知識と称されるものは不完全で、厳密さに欠け、疑わしかったし、また知る必要のある多くのことが何も知られていなかった。当の事実が知られる以前に原則や指示が立てられた。教育学の情報内容が比較的わずかなものにとどまっていたこと、その命題が長いこと非科学的であり、教育実践にほとんど役立たないと見なされていたことは、このように問題意識が欠けていたことと関連している。」（ME. 114）

「われわれの社会の未来を偶然の手にゆだね、われわれの子どもたちをたんなる気まぐれに任せたくないのであれば、教育もまた批判的に判断し、できるかぎり合理的に計画し実行することが必要である。そもそも教育の行為や制度はある目的のために行なわれ、また存在するが、そうした行為や制度がその目的にふさわしいかどうか、どんな条件であればふさわしいかを知らなくてはならない。そのことは経験的な研究によってのみ知られ、科学的な理論にのみ表される。（中略）理性的に行為することができるために必要な、現実にかんする知識は、科学的な方法の規則に従うことでもっとも良く入手できる――このことはすでに多くの領域で示されている。情報の内容がわずかしかないという事実に表れている教育学の停滞と相対的な不毛さを克服したいと望むならば、教育の問題を解決するさいにもこうした科学的な方法の規則を適用するよう努めなくてはならない。」（ME. 25f.）

ブレツィンカが従来の教育学（Pädagogik）にかえて教育科学（Erziehungswissenschaft）を提唱するのは、まさにこうした理由からである。それは有効で確かな教育の技術知を提供できるように、教育の科学（Wissenschaft）にならなくてはならないのだ。

ただし、このことは教育の目的―手段の関係、そして行為とその結果についての事実的な関係についてのみ言えることであって、教育の目的そのものについては当てはまらない。そもそも教育の目的は教育の内部にはない。それは教育が設定するものではなく、いわば教育の外部にあり外部から来るのである。すなわち、さきに述べたように教育の目的とは、教育される人間のうちに教育（する者）が実現しようとする、望ましい人間の特性や性向であり、その複合的な構造である。つまりそれは（その教育が行なわれる）社会集団によって望ましいとされる人間のあり方であり、人間の理想や規範

「他の人間の心的な性向（psychischen Dispositionen）の構造を何がしかの点で持続的に改善したり、価値ありと判断されるその人間の構成要素を維持したり、あるいは悪いと評価される性向が生じるのを妨げるために、行為する者が手段とみなす行為だけが、教育の概念には含まれる。」（ME. 53）[1]

「教育の行為が出てくるのはただ、行為をおこなう人間がその行為を、教育される者のうちに目指すものを達成するための手段とみなすという理由からである。目的なしには教育はない。すべての教育は目的のための手段である。教育は目的―手段の関係の構成部分としてのみ生じる。」（EEE. 24）

このように教育が手段としての行為であるとすれば、（そもそも手段は目的のためにあるのだから）当然ながら目的を達成することができない手段には存在意味がない。目的を達成できる有効で効果的な手段だけが教育として意味をもつのである。そしてそれを見極めるためには「目的―手段という図式」に照らして手段の有効性を検証することが必要になる。期待される結果を確実にひき起こすような行為だけが、教育として行なわれるべきなのである。

教育の行為の結果を科学的に検証することで、つまり教育という事象の因果関係を明らかにすることで、教育という手段の有効性と確実性は高まる。より効果的に教育を行なうことができる。そして目的を実現するための確実で有効な手段を教えること、つまりは教育に科学的に確証された、確実な技術知を提供することが、教育学というものの役割なのである。それゆえに教育学は、教育の「技術科学」（Technologie）だということになる。

従来の教育学が不毛だったのは、そしてそれが進歩と無縁だったのは、この学がこうした有効な技術知を提供することができなかったからである。そしてそのような技術知を手に入れるためには、教育という事象を科学的に明らかにすること、教育の行為とその結果の因果関係を究明し、経験科学的に検証することが必要である。ようするに従来の教育学は「科学」ではなかったのだ。つまりそれに

1　以下、ブレツィンカの著作から引用をおこなうさいには、このように書名を以下に記したような略号で表し、頁数とあわせて引用文末に括弧書きで記して典拠を示す。
AE：Wolfgang Brezinka, Aufklärung über Erziehungstheorien. Beiträge zur Kritik der Pädagogik.（Wolfgang Brezinka Gesammelte Schriften. Bd. 1）München 1989.
EEE：ibid., Erziehungsziele, Erziehungsmittel, Erziehungserfolg. 2., verbes. u. erw. Aufl. München 1981.
EKM：ibid., Erziehung―Kunst des Möglichen. Beiträge zur Praktischen Pädagogik. 3., verbes. u. erw. Aufl.（Wolfgang Brezinka Gesammelte Schriften. Bd. 2）München 1988.
EwGl：ibid., Erziehung in einer wertungesicherten Gesellschaft. 2., verbes. Aufl. München. 1986.
EPK：ibid, Erziehung und Pädagogik im Kulturwandel. München. 2003.
GE：ibid., Grundbegriff der Erziehungswissenschaft. Analyse, Kritik, Vorschläge. 4., verbes. Aufl. München 1992.
ME：ibid., Metatheorie der Erziehung. München 1978.
T：ibid., Tüchtigkeit. Analyse und Bewertung eines Erziehungszieles. München 1987.

# 技術知としての教育学
## ――W・ブレッィンカによる「教育の経験科学」の提唱――

氏家重信

教育は技術ではない。モノをつくるように人間をつくることはできないからである。――このような基本的な理解に立てば、教育学が（あたかもモノをつくる場合のように）自然科学に範をとった法則性を教育という事象からひき出し、それによって教育の行為をみちびく有効で確実な方法や技術を示すということは根本的に誤った発想だということになるだろう。しかしW・ブレッィンカは教育をはっきりと手段的・技術的な行為であるとし、そうした教育の行為に（法則性の認識にもとづいた）有効で確実な方法知を提供することに教育学の使命をみる。教育学は「教育の技術学」であるべきだと明言するのである。教育学に対するこのような理解ははたして適切なものだろうか？　このような理解は教育という事象の性質にふさわしいものと言えるのだろうか？　ブレッィンカが主張するこのような教育科学の基本的な性格と構造を明らかにすることで、「教育の技術学」という教育学の理解がどの程度正当性を主張しうるのかを吟味し、明らかにすること――それが本稿の目的である。

### 一、教育科学の必要性

ブレッィンカによれば、教育とは目的を達成するための手段的・技術的な行為である。ここでいう「目的」とは教育目標のこと、望ましいと考えられる人間的な特性や性向の複合体、すなわち人間の理想であり、それを教育される者のうちにつくり出すことである。ようするに教育とは目的を実現しようとする意図をもってなされる行為であり、つまりは「目的」を実現するための「手段」であって、それ自体として単独で成り立つものではない。それはあくまでも「目的―手段という図式」の中でしか意味をもたないのである。

前号目次

〔論　　文〕

A Reading of *The Waste Land* …… 菊　地　　弘…… 1

中国における労働力市場に関する考察（1）…… 楊　　世　英…… 21

ラゲール多項式の積の展開公式 I …… 高　橋　光　一…… 39

教育アスピレーションと教育達成の変容
—1975 ～ 2005 年の若年層男性— …… 片　瀬　一　男…… 47

体力・運動能力調査における悉皆調査の意義 : 標本データと
全数データの相違に着目して…… 鈴　木　宏　哉・高　橋　信　二…… 67

〔研究ノート〕

Five Years of Death: Cid Corman …… スコット・ワトソン…… 79

〔翻　　訳〕

ミヒャエル・シュミット著「ジェームズ・コールマンの行為理論と社会理論」
…… 久　慈　利　武…… 85

## 東北学院大学学術研究会

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 星宮　望 |
| 評議員長<br>編集委員長 | 吉田　信彌 |
| 評　議　員 | |
| 文 学 部 | 遠藤　裕一（会計） |
| | 北　　博（編集） |
| | 辻　　秀人（編集） |
| 経済学部 | 越智　洋三（会計） |
| | 細谷　　圭（編集） |
| | 郭　　基煥（編集） |
| 経営学部 | 菅山　真次（庶務） |
| | 目代　武史（編集） |
| | 折橋　伸哉（編集） |
| 法 学 部 | 黒田　秀治（編集） |
| | 白井　培嗣（編集） |
| | 羽田さゆり（庶務） |
| 教養学部 | 吉田　信彌（評議員長・編集委員長） |
| | 野村　　信（編集） |
| | 柳井　雅也（編集） |



東北学院大学教養学部論集　第154号

2009年11月25日　印 刷
2009年12月　1日　発 行

（非売品）

編集兼発行人　吉　田　信　彌
印　刷　者　笹　氣　幸　緒
印　刷　所　笹氣出版印刷株式会社
発　行　所　東北学院大学学術研究会
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
（東北学院大学内）

# FACULTY OF LIBERAL ARTS REVIEW

TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

No. 154 December, 2009


## CONTENTS


**Articles**

The Sound of Period That Should Be Transmitted ····· SUZUKI Hidemi ···· 1

Expansion Formula for a Product of Laguerre's Polynomials II ····· TAKAHASHI Koichi ···· 21

Climatological Background on the Watermelon Cultivation in Obanazawa-Basin, Yamagata Prefecture ····· KIKUCHI Ritsu ···· 29

Spread of the Heki School Insai Group to the Domain of Sendai (Date) ····· KUROSU Ken ···· 51

Cees Nooteboom lesen 1 „Philip und die Ancderen" ·· YOSHIMOCHI Senji ···· 65

Different Behaviors of Initial- and Medial-/j/ in English ····· TAKAHASHI Naohiko ···· 91

Tilesius und Japan (Teil 1) : Tagebuchauszüge über Ankunft und Aufenthalt in Nagasaki 1804/5 ····· Frieder SONDERMANN ···· 105

For a Walk : Experientially Learning a Lost Way of Life ····· Scott WATSON ···· 149

**Translation**

Jonathan H. Turner's Proposal of the Use of Sociological Theory in Sociological Practice (Personal Edition) ····· KUJI Tositake ···· 157

**Articles**

What is the Mind : Dualism and Mind-body Causation. ····· ITO Haruki ···· 242

Pädagegik als Wissen der Technik Vorschlag der Erfahrungswissenschaft der Erziehung bei Wolfgang Brezinka ····· UJIIE Shigenobu ···· 268



The Research Association Tohoku Gakuin University

Sendai Japan